メタルギア ソリッド　シナリオ・ブック

目次

【ご注意】

本書は、開発途中のシナリオを元に作成しているため、ゲーム上の表現とは若干異なる場合があります。

Section 1

Briefing – vs M1 Tank

ブリーフィング〜M1戦車戦

【ブリーフィング　FILE00指令内容説明】

――オハイオ級原子力潜水艦内、狭い医務室。

――そのベッドに一人全裸で座っているスネーク。

――扉を開けてキャンベルが入ってくる。その後ろに付き従うナオミ。ナオミは白衣を着ている。

キャンベル　「久しぶりだなスネーク」

スネーク　「誰かと思えば、大佐……あんたか？」

キャンベル　「相変わらず無愛想な男だな、スネーク」

スネーク　「用件はなんだ？」

キャンベル　「君を迎えに行かせたのは他でもない」

スネーク　「迎えだと？　あの武装した兵士達がか？」

――回想／アラスカ、ヘリに強引にスネークを連れていく兵士達のカット。

キャンベル　「少々、手荒だったことは謝る。しかし、大変な事が起こったのだ。また君の力が必要になった」

スネーク　「俺はもうFOXHOUNDを除隊している。あんたももはや指令官ではない。命令を受けるいわれはない」

キャンベル　「君は引き受けてくれるよ。そう信じている」
スネーク　「……」
――ナオミ、構わずスネークの消毒をはじめる。スネークの身体は傷だらけ。
ナオミ　「失礼……」
スネーク　「この美人は？」
キャンベル　「Dr．ナオミ・ハンター。FOXHOUND（フォックスハウンド）部隊のメディカルスタッフ。遺伝子治療（ジーン・セラピー）【注1】の専門家だ」
スネーク　「軍人か？」
ナオミ　「民間人よ。ATGC社から派遣されているの。よろしくスネーク」
ナオミ　「ごめんなさい。注射をするわね」
――消毒を終えたナオミ、巨大なアームの注射器を取り出し、スネークに注射をする。FOXDIEが注入される。
スネーク　「何の注射だ？」
ナオミ　「あら注射が嫌い？」

スネーク　「……?」

キャンベル　「スネーク聞いてくれ」

――キャンベル、スネークの前に数枚の写真を差し出す。

――（シャドー・モセス島の空撮（遠景）と衛星写真）

――スネーク、写真を受け取り、目を落とす。

キャンベル　「今から5時間前のことだ。アラスカ、フォックス諸島沖の孤島、シャドー・モセス島が現役の特殊部隊によって占拠された」

スネーク　「何処の部隊だ?」

キャンベル　「FOXHOUND（フォックスハウンド）部隊と彼等の率いる次世代特殊部隊」

スネーク　「……」

キャンベル　「彼等はある要求を政府（ワシントン）に突きつけてきた。それが受け入れられない場合、核を発射すると通告してきている」

スネーク　「核を?」

キャンベル　「うむ…、シャドー・モセス島には核兵器廃棄所があるのだよ」

スネーク　「FOXHOUND（フォックスハウンド）が核ジャック……」

キャンベル　「そうだ、事の重大さがわかってくれただろう」

キャンベル　「君に依頼する任務は二つ。核兵器廃棄所に単身潜入、人質としてとらわれた国防省付属機関先進研究局、通称DARPA（ダーパ）【注2】の——ドナルド・アンダーソン局長、アームズテック社のケネス・ベイカー社長、この両名を救出すること」

スネーク　「人質にしては豪華なメンバーだな」

キャンベル　「そして——テロリストの核発射能力の有無を調査し、事実ならばそれを阻止することだ」

——キャンベル、スネークに人質の写真を見せる。

キャンベル　「質問はあるか？　スネーク？」

スネーク　「質問？　俺はまだ受けるとは言ってないぞ」

キャンベル　「まぁ、状況を聞いてからでも遅くはあるまい？」

【ブリーフィング　FILE01作戦概要】

※【潜入方法】を選択

スネーク　「核兵器廃棄所の状況は？」

キャンベル　「うむ、核兵器廃棄所は地下基地だ。最新鋭の諜報機器を駆使しても内部の状況は不明だ」
スネーク　「人間が潜入して内部情報を探るしかないのか…スパイ映画のように…」
スネーク　「で、潜入方法は？」
キャンベル　「空からの潜入は無理だ」
スネーク　「この嵐だとな」
キャンベル　「潜水艦で廃棄所の近くまで接近する」
スネーク　「近くまで？」
キャンベル　「そうだ、数マイル付近までだ。廃棄所には水中聴音装置がある。エンジンやプロペラのノイズを拾う」
キャンベル　「その為に発見される恐れがある」
スネーク　「そこからは？」
キャンベル　「小型潜水艇（SDV）を射出する」
スネーク　「射出？」
キャンベル　「魚雷と同じだ。推進機は付いていない」

キャンベル　「島に最接近後、潜水艇を破棄。後は泳ぎだ…」
スネーク　「このアラスカの海を泳げというのか？」
キャンベル　「うむ、その最新スーツが役に立つと思う」
　　　　　　――スネークの隣に最新のスニーキング・スーツが吊られている。
　　　　　　――スネーク、スニーキング・スーツを装着する。
キャンベル　「島全体が核廃棄施設になっている。上陸後は無線機で指示を出す」
スネーク　「俺の他には？」
キャンベル　「いつもの様に単独での潜入任務（スニーキング・ミッション）だ」
スネーク　「装備も武器も現地調達？」
キャンベル　「非公式の極秘任務だ。公式な支援は、あてにせんで欲しい」

※【タイムリミット】を選択
スネーク　「タイムリミットは？」
キャンベル　「24時間だ」
キャンベル　「彼等は24時間後に核を発射すると言っている」

――潜水艦内のデジタルクロックがカウントダウンしているカット挿入。

スネーク　「核ミサイルの目標は?」
キャンベル　「今の所、目標については触れていない」
スネーク　「いつからだ。カウントは?」
キャンベル　「既に5時間が経過している」

【ブリーフィング　FILE02作戦メンバー】

※【作戦責任者】を選択

スネーク　「大佐、あんたは誰を代表している?」
キャンベル　「勿論、合衆国政府を代表している」
スネーク　「作戦の責任者は誰だ?」
キャンベル　「合衆国大統領だ」
スネーク　「という事は――、今頃ホワイトハウスの地下でお祭り騒ぎか?」
キャンベル　「いや、ビデオリンクで話をしているところだ」

――ホワイトハウス、会議をビデオリンクで行う大統領達のカット挿入。

スネーク　「核弾頭が本物だとすると、政府存続設置(COG)【注3】発令?」
キャンベル　「いや、まだだ。国防省長官が全権を担って指示を出している」
キャンベル　「君が潜入して事実関係を調査、核が事実なら政府存続設置(COG)が発令される」
スネーク　「彼等がまだワシントン山の核シェルターに避難していないのなら、こんなに心強い事はない」
スネーク　「国家安全保障局(NSA)【注4】も絡んでいるのか?」
キャンベル　「国防省情報局(DIA)【注5】も動いている」
スネーク　「国防省情報局(DIA)?　嫌な予感がするな。」
キャンベル　「応援が来ると思う」
スネーク　「制服連中よりも、核の専門家が必要だ」
キャンベル　「勿論だ。核の専門家を一人つける準備をしている」

※【サポート要員】を選択

スネーク　「誰かに専門的なサポートをして欲しい。核兵器に関してはこっちは素人だ」

――ナスターシャの写真とデータ。

キャンベル　「わかってる。ナスターシャ・ロマネンコという軍事アナリストに協力を依頼している。無線機でサポートしてくれるはずだ」
スネーク　「女のアナリストか」
キャンベル　「核エネルギー調査チームの顧問として成果をあげている人物だ。何か聞きたいことがあれば彼女と連絡を取ってくれ。彼女はハイテク兵器にも詳しい」
スネーク　「その女は、今何処に？」
キャンベル　「ロスの自宅だ」
スネーク　「カリフォルニアか？　ここからは大違いだな」

※【ロイキャンベル】を選択

スネーク　「大佐、退役したあんたがどうしてこの作戦を？」
キャンベル　「FOXHOUND（フォックスハウンド）を知る数少ない男だからだ」
スネーク　「本当にそれだけか？」
キャンベル　「私は軍人生活が長い。他の人生は知らん。老いてもなお、現場にいたい」
スネーク　「大佐、俺はあんたを知っている。本当の事を言ってくれ」

キャンベル　「……すまない、スネーク。わかった。正直に話そう。私の大切な人が人質になっている」

スネーク　「大切な人？」

キャンベル　「姪のメリルだ」

※【メリル】を選択

スネーク　「大佐に姪がいたとは？」

キャンベル　「彼等の蜂起（ホウキ）当日、数名のＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）隊員が行方不明になった。急遽、姪が部隊に補充されたんだ」

――メリルの写真とデータのカット挿入。

スネーク　「あんたに似てるな？」

キャンベル　「弟の娘だ。弟は湾岸戦争で死んだ。それ以来、面倒を見ている」

スネーク　「個人的な動機か…軍人らしくないな」

キャンベル　「私は退役している。ただの老人であり、君の友人だ」

スネーク　「いつ友人になったつもりだ」

キャンベル「ザンジバーランド陥落の時から君を親友だと思っている」
スネーク「俺のような躁鬱(そううつ)気質はこりごりのはずだ」
キャンベル「君のそういう所を信用している……頼む、スネーク。あの子を——、メリルを助けてくれないか?」
スネーク「わかった。そのかわり、条件がある」
キャンベル「なんだ?」
スネーク「俺と大佐の間では隠し事は一切なしだ。それと俺はあんたからしか指示を受けない。連絡に第三者(カットオフ)を使わない。この二点だ」
キャンベル「いいだろう。その為に私が呼ばれたんだ。それから……」
スネーク「なんだ?」
キャンベル「私はもはや大佐ではない」
スネーク「わかった。大佐」

※【Dr.ナオミ】を選択

スネーク「そこの女博士も作戦に参加するのか?」

キャンベル　「彼女はFOXHOUND(フォックスハウンド)部隊の遺伝子治療(ジーン・セラピー)を担当していた。彼等の事は一番良く知っている」

スネーク　「男の裸体も見慣れているってわけだ」

ナオミ　「誤解しないで、これでも科学者よ」

スネーク　「さっきの注射はなんだ?」

ナオミ　「低温下でも血液や体液が凍らないようにする不凍物質の『不凍糖ペプチド』とナノマシンの混合液よ」

スネーク　「ナノマシン?」

ナオミ　「ええ。それも一種類ではないわ。それぞれがアドレナリンと栄養剤、糖分の補給を行うの」

スネーク　「食事の心配はいらないわけだ」

ナオミ　「……それにヌゥートロピクス」

スネーク　「何だって?」

ナオミ　「ヌゥートロピクス、知的認識能力を高める薬」

スネーク　「頭の回転がよくなる薬か?　他には?」

ナオミ「ベンゼドリン、服用すると興奮と緊張状態が12時間持続する覚醒剤の一種…」
スネーク「大層なこった な。それだけか？」
ナオミ「最も重要な通信機のバッテリー、これもナノマシンが補充するのよ」
スネーク「この分だとダイエットも頼めそうだな」
ナオミ「どういたしまして」

【ブリーフィング　FILE03詳細情報】

※【人質】を選択
スネーク「DARPA局長に兵器会社の社長……」
——局長の写真とデータ。AT社長の写真とデータ。AT社ロゴ。
スネーク「核兵器廃棄所なんかに何の用があって？」
キャンベル「……実はテロが起こった時、ここである演習が行われていたのだよ」
スネーク「DARPAの局長とアームズテック社長自らが参加するくらいだ。何かの新型兵器を使った演習か？」
キャンベル「それは知らされていない」

スネーク　「そいつらの正確な居場所は？」

――ナオミの持っているデスクトップにナノマシンのデータ。

ナオミ　「DARPA(ダーパ)局長にも発信機を打ち込んでいるの。だから近づけばレーダー上に
彼の位置が表示されるはずよ」

※【核兵器】を選択

スネーク　「本当に奴等は核ミサイルを撃てるのか？」
キャンベル　「弾頭のシリアルナンバーまで伝えてきた」
スネーク　「符合したのか？」

――核ミサイルのカット挿入

キャンベル　「少なくとも、彼等は核ミサイルを保有している」
スネーク　「今回のようなテロを防ぐ為の起爆コードみたいなものは？」
キャンベル　「うむ、起爆コード、PAL(パル)は存在する。たとえ核弾頭だけでもな」
スネーク　「PAL(パル)？」

キャンベル　「パーミッシブ・アクション・リンク。すべての核ミサイルに装備されている安全制御システムだ」
キャンベル　「だがそれも安心はできん」
スネーク　「なぜ？」
キャンベル　「DARPA（ダーパ）局長が発射暗号を知っているからな」
スネーク　「しかし、核弾頭があったとしても、核ミサイルは解体されているんだろう？廃棄所では核弾頭を外しているものだ。弾道ミサイルなんて簡単に入手できるものじゃない」
キャンベル　「まぁ、確かにそうだが…冷戦終結後、金さえだせば何でも手に入るご時世なんだ」

※【テロリストの兵装】を選択
スネーク　「テロリストは……演習中だったという事だが、どの程度武装をしている？」
キャンベル　「かなりの重装備だ」
スネーク　「彼等の戦闘経験は？」
キャンベル　「首謀格である6人のFOXHOUND（フォックスハウンド）はいずれも強者ばかりだ。なんと言って

も、FOXHOUND(フォックスハウンド)だからな」

スネーク　「お褒めいただいて恐縮だ」

キャンベル　「その他の連中は次世代特殊部隊だ。彼等も相当に手強い」

※【テロリストの要求】を選択

スネーク　「一体、奴等の要求は何なんだ?」

キャンベル　「ある人物の遺体だ」

スネーク　「遺体?」

——偉大な兵士、戦場での勇姿のカット。

——ただし顔は陰になって見えない。

キャンベル　「そう…遺体だ。正確には、ゲノム遺伝情報を含む、ある人物の細胞標本だ」

スネーク　「細胞標本?　なぜそんなものが?」

キャンベル　「テロリスト達にはそれが必要なんだ。実は、次世代特殊部隊隊員達は遺伝子治療(ジーン・セラピー)によって強化されている」

スネーク　「遺伝子、強化?」

キャンベル　「知っての通り、人のゲノムマッピング、ヒトゲノム計画はほとんどが完了している」

――ヒトゲノムの研究風景、データのカット挿入。

キャンベル　「さらなるステップとして、今、戦闘に最も適した遺伝子の究明が行われているのだ」

スネーク　「戦闘に適した遺伝子なんて存在するのか？」

キャンベル　「ああ、実在する。それらを遺伝子治療（ジーン・セラピー）で兵士に還元する」

スネーク　「遺伝子治療（ジーン・セラピー）？」

ナオミ　「そこは、私から説明するわ」

――ナオミ、モニターで説明する。

ナオミ　「遺伝子治療によって、病気や疾患を誘発する遺伝子を取り除いたり、逆に付加したりする事が、容易にできるの」

キャンベル　「つまり、あらゆる遺伝病を克服できると同時に、遺伝的素質を任意に追加する事もできる」

スネーク　「戦闘に適した遺伝子がわかれば、それらを組み込むことができる?」

ナオミ　「ええ、そうよ」

キャンベル　「ただし――、戦闘に適した遺伝子の究明がされればの話だ」

ナオミ　「戦闘に最適な遺伝子がなんなのか、それを知る為には戦闘に優れた兵士の遺伝子を調べる事が重要になってくるの」

※【遺伝子強化】を選択

スネーク　「戦闘に優れた兵士?」

ナオミ　「20世紀最強と言われた伝説の戦士…」

スネーク　「まさか…ビッグボスの事か?」

――ビッグボスの遺体保存現場のカット挿入。

――ゲノム情報を調べる科学者達。

ナオミ　「そうよ。彼の細胞から戦闘に適した遺伝子、ソルジャー遺伝子の解析が、急ピッチで行われているわ。現在までに60のソルジャー遺伝子が発見されている」

スネーク　「遺体を回収していたのか?」

キャンベル　「そうだ…。細胞は大切に冷凍保存されている。彼のゲノム情報は人類の宝だ」
スネーク　「軍の、だろ？」
ナオミ　「遺体の焼失ははげしかったけど、髪の毛1本あればＤＮＡ情報を再現できるの」
スネーク　「その判明した遺伝子を兵士達に？」
ナオミ　「遺伝子ターゲッティングという技術を使ってね。最強の戦士は訓練や経験等の後天的な要素では生まれない。遺伝子の中に含まれた先天的なものが重要なの」
キャンベル　「スネーク…、彼の遺体を渡すわけにはいかんのだ。いかなる大量破壊兵器よりも戦略的な意味を持つ」
ナオミ　「テロリスト達は自分達の事を…『ビッグボスの息子達』と名乗っているの」
スネーク　「『ビッグボスの息子達』…」

※【次世代特殊部隊】を選択
スネーク　「その次世代特殊部隊というのは？」
キャンベル　「もともとは、バイオ・ケミ・ユニットや、テクニカル・エスコート・ユニット、核エネルギー調査チームから編成された実力対テロ特殊部隊だった。ＮＢＣ兵

器【注6】を含む次世代大量破壊兵器の攻撃に対応する為のな」

ナオミ　「そう、彼等が加わるまでは」

スネーク　「彼等？」

キャンベル　「彼等はもともと正規軍ではない」

——仮想訓練機でVR訓練をする兵士達のカット挿入。

スネーク　「様々な人種で構成されているようだが、傭兵出身者なのか？」

キャンベル　「もっと性質（タチ）が悪い。彼等のほとんどが傭兵派遣会社出身だ」

キャンベル　「偉大な英雄、ビッグボスに組織された私兵軍隊だ。そこを軍が買い上げた」

スネーク　「OUTER HEAVEN（アウター・ヘブン）……」

——アウター・ヘブンのマークと回想のカット挿入。

キャンベル　「その後、VR部隊『FORCE21』と合流して訓練された。次世代特殊部隊はシミュレーション部隊とも呼ばれている。実戦経験はないと思っていい」

スネーク　「TVゲーム世代の兵士か」

ナオミ　「でも彼等は遺伝子治療（ジーン・セラピー）を受けてるわ。戦闘に優れた遺伝子を組み込まれている

の。だから、実戦経験が浅いといっても気を抜かないで…」

――遺伝子治療を受ける兵士達のカット挿入。

スネーク「国際法で遺伝子治療(ジーン・セラピー)の軍事利用は禁じられているはずだ」

ナオミ「確かに、でも…どれも宣言であって条約ではないわ」

キャンベル「彼等のほぼ全員が今回の蜂起(ホウキ)に賛同しているんだ」

※【全員賛同の理由】を選択

スネーク「部隊全員がなぜ蜂起(ホウキ)を?」

ナオミ「彼等は蹶起(ケッキ)と呼んでいるわ」

キャンベル「遺伝子治療(ジーン・セラピー)による同類意識としか言えん…彼等は部隊を家族と見なしている」

スネーク「『ビッグボスの息子達』か……正規の軍人なら、定期的にカウンセリングを受けていたはずだ」

キャンベル「思想、信条、忠誠心、愛国心、全ての精神面でAクラスの判定を受けている」

スネーク「全員が蜂起(ホウキ)に参加したのか?」

キャンベル「いや――、当日数名が集合しなかった。そのため、隊員が補充された」

スネーク　「事前に何か兆候があったのか？」

キャンベル　「1カ月前、彼等の行動がおかしいとの報告があった」

ナオミ　「ソルジャー遺伝子の情報を無断で引き出し、遺伝子治療（ジーン・セラピー）を行っていたらしいの」

スネーク　「あんた抜きでそんな事ができるのか？」

ナオミ　「ええ、遺伝子治療は既に自動化されているわ。それに彼等はみんなＩＱ１８０以上の天才ばかりよ」

キャンベル　「彼等ゲノム兵は存在自体が国家機密だ。下手に刺激はできん。内偵を進めて、証拠を掴めば逮捕に踏み切るはずだった」

※【ＦＯＸＨＯＵＮＤ部隊】を選択

――ＦＯＸＨＯＵＮＤのマークとデータのカット挿入。

キャンベル　「ハイテク特殊部隊、ＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）。かつて君が所属し、私が指揮をとったこともある特殊部隊だ。あらゆる技能と知識を持ち合わせている精鋭中の精鋭。それは私が退役した後も変わっていない」

スネーク　「まだ存在していたとはな」

キャンベル　「今回のテロには6人のFOXHOUND(フォックスハウンド)隊員が参画している」

——FOXHOUNDの隊員達の写真とデータ。

キャンベル　「サイキック能力を持つ、サイコ・マンティス。天才女狙撃手、スナイパー・ウルフ。変装の達人、デコイ・オクトパス。巨漢のシャーマン、バルカン・レイブン。拳銃の名手だけでなく拷問のスペシャリストとしても知られるリボルバー・オセロット」

スネーク　「これじゃ、まるでコミックじゃないか…」

キャンベル　「そして彼等を率いるのがFOXHOUND(フォックスハウンド)の実戦部隊リーダー、リキッド・スネークだ」

スネーク　「リキッド・スネーク?」

キャンベル　「そうだ…。奴に対抗できるのは君しかいない」

※【リキッド・スネーク】を選択

スネーク　「リキッド・スネーク?」

キャンベル　「リキッド・スネーク、君と同じ暗号名を持つ男……固体のソリッドに対して、

液体のリキッド…」

スネーク　「何者だ？」

キャンベル　「彼は10代で湾岸戦争に参加した。英空軍特殊部隊（SAS）【注7】での最年少記録だ。スカッドミサイルの移動発射台を破壊する特殊任務だった…」

――回想／湾岸戦争のカット挿入。

キャンベル　「君もグリーンベレーと共にイラク西部に潜入したはずだ」

スネーク　「俺もまだ10代のガキだった」

キャンベル　「詳しい事は極秘だが、もともと彼はイギリス情報局（SIS）のスリーパーとして中東に潜伏していたらしい」

スネーク　「イギリス情報局、ＳＩＳ【注8】の男か」

キャンベル　「しかし、彼はセンチュリー・ハウスに姿を現した事は一度もない」

キャンベル　「彼はイラクの捕虜となり、その後消息を絶った」

キャンベル　「君の除隊後救助され、ＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）に入隊した……」

スネーク　「俺の除隊後なら暗号制は廃止されているはずだ」

キャンベル　「本名はわからん。何もかも極秘扱いだ。私でさえも見る事はできん。これが彼

の写真だ」

——リキッドの写真を差し出すキャンベル。そこにはスネークと同じ顔が写っている。

スネーク　「……!!（絶句）」

キャンベル　「驚いたろう。肌の色こそ違うが、何もかも君にうりふたつだ」

スネーク　「俺に双子が…?」

キャンベル　「詳細はわからんが、そういう事だ。この作戦には君が必要なんだ」

ナオミ　「彼に勝てるのはあなたしかいないのよ。あなたに今、逢って確信したわ。あなたにはリキッドにない何かを感じる」

スネーク　「気休めにもならんな」

※【EXIT】を選択

スネーク　「ハサミを貸してくれ」

ナオミ　「どうするつもり?」

スネーク　「心配するな。ちょっとさっぱりしたいだけだ」

ナオミ　「え?」

スネーク　「テロリストのリーダーに間違われたくないからな」

【潜入01潜入イントロデモ】

【テロップ】

アラスカ　ベーリング海

――アラスカ、ベーリング海を深く潜行して進む、オハイオ級US原子力潜水艦「ディスカバリー」。

――ディスカバリー指令室。無機質な計器類の照り返しを受けて、無線器に向かうキャンベル。

――その傍らにナオミ。

キャンベル　「アラスカ、フォックス諸島沖の孤島、シャドー・モセス島にある核兵器廃棄所を…、FOXHOUND(フォックスハウンド)部隊と彼等の率いる次世代特殊部隊が突如として蜂起(ホウキ)、島を占拠した」

――原潜のレーダーにシャドー・モセス島の陰影が映る。

――原潜内のブリーフィングモニターに様々な映像とデータが投影される。

キャンベル　「彼等が政府につきつけた要求はビッグボスの遺体だ。それが24時間以内に受け入れられない場合、彼等は核を発射すると通告してきている」

——ディスカバリー外観。原潜のハッチから射出される一人乗り用小型潜水艇。乗っているのはスネーク。潜水艇のスネークからみた水中主観、レーダーに様々なデータが映り込んでいる。

キャンベル「君に依頼する任務は2つ。廃棄所に潜入して、人質としてとらわれたDAPA局長ドナルド・アンダーソン……」

——小型潜水艇、シャドーモセス島の洞窟内に侵入。

——スネークの耳に、キャンベルからの無線が聞こえる。

キャンベル「……アームズ・テック社社長ケネス・ベイカーの両名を救出すること、そしてテロリストの核発射能力の有無を調査し、事実ならばそれを阻止することだ」

スネーク「で、潜入方法は？」

——小型潜水艇のハッチが開いて、潜水具に身を包んだスネークが現れる。

——水中に沈んでいく小型潜水艇を見送るスネーク。

キャンベル「潜水艇で廃棄所の近くまで接近する」

スネーク「そこからは？」

キャンベル「小型潜水艇を射出する」

キャンベル　「島に最接近後、潜水艇を破棄。後は泳ぎだ…」

キャンベル　「ハイテク特殊部隊、FOXHOUND。かって君が所属し、私が指揮をとったこともある特殊部隊だ」

スネーク　「まだ存在していたとはな」

キャンベル　「今回のテロには6人のFOXHOUND隊員が参画している」

キャンベル　「サイキック能力を持つ、サイコ・マンティス。天才女狙撃手、スナイパー・ウルフ。変装の達人、デコイ・オクトパス。巨漢のシャーマン、バルカン・レイブン。拳銃の名手だけでなく拷問のスペシャリストとしても知られるリボルバー・オセロット」

スネーク　「これじゃ、まるでコミックじゃないか……」

キャンベル　「そして彼等を率いるのがFOXHOUNDの実戦部隊リーダー、リキッド・スネークだ」

スネーク　「リキッド・スネーク？」

キャンベル　「君と同じ暗号名を持つ男…」

キャンベル　「島全体が核廃棄施設になっている。上陸後は無線機で指示を出す」

スネーク「俺の他には？」

キャンベル「いつものように単独での潜入任務（スニーキング・ミッション）だ」

スネーク「装備も武器も現地調達？」

キャンベル「非公式の極秘任務だ。公式な支援は、あてにせんで欲しい」

【潜入０２潜入デモ】

――シャドーモセス島洞窟。画面はスネークの主観。画面の端にゴーグルの枠あり。海中からつながっている薄暗い洞窟。

――洞窟の奥はコンクリートの船着き場になっており、コンテナが立ち並んでいる。コンテナ置き場の奥には、船荷を地上に上げるための昇降機が設置されている。

――水中には小型アクアラングを身に着けたスネークの姿がある。

――コンテナ置き場からかなり離れた地点で水中から頭を出すスネーク。

――寒冷地用装備をした二人のゲノム兵が見回りをしているのを見て取ったスネークは、再び水中に戻る。

――この間、ＣＡＳＴクレジットが順番に表示されていく。

――スネーク、今度はコンテナ置き場にかなり接近した地点で水中から頭を出す。左右を見回すスネーク。

——その眼の前を鼠の群れが横切り、兵士の足が通過する。

——兵士は、海から頭を出して覗いているスネークに気付くことなく通りすぎる。

——少し離れたところから男の声がする。

リキッド「(OFF) いいか、奴は必ず来る。気を抜くな」

リキッド「(OFF) 俺は今からうるさい蠅を落としてくる」

——何かのモーターの稼働音（昇降機の上がる音）が同時に聴こえる。

——海中のスネーク、装備から双眼鏡を取り出してコンテナ置き場中央奥の昇降機をズームする。
ファインダーの中に、上半身裸で皮のロングコートを着たリキッド・スネークが映る。男は力を誇示するように両腕を組んだまま上昇していく。スネーク、双眼鏡を上半身へパンするとリキッドの顔が見える。その顔はスネークと同じ。

——リキッドのクレジット

——スネーク、再び海面に潜る。

——「チャポッ」という水音とともに水面に波紋が広がる。

——昇降機上のリキッド、スネークが潜った地点に目を凝らす。

——水面に広がっている波紋。しかしスネークの姿は既にない。

——スネーク、西側の岸に頭を出す。その前方にはタンクの様な遮蔽物。タンク状の物のとなりにドラム缶が積まれている。スネークはあたりを見回し、完全な死角であると確認する。

——コンテナ置き場の岸に這いあがるスネーク。ちょうどそこだけが一段高くなっている。スネーク、水中装備（ベスト、ゴーグル）をしている。既にエアー（マウスピース）は口から外している。
——膝より下は海水の中。水面を通してスネークの足のフィンが見える。
——浅瀬から岸へ近付くスネーク。岸に腰かけて、フィンをしまう。
——スネーク、キャンベルへ無線をＳＥＮＤする。

【潜入０３潜入無線機デモ】

スネーク　「こちらスネーク…。大佐、聴こえるか？」
キャンベル　「良好だ、スネーク。状況はどうだ？」
スネーク　「やはり、地上へのルートは中央の昇降機だけらしい」
キャンベル　「そうか…。予定通り、昇降機を使って地上へ出るしかないか」
キャンベル　「くれぐれも見つからんようにな」
キャンベル　「なにかあれば無線連絡をくれ。周波数は１４０．８５だ」
キャンベル　「無線機を使いたいときはＳＥＬＥＣＴボタンを押すんだ」
キャンベル　「こちらから連絡がある場合はコールする」

キャンベル「コール音が鳴ったら、SELECTボタンを押してくれ」
キャンベル「耳小骨を直接振動させるものだ。敵には聞こえない」
スネーク「わかった。作戦(ミッション)に入る」

【潜入04スネーク素顔見せるデモ】

——スネーク、見張りの目をかいくぐって昇降機に乗り込む。
——スネーク、水中装備を脱ぎ始める。足下にゴーグル、タンク、フィンが落ちる。スネークの険しい顔がはじめて見える。（それまでのスネークは潜水用のゴーグルとドライキャップを被っているので顔が見えない）あらわになったスネークの顔はリキッドと同じ。
——上昇して行く、昇降機から見たコンテナ置き場の全景が明らかにされる。

【潜入05ヘリポートデモ】

——コンテナ置き場から上がってきた昇降機は、ヘリポートの南西側の断崖付近にあるコンテナ置き場の一角に到着する。
——地上は吹雪いている為、あまり視界が効かない。
——スネーク、昇降機を降りて、数歩踏み出すと断崖絶壁、眼下に凍結した海が見える。北には60メートル程前方に巨大な核兵器廃棄所の壁面が見える。その手前には四角いヘリポートがあ

り、今まさに飛び立とうとしているハインドDが横たわっている。
——ヘリポート左手にはせわしなく、パワーリフトが積み荷を運んでいる。
——スネーク、昇降機を降り、無線でキャンベルに連絡する。

【潜入06ヘリポート無線機デモ】

スネーク　「こちらスネーク。地上の廃棄所前に到着した」
※潜入に時間がかからなかった場合
キャンベル　「予定通りだな。ブランクがあるとは思えん」
※潜入に時間がかかった場合
キャンベル　「かなり時間がかかったようだな。やはり、ブランクがあると辛いか？」
スネーク　「心配するな。既にカンは取り戻した」
ナオミ　「スニーキング・スーツはどう？」
スネーク　「ドライ効果は高いな。だが身動きが取りにくい」
ナオミ　「我慢して。低体温症を防ぐためよ。そこはアラスカなのよ」
スネーク　「わかってる。感謝してるさ。君が注射してくれた不凍液のお陰で水中で凍り付くことはなかった」

ナオミ　「不凍糖ペプチドよ、スネーク。今回の演習でゲノム兵も使用してるわ」

スネーク　「なるほど、安心した。実験済みってわけだ…。ところで陽動作戦（フェイント・オペレーション）の方はどうなった？」

キャンベル　「既にF16が二機、ガレーナ基地からそちらに向かっている。今頃はテロリストのレーダーにも捕捉されているはずだ」

【潜入07ヘリ発進デモ】

——ヘリポートに轟く爆音。スネーク、無線を一時中断。音のほうを見る。ヘリポートからハインドDがゆっくりと飛翔していく。寒冷地装備の兵士、ハインドを見送る。

——スネーク、装備から双眼鏡を取り出し、コックピットを覗く。

——コックピットに乗っているのは先ほどのリキッドらしき男。ハインドDの機体を確認しながら疑問を抱くスネーク。

スネーク　「ハインドD？」

スネーク　「（多少の不信を込めて）大佐…、ロシアの重攻撃（ガンシップ）ヘリがなぜここにある？」

——無線からキャンベルの声が聞こえる。

キャンベル「わからん…。だが奴等が陽動作戦（フェイント・オペレーション）に引っかかったのは確かなようだ。今のうちに潜入してくれ」

――ヘリポートから飛び立つハインドD。

【潜入08メイ・リン登場無線機デモ】

キャンベル「彼等の指定したタイムリミットまで、18時間を切っている。もう時間が無いんだ」
メイ・リン「それにしても、この嵐の中でハインドを飛ばすなんて、無茶ね」
スネーク「誰だ？」
キャンベル「ああ、まだ紹介していなかったな。ソリトンレーダーと無線機システムの開発者、メイ・リンだ。画像・データ処理の専門家として同行してもらった。レーダーや無線機については、彼女に聞いてくれ」
メイ・リン「はじめまして、スネーク。伝説の英雄（ヒーロー）とお話できるなんて嬉しいわ」

――メイ・リンのビジュアルがモニターに表示される。

スネーク「……」

メイ・リン　「どうしたの？」

スネーク　「いや…、画期的な軍事技術の開発者が、こんなにかわいい女の子とは思わなかったものでね」

メイ・リン　「スネークったら、お世辞は下手ね（と言いつつ嬉しい）」

スネーク　「お世辞じゃない。これからの18時間、退屈せずにすみそうだ」

メイ・リン　「何それ？　伝説の英雄（ヒーロー）に口説かれちゃった…。でも意外ね…。こんなにフランクな人だとは思わなかったわ」

スネーク　「俺達は互いの職業に偏見を持っていたみたいだな」

メイ・リン　「そうみたい。これから理解を深めていくことにしましょう。それじゃ、ソリトンレーダーの説明をするわ」

――画面上にレーダーが表示される。プレイヤーの位置、敵の位置が表示されている。

メイ・リン　「中心の光点がスネーク、あなたよ。赤い光点が敵の位置、蒼い円錐が敵の視界」

ナオミ　「スネーク、気をつけてね。ゲノム兵は遺伝子治療（ジーンセラピー）を受けているから視覚と聴覚が鋭いわ。視界に入らないように注意して」

キャンベル　「まずは廃棄所に潜入して、DARPA（ダーパ）局長を捜すんだ」

ナオミ　「局長にもあなたと同じGPS発信器用のナノマシンが注入されているわ」
メイ・リン　「レーダー上に緑の光点となって表示されるはずよ」
キャンベル　「彼からテロリスト達の情報を聞き出せ。もし生きていたらの話だがな…」
メイ・リン　「スネーク、ソリトンレーダーは気象には影響されないけど、敵に発見されると使えなくなるわ」
キャンベル　「うむ、簡単に妨害されてしまうんだ」
メイ・リン　「ソリトンレーダーはもはや既存技術なの。それと音響共鳴の強い空間でも使えないから気をつけて」
キャンベル　「君の行動はレーダーを介して、我々がモニターしている。何かあれば無線機を使ってくれ」
スネーク　「わかった。寂しくなったら連絡する」
ナオミ　「無理をしないで、スネーク。何かあれば私達に相談して」
メイ・リン　「潜入データの記録も私が担当してるの。記録(セーブ)したいときは私に連絡してね」
メイ・リン　「周波数は140．96。記録(セーブ)用の専用回線よ。覚えていてね」
キャンベル　「今回も双眼鏡以外の武器装備は全て現地調達だ」

スネーク　「ドクターに丸裸にされて、何もかも取り上げられたからな。あの時の気持ちもわかってもらいたいな」
ナオミ　「わかったわ。生きて帰れたら、私を調べて良いわ」
スネーク　「それは夢のある話だ。悪いが、煙草だけは携帯させて貰ったよ」
ナオミ　「どうやって？」
スネーク　「胃の中にね…。君が胃液を抑える薬を入れてくれたおかげだ」
メイ・リン　「煙草なんか、何の役にも立たないわよ」
スネーク　「そうとは限らんよ」

【潜入09双眼鏡偵察デモ】

——再び装備から双眼鏡を取り出し、基地を覗くスネーク。

キャンベル　「潜入するとすれば…まず正面の扉」

——スネーク、正面扉ズーム。

キャンベル　「一番の近道だが、敵に見つかる可能性が高そうだな」

スネーク　「ノックしても簡単に開けてくれるとは思えん」

——スネーク、一階の正面扉脇のダクトにズームする。トラックの前に兵士一人確認。

スネーク　「……左と右に歩哨が1名ずつ……」

——双眼鏡をパンさせて、歩哨を確認する。

スネーク　「装備は5．56ミリのトランペットに、パイナップル……」

キャンベル　「正面扉の脇にあるダクトはどうだ?」

キャンベル　「2階にもダクトがあるはずだ」

——スネーク、二階のダクトにスコープを向けるが、角度的に確認できない。

——二階のデッキには一人、兵士がいる。

スネーク　「ここからでは見えないな」

——双眼鏡をしまうスネーク。

キャンベル　「潜入ルートは君次第だ。スネーク、頼むぞ」

【潜入10移動トラックデモ】

――ヘリポートに駐車中のトラック内。ダンボールをかぶっているスネーク。

――窓から兵士が覗き、つぶやく。

兵士A　「積み荷はこれだけか？……」

※ダンボールの伝票がヘリポート行きの場合

兵士A　「ヘリポート行きだな……」

※ダンボールの伝票が渓谷行きの場合

兵士A　「渓谷行きだな……」

※ダンボールの伝票が核弾頭保存棟行きの場合

兵士A　「核弾頭保存棟行きだな……」

※ダンボールの伝票が通信棟北大雪原行きの場合

兵士A　「通信棟北の大雪原行きだな……」

――トラックのエンジンがかかり、トラックスタート。

【ダーパ局長接触01武器の所在ヒントデモ】

――戦車格納庫1Fダクト。人一人が腹ばいでようやく通れる程の地を這う狭い通気口。

――その中を這い進むスネーク。

――つきあたりからの金網からあかりが漏れている。

――そこまで辿りついたスネークが金網から通気口の外を伺うと、二人の兵士が立ち話をしている。

――兵士達はファマスを構えたまま、直立不動。

――その足もとで息を殺しているスネーク。

兵士A「ソーコムピストルの運び込みは？」

兵士B「ああ、終わった。だが問題がある」

兵士A「なんだ？」

兵士B「扉のセキュリティが壊れていた」

兵士A「じゃあ…、扉は開きっぱなしか？　2階の何処だ？」

兵士B「東側の部屋」

兵士A「ボスに見つかる前に直しておかないと…」

※潜入者が判明している場合は追加

兵士B　「ああ、それよりも聞いたか？　外で侵入者があったらしい」
兵士A　「何だって！　遂に実戦か……」
兵士B　「ああ、だから扉が開いたままではまずい」
兵士A　「扉を直すように連絡しておこう」

【ダーパ局長接触02局長の居場所ヒントデモ】

――戦車格納庫2Fダクト。天井を伝う狭い通気口の中を這い進むスネーク。
――金網から下を覗くと二人の兵士が立ち話をしている。
――兵士達の頭上にスネークの顔。

兵士A　「DARPA（ダーパ）の局長は……地下1階の独房に移しておいたぞ」
兵士B　「通風口の掃除は？」
兵士A　「さっき、通風口のフタを開けた。これからネズミの駆除を始めるところだ」

――二人の会話を反芻して頭にたたき込むスネーク。

スネーク　「地下1階の通風口…」
兵士A　「終わったら通風口のフタを閉めておけ」

兵士Ａ　「それと、独房の女（メリル）を見張ってろ。気を抜くんじゃないぞ」
スネーク　「独房の女？」
※潜入者が判明している場合は追加
兵士Ｂ　「何かあったのか？」
兵士Ａ　「侵入者がいるんだ」
兵士Ｂ　「本当か？」
兵士Ａ　「もう３人もやられている」
兵士Ｂ　「（怯え）３人も……殺されたのか？」
兵士Ａ　「（深刻）ああ…。しかもそいつは——ステルスらしい」
——心当たりのないスネーク、首を傾げる。
スネーク　「ステルス？　俺の他に誰か侵入者が？」（ニンジャのネタ振り）
兵士Ａ　「とにかく、局長の警備を強化しておけ」

【ダーパ局長接触０３看守（ジョニー佐々木）デモ】俯瞰

——戦車格納庫Ｂ１の天井を伝う通気口の中を進むスネーク。

――トイレを覗くと兵士（ジョニー佐々木）が独り言を言っている。

ジョニー「どうやら風邪をひいたようだ。アラスカがこんなに厳しいなんてな」

ジョニー「しかし、あの女……結構いい線いってるよな」

【ダーパ局長接触04捕虜発見デモ】俯瞰

――戦車格納庫B1の天井を伝う通気口の中を進むスネーク。

――メリルの独房覗くとメリルは海兵隊式腹筋運動をしている。メリルは黙々と腹筋をしている。

スネーク「女か……違うな」

【ダーパ局長接触05ダーパ局長デモ】

――スネーク、通気口を進み局長の独房を発見する。

――薄暗く不潔な独房の中、局長が独りでベッドに腰掛けている。局長は40代の筋肉質の体躯をした黒人。制服組らしく、ワイシャツにネクタイ姿。以前は白かったであろうワイシャツも血と汗で汚れている。

――通気口にはまった蓋を外し、独房内に降り立つスネーク。

――侵入者を見て、ベッドから降りる局長。

局長　「だ…誰だ!?」

スネーク　「助けに来た。DARPA（ダーパ）の局長、ドナルド・アンダーソンだな?」

局長　「助けに来た?　どこの所属だ?」

——スネーク、両手を上げて、武器をもっていない事を強調する。

——この時、武器を持っていても手を上げる。

スネーク　「俺はあんたらの様なロクデナシを助ける為に雇われた哀れな捨てゴマだ」

局長　「本当か?　……」

——スネークのいでたちを見て考えを巡らせる局長。

——局長、やや気を許し、ベッドの上に腰掛ける。

局長　「確かにテロリストの一味ではないようだな。ならば、ここから早く出してくれ」

スネーク　「大丈夫だ、心配するな。先に情報を知りたい。テロリストの事だ」

局長　「テロリスト?」

スネーク　「奴等は本当に核を撃てるのか?」

局長　「どういうことだ?」

スネーク　「テロリストは政府（ホワイトハウス）を脅迫している。要求を飲まなければ核攻撃を仕掛けると言ってな」

——頭を抱える局長。

局長　「何ということだ……」
スネーク　「どうなんだ？」

——局長、身体を横に向け、スネークから視線を外す。

局長　「……可能だ。奴等は——核を撃てる」

——ベッドの上で独り腹筋運動をしていたメリル、隣の騒がしさに身を起こす。

メリル　「？」
スネーク　「（ＯＦＦ）どうやって撃つつもりだ？　ここは解体した核弾頭を保存しておく為の施設だろう？　核ミサイルなんて無いはずだ」

——続いて話をしているスネークと局長。

局長　「それは表向きの話だ。いいか」

——局長、スネークに歩み寄り、辺りを気にしながら声のトーンを下げて続ける。

局長「ここで、ある新型兵器の演習が行われていたのだ。兵器史上に残る、な」

スネーク「なに？」

局長「地球上のあらゆる地点からの核攻撃を実現する……核搭載歩行戦車……」

——格納庫に眠るメタルギアの映像。

——画面外で進むスネークと局長の会話。

スネーク「メタルギア!? まさか……」

局長「知っているのか？ ……メタルギアは——、極めて機密性の高い隠密計画(ブラック・プロジェクト)のひとつ。どこでその名を知った？」

スネーク「昔から多少縁があってな。あんたがこの廃棄所にいたのはそれが理由か」

局長「そうでなければ、私がわざわざこんな辺鄙な所まで来たりはせん」

スネーク「メタルギア計画は全て破棄されたと聞いているが？」

局長「いや、アームズ・テック社と我々の手で大きなプロジェクトに育て上げた。今回の演習を材料にして、量産に移行する計画だった」

——身を乗り出して、顔を近づける局長。

局長　「（苦々しい口調の演技）奴等の蹶起（ケッキ）さえなければな」

——（オクトパスは口が滑ってテロを蹶起と言ってしまう）

スネーク　「蹶起（ケッキ）……？」

——口を滑らせた事にやや戸惑い、スネークに背を向けて続ける。

局長　「レックスはテロリストの手に渡ってしまった……」

スネーク　「レックス？」

——再び、スネークに向き直る。

局長　「メタルギア・レックス。新型メタルギアのコードネームだ」

——独房の外で見張りをしている兵士（ジョニー佐々木）。

——兵士、局長の声にふりむく。

局長　「（ＯＦＦ）もう奴等はレックスへの核弾頭装備を完了しているはずだ」

——話を続ける局長。

局長「奴等はその道のプロだ。兵器の整備・取扱いにも慣れている」

——兵士が様子を見に来る。

ジョニー「おい！　うるさいぞ！　静かにしてろ」

——スネーク、独房の壁の影にさっと身を隠す。

——兵士、しばらく窓から独房の中を覗く、「問題はないよ」と手を振って合図をする局長。

——見張りはうなずいて、独房前から歩き去る。

——局長、独房の扉まで歩いていき、兵士がいなくなったのを確認。

——ホッと胸を撫で下ろすスネーク。

スネーク「しかし、核弾頭には安全装置が組み込まれているはずだ。起爆コード入力式の……」

——独房の扉を背にスネークに振り向く局長。

局長「ああＰＡＬ（パル）の事か。確かにＰＡＬ（パル）はある。２つのパスワードを入力しなければ発射できない仕組みだ」

スネーク「パスワードが2つ?」
局長「そうだ。私とベイカーが一つずつ知っていた」
スネーク「ベイカー? 誰だ?」
局長「ケネス・ベイカー。アームズ・テック社の社長だ。我々2人の起爆コードを両方とも入力しなければ発射はできないのだが……」
局長「私のパスワードは知られてしまった」
——扉の影から、独房内に出てくるスネーク。
スネーク「喋ったのか?」
——歩きながら、答える局長。自分の頭を指で示す。
局長「サイコ・マンティスは人の心を読む。抵抗は出来ん」
——局長、ゆっくりと歩き、ベッドに近寄る。
スネーク「サイコ・マンティス?」
局長「FOXHOUND(フォックスハウンド)の一員だ。読心能力(リーディング)を持っている」

スネーク　「厄介だな…」
——メリル、壁に耳をあてて二人の会話を聴いている。
局長　「(ＯＦＦ) おそらくマンティスはベイカーのパスワードも……」
スネーク　「もし、奴等が——ベイカーの起爆コードを手にしていたら……」
局長　「そうだ。いつでも核を撃てる」
——最悪の事態に顔をしかめるスネーク。
——組んでいた手をほどき、スネークを見上げる局長。
局長　「だが、核発射を止める方法はある」
スネーク　「何？」
——局長、ベッドから立ち上がって熱弁を始める。スネークを利用するため。
局長　「鍵(PALキー)だ」
スネーク　「鍵？」
局長　「システムの開発元であるアームズ・テック社が緊急時のために用意しているも

のだ。暗号を使わずにセイフティを入力、解除できる」

スネーク「それを使えば……」

局長「ああ。核発射をくい止める事ができる」

——メリル、鍵の事を聞いて、壁から耳を離す。ＡＴ社長から預かった鍵の事を思い出す。

メリル「あの鍵が？」

——局長の独房。

スネーク「その鍵(PALキー)はどこに？」

局長「ベイカーが持っていたはずだ」

——独房内を歩き回るメリル。どうしようか考えている。隣の独房から会話の続きが聴こえる。

局長「（ＯＦＦ）いいか、鍵(PALキー)は３つ必要だ。ロックは３カ所ある。それを解除すればいい」

スネーク「鍵(PALキー)は３つあるんだな？　それで、そのベイカーの居所について、あんた、何か知っているか？」

局長「地下２階のどこか」

スネーク「地下２階？」

局長「妨害電波が出ている地域に移されたらしい。見張りがそんな事を言っていた」

スネーク「手がかりは？」

局長「奴等、入口を塗り固めたらしい。だが充分な時間はなかったはずだ。壁の色が違う所を探してみてはどうだ？」

——局長、立ち上がってカードをスネークに渡す。

局長「これを渡しておこう。私のＩＤカードだ。セキュリティ・レベルが１の扉なら開く」

スネーク「このカードはＰＡＮ（パン）という人体通電技術を使っている」

局長「パーソナル・エリア・ネットワークか？」

スネーク「人体の持つ塩分を伝導体としてデータ伝送を行うものだ。扉のセキュリティ装置に近づくだけで鍵内（カード）のデータを確認する」

局長「近づくだけで扉を開けられる、と言う事だな」

——スネーク、カードを受け取る。

スネーク　「わかった。脱出するぞ？」
局長　「ちょっと待ってくれ」
スネーク　「何だ？」
局長　「…他にＰＡＬ（パル）を解除する方法を聞いているんじゃないのか？　お前の雇い主から」
スネーク　「いや」

――局長、スネークに近づく。

局長　「本当に何も聞いていないんだな？」
スネーク　「くどいな？」
局長　「では、政府（ホワイトハウス）は要求を飲む気があるのか？」
スネーク　「それは奴等の問題だ。俺の任務とは関係ない」
局長　「しかし、国防総省（ペンタゴン）は…」
スネーク　「国防総省（ペンタゴン）？」

――突然、苦しみだす局長。
――局長、胸をかきむしり、悶え苦しむ。

局長　「……？　グフッ！」

——局長、スネークの両肩に縋る。

スネーク　「どうした？」

局長　「な……なぜっ⁉」

——異変に気づくメリル。

局長　「（OFF）……うおおっ‼」

メリル　「どうしたの⁉」

——扉をたたいて、監視を呼ぶメリル。

メリル　「何かあったの！　ねぇ‼」

——局長の独房。膝を折り、ズルズルと床にすべり落ちる局長。

——スネークの身体に顔面がこすれる。どうする事もできないスネーク。

スネーク　「⁉」

——スネーク、局長の首筋に手を添えて、脈を取る。局長は既に絶命している。

スネーク　「死んだ……」

　　　　　――スネーク、無線機でナオミを呼び出す。

【ダーパ局長接触06ダーパ局長死後無線機デモ】

スネーク　「ナオミ、局長が！　何があった?」

ナオミ　「(ちょっと動揺。局長相手にFOXDIEを仕込んだ覚えはない) わからないわ。心臓発作のようだけど……」

キャンベル　「心臓発作?　もしや…?」

スネーク　「……(不信) 大佐、俺に何か隠しているのか?」

キャンベル　「……ない。わかってくれ。今回のテロはコード・レッドのセキュリティレベルが敷かれている。真相を知るには最高度の機密接近資格(セキュリティ・クリアランス)が必要だ」

スネーク　「作戦を任されている大佐が、最高機密のアクセス権限を持っていないというのか?」

キャンベル　「本作戦の司令官は国防省長官だ。私は君のサポート役にすぎない……」

スネーク　「……」

キャンベル　「（気まずさ、後ろめたさを誤魔化すように）スネーク、議論をしている時間はない。そこから脱出しろ！　ベイカー社長を探すんだ」

【メリル接触01メリル接触デモ】

──局長の独房の扉から警戒しつつ首を出すスネーク。

──独房前は広間になっている。正面には見張り兵の詰所、左にはメリルの独房。右正面にも扉があるが、それは固く閉まっている。

──左側を伺うと床の上に兵士（ジョニー佐々木）が全裸（身ぐるみ剥がされて）で気絶している。

──と、スネークの頭部にファマスの銃口が付けられる。

兵士（メリル）　「動かないで！」（女の声）

スネーク　「……（絶句）」

──独房内に横たわる局長（デコイ・オクトパス）の死体。

兵士（メリル）　「局長を殺したわね。酷（ひど）いことを……」

──スネーク、メリルの方にゆっくりと向き直る。

──兵士、スネークの顔をみて驚く。

兵士（メリル）「リキッド!?　いや違う?」

――兵士の隙をつこうと体を沈めるスネーク。

――だが兵士はそれを見逃さず銃口をスネークに向ける。

兵士（メリル）「動かないで!!」

――銃口をスネークに突きつける兵士。銃口がかすかに震えている。

――敵の服装（軽装兵）を着たメリルと目が合う!

――頭蓋用帽子を被っている為、目しか見えない。

スネーク「人に銃を向けるのは初めてか?」

スネーク「手が震えているぞ」

兵士（メリル）「!」

――メリルが一瞬警戒を緩めた瞬間、スネークは素早く銃を抜き、敵の頭に銃を付ける（この時、銃を持っていない時は銃口を掴む）。

――睨み合う二人。

スネーク「撃てるかっ!?　新米!」

兵士（メリル）「馬鹿にしないで、新米じゃない！」

——メリルのトリガーにかけた指に力が篭る。

スネーク「嘘をつけ！　視線が定まらず、自信が感じられないその目つき。……新兵特有の目だ。生身の人間を撃ったことはないだろ？」

兵士（メリル）「無駄口の多い男ね……」

スネーク「安全装置が外れてないぞ」

——ここで初めて、女性らしい言い方（地声）をしてしまうメリル。

兵士（メリル）「言ったでしょ！　新米扱いしないで!!」

——兵士、息が荒い。

スネーク「奴等の仲間じゃないな？」

——睨み合ったまま、右側のドアへ近付こうとする。

——少しずつ、後ろずさりする兵士。

兵士（メリル）「そこの扉を開けなさい！　鍵（カード）を持ってるでしょう」

スネーク　「どうして？」

兵士（メリル）　「ここからおさらばする為よ」

――……と、扉が開いて、敵兵がなだれ込んでくる。

スネーク　「その必要はなくなったようだな」

兵士（メリル）　「チッ！」

――メリルが銃を敵に向けて発砲する。

――ソコムを持っている時：スネークも銃を構える。

――ソコムを持っていない時：スネークはファイティングポーズ。

――扉から敵兵がどんどんなだれ込んでくる。プレイヤーはこれを倒さねばならない。

――3人の敵兵を倒すと、スネークはメリルに射撃をうながす。

スネーク　「何をしてる！　撃てっ!!　怯むな!!」

――メリルは最初の一撃を躊躇しているが、一人倒すと吹っ切れたように敵を倒していく。

――メリル、プレイヤーと共に撃ち続ける。プレイヤーが弾切れだとメリルが片づけてくれる。

銃を持っていない時はパンチ、投げで勝負する。

――敵兵を一定人数（4〜5人）、片づけると敵兵は全滅する。

【メリル接触02メリル脱走デモ】

——DARPA局長の独房前。敵兵を全て倒したメリルとスネーク。

——メリル、開いた右側の扉に目をやり、もうそこから敵兵が出てこないことを確認する。

兵士(メリル)「もう、あんたには用無しね」

——部屋を駆け抜けていく兵士。

——続いて廊下に出るスネーク。

——逃げ去っていく兵士のお尻UP。モーションが女らしい。

スネーク「待てっ!」

——突き当たりに設置してあるエレベーターに向かって駆けていく。

——すぐにエレベーターが到着、扉が開く。

スネーク「お前は一体っ!」

——と、サイコ・マンティスの洗脳BGM(ロシアの歌声)が聞こえてくる。スネークの頭にザッピング。マンティスの思念(マンティスの主観映像)が垣間みえる。

【メリル接触03マンティス・ザッピングデモ】

――拷問台に本当の局長が横たわっている。

――局長は既に息絶えている。その顔は暗がりでよく見えない。

――拷問台を見おろす、オセロット、マンティス、リキッドの3人。

リキッド　「（怒り）馬鹿が。殺してしまうとは……」

オセロット　「すいません。つい……」

マンティス　「（呼吸音）……こいつの精神防壁（プロテクト）は強力だ。侵入（ダイブ）できなかった」

リキッド　「（焦燥）まずいな。このままでは起爆コードが……」

マンティス　「ボス、俺に良い考えがある」

――気を失っているメリルを映す。

【メリル接触04メリル逃亡デモ】

――スネーク、廊下（現実に）に意識が戻る。

――兵士（メリル）、まさにエレベーターに乗りこもうとしている。

――追いかけようとするスネークに向かって兵士（メリル）、拳銃の連射。

――床に伏せて、弾丸をかわすスネーク。

スネーク　「クソッ！」

——扉が閉まる。

——と、再びザッピング。エレベーター前を亡霊のようにサイコ・マンティスの思念（半透明）が浮かび上がって消える。

——マンティス、コートを着ている。

——消えゆく時にマンティスの息づかい（マスク）が耳に残る。

マンティス　「いい子だ…。その調子だ…」

——サイコマンティスの洗脳BGM（ロシアの歌声）消える。

——スネーク、無線機でナオミを呼び出す。

【メリル接触05ザッピングの説明無線機デモ】

スネーク　「ナオミ！　今おかしな幻覚が見えた。ナノマシンの故障じゃないのか？」

ナオミ　「いいえ、スネーク。ナノマシンは正常に動作しているわ」

スネーク　「じゃあ、何だっていうんだ？」

ナオミ　「それはきっとFOXHOUND（フォックスハウンド）のサイキック、サイコ・マンティスの精神干渉

ノイズよ。彼の記憶の一部が逆流してきたんだわ」

スネーク　「あれがマンティス……？」

――スネークは監禁されているというベイカー社長を救出すべく、地下2階へ向かった。

【VSオセロット01オセロット遭遇デモ】

――監禁部屋。室内に5本の鉄支柱が立っている。

――支柱にはワイヤーが何本も張り巡らされている。全てのワイヤーは中央の支柱に繋がっており、その支柱（1メートルくらいの高さ）に一人の男が縛られている。男はスーツを着た初老のAT社長、ケネス・ベイカー。左手に杖を持っている。男は既に死んだように動かない。

スネーク　「遅かったか？」

――男に歩み寄るスネーク。

AT社長　「うぐっ!!」

――意識が回復、顔を上げるAT社長。拷問されてかなり酷く損傷している。

――右手を骨折している為、コートの袖に腕を通していない。

AT社長　「!!　……ふっううっ……」

スネーク　「生きていたか?」

——AT社長の真下まで近づくスネーク。

スネーク　「アームズ・テックの社長、ケネス・ベイカーだな?」

——軽く頷くAT社長。

スネーク　「心配するな。助けに来た」

——AT社長の訴えるような目。

——スネーク、社長を解放しようとワイヤーに近付く。

AT社長　「触るな!」

——スネーク、社長の態度に気づき、ワイヤーを改めて見つめる。

——ワイヤーが集中する中央の支柱にC4爆弾が張り付けられている。

——ちょうどAT社長の頭上に大量のC4爆弾がセットされている。

スネーク　「C4爆弾!」

――スネークが爆弾に気付いたのと同時、足下に銃弾が撃ち込まれる。

――一歩、身を引くスネーク。

――オセロットの冷静な足音が響く。

声　「そうだ。そのワイヤーに触れると、そいつ共々Ｃ４が爆発する！」

――支柱の影からオセロットが現れる。

――たった今、発射したリボルバーから硝煙が立ち上っている。

オセロット　「お前がボスのお気に入りか？」

――後ずさりして、身構えるスネーク。

スネーク　「お前は⁉」

オセロット　「私はＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）部隊……」

――オセロットが見事なガンプレイを見せる。

――片手にリボルバーを納め、さっと銃口を上に上げる。

オセロット　「リボルバー・オセロット！」

――再びガンプレイに興じる。

――リボルバーを腰のガンベルトにすっぽりと納める。

オセロット「待っていたぞ。ソリッド・スネーク！」

――ワイヤーの前あたりまで自信たっぷりに前進する。

オセロット「お前が噂どおりの男かどうか、試してやろう！」

――再びガンベルトから銃を引き抜くオセロット。

オセロット「こいつは世界で最も高貴な銃、シングル・アクション・アーミーだ」

――銃を2、3回、回した後、排莢する。薬莢が床の上を音を立てて転がる。

オセロット「6発だ。6発以上、生き延びた奴はいない」

――弾丸をシリンダーに目にも留まらぬ早さで詰めていく。

オセロット「私がなぜリボルバーと呼ばれているか、じっくりと味わわせてやる」

――シリンダーを元にもどして、スネークをじっと睨む。

――オセロット、ガンプレイでホルスターに戻すと、両手をたらし、リラックスさせる。

――指の骨が軋む音が反響する。

オセロット　「来いっ!!!」

【VSオセロット02忍者乱入デモ】

――激しい闘いを繰り広げるスネークとオセロット。

――スネークがオセロットに対し、一定ダメージを与えた後。

※1）プレイヤーにほとんどダメージが無い場合

オセロット　「いいセンスだ。やはりボス（リキッド）と同じコード（遺伝暗号とコードネームのダブルミーニング）を持つ男」

オセロット　「久しぶりだよ。これほど充実した闘いは……。そろそろ本気を出して行こうか」

※2）プレイヤーにダメージがかなりある場合

オセロット　「ふむ、拍子抜けしたな。やはりボス（リキッド）とは違う」

オセロット　「遊びは終わりだ。お前は闘うに値しない。せめて苦しまずに殺してやろう」

――銃を構え直すオセロット。その手に衝撃が伝わる。

——思わず、リボルバーを落とすオセロット。
——床の上にリボルバーを握ったままの右腕が転がる。

オセロット「なに!!」

——オセロット、右手を上げると、肘から先がなくなっている。
——切断面から、血が高くほとばしっている。驚愕するオセロット!

オセロット「右手がっ!!」

——見えない敵が室内の柱を切り倒していく。見えるのは光の束と火花。
——中央の支柱、斜めに切れる。
——AT社長、ワイヤーが切断されて、床の上へ投げ出される。
——遅れて柱、ゆっくりと滑り落ち、C4爆弾が爆発する。
——爆風で、壁にたたきつけられるオセロット。後頭部を強く打ちつける。

オセロット「うぐっ!!」

——画面にノイズが走り、ステルス迷彩独特のノイズ音がする。
——爆発の炎の中にシルエットが浮かび上がる(ステルス迷彩)。
——大刀を振りかざした忍者の輪郭が歪んで見える。

オセロット　「ステルス迷彩かっ！」

——爆発の干渉でステルス迷彩が一瞬、無効になり、サイボーグ忍者の姿が見える。

オセロット　「死に損ないがっ……！」

——さっとスネークを振り返るオセロット。

オセロット　「邪魔が入った。また逢おう！」

——リボルバー、切断された右腕を拾って、開いた穴（扉）から逃げていく。

——スネーク、近付く忍者に銃を向けて威嚇する。

——忍者、ゆっくりと炎の中から現れる。

スネーク　「誰だ……!?」

忍者　「名前などない……お前と同じだ」

——声帯を通した声ではなく、機械的なデジタルボイス。

——AT社長、杖をついて起きあがろうとする。

AT社長　「う、ううう！」

――忍者、気配に刀をAT社長に向ける。

――AT社長、顔を上げて忍者を確認する。

AT社長「その強化骨格は……」

――忍者、何かを思い出したように、突然、天井に向かって咆吼する！

忍者「ぐうわぁぁぁぁぁ!!!」

――人の声ではなく、獣（ビースト）の様な雄叫び。耳を押さえるスネーク。

――忍者、凄い跳躍力で天井に跳躍する。

――忍者を見送るスネーク。

――室内に忍者の跳躍音がこだまする。

スネーク「奴は、一体？」

【VSオセロット03AT社長救出デモ】

――オセロットも忍者も去った監禁部屋で、スネーク、AT社長ケネス・ベイカーを助け起こす。

――AT社長立ち上がろうとするが立ち上がれない。

スネーク　「話せるか？」

——AT社長に肩を貸してやるスネーク。

AT社長　「ああ……、君は？」

スネーク　「奴等の仲間ではない」

——北へ歩きながら話す二人。

スネーク　「DARPA（ダーパ）局長は起爆コードを知られたと言っていた。あんたの起爆コードは？」

AT社長　「ふん、なるほど……。ジム……国防総省（ペンタゴン）【注9】の遣いか」

スネーク　「…質問に答えろ」

AT社長　「……」

——答えを渋りながら、うなだれるAT社長。それをせかすスネーク。

スネーク　「起爆コードは？　時間が無いんだ」

AT社長　「……私は……喋ってしまった」

スネーク　「何！」

スネーク　「これで起爆コードは2つとも奴等の手に渡ってしまった……」
　　　　　――スネーク、舌打ちしてAT社長を見る。
　　　　　――怯えながら言い訳をするAT社長。
AT社長　「私だって抵抗しなかったわけじゃない。サイコ・マンティスの侵入(ダイブ)はかわしたんだ」
スネーク　「サイコ・ソルジャーの読心能力(リーディング)を？　どうやって？」
　　　　　――AT社長、足を伸ばして楽な姿勢を取る。
AT社長　「精神手術(プロテクト)だ」
スネーク　「精神手術(プロテクト)？」
AT社長　「我々のような極秘コードを知る者は、皆手術を受けている」
スネーク　「DARPA(ダーパ)局長もそうなのか？」
AT社長　「そうだ」
スネーク　「確か局長はマンティスに起爆コードを読まれたと……」
AT社長　「聞き違いじゃないのか？」

スネーク　「いや……まあいい。なぜ、あんたの起爆コードは奴等に知られた？」
AT社長　「（苦々しく）……拷問に耐える訓練なぞ受けておらんからな」

——軽く咳込んで吐血する。

スネーク　「その様子じゃ、相当可愛がられたようだな」
AT社長　「あいつは普通じゃない。明らかに拷問を楽しんでおった……」

——AT社長の片腕を指さして。

スネーク　「その腕は？」
AT社長　「奴に折られた……」
スネーク　「おあいこだ。あいつも腕を無くした」
AT社長　「フッ……面白い男だな？」

——杖を立てて、背筋を伸ばす社長。

AT社長　「……それで、DARPA（ダーパ）局長はどうした？　無事か？」
スネーク　「死んだ」

——スネークの顔を見る社長。

AT社長　「な、なんだと?」

——腑に落ちない表情のAT社長。

AT社長　「まさか!」

——突然、暴れ出して、杖でスネークを猛打する。

AT社長　「約束が違うじゃないか? ジムめ! やはり私の口封じを!」

——杖を掴んで、押し返すスネーク。

スネーク　「落ちつけ!」

——AT社長、スネークに押し返されてへたりこむ。

スネーク　「何を勘違いしている? 俺はあんたを助け出すように言われただけだ」

AT社長　「……」

スネーク　「DARPA(ダーパ)局長も俺が殺したわけじゃない。心臓発作のようだった……」

AT社長　「（極めて訝しげ）心臓発作だと？　馬鹿な！」

——肩を落として、うなだれる社長。

スネーク　「とにかく、起爆コードは2つとも奴等の手に渡ってしまった」
AT社長　「連中、完全にイカれとる。奴等なら核の発射をためらうことなどない……」
スネーク　「だろうな。一体奴等の目的は何だ？」
AT社長　「さぁな…。だが、我々武器屋が必要とするように……」
AT社長　「彼等も戦争の火種を必要としているのかもしれん」

——スネーク、武器庫への扉に歩み寄る。あたりを警戒しながら話す。

スネーク　「いずれにせよ好きにさせるわけにはいかない」
スネーク　「今も鍵（PALキー）を持っているか？」
AT社長　「鍵（PALキー）？」
スネーク　「起爆コードを緊急解除する鍵（PALキー）だ。あんたが持っていると聞いた」
AT社長　「もう、ここにはない」

——振り返るスネーク。

スネーク　「何だって？　まさかテロリストに？」
AT社長　「いや。女に渡した」
スネーク　「女？　誰だ？」
AT社長　「一緒に独房に入れられていた兵士だ」
スネーク　「独房？　あの女兵士か？」
AT社長　「当日演習に合流したばかりの新兵らしい。蜂起（ホウキ）への参加を断わって、捕まったと言っていた」
スネーク　「当日に合流？　では……あの女が大佐の姪？」
AT社長　「鍵（PALキー）は彼女に渡した」
AT社長　「脱獄には成功したらしいが、無事だろうか？」

――社長の前まで歩み寄るスネーク。

スネーク　「無事だろう。新米だがしたたかだよ、彼女は。しかし、どうして脱獄のことを？」
AT社長　「彼女とは無線機で連絡を取り合っていたんだ。ここに縛られるまでな」
スネーク　「無線？」

AT社長　「そうだ。看守から奪ったものらしい。今でも、彼女が無線機を持っていたら、話せるはずだ」

――社長の話を聞いて、大きく頷く。

スネーク　「大丈夫、持っているはずだ。周波数帯はどこを使っていた？」
AT社長　「よし、無線機の周波数を教えよう」
AT社長　「ん？　……すまん、ド忘れした」
スネーク　「クソッ」

――自分の両膝を叩いて、立ち上がるスネーク。スネークを目で追う社長。

AT社長　「そうだ、パッケージの裏に載っているはずだ。連絡を取ってみろ」
スネーク　「ああ、まず彼女に話を聞いてみよう。鍵（PALキー）が手に入らなかった場合、核発射を防ぐ手だてはあるのか？」

――スネークの問にうなずきながら答える社長。

AT社長　「そうだな……うちの社員（アームズ・テック）のハル・エメリッヒという男を探してみろ」

スネーク　「誰だ、そいつは？」

AT社長　「メタルギア・プロジェクトの開発チーフ。優秀な技術者だ。少々変わり者だが……。あいつなら発射を食い止める手だてを考えつくかもしれない」

スネーク　「方法を思いつかなければ？」

――スネークに目線を預けて。

AT社長　「破壊するしかない。エメリッヒなら破壊方法も知っているはずだ」

スネーク　「その男はどこに？」

AT社長　「おそらく、核弾頭保存棟のどこかに軟禁されているだろう。ここから北にある。奴の仕事場はそこだった」

――再び社長の前を往復するスネーク。

スネーク　「わかった……しかし、なぜメタルギアなんだ？　核の時代は20世紀末に終わったはずだ」

AT社長　「それは違う。核の脅威は消えてはいない。以前よりもよりリアリティを増している」

——核解体シーン、・小国核武装等のニュースフィルム。
——画面、モノクロのニュースフィルムが次々と映し出される。
——ＡＴ社長がとうとうと語る。

ＡＴ社長　「使用済み核燃料、解体核プルトニウムは今も増え続けている……。あんた、どこでもいいが、核物質貯蔵庫を見たことがあるか?」

スネーク　「いいや」

ＡＴ社長　「広くもない地下貯蔵庫に、核廃棄物を入れた容器が山積みになっている。核物質には有効な処理法も利用法もないからな」

スネーク　「ただ放り込むしかないということか」

ＡＴ社長　「うむ…。しかもその管理はずさんを極める。多くの貯蔵容器が腐食し、廃液が漏れ出していた」

スネーク　「ひどいな」

ＡＴ社長　「それだけじゃない。年に何キロかのＭＵＦ（マフ）（核物質不明量）も発生している」

スネーク　「ＭＵＦ（マフ）?」

ＡＴ社長　「核物質不明量を示す言葉だ。核物質の闇取り引きが横行している証拠だ」

AT社長「さらに冷戦の終結以来、特にロシアの核技術者は職にあぶれ、行き場を失っている」

——AT社長、スネークに続ける。

AT社長「つまり、核兵器製造に必要な技術者と核物質。そのどちらも、簡単に手に入るんだよ。どんな小国でも核武装可能な時代になったんだ」

スネーク「他の核大国はどうなんだ?」

AT社長「ロシアも中国も依然として核抑止を継続している」

AT社長「核廃絶の実現など不可能なのだ」

AT社長「だからこそ、抑止理論を保つには圧倒的な兵器が必要なのだよ」

——画面は格納庫に眠るメタルギア・レックス。スネークとAT社長の会話。

スネーク「それが、メタルギアか?」

AT社長「うむ。『平和』という幻想に基づく軍縮……折りからの経済不振で、我々の業界は大きな打撃を被った」

スネーク「大手兵器企業の買収、合併……よく聞く話だな」

AT社長　「次期主力戦闘機計画の入札にも失敗した我が社にとって、メタルギア・システムは生き残りをかけた切り札だった」
AT社長　「そのために隠密計画(ブラック・プロジェクト)として開発を進めていたのだが……」
スネーク　「隠密計画(ブラック・プロジェクト)？」
AT社長　「国防総省(ペンタゴン)の影の予算(ブラック・バジェット)による隠密計画(ブラック・プロジェクト)だ。余計な手続きを避け、兵器開発でリードタイムを稼ぐことができる。誰も手出しはできん」
AT社長　「たとえ、国防省監視委員会の連中でさえもな」
スネーク　「癒着…か」
AT社長　「軍産複合体と言ってくれ」
AT社長　「今回の演習結果で正式採用が決められるはずだった……」

——スネーク、社長に近付く。

スネーク　「あんたの会社の経営が、どうなろうと知ったことじゃない」
AT社長　「フンッ。あんたら兵隊に、我々の苦悩などわかるまい……」
AT社長　「ほら、これが目的なんだろう？」

――AT社長、コートの袖から光ディスクを渡す。光ディスクUP。

スネーク　「それは？」

AT社長　「光ディスクだ。ここに全てが入っている」

AT社長　「ハードディスクは銃弾でクラッシュした。データはもうこの中にしかない」

スネーク　「何のデータだって？」

AT社長　「例の演習データを収めている」

AT社長　「別にとぼけることはない。あんた、これを回収するように言われて来たんだろう？　私はあの拷問マニアからこれを守りきった」

AT社長　「奴等はこのディスクの存在にまだ気が付いていない。この事をジムに……あんたのボスにちゃんと報告しておいてくれよ」

スネーク　「……」

AT社長　「鍵(カード)も渡しておこう。セキュリティレベルが2の扉ならこれで開く」

――スネークにカード2を渡す。

――スネーク、社長の肩に手を置く。

スネーク　「歩けそうか？」
AT社長　「いや、ここで休ませてくれ」
　　　　　——気分が悪化した様子。顔色一層悪くなる。
AT社長　「奴等ももう、私には用はないはずだ」
スネーク　「もうひとつ聞きたい。さっきの忍者（サイボーグ）は何だ？　何か知ってるんじゃないのか？」
　　　　　——苦しそうに胸を押さえる。息が荒い。
AT社長　「ああ、あれか……あれはFOXHOUND（フォックスハウンド）の暗部だ」
スネーク　「暗部？」
AT社長　「実験体——、ゲノム兵士のな。ゲホッ！」
スネーク　「知ってるのか？」
　　　　　——再び咳込んで、身体の位置を変える。
AT社長　「私より、FOXHOUND（フォックスハウンド）の……Dr．ナオミ・ハンターに聞いてみたらどうだ？」

スネーク　「ナオミ？」

——スネーク、社長の正面に回り込む。

AT社長　「とにかく奴等を止めねばならん。アレが公になれば我が社も私も……終わり……」
スネーク　「メタルギアは既存技術じゃないのか？」
AT社長　「それ自体はな。だが……」

——社長、突然苦しみだす。

スネーク　「おいっ!!」

——スネーク、社長の身体に触れようとして躊躇する。
——社長、胸を押さえて苦しがる。

AT社長　「貴様、何かしたなっ？」

——スネークにつかみかかろうとする。後ずさりするスネーク。

AT社長　「まさか、例の!?……国防総省（ペンタゴン）の役人どもめ……そうか……そういうことか……
……！」

スネーク　「何を言ってる？」

――社長、呆然としているスネークの胸ぐらを掴む。

AT社長　「奴等は……お前を……利用し……」

――息絶えて、絶命する。（FOXDIEによる）

――社長、しばらく痙攣した後、動かなくなる。

スネーク　「なぜだ!?」

――2人目の謎の死に呆然とするスネーク

――スネーク、無線でキャンベルを呼び出す。

【VSオセロット04AT社長死後無線機デモ】

スネーク　「大佐！　聞いてるか！　こいつも死んだぞ!!」

キャンベル　「……わからん」

スネーク　「いいか、隠し事はするな！」

ナオミ　「心臓発作のように見えるけど……」

スネーク「毒物じゃないのか？」

ナオミ「……確かに、大量投与すれば心臓発作を起こす薬物は、いくつかあるわ。塩化カリウムとか、ジゴキシンとか……。でもそれは検死をしなければわからない」

スネーク「くっ！」

キャンベル「スネーク、頼む。メリルと協力してくれ！」

スネーク「あいつは信用できるのか？」

キャンベル「私よりは信用できるだろう」

スネーク「……」

キャンベル「メリルに連絡を取ってみてくれ」

メイ・リン「スネーク、そこは妨害電波が出ているわ。私達のようにバースト通信なら大丈夫だけど、通常通信はできないはず。そのエリアから出てみて」

キャンベル「スネーク、冷静になってくれ……」

スネーク「ナオミ、聞きたいことがある。さっきの忍者(サイボーグ)はなんだ？」

ナオミ「……」

スネーク「FOXHOUND(フォックスハウンド)の隊員か？」

ナオミ　「ちがうわ……」

スネーク　「心当たりはないんだな?」

ナオミ　「ええ、うちにあんな隊員はいない…」

スネーク　「……そうか」

キャンベル　「スネーク、頼んだぞ」

【メリルとの通信01メリルとの通信無線機デモ】

——無線機の映像、メリルは最初、スカルキャップを被っている。

メリル　「あっ、あなたは?」

スネーク　「逃げおおせた所を見ると素質はあるらしい」

メリル　「独房の……?」

スネーク　「君が大佐の姪、メリルか?」

メリル　「(リキッドと思って)……やっぱり、ちがう?」

メリル　「誰なの、あなた?」

スネーク　「君の伯父にはめられて、こんな僻地まで来た哀れな男だ」

メリル　「一人で？　何それ、英雄（ヒーロー）にでもなろうと思ったの？」
※ソーコムを持っていなかった時
メリル　「武器も持たずに？」
スネーク　「あの時の事には礼を言うが、」
スネーク　「そのへんで説教はやめてくれないか？　大佐譲りだな」
メリル　「伯父とはどういう知り合い？」
スネーク　「腐れ縁だ」
メリル　「名前は？」
スネーク　「これまで名前が必要になった事はない」
メリル　「あっ！」

——スネークの事を思い出すメリル。

メリル　「もしかして、スネーク？　ソリッド・スネークなの？」
スネーク　「そう呼ばれた事もある」
メリル　「伝説の男？　……あなたが？」

――メリル、スカルキャップを脱ぐ。メリルの幼さが残る表情が映る。
――やや取り乱し気味のメリル。声のトーンが親密になる。

メリル　「さっきはどうも……味方だとは知らなかった」

スネーク　「こっちはわかったさ」

メリル　「どうして？」

――独房でのにらみ合いを思い出しながら話す。
――ロード時間がかからなければ、メリルとの遭遇デモをここで回想（再現）する。セピア調でブラー処理をいれる。

スネーク　「君の眼だ」

メリル　「目？」

スネーク　「戦士の眼じゃない」

メリル　「新兵の目でしょ？」

スネーク　「いや、人を慈しむ眼だった」

メリル　「さすがは伝説の男ね。いきなり口説くつもり？」

スネーク　「逢えば伝説じゃなくなる。現実に直面すれば、幻滅するものだ」

メリル「そうでもないわ」
スネーク「俺の顔を見て驚いていたようだが?」
メリル「ええ、そっくりだったから」
スネーク「……テロリストのリーダー、リキッド・スネーク、か?」
メリル「ええ。知ってたの? まさか兄弟、とか?」
スネーク「俺に家族はいない」
メリル「じゃ、どういうこと?」
スネーク「さあな。奴に直接聞くさ」
スネーク「それよりも、情報を教えて欲しい。君は最初から今回の演習に参加していたはずだ。ここで何があった?」
メリル「(ちょっと当惑ぎみ)私も演習には当日合流したばかりだから……」
スネーク「かまわない。まず、この基地は何だ? ただの核兵器廃棄所とは思えん」

——スネークの問いに驚くメリル。

メリル「なるほど……連中のやりそうなこと。本当に何も知らされていないのね。いい、スネーク、ここは表向きは核兵器廃棄所だけど、本当はちがう。アームズ・テ

ック社のダミー会社が所有する基地なのよ」

スネーク「ここが民間の基地?」

メリル「そう。メタルギア開発のためのね」

スネーク「くっ、大佐め……」

メリル「そしてその模擬核弾頭発射演習のために、次世代特殊部隊とFOXHOUND(フォックスハウンド)が召集された」

スネーク「なぜFOXHOUND(フォックスハウンド)が?」

メリル「メタルギアの開発を極秘裏に進めたかったからよ。FOXHOUND(フォックスハウンド)はいまだに影の部隊。だから隠密行動にはもってこいなのよ」

スネーク「しかし模擬弾頭発射実験なら、これまでも行われていたはずだ。なぜ今回に限って?」

メリル「メタルギアの正式採用を決定するための最終的実戦演習、そう聞いているけど?」

スネーク「怪しいものだ……。それで、テロリストの目的は?」

メリル「(すまなそうに) ごめんなさい。蜂起(ホウキ)の後、すぐにベイカー社長と一緒に捕まって

しまったから……」

スネーク「そうか…。その時、牢獄でベイカーから起爆コード解除の鍵(PALキー)を預かっているだろう?」

メリル「ええ、大事にしてるわ」

スネーク「奴等によく奪われなかったもんだ」

メリル「女は男と違って引き出しを幾つも持ってるの。……ベイカー社長と逢ったのね。保護したの?」

スネーク「いや……彼は死んだ」

メリル「えっ?」

スネーク「心臓発作だった。DARPA(ダーパ)局長と同じく……」

——独房での局長の死体を思いだし、首をひねるメリル。

メリル「局長も心臓発作で……?」

スネーク「ああ。彼等には何か持病が?」

メリル「いえ、聞いたことないわ」

スネーク「二人つづけてとなれば偶然とは思えん。きっと何かある」

メリル　「そうね…。でも心当たりはないわ」
スネーク　「そうか……」
　　――少し間を置いて続ける。
スネーク　「メタルギアの開発者を知っているか？」
メリル　「エメリッヒ博士のこと？」
スネーク　「そうだ。彼は無事なのか？」
メリル　「たぶん、北にある核弾頭保存棟の地下二階よ。そこの研究室フロア」
スネーク　「地下二階だな？」
メリル　「ええ。彼の研究室があるらしいの。そこで核発射のプログラムを強いられてると思うわ」
スネーク　「それが終わるまでは生かしておくつもりだな」
メリル　「準備作業が終わるまでになんとかしないと？」
スネーク　「ああ。起爆コードの解除が間に合わなかった時のために、メタルギアの破壊方法を聞いておかなければならない」

メリル　「（スネークの無謀さに驚く）破壊……って、スネーク。あなた、アレとやりあうつもり？」

スネーク　「（事もなげに）別に今回が初めてじゃない」

メリル　「……」

スネーク　「博士の監禁されている核弾頭保存棟に行くには？」

メリル　「この建物の一階、エレベータの横に北への運搬口がある」

スネーク　「そこの扉のセキュリティ・レベルは？」

メリル　「5よ。大丈夫、私、カード5を持ってるから」

スネーク　「わかった。俺はこれから博士の保護に向かう。君は……」

メリル　「私も一緒にいくわ」

スネーク　「ダメだ。新米はどこかで隠れてろ」

メリル　「新米じゃないわ」

スネーク　「口だけではだめだ」

メリル　「……」

スネーク　「敵に向かって一瞬でもためらったら終わりだぞ。二度も幸運は続かない」

――スネークに指摘され、落ち込むメリル。

メリル　「私、引き金がすぐに引けなかった」
メリル　「訓練ではちゃんとやれたのに……」
メリル　「指を引くだけで、相手の命が終わってしまうと思うと、怖かった……」
スネーク　「訓練で的を撃つのとは訳がちがう」
メリル　「私、軍人になる事をずっと、夢見てきた…」
メリル　「実戦にむけて、毎日毎日、訓練をしてきた…。でも……」
スネーク　「どうだ。もうやめたいか？」

――自分に言い聞かせるようにつぶやく。

メリル　「やめられない。やめるわけにはいかない」
スネーク　「人を殺してショックを受けないのは、異常者だけだ」
スネーク　「罪悪感のない殺人は新たな殺戮を産む。戦場では、普段は封印されている残虐性や闘争本能が顔を出す…。戦場では、戦争という名のもとに罪の意識は緩和される」

メリル　「でも、これは戦争じゃない。テロよ」

スネーク　「精神が安定していないのは、戦闘時の高揚(コンバット・ハイ)の反動だ。大量に分泌されたアドレナリンが薄れ始めているんだ。結論を急ぐな」

メリル　「戦闘時の高揚(コンバット・ハイ)なら講習を受けたわ」

スネーク　「今は議論はやめよう。生き残る事だけを考えろ」

――メリル、平常心を無理矢理取り戻す。

メリル　「ここから生きて帰れたらゆっくり考えてみる」

スネーク　「わかった。言い方を変える。俺の邪魔はするな」

――メリル、笑顔を取り戻す。

メリル　「くえない男。伯父から聞いた通り……」

スネーク　「ほらっ、言った通りだ。現実に直面すれば幻滅するものだ」

メリル　「そうみたい」

――しばらく笑い合う二人。

メリル「わかった、スネーク。おとなしくしてるわ」
スネーク「博士を保護したら合流しよう。それまで鍵(PALキー)を持っていてくれ」
メリル「ええ、大事にしてる。……それと、ここの基地に関しては、私の方が詳しいわ。
何かわからない事があったら連絡して……」
スネーク「気をつけるんだぞ」
メリル「運搬口の扉を開けたらコールするわ」

【メリルとの通信02メリルが扉を開ける無線機デモ】

メリル「スネーク、運搬口の扉のロックを解除しておいたわよ」
スネーク「ありがとう。君はどこに?」
メリル「あなたの見えると・こ・ろ・よ」
スネーク「あまり派手に動くなよ」
メリル「大丈夫こっちは敵兵士の服装でカムフラージュしてるから」
――メリル、スカルキャップを被る。
――メリルの腰を振った歩き方を思い出しながら。

スネーク「君の歩き方を見ればすぐにバレるぞ?」
メリル「どういう意味?」
スネーク「いや、いいんだ」
メリル「聞いて、スネーク。運搬口はエアロックになっているの」
メリル「赤外線センサーが配置してあるわ。気をつけて…。見つかるとガスが噴出する仕掛けになってる」
スネーク「ガスか……」
メリル「それじゃ、核弾頭保存棟で逢いましょう!」
スネーク「おいっ、メリル、待てっ! おとなしくしている約束だぞ!」
メリル「気が変わったの」
スネーク「自棄(ヤケ)になるな。そういう時が一番危険だ」
メリル「私、自分が本当にこの道を進むべきなのか…。闘いの中で答えを探してみる」
スネーク「奴等は殺しのプロだ。死ぬぞっ!」
メリル「……じゃあ!!」

【M1戦車戦00ディープ・スロート無線デモ】

――戦車格納庫を出て、しばらく北へ進むと、強制コール。

D・スロート 「スネーク、気をつけろ!!」
D・スロート 「そこにはクレイモア地雷がセットされている」
D・スロート 「地雷探知機を使え!」
スネーク 「あんた、誰だ?」
D・スロート 「ディープ・スロートとでも名乗っておこう」
スネーク 「ディープ・スロート?」
スネーク 「ウォーターゲートの内部告発者か?」
D・スロート 「そんな事はどうでもいい」
スネーク 「バースト通信ではないな」
スネーク 「近くにいるのか?」
D・スロート 「いいか、お前の前方にM1戦車が待ち伏せしている」
スネーク 「お前は誰だ?」
D・スロート 「ファンの一人だよ」

【M1戦車戦01戦車登場デモ】

—格納庫の南側にある出口から北にある核弾頭保存棟へと一直線に続く渓谷。
—両脇は切り立った崖になっており、まっすぐ北の保存棟まで延びている。
—格納庫の出口も北の保存棟も凍り付いた雪（岩盤）に覆われ、出入口しか見えない。
—特に保存棟は岩盤をくりぬいて作られているので、保存棟内への扉（防空壕のような）しか確認できない。
—あたり一面に吹きすさぶブリザード。
—スネーク、前方を見る。画面、スネークの主観。
—雪コブ（凸地面）を乗り越え、雪煙を散らしながら登場するM1A2戦車。
—たじろぐスネーク。
—戦車、コブを乗り越え、停止する。
—雪渓谷北部。戦車のハッチがあいて、レイブンの額（頭）が覗く（ハッチから目のラインまで晒している）。その額にはレイブンの入れ墨。

レイブン「ここは大烏（レイブン）の縄張りだ……」

—上空をカラスが弧を描いて飛んでいる。
—レイブンの上半身が姿を現わす。レイブン、スネークに目線を合わせてつぶやく。

レイブン「アラスカに蛇（スネーク）は似合わん……。迷い込んだとしても、見逃す訳にはいかん……」

――レイブン、下を向いて戦車の中の兵士に冷たく命令する。

レイブン　「まずは、挨拶からだ」

――戦車主砲旋回、スネークに照準をあわせる。
――主砲の延長線上にスネークがいる。
――主砲、砲撃！
――0．5秒後、スネークの足下に着弾！
――スネーク、吹き飛ばされる。地面にたたきつけられるスネーク。
――それを見て哄笑するレイブン。

レイブン　「ハッハハハハ……いいぞ、その調子だ。跪くがいい」
レイブン　「蛇よ、大地を這いまわるがいい」

――雪渓谷南側。吹き飛ばされたスネーク、起きあがって戦車を見る。
――戦車の主砲、回転しながら、スネークに照準を合わせる。

レイブン　「さぁ本番だ！」

――レイブン、ハッチを閉める。

【M1戦車戦02VS戦車勝利後デモ】

――スネーク、プラスチック爆弾と手榴弾で戦車の動きを止める事に成功。戦車兵から核兵器保存棟の扉を開けるカードを手にいれる。

――壊れたキャタピラ、ハッチからは白煙が立ちのぼり、戦車、完全に静止している。

――カラスの視点である為にかなりの俯瞰。

――スネークが保存棟の扉をくぐろうとしている。

――M1A2戦車のハッチから顔を出す男、バルカン・レイブン。

――額から出血している。

――上空からカラスが舞い降り、レイブンの肩に停まる。

――レイブン、無線機に向かって毒づく。

レイブン　「ボス、これでいいのか？　みすみす鍵(カード)をくれてやったようなもんだ？」

――レイブンの無線機にリキッドの声。

リキッド　「ああ……、まだ奴は泳がせておけ」

レイブン　「奴を甘く見ないほうがいい」

リキッド　「どうだ？　あの男は？」

レイブン　「確かに、ボスの眼に狂いはない」

レイブン　「戦場に息吹を吹き込んでくれる。あんたと同じだ。さすがにあんたの……」

——無線機に割り込むオセロットの声。

オセロット　「私の気持ちがわかったか。奴は私がしとめる」
レイブン　「腕を斬られて逃げ帰ったらしいじゃないか？　旧ソ連（イワン）の大将？」
オセロット　「なんとでも言え、魔術師（シャーマン）が……」
レイブン　「アメリカ・インディアンのスー族の『スー』は——、インディアン語で蛇（スネーク）を意味する……、蛇（スネーク）は恐れられている生き物だ」
オセロット　「私はあいつを愛してしまったようだ。あいつを可愛がってやりたい」
リキッド　「まだだ…、まだ泳がせておけ」
レイブン　「俺は奴ともう一度、闘うことになる」
オセロット　「いつもの予言か？」
レイブン　「そうだ、額の大鳥（レイブン）が奴を欲しがってる」

——ハッチを閉めるレイブン。

——カラスが不気味な鳴き声をあげて飛び立つ。

【注1】病気の原因となっている遺伝子を、正常な遺伝子に戻すことで行う治療。

【注2】国防省付属機関先進研究局（Defence Advance Research Project Agency）の略称。軍事利用を前提とする技術の研究開発を行う機関。

【注3】Continue of Goverment の略。アメリカ合衆国が核による攻撃を受けても、政府機能が停止しないように、100人前後の政府当局者らを地下の防空施設に避難し臨時政府を再構築すること。

【注4】National Security Agency の略で、国防総省の情報収集機関。1952年に創設、通信傍受施設や偵察衛星を用いてアメリカの国家安全保障に関与する、通信諜報活動の専門機関。

【注5】アメリカの国防情報局（Defence Intelligence Agency）の略称。国防長官直属の情報機関で、陸・海・空軍の情報機関を統轄している。

【注6】核（ニュークリア）、生物（バイオ）、化学（ケミカル）の頭文字からとった禁止兵器のこと。

【注7】イギリス軍の特殊空挺部隊（Special Air Service）の略称。対テロ活動において世界屈指の技術力を誇る部隊である。

【注8】イギリスの諜報機関。Secret Intelligence Service の略で、M－6（軍事情報部6課）ともいわれる。アメリカのCIAにあたる組織で、国外の情報集種を任務としている。

【注9】アメリカ合衆国の国防総省総司令部の通称。庁舎の形が五角形をしていることから、ペンタゴンの名で呼ばれる。アメリカ合衆国の国防の中枢である。

■昇降機乗り込み前　キャンベル

【搬入ドック基本】

キャンベル「これが潜入任務だということを忘れるな、スネーク。敵は多数、君は一人。もし見つかってしまったら、あっという間に取り囲まれるぞ」

※一回目のみ

ナオミ　「そうなったら勝ち目はないわ」

※二回目以降

キャンベル「まずはそこの奥にある昇降機に乗って地上に出ろ。それからＤＡＲＰＡ局長を探すんだ」

【コンテナ、パイプの前】ＣＡＬＬ

キャンベル「スネーク、そこはホフクで下を潜り抜けるんだ。まずホフクボタンを押してしゃがんでから、進みたい方向に方向キーを押せばいい」

※一回目のみ

ナオミ　「ホフク中はゆっくりとしか動けないし、攻撃もできなくなるから気をつけてね」

キャンベル「もう一度、ホフクボタンを押せば立ち上がる事ができる」

【水中】

キャンベル「水中やガスをまかれた状況ではＯ２ゲージが表示される。Ｏ２ゲージが一回の息継ぎに相当する」

キャンベル「Ｏ２ゲージが０になると続いて、ＬＩＦＥが減るぞ。注意するんだ」

【水溜まりの近く】

キャンベル「スネーク、水溜まりの上は走るなよ。水音を立てると、敵に気付かれる。注意しろ」

【エレベータ近く】

※一回目のみ

キャンベル「スネーク、そこに地上に昇るための昇降機がある」

※エレベータが降りてきている状態

キャンベル「昇降機に乗れ。核兵器廃棄所の正面に出るはずだ」

※エレベータが降りてきていない状態
キャンベル「昇降機が降りてくるまで待つしかないぞ。どこかに身を隠すんだ」
※エレベータは降りてきているが、敵に見つかっているのでエレベータが動かない状態
キャンベル「敵に追いかけられているのか、スネーク？　危険モード、回避モードの時は昇降機は動かない。なんとか敵を振り切るんだ」

■ヘリポートダクト侵入前　キャンベル

【ヘリポート基本】
キャンベル「スネーク、君の任務は潜入だ。戦闘ではない。敵に見つかるなよ」
※一回目のみ、敵に見つかっている場合
キャンベル「しかし君は早くも敵に見つかってしまったようだな」
キャンベル「残念ながら作戦は不利になってしまった。気をつけるんだ」
※合流
キャンベル「まずはDARPA（ダーパ）局長を救出するんだ。正面の建物に潜入しろ。侵入口を探せ」

【サーチライト近く】
キャンベル「スネーク、相手はサーチライトを使って警戒をしているようだ。敵に見つかるぞ。光の輪に入るな」

【ヘリポート、昇降機近く】
キャンベル「スネーク、もう後戻りはできんぞ。任務を果たしてくれ。希望は君だけなんだ。頼むぞ」

【ヘリポート、トラック近く】
キャンベル「輸送用のトラックがあるようだな」
キャンベル「きっと、施設内の荷物を運搬をするために使われているんだろう」
※ダンボールを持っている場合（移動した事が無い場合）
キャンベル「スネーク、いつものように荷物のふりをしてみればどうだ？　うまく荷物に紛れ込めば、トラックの移動を利用できるかもしれないぞ」

【ヘリポート、正面扉前】
キャンベル「スネーク、その扉から侵入するのは無理だ。他の侵入口を探せ」

【扉、ダクト付近】ＣＡＬＬ
キャンベル「基地の運営には換気が欠かせない。汚れた空気をすて、新鮮な空気を取り入れるための排気口があるはずだ」
※一回目のみ
キャンベル「それと膨大な電力を消費するため、ディーゼル発電器等を備えている可能性もある。発電には空気を消費する。吸排気口が必要だ」
キャンベル「さらに信じられん事だが、陽動作戦（フェイント・オペレーション）に使ったF16が撃墜された。ハインドDにな。リキッドから我々に連絡が入った。『今度またふざけた真似をすると容赦なく、核を発射する！』となン…」
キャンベル「スネーク、潜入を急げ！　もうじきハインドがヘリポートに帰還するぞ」

■ＤＡＲＰＡ局長接触前　キャンベル

【戦車格納庫２階、監視カメラ】
※Ａ、Ｂのランダム
（Ａ）
キャンベル「監視カメラに注意しろ。チャフを使えば、一定時間、電波妨害が可能だ」
（Ｂ）
キャンベル「監視カメラの真下は死角のはず。壁に張り付いて進めば大丈夫だ」

【戦車格納庫２階、音が鳴るデッキ】
キャンベル「物音を立てると、敵に気付かれる。足音がしそうな床では慎重に歩けよ」

【戦車格納庫、居眠り兵】
キャンベル「遺伝子強化されたゲノム兵といえども睡眠時間は必要だ。仮眠を取っている間に行動しろ」
※一回目のみ
ナオミ　「彼らはいついかなる時も攻撃姿勢のまま仮眠を取れるように訓練されているわ。音を

立てないようにね」

※二回目以降
キャンベル「あくびをしている時、敵は目を閉じている。君の姿も見えないはずだ。そのタイミングをうまく利用しろ」

【武器入手】
キャンベル「よし、武器を手にいれたな。武器を使うにはまずR2ボタンを押しっぱなしにして、『武器モード』に入れ。そしてそのまま方向キーで使いたい武器を選択するんだ」
キャンベル「選択したら、R2ボタンを離し『武器モード』を解除しろ。君の手に選んだ武器が握られているはずだ。それぞれの武器の使い方は、ウインドウに表示される説明に従ってくれ」
キャンベル「R1ボタンを使えば、武器の装備が素早くできるぞ。素手の状態でR1ボタンを押せば、前に選んだ武器を装備し、武器を装備した状態でR1ボタンを押せば素手に戻る」

※サプレッサーを持っていない時のみ
キャンベル「銃は無闇に発砲するなよ。音で敵に気づかれるからな。サプレッサーを装備できる銃ならば、銃声を消せるんだが…」
※ナスターシャと無線連絡をしていない場合
キャンベル「武器や兵器に関する事は軍事アナリストのナスターシャに聞くといい。ナスターシャの周波数は141．52だ」

【エレベータ前】
キャンベル「スネーク、エレベータに乗ればフロアからフロアへ移動ができる」
キャンベル「エレベータを呼ぶには、近くにあるパネルを、アクションボタンで押せばいい。しばらく待てばエレベータが来るはずだ」

【DARPA局長居場所デモの前】
キャンベル「スネーク、まずDARPA局長を保護しろ。彼の手がかりを探すんだ」

【DARPA局長居場所デモ（2Fダクト）の後】
キャンベル「DARPA局長は地下一階の独房に移された、という話を聞かなかったか？」

【エレベータ内】
キャンベル「フロア移動はエレベータを使え。行きたいフロアを指定するには、エレベータを入って左にあるパネルを操作すればいい」
キャンベル「方向キーの上下で行きたいフロアの選択、○ボタンで決定、×ボタンでキャンセルだ」
キャンベル「危険モード、回避モードの時はエレベータは動かない。注意するんだ」

【独房、DARPA局長デモ前】CALL
ナオミ「スネーク！ レーダーを見て。DARPA局長の反応を捉えたわ」
メイ・リン「緑の光点が密集して点滅してるのが、見えるでしょ？ それがDARPA局長の体の中にある発信機の反応なの。局長はそこにいるわ」
キャンベル「どうも局長は独房に閉じ込められているようだな…。どこからか中に入り込めないか？ なんとかしてDARPA局長を助け出すんだ」

【DARPA局長の反応を捉えた後】
※B1以外にいる時にSEND
キャンベル「スネーク、地下一階でDARPA局長の反応を見つけたんじゃないのか？」

【DARPA局長デモ前扉の前】
キャンベル「スネーク、その扉はセキュリティシステムで保護されている。セキュリティ・カードが無ければ開ける事はできないぞ」
キャンベル「扉以外にも潜入可能な入り口はあるはずだ。まわりをよく見てみろ。まわりを見るには、主観モードにするとわかりやすい。主観ボタンを押せば主観モードになるぞ」

【独房ダクト、局長の近く】CALL
キャンベル「スネーク、DARPA局長のレーダー反応はそのあたりにある。どこか降りられる所

はないか？　主観でよく探してみろ」

■オセロット戦前　キャンベル

【戦車格納庫、DARPA局長接触デモ後】

※一回目のみ

キャンベル「残念だが、DARPA局長の救出は失敗だ。これ以上その独房にいる意味はない」

※二回目以降

キャンベル「スネーク、とにかくそこを脱出して地下二階に向かえ。アームズ・テック社のケネス・ベイカー社長を助けるんだ。彼の起爆コードがテロリストに知られる前に」

【メリル独房戦】ＣＡＬＬ

※一定時間経過してもスネークが発砲しない場合

キャンベル「スネーク！　何をしてる？　とにかく敵を倒してそこから脱出するんだ！」

※武器を持っている場合

キャンベル「手に入れた武器を有効に使え！」

※武器を持っていない場合

キャンベル「そこに落ちている武器を使え！」

【独房、メリル逃亡デモ後】

※一回目

ナオミ「スネーク、サイコ・マンティスは人の心を読むことが出来るサイキックよ。DARPA局長の起爆コードも彼に読まれた。早くしないと、ベイカー社長も……」

キャンベル「ああ。彼の起爆コードさえ手に入れれば、テロリストはいつでも核を撃てるようになる」

スネーク「（遮って）メタルギアを使ってな。…大佐、あんたは知っていたのか？　この核兵器廃棄所でメタルギアの演習が行われていた事を」

キャンベル「……知らなかった」

スネーク「本当か？」

キャンベル「スネーク、わかってくれ。言った通り、私は君との連絡役に過ぎないんだ」

※二回目以降

キャンベル「とにかく地下二階にいるアームズ・テック社のケネス・ベイカー社長を助けるんだ。彼の起爆コードがテロリストに漏れる前にな」

【武器庫、壁破壊前】
キャンベル「壁が塗り固められたと言うことは壁の色に若干、ちがいあるはずだ。主観でじっくり見てみろ。壁の模様が違う所を探すんだ」
※一回目のみ
ナオミ　「壁を叩いてみたら？　音もちがうんじゃないかしら?!」
※C4を入手していない場合
キャンベル「壁の破壊には何か爆薬が必要だ。C4爆弾か何かがあるだろう。そこは、武器庫じゃないのか？　よく探してみろ」
※C4を入手している場合
キャンベル「君の持っているC4爆弾なら塗り固めた壁を壊せるはずだ」

【壁破壊後】
キャンベル「壁の破壊に成功したようだな。DARPA(ダーパ)局長の残した情報が正しければ、ベイカー社長はその先にいるはずだ。すぐに彼の救出に向かってくれ」

【壁破壊後、武器庫南以外】
キャンベル「ベイカー社長は、地下二階で君が壊した壁の南のエリアに捕えられているはずだ。テロリストが起爆コードを聞き出す前に、彼を救出するんだ」

【壁破壊後、武器庫南】
キャンベル「ベイカー社長はそのあたりにいるはずだ。早く彼を助け出すんだ」
キャンベル「それと、そのあたりではレーダーが使えない。メイ・リンによると妨害電波のせいだそうだ。詳しい事はメイ・リンに聞いてくれ」

■メリル通信前　キャンベル

【武器庫南、オセロット戦】
※一回目のみ
キャンベル「FOXHOUND(フォックスハウンド)部隊の事なら、ドクター・ナオミの方が詳しい」
ナオミ　「リボルバー・オセロットは、元スペツナズ(スペッツナズ)で、ソ連崩壊後は、民警特殊任務部隊(オモン)を経

て、ロシア税務警察の突撃隊に身をおいていたそうよ」

ナオミ「その後、KGB第1管理本部を前身とするロシア対外情報本部（スルージバ・ヴェネシュニイ・ラズヴトキ）の特殊作戦部門に入ったらしいわ」

ナオミ「でも旧KGB体制に適応することができず、スカウトされてFOXHOUND部隊に入隊したの」

ナオミ「西部劇やマカロニウエスタンをこよなく愛すガンマニアであると同時に、スペツナズ時代、強制収容所で拷問特別顧問として参加して、その名を知られた拷問マニアでもあるわ」

キャンベル「KGB本部内にはルビヤンカ刑務所が付設されていたからな」

※二回目以降、ABCDEランダム

（A）

キャンベル「ベイカー社長を傷つけるな。彼を死なせてしまったら全ては水の泡だ。黄色いラインより近づかないようにしろ。仕掛けられた爆弾が爆発するかもしれん」

（B）

キャンベル「戦闘中では弾倉交換時が最も危険だが、奴はそれを楽しんでいる。だからそれを逆に利用するんだ」

キャンベル「リロード時に勝負をかけろ。奴の残弾数が画面に表示されているだろう？　リロードの瞬間を狙え」

（C）

キャンベル「スタン・グレネードを使って気絶させるのも有効だ」

（D）

キャンベル「オセロットに接近しすぎると逃げられるぞ。注意しろよ」

（E）

キャンベル「スネーク、ベイカー社長がいる事を忘れるな。彼はC4爆弾といっしょに縛り付けられているんだ。爆発系の武器は使うな」

【武器庫南、ガンカメラ地帯】

キャンベル「スネーク、ガンカメラが仕掛けられている。

見つかったら攻撃されるぞ」
キャンベル「カメラの視界に入らないようにしろ。チャフで妨害するのもいいかもしれん」

【武器庫、ファマス】
キャンベル「どうやら赤外線センサーが仕掛けられているようだ。何とか赤外線をくぐり抜けるようにしろ」

【武器庫、落とし穴近く】
キャンベル「スネーク！　そこには落とし穴が仕掛けられているぞ。落ちれば命はない。落とし穴のふちを壁に張りつきながら進んでみろ」
※一回目のみ
キャンベル「サーマル・ゴーグルを使えば、落とし穴がどこにあるか見えるはずだ」

【メリル通信前、武器庫南以外】
※一回目のみ
キャンベル「DARPA(ダーパ)局長、ベイカー社長。二つの起爆コードは両方ともテロリストに知られてしまったということか……」
スネーク「ああ……。(極めて怪訝）そして二人とも死んだ」
キャンベル「スネーク、二つの起爆コードが奴等に知られてしまった以上、核発射を食い止めることができるのは、メリルの持っているという起爆コードを緊急入力／解除するためのPAL鍵(キー)と、」
スネーク「ベイカー社長の言っていたメタルギアの開発チーフだけか？　ハル・エメリッヒとかいう？」
※二回目以降
キャンベル「とにかくメリルと無線で連絡をとってくれ。周波数はパッケージの裏に書いてあると言ってなかったか？」

【メリル通信後、最初SEND】
※一回目のみ
スネーク「大佐、安心しろ。メリルは無事だ」
キャンベル「(安堵）そうか……」
ナオミ「メリルさん、強いのね。尊敬しちゃうわ」

スネーク「素質は充分だ」
キャンベル「スネーク、ありがとう」
スネーク「まだ、任務は終わっていない。これからだ」
※二回目以降
キャンベル「メタルギア開発者の保護が最優先だ。メリルが運搬口の扉を開けたら、そこから北に向かってくれ」

【メリルが運搬口を開けた後】
キャンベル「メリルから連絡があっただろう? 格納庫棟一階の北にある運搬口から、核弾頭保存棟へ向かってくれ」

■M1戦車戦前　キャンベル

【渓谷、戦車戦前】
キャンベル「そのまま北に進めば、核弾頭保存棟に着くはずだ」
ナオミ「エメリッヒ博士もそこに捕まっているはずよ」
キャンベル「彼を保護して、メタルギアの破壊方法を聞き出してくれ」

【渓谷、地雷原】
※地雷探知器を持っていない場合
キャンベル「地雷原か。地雷探知機が必要になるな」
キャンベル「メリルなら基地の中に詳しいはずだ。聞いてみてはどうだ?」
※地雷探知器を持っている場合
キャンベル「地雷原だな。地雷探知器を使ってみろ。レーダーに地雷の位置が表示されるはずだ」
キャンベル「地雷の仕掛けられている場所がわかったら、そこをホフクで進んで、地雷を回収するんだ」

【ディープ・スロート受信後】
※一回目のみ
スネーク「大佐、部外者から無線が入ってきた!」
キャンベル「ああ。こちらでもモニターしていた。通信システムに関してはメイ・リンが詳しい。彼女に説明してもらおう」
メイ・リン「確かに部外者でもあなたの無線の周波数を知っていれば、連絡は可能なの。…でもどこでそれを知ったのかな? 回線周波数は

極秘なのに……」
スネーク「情報が外部に漏れている、と?」
メイ・リン「そうとしか……」
スネーク「メイ・リン、奴がどこから通信してきたか、
わかったか?」
メイ・リン「ごめんなさい。電波が弱すぎて特定することができなかったの。でも近くにいることは確かよ」
※二回目以降
キャンベル「スネーク、とにかく地雷原を抜けなければ、先には進めないぞ」

■核保存棟潜入前　キャンベル

【M1戦車戦】
※一回目、ナスターシャSEND前
キャンベル「スネーク、敵の戦車砲は強力だ。そのままでは狙い撃ちだぞ」
キャンベル「何か方法があるはずだ。ナスターシャに聞いてみろ。彼女は兵器関係に詳しい」
※ナスターシャSEND後二回目
キャンベル「戦車は決して単独では行動しない、実はそれ程、脆弱な兵器なんだ。悲観するな。君に勝ち目がないわけではない。ナスターシャに意見を聞いてみろ」
※ナスターシャSEND後三回目以降
キャンベル「戦車を破壊しなければ、核兵器保存棟へは行けないぞ。スネーク、戦車を倒すしかない」

■DARPA局長接触前　メイ・リン

【イントルード状態】
メイ・リン「ごめんなさい。ソリトン・レーダーは狭い空間では使えないの」
メイ・リン「「音響共鳴が激しい場所では、電波が輻輳して地形データが解析できなくなるからなんだけど…。広い所に出るまで我慢して、ね?」
【DARPA局長、居場所デモ後】
メイ・リン「DARPA局長の居場所が分かったのね― DARPA局長は体の中にナノマシン発信機を注射してるわ。近くまで行け

ばレーダーに緑色の光点として映るはずよ。探してみて」

【独房】ＣＡＬＬ

メイ・リン「レーダーを見て！　ＤＡＲＰＡ(ダーパ)局長を捉えたわ。緑の光点で映ってるのがそうよ。早く助けてあげて！」

■オセロット戦前　メイ・リン

【ＤＡＲＰＡ(ダーパ)局長死後直後】ＣＡＬＬ

メイ・リン「ＤＡＲＰＡ局長、かわいそう……せっかく助かったのに、心臓発作だなんて……」

メイ・リン「スネーク、私、何か嫌な予感がするわ。記録(セーブ)しておいて、ね？」

【武器庫】

メイ・リン「スネーク、そのエリアじゃレーダーは使えないわ。妨害電波が出てるみたいなの。一体何のためかしら…？　とにかく気をつけてね」

■Ｍ１戦車戦前　メイ・リン

【渓谷、ディープ・スロート受信後】

※一回目のみ

スネーク「メイ・リン、この無線は部外者からの割り込みを受け付けるのか？」

メイ・リン「ディープ・スロートとか名乗ってた奴ね。こっちでもモニターしていたわ」

スネーク「どうなんだ？」

メイ・リン「確かに部外者でもあなたの無線の周波数を知っていれば、連絡は可能なの。……でもどこでそれ知ったのかな？　回線周波数は極秘なのに……」

スネーク「奴がどこにいるか、わかるか？」

メイ・リン「ごめんなさい。電波が弱すぎて特定することが出来なかったの。でも、あなたの近く……その基地の中にいることは確かかよ」

■初無線　ナスターシャ

ナスターシャ「ナスターシャ・ロマネンコだ。よろしくな、ソリッド・スネーク」

スネーク　「あんたが大佐の言っていた核の専門家か?」
ナスターシャ「そうだ。核に関する質問があったら何でも聞いてほしい」
ナスターシャ「それに、これでも軍事アナリストだ。兵器の知識でも君をサポートできると思う」
ナスターシャ「この作戦には核緊急捜索チームの顧問として参加を要請された。喜んで引き受けさせてもらったよ」
ナスターシャ「テロリストによる核攻撃など許すわけにはいかない。協力させてくれ」
スネーク　「随分と、勇ましいんだな」
ナスターシャ「(真剣) 実際に核が撃たれようとしているんだろう?　核の問題というのは全人類にとって常に他人事ではありえないんだ。傍観は出来ない」
ナスターシャ「…と言っても、今の私にできるのは君に助言をする事くらいだが…」
スネーク　「(ナスターシャの熱意を認め優しく) それで充分だ。誰もあんたにここに来て戦うことなどは望んでいない。…それは俺の役目だからな。ナスターシャ、よろしく頼む」
ナスターシャ「こちらこそ」

■DARPA局長接触前　ナスターシャ

【戦車格納庫2F、監視カメラ】
ナスターシャ「監視カメラがあるな。その機種は監視センターに無線で映像を送信するタイプだ。チャフを使えばカメラを無効にできる」

■オセロット戦前　ナスターシャ

【武器庫南、ガンカメラ地帯】
ナスターシャ「スネーク、そのあたりにはガンカメラが設置されている。発見したものを自動で銃撃する無人警備システムだ。注意しろ」
ナスターシャ「チャフを使えばセンサーを撹乱できるはずだ。ガンカメラの機能が麻痺している間に、駆け抜けろ!」
※スティンガーを持っている場合
ナスターシャ「スティンガーで破壊するというのも手だな」

■メリル通信前　ナスターシャ

【武器庫ファマス部屋、赤外線センサー】

ナスターシャ「スネーク、そこには赤外線センサーが仕掛けられている。紫煙（タバコ）の煙なら赤外線が見えるはずだ」

※一回目のみ

スネーク「あいにく、こいつは煙の出ないモスレムなんだ」

ナスターシャ「副流煙の出ない先折り紫煙（タバコ）か。意外と軟弱なものをすってるんだな……。だが口から煙を吹きかけるようにすれば、赤外線は見えるはずだ」

ナスターシャ「紫煙（タバコ）がこんな所で役に立つとはな。だが吸いすぎには注意しろ。体力が減ることは間違いない。呼吸器系にも影響が出る」

【武器庫南、オセロット戦】

※一回目のみ

ナスターシャ「（軽い驚き）彼はシングル・アクション・アーミーを使っているのか？　シングル・アクション・アーミーの第一号が作られたのは130年以上前。1873年のことだ」

ナスターシャ「今でも少量ずつ生産されてはいる。だがそれはコレクションや美術品としてだ。実戦で使う者などいない」

※二回目以降

ナスターシャ「とにかくリボルバー式拳銃の最大の弱点は、リロードに時間がかかる事だ。その隙をつけ」

■M1戦車戦前　ナスターシャ

【渓谷地雷原、無線聞いた後】

ナスターシャ「そこは地雷原になっているのか？」

※地雷探知機持っていない場合

ナスターシャ「地雷探知機があればな……」

※地雷探知器を持っている場合

ナスターシャ「レーダーで地雷の位置を特定できたら、あとはホフクで進めば回収できる」

※合流、一回目のみ

ナスターシャ「……世界各国で対人地雷は年間二万人以上の犠牲者を出している。カンボジアやニカラグアでは、紛争が終わった今も、地雷に

よる一般の死傷者が続発している」
ナスターシャ「地雷を埋設するのは簡単だが、大量に設置された地雷を除去するのには、莫大な時間と労力がかかるんだ」
ナスターシャ「地雷埋設地域への地雷探知機の輸出、除去技術のサポート等の支援策が、国際的に求められている」

■核保存棟潜入前　ナスターシャ

【渓谷、M1戦車戦】
※一回目のみ
ナスターシャ「M1戦車の電子装置、ベトロニクスは極めて性能が高い。照準を一度ロックオンされたら自動追尾されるぞ。主砲は3000メートルまで有効だ」
ナスターシャ「接近するには、この電子装置を撹乱するしかない。チャフを使え。電子装置を撹乱して主砲の旋回範囲内にまで接近すれば、主砲は意味をなさなくなる」
ナスターシャ「遠距離ではチャフを使って、電子装置をあざむくんだ」

※二回目のみ
ナスターシャ「接近できたとしてもM1戦車の最高時速は70キロ。人間が対抗できる速さじゃない。C4でもグレネードでもいい。まずキャタピラを攻撃して戦車の速度を落とすんだ」
ナスターシャ「速度が落ちたら、操縦席にグレネードを放り込んでやれ。M1戦車の装甲は極めて強固だ。現在の装備であれを倒すには、ハッチから内部の兵士を狙うしかないぞ」
ナスターシャ「接近戦では、グレネードで上部ハッチを狙うんだ」

■ヘリポートダクト侵入前　マスター

【ヘリポート雪の上】
マスター　「足跡はたくさん残す事で敵の判断を狂わせる事が出来る。足跡で進んだ方向を悟らせるな。逆に足跡を偽装することで敵を騙すんだ」

■ダーパ局長接触前　マスター

【マスター・ミラー自己紹介】
※スネークとの初めての通信
マスター「スネーク、マクドネル・ミラーだ。なつかしいな」
スネーク「マスター？　どうして？」
マスター「私は、ブーツキャンプの教官を辞めて、アラスカに住んでいる。君と同じく、隠居生活だ。たまにはアラスカ・スカウトの教官をやったりはしているがな」
スネーク「お互い世代交代の時代か」
マスター「キャンベル大佐から今回の事を聞いた。サポートさせてもらおう」
スネーク「マスターのサポートがあれば心強い」
マスター「サバイバル教官としての経験、知識を役立ててくれ。それと私はアラスカに暮らして、君より長い。
マスター「アラスカの環境、動植物の事などに詳しいつもりだ。周波数は141．80だ」

【ダクト内】
マスター「そのネズミはアラスカハタネズミだな。心配するな。害はない」
※一回目のみ
マスター「野生のハタネズミは厚い脂肪層も持たず、冬眠もしないのに酷寒を生きのびることができる。雪の下にトンネルを掘り、そこで寒さを耐えるんだ」
スネーク「サバイバルの専門家だな。見習うべきか」
マスター「激しい一面もあるぞ。ハタネズミの中には、メスと交尾したオスが、そのメスと他のオスの子どもを殺す行動に出る種もある」
スネーク「自分の遺伝子を残すためか？」
マスター「よくできたプログラムだ」
※二回目以降
マスター「ネズミがいるという事は出口があるはずだ。ネズミの向かった方向に行ってみろ」

【戦車格納庫2F、音鳴りデッキ】
マスター「スネーク、そこの床には足音が響く仕掛け

がしてあるようだ」

※一回目のみ

マスター「いいか、足音を立てずに歩くには『ストーキング』と呼ばれる足の運びを使うといい。方法はこうだ」

マスター「まず、踏み出す方と反対の足に体重をかけ、カカトから地面に着くように足を踏み出す。そしてゆっくりと踏み出した方の足に体重を移しながら、爪先まで地面に下ろすんだ」

マスター「微妙なバランスはうまくヒザを使ってとれ。さぁやってみろ」

スネーク「…で、できない…」

マスター「靴の上から靴下を履くのも手だが…」

※二回目以降

マスター「ホフクで進めば、音はしないはずだ」

■オセロット戦前　マスター

【独房、DARPA局長死後】

※一回目のみ

マスター「(驚き) DARPA(ダーパ)局長が死んだだと?」

スネーク「ああ……。ナオミによると心臓発作だそうだ」

マスター「馬鹿な……」

マスター「(苦々しく) とにかく今はアームズ・テック社の社長、ケネス・ベイカーを探すしかないようだな」

マスター「地下二階だったか?」

スネーク「ああ、塗り固めた壁の向こう側らしい」

マスター「そうか。頼むぞ、スネーク……」

■メリル通信前　マスター

【武器庫南、オセロット戦】

※一回目

マスター「リボルバー式拳銃から射出される弾丸の初速は、オートマチックの拳銃よりもおそい。それが厄介なんだ」

マスター「銃弾の初速は低い方が、肉体に与えるダメージは大きくなる。弾丸が貫通せずに、体内に残るからだ」

マスター「傷の治癒はおそく障害が残る確率も高くなる。そのあたりも熟知した上でリボルバー

を使っているんだろう。そのオセロットという男は」

※二回目以降

マスター「リボルバー式拳銃の最大の欠点は、リロードに時間がかかる事だ。その隙を狙うんだ！」

【ベイカー社長死後】

※一回目のみ

マスター「DARPA（ダーパ）局長に続いてベイカー社長も心臓発作だと？」

スネーク「ああ。あまりにも出来すぎている……。マスター、何かわかるか？」

マスター「いや…（考え込む）が、何かあることは確かだな。用心した方がいい」

■M1戦車戦前　マスター

【ディープスロート受信後】

※一回目のみ

スネーク「マスター、ディープ・スロートという名に心当たりは？」

マスター「ディープ・スロート？　何者だ、そいつは？」

スネーク「わからない。作戦メンバーにも入っていない。それにも関わらず、無線で俺に助言してきた」

マスター「なに？」

スネーク「しかもバースト通信ではなかった。どうやらこの基地の中から送信しているらしい」

マスター「（驚きを隠しつつ）基地の中だと？」

スネーク「ああ」

マスター「……いや、見当はつかない」

スネーク「そうか……」

■M1戦車戦前　メリル

【運搬口開ける前】

※一回目のみ

メリル「スネーク？　……せっかちなのね、あなたって。焦らないで。運搬口を開けるには、あとちょっとかかるわ」

※二回目以降

メリル「扉を開けたらコールするから、もう少し待

ってて?」

【運搬口開けた後、戦車格納庫地上階】

メリル 「運搬口の扉はもう開けてあるわよ。そこから出て北に進めば、エメリッヒ博士が閉じ込められてる核弾頭保存棟があるわ」

メリル 「私は先に行って待ってるから、早く追いついてきてね」

【運搬口開けた後、戦車格納庫地下階】

メリル 「スネーク、道にでも迷ったの? 運搬口は一階よ」

【運搬口開けた後、ヘリポート】

メリル 「スネーク、どこに行こうとしてるの? 核弾頭保存棟は北よ。(呆れ)まったく、伝説の男が方向音痴だったなんて…。現実に直面すると幻滅するってホントね」

【搬出口のエアロック】CALL

メリル 「気をつけて、スネーク。そのエアロックには赤外線センサーが仕掛けられているわ」

※一回目のみ

メリル 「肉眼では見えないでしょうけど、壁から何本も赤外線が出ているのよ。それに触れると扉が閉まって毒ガスが吹き出してくる仕掛けになってるわ。そうなったら命はない」

メリル 「何とかセンサーをよけて進んで」

【ダンボール入手】

※一回目のみ

メリル 「ダンボール箱……伯父から話には聞いていたけど本当に…。いえ、コメントは差し控えさせてもらうわ……」

【渓谷、基本】

メリル 「そのまま北に進めば、核弾頭保存棟に辿り着くわ。エメリッヒ博士は地下二階の研究室エリアにいるはずよ」

※一回目のみ

メリル 「私は一足先に行って待ってるわ」

スネーク「メリル」
メリル「何？　まだ新米は引っ込んでいろとでもいうの？」
スネーク「いや。君が選んだ道だ。俺はもう止めない。だが……」
メリル「だが？」
スネーク「(気づかい) 無茶はしないでくれ」
メリル「(冗談ぽく、すねてみせる) 無理するな、じゃなくて無茶するな、か。よっぽど信用されてないのね、私」
スネーク「(諭そうとする) メリル……」
メリル「わかってるわよ。ありがとう。じゃあ」

【地雷原】
※一回目のみ
メリル「地雷が仕掛けられているの？　そうね、地雷探知機を使えば、レーダーに地雷の位置が表示されるわ」
※地雷探知機持っていない場合
メリル「地雷探知器なら、戦車格納庫棟の二階にあったはずよ」

■核保存棟潜入前　メリル

【M1戦車戦】
※A、Bのランダム
(A)
メリル「チャフを使えば戦車の電子装置をだませると思う」
(B)
メリル「生身で戦車を相手にするのは、いくらあなたでも無茶よ。戦車を操縦している人間を倒すしかないわ」
メリル「グレネードを投げつければ、戦車の上の敵も攻撃できるはずよ」

Section 2

after M1 Tank fight – vs Sniper Wolf (1st)

M1戦車戦後～ウルフ戦(1st)

【核弾頭保存棟一階無線デモ】

キャンベル「スネーク、そのフロアで武器は使うな」

ナオミ「ナノマシンを使って、あなたが武器を使えないようにしておいたわ」

スネーク「何？　俺を死なせたいのか!?」

ナオミ「忘れたの？　そこは廃棄核弾頭の保存庫なのよ」

スネーク「ああ。たくさん箱が積まれているが……これが全部？」

キャンベル「そう。廃棄核弾頭だ」

スネーク「置きっぱなしか。（呆れ）ベイカー社長の言った通りだな。ずさんな管理だ」

キャンベル「費用や人員は常に限られているからな。メディアに対しては聞こえの良い言葉で体裁を繕っていても、実状はこれだ。そのあたりの事はナスターシャが詳しいはずだがな」

キャンベル「ナスターシャの周波数は141．52だ」

ナオミ「そこに積まれてる核弾頭、起爆装置は外してあるはずだから爆発はしないはずだけど、弾頭が壊れてプルトニウムが漏れ出したら大変なことになるわ」

キャンベル「注意しろ。そのエリアでは武器は絶対に使えない。いいな」

【サイボーグ忍者戦00高圧電流注意】

D・スロート　「スネーク、気をつけろ!!」
D・スロート　「ガスが充満している」
D・スロート　「おまけに床には高圧電流が流されている」
D・スロート　「まず高圧電流のスイッチを破壊するんだ」
D・スロート　「北西の壁にある配電盤のようなものだ」
スネーク　「そこまで行けない。どうしたら?」
D・スロート　「リモコンミサイルを使うんだ」

【サイボーグ忍者戦01兵士達の死体デモ】

――メタルギア開発チーフ、ハル・エメリッヒ博士（オタコン）の研究室へと続く細い廊下。あたりを見渡すスネーク。
――その両脇には兵隊（ガスマスク兵）の死体が累々とならび、冷たい蛍光灯の光に照らされている。壁や床には流血の跡。
――兵士達の死体は皆、刀で斬られたような斬り傷、血痕がある。
――スネーク、兵士の傷を指でなぞる。

スネーク　「刃物で斬られたようだ」

——俯瞰画面。操作が可能になるが、カメラはスネークの背後（北向き）に降りてきて、背面視点に近いアングルになる。

——スネークが進むと、左のコーナーから兵士がよろよろと歩いて、スネークの前で倒れる。スネークはまだコーナーを曲がりきっていない。

兵士A　「ゴ…、ゴースト！　……グフッ…」

——息絶える兵士。

【サイボーグ忍者戦02研究室扉前デモ】

——スネーク、死屍累々の廊下を進み、研究室の前に至る。

——直後、研究室の内部から兵士達が忍者に発砲する銃声と、忍者に斬り殺される断末魔の叫びが響いてくる。

——既に開け放たれた研究室の扉前で、敵兵士の一人が姿の見えない何かに串刺しにされている。

——見えない敵（忍者）は周期的にスパークして、そのシルエットが陽炎のように浮かぶ。

——兵士の死体が地に落ち、忍者のあいまいな輪郭が研究室への扉をくぐっていく。

——それを呆然と見送るスネーク。

――スネーク、研究室の中に足を踏み入れる。

【サイボーグ忍者戦03忍者遭遇デモ】

――オタコン専用の研究室。パーティションで区切られたオタコンと助手達のブース。整然としていて清潔。

――様々なOAコンピュータ、大型スーパーコンピュータ（西側のパーティション）、ハードディスクに書類、ファイルや本（ジャパニメーション関係のマンガ）が収められている大きな資料棚。

――フラスコやビーカー、試験管が並ぶ化学実験棚、科学実験装置。

――部屋の片隅にはオタコン達のロッカー。

――スネーク、室内に入ると白衣を着た男（オタコン）が腰を抜かしている。

――入り口からオタコンのいるところまで、血の足跡がつづいている。

――陽炎のような忍者の影が、部屋の片隅（ロッカーの前付近）のガラスのパーティションにオタコンを追いつめていく。

――オタコン、お尻をついたまま壁に追いつめられ、逃げ場がない。

――恐怖に失禁するオタコン。

オタコン　「！　……」

――姿無き忍者の手に握られている刀が失禁で濡れた床をこすり、火花が散る！

――火花が散った瞬間、ステルス迷彩が撹乱されて、忍者のシルエットがみえる。

――と、忍者は空間からすっと現れる。

オタコン「ステルス迷彩？　君は？」

忍者「俺の友はどこだ？」

オタコン「何の事だよ？」

――スネーク、部屋の中央へ。オタコン、スネークに気づき視線を向ける。

オタコン「今度はなんだ？」

――オタコンの視線に気づき、ゆっくりと振り向く忍者。忍者、スネークを視界に入れる。

忍者「スネーク!!」

――所々、聞き取りにくい。喉の気管から直接出力しているような呼吸音が混じっている。

スネーク「さっきの忍者……」

忍者「待っていたぞ！　スネーク！」

――忍者、身体ごと向きなおり、刀を構える。

スネーク「貴様は一体？」

忍者「敵でも味方でもない。そういうくだらない関係を超越した世界から帰ってきた」

――刀から滴り落ちる敵兵達の鮮血。

忍者「二人きりで勝負をつけたい。邪魔な奴等は排除した」

スネーク「目的はなんだ？」

忍者「ずっと待ち望んでいた。ただお前との一時を楽しみたい」

――オタコン、二人の会話を聞きながら、逃げるタイミングを探すべく、ゆっくりと壁伝いに移動し、忍者との距離を稼ぐ。

――移動しながら、掠れるような声で悪態つくオタコン。

オタコン「何なんだよ、こいつら……これじゃ、まるでアニメじゃないか」

忍者「決着をつける為にあの世から戻ってきた」

スネーク「恨みか？」

忍者「そんな陳腐な感情ではない」

忍者「お前との生死をかけた闘い、そこにのみ快楽がある」
忍者「お前を殺す事、お前に殺される事。どちらも同じだ」
――オタコン、決然とした表情。意を決し跳ね起きる。
オタコン「うおっぉおおお……」
――オタコン、凄い勢いで突進。だがその方向は忍者でもスネークでもなく、
――部屋の奥のロッカー。
――ロッカーの中に入り込むと、その扉をバタンッ！と閉める。
――忍者、微動だにせず、吐き捨てる。
忍者「ふん、いいだろう、特等席で見ているがいい」
スネーク「その男は必要だ。手出しはさせん」
――忍者、刀を大きく振り回して、もう一度、構え直す。
忍者「さあ、俺を感じさせてくれ！　俺に生きる実感をくれ！」

【サイボーグ忍者戦04忍者逃亡デモ】

――スネークとの格闘戦の末、忍者倒れる。
――忍者、しばらく両手を床につき、肩で息をする。
――それを黙って見下ろしているスネーク。

忍者　「効いたぞ、スネーク……」
――忍者、ゆっくりと立ち上がる。

忍者　「思い出したか？　この俺を？」
――スネーク、忍者の行動にハッと思い出す。

スネーク　「まさか？　ザンジバーランドで死んだはず」
――忍者、腕を回転させて刀を出現させる。
――突然、電撃に触れたように身体を仰け反り、痙攣し出す。

忍者　「うわぁあああ！」

スネーク　「なんだ!?　またあの症状？（と勘違いして）」

忍者　――忍者、四つん這いになり、首を左右に小刻みに振りはじめる。
「クスリがぁ」
――苦痛をのがれる為、床に頭突きを始める忍者。
――杭を打ち込むような反響が響く。
――ロッカーの中で膝を抱えて、耳を塞いで震えるオタコン。
――のたうちまわる忍者。

スネーク　「どうなってる…？」
――スネーク、忍者の突然の異変に立ち尽くす。
――人格が失われつつある忍者。痙攣をやめて、ゆっくりと床から頭を離す。

忍者　「俺が消える!!」
――唖然とするスネーク。
――忍者、体内に走る苦痛が去ったかのように平然とスネークを傍観する。

スネーク　「……」
――一瞬の静寂にロッカーの中で顔を上げるオタコン。

オタコン　「収まった…？」
忍者　「ぐぅわぅわわわわわー!!!」

——忍者、獣のような咆吼と共に消える！
——天井を見上げるスネーク。
——もう一度、獣のような咆吼が研究室内に轟く。
——スネーク、キャンベルに無線連絡する。

【サイボーグ忍者戦05忍者逃亡後無線機デモ】

スネーク　「グレイ・フォックス…。奴はグレイ・フォックスだ、大佐。間違いない」
キャンベル　「そんな馬鹿な？　奴はザンジバーランドで君に…」
ナオミ　「(ヤケ気味) そう、殺されたはず。でも、生きていたのよ」
キャンベル　「何だと？」
ナオミ　「私がFOXHOUND(フォックスハウンド)のメディカルスタッフになる前の事よ。ゲノム兵の遺伝子治療(ジーン・セラピー)の実験体にされた兵士がいたらしいわ」
キャンベル　「初耳だぞ」

ナオミ　「キャンベルさんが除隊した後の話だから…。私の前任者、クラーク博士が担当していたの」
キャンベル　「クラーク博士？」
ナオミ　「遺伝子治療（ジーン・セラピー）を導入した張本人よ」
スネーク　「そのクラーク博士は？」
ナオミ　「一年前研究所の爆発事故で亡くなったそうよ」
スネーク　「人体実験、と言ったな」
ナオミ　「ええ。その実験体にはザンジバーランド陥落の時に回収された元隊員が選ばれたそうよ」
スネーク　「それがグレイ・フォックスか」
キャンベル　「だがあの時、奴は死んだはずでは？」
ナオミ　「（怒りを抑えつつ）無理やり蘇生させられたのよ。強化骨格と麻薬づけにされて。それから4年間彼は死ぬことすら許されないまま玩具（オモチャ）のように弄（もてあそ）ばれつづけた」
ナオミ　「今のゲノム兵は、その実験結果から生まれたのよ」
キャンベル　「酷（むご）い話だな……」

ナオミ　「おそらく様々な遺伝子治療（ジーン・セラピー）の初期実験がされたはず」

スネーク　「……ナオミ、なぜ今まで黙っていた」

ナオミ　「……。機密事項…だったから」

スネーク　「それだけか？」

ナオミ　「……」

キャンベル　「ナオミ、その後グレイ・フォックスはどうなったんだ？」

ナオミ　「事故死、と記録にはあったわ」

キャンベル　「そうか……。だが、その忍者（サイボーグ）がグレイ・フォックスだったとしても、なぜ？」

スネーク　「あの様子では、正常な意識は無くしているようだった」

キャンベル　「戦闘意識のみで生きているというのか……？」

スネーク　「あるいは、俺との決着をつけるつもりか……。いずれにせよ、奴はまた現われるはずだ」

ナオミ　「そうしたら、また闘うの？　彼を殺すまで？」

スネーク　「……そうだな……（悲しげに）奴はそれを望んでいるのかもしれん……」

ナオミ　「……」

【オタコン救出01オタコン救出デモ1】

――忍者が消え去った直後の研究室。忍者の気配は既に無く、咆哮ももう聞こえない。スネーク、ロッカーに近づき、オタコンに語りかける。

スネーク　「いつまで隠れてる？」

――ロッカーの中で顔を上げるオタコン。
――ロッカーの外のスネークの声に応える。

オタコン　「えっ？　……君も仲間？」
スネーク　「仲間？　俺に仲間はいない。俺はいつも一人だ」
オタコン　「一人？　……君もオタクかい？」
スネーク　「さあ、早く出て来るんだ。いつまでもここに居られない」

――オタコン、ゆっくりとロッカーの扉を開けて、様子を伺いながら這い出てくる。
――スネークの服装を見て、ホッとするオタコン。

オタコン　「奴等の制服とは違うね」
スネーク　「メタルギア・レックスの開発チーフ、ハル・エメリッヒ博士だな？」

——オタコン、立ち上がる。

オタコン「僕を知ってるようだね」
スネーク「メリルに聞いた」
オタコン「ああ、助けに来てくれたの？」
スネーク「残念だが、そうじゃない。先にしなければならない事がある」
オタコン「まあいいか、敵じゃなさそうだし」

——スネーク、オタコンが足を引きずっていることに気付く。

スネーク「ん？　怪我をしたのか？」
オタコン「逃げ込んだ時にちょっと足をひねっただけさ」

——足をさすって見せるオタコン。

スネーク「その様子なら心配ないようだな」

——スネーク、オタコンに歩み寄る。

スネーク「聞きたいことがある。メタルギアについて知りたい」

オタコン「えっ、メタルギアかい？」
スネーク「そうだ。メタルギアが開発された真の目的はなんだ？」
オタコン「移動可能な戦域ミサイル防衛[TMD]【注1】だよ。核ミサイルを撃墜する、あくまでもディフェンス用の兵器」

――スネーク、オタコンにつかみ掛かる。

スネーク「嘘だ！　今回のメタルギアが単なる核搭載歩行戦車ではない事は分かってる！」
オタコン「核…？　一体何のこと？」
スネーク「テロリスト達はメタルギアで核攻撃を仕掛けようとしているんだぞ。知らないはずがあるか！」
オタコン「彼等はＴＭＤのミサイル・モジュールを利用して、廃棄核弾頭を撃ち出そうとしてるんじゃ？」
スネーク「違う。この基地で行なわれていた演習は、初めからメタルギアによる模擬核弾頭発射が目的だった。奴等はそれをそのまま占拠し利用しているんだ」
オタコン「そんな馬鹿な」
スネーク「お前のボス、ベイカー社長から直接聞いた」

――スネークの迫力に、その言葉が事実であることを悟り、うなだれるオタコン。

オタコン　「嘘だ……レックスに核が……」

スネーク　「（あまりに意外）まさか本当に知らなかったのか？」

――到底、信じられない様子のオタコン。

オタコン　「武装は全て別の部署で作られていたんだ。本体への組込は社長が直接指揮をとっていた」

スネーク　「あの社長が？」

オタコン　「ああ。武装の内容についても詳しくは知らされていなかった。バルカン砲、レーザー、レールガン・ユニットがあるということしか……」

――格納庫に眠るレックスをカメラが嘗める。

――レールガンユニットのＵＰを画面に映しスネークとオタコンの会話は進行する。

スネーク　「レールガンだって？」

オタコン　「磁場を使って超高速の弾丸を撃ち出す兵器さ。ＳＤＩ構想【注2】で一度、ポシャった企画だけど。リバモア国立研究所【注3】とアームズ・テック社が共同開発し

て小型化に成功したんだ。レックスの右肩に装備されている」

——メタルギアの核モジュール（ランドセル）部分UP。

スネーク 「メタルギアは核発射専用の兵器だ。何か、思い当たるフシはないか？」

オタコン 「確かに、レックスの背中には——、8発のミサイルを装填できるミサイルモジュールがある。でも……それが始めから核ミサイルを発射するためのものだったってこと？」

【オタコン救出02オタコン研究室　オタコンのデスク】

——オタコンとスネーク、場所をオタコンのデスクに移している。

——オタコン、椅子に腰かけている。

——スネーク、オタコンの机に腰かけている。

——オタコンのデスクにメタルギアの設計図らしきものが貼られている。

——そのメタルの設計図を指で示しながら……。

スネーク 「ああ…。だがそれだけとは思えない。メタルギアで通常核を発射する実験なら、これまでに、収集データがあるはずだ」

――オタコン、考え込む。

オタコン「まさか…いや…、ひょっとして？」

――オタコン、急に気付く。手を振り回して大仰な手ぶり。

――仮想実験室のニュースフィルム（モノクロ）と核実験のフィルム挿入。

オタコン「レックスの共同開発元、リバモア研究所では…新しい核兵器を創るプロジェクトも行なわれていたんだ。ノバやニフと言ったレーザー核融合実験装置とスパコンを使ってね」

スネーク「その仮想実験室でもしも新型核兵器が開発されていたら……」

オタコン「仮想データだけでは実戦配備はできない。実際の発射データが必要……」

――スネークとオタコン、再び場所を移している。

――スーパーコンピュータが並んでいる（被弾していると壊れている）。

――スパコンを前にオタコンが続ける。

オタコン「これがそのスパコンの一部だよ。これらを繋ぐと仮想空間での実験ができる…
…あくまでも理論上の事だけどね」

――スパコンを見ながら、スネーク。

スネーク　「その理論をより具体化するための演習だったのか？」

オタコン　「うちの社長、なんて事を。……それを奴等が発射しようとしている」

――うなだれるオタコン。

オタコン　「クソッ」

――床の上を拳で叩く。何度も何度もたたくうちに手に血がにじみ出す。

オタコン　「クソッ!!」

――オタコン、涙を流しながら……

オタコン　「僕が馬鹿だったよ……。自分のまいたタネだ」

――マンハッタン計画、エノラゲイ、ファットマン、ヒロシマ、ナガサキの映像挿入。

オタコン　「実は――、僕の祖父さんは、マンハッタン計画【注4】に参加していたんだ」

オタコン　「祖父さんは死ぬまでその事を悔やんでいた。それに僕の父が生まれたのは、

スネーク　「ヒロシマに原爆が投下された日か……皮肉な事だな」
　　　　　　　1945年、8月6日」
オタコン　「親子三代……僕の家系のＤＮＡには核兵器に苦しめられる運命が書き込まれて
　　　　　いるのか？」

　　　　　――再び場所を変える二人。ロッカーの前のスペースにいる。

オタコン　「『科学は人の生活を助ける』と信じて研究してきた。それが……」
オタコン　「結局、僕等は利用されただけだ。科学の平和利用なんてアニメでしか……」

　　　　　――泣き崩れるオタコン。

スネーク　「泣き言はいい。現実を見るんだ」
スネーク　「メタルギアはどこだ。この基地のどこにある？」
オタコン　「レックスは今、地下整備基地にある」
スネーク　「それはどこだ？」
オタコン　「通信塔の遥か北さ。だけど道のりは遠いよ」
スネーク　「同じ所に起爆コードを解除するシステムが？」

オタコン　「おそらくは……。地下整備基地の司令室だ」

オタコン　「急いだ方がいいよ。最初から発射実験が仕組まれていたとすると、弾道プログラムも済んでいるはずだ。この数時間、僕が呼ばれてない所をみると、もう僕は用無し、つまりは準備完了って事だ」

スネーク　「メリルが起爆コード解除の鍵(PALキー)を持っている。彼女と合流しよう」

オタコン　「解除がダメなら、破壊するしかないね」

――ロッカーの前のオタコンとスネーク。オタコンはロッカーの中から取り出したステルス迷彩コートを見にまとっている（スイッチは入れていないので姿は見える）。元気づくオタコン。足を引きずりながら大仰な手ぶり。

オタコン　「僕が案内するよ」

スネーク　「その足でか？　邪魔なだけだ」

オタコン　「レックスを破壊するには僕が必要だよ」

スネーク　「必要なのは、おまえじゃない。お前の知識だけだ」

オタコン　「レックスは僕が創った。僕には破壊する義務がある。権利がある」

――スネーク、銃を構え部屋を出る準備をし始める。

スネーク　「頃合を見計らって、ここから脱出してくれ。安全を確保してから、無線で連絡をする」
オタコン　「この孤島からどうやって逃げろっていうんだい？」
スネーク　「わかった」
オタコン　「それじゃあ？」
スネーク　「どこかに隠れて、情報だけでいい。この施設には詳しいだろ？」
オタコン　「そうこなくっちゃ。心配しなくてもいいよ。この新兵器がある」
　　――ステルス迷彩のスイッチを入れる。
　　――と、オタコン、透明になる。輪郭だけは見える。
オタコン　「さっきの忍者と同じステルス技術だ。FOXHOUNDに支給される予定だったんだけどね。これさえあれば足を、怪我してたって大丈夫さ」
スネーク　「わかった。メリルに護衛させよう」
　　――スネーク、無線機でメリルを呼び出す。

【オタコン救出03メリルと通信無線機デモ】

スネーク「メリル、開発者を保護したぞ」
メリル「よかった」
スネーク「君に奴の面倒を頼みたい。今、何処だ？」
メリル「すぐ近くよ」
敵兵の声「いたぞっ！　こっちだ!!」
メリル「しまった！　見つかったわ!!」

――銃声とノイズ……
――ＢＧに洗脳の歌が聞こえる。
――銃撃の音の後、無線機が壊れる音。

スネーク「メリル！　どうした!!」

――無線機途絶える。

【オタコン救出04オタコン救出デモ2】

――再び場所を変える二人。オタコンのデスク前にいる。

――心配げなスネーク。

スネーク「何かあったらしい」

オタコン「何か聞こえなかった？　音楽のようだったけど」

スネーク「彼女の容姿は？」

――オタコン、腕組み、考えるポーズ。

オタコン「彼女、テロリスト達と同じ緑の戦闘服を着てたよ」

――スネーク、逃げていくメリルの後ろ姿を思い出す。

――画面にはその時の様子が映し出される。

スネーク「変装か？」

オタコン「なかなか魅力的な歩き方をしてたな。お尻なんか振っちゃってさ……」

スネーク「よく見てるな」

オタコン「彼女のお尻、魅力的だったから……」

スネーク「歩き方か……」

オタコン「それと敵兵に化けてるんなら、一人の時に接触（コンタクト）しないとダメだな」

オタコン「女が一人になる所っていえば……ひとつしかないけどね」

スネーク「どこだ?」

オタコン「野暮なこと聞くなよ……」

——照れ隠しに、オタコン、カードをスネークに渡す。

オタコン「これ、僕のセキュリティ・カード、使ってくれ」

オタコン「セキュリティ・レベルは4だ」

——スネーク、思いついたように。

スネーク「苦しくはないか?」(フォックスダイの件)

——オタコンの肩に触れるスネーク。

オタコン「えっ?」

スネーク「気分はどうだ?　どこか具合が悪いとか?」

——オタコンの身体に手を置き、確認する。不思議がるオタコン。

オタコン「気持ち悪いな…。急にやさしくなっちゃって」

スネーク　「いや、何もなければいい」
オタコン　「君、変だよ」
スネーク　「俺の思い過ごしだ。俺が助けた奴はみんな死んだ」
オタコン　「縁起悪いな」
スネーク　「博士、忘れてくれ……」
オタコン　「オタコンって呼んでくれ」
スネーク　「オタコン？」
オタコン　「オタク・コンベンションの略。僕、和製アニメ(ジャパニメーション)が好きなんだ」

――オタコン、自分の部屋を見回す。
――室内にはジャパニメーションや特撮物のポスターや模型が並んでいる。
――ポリスノーツのＥＭＰＳのポスターがＵＰになる。オタコン、研究室を案内するように歩き出す。
――スネーク机にすわったまま、目でオタコンを追う。

オタコン　「世界で最初に二足歩行を完成させたのは日本人なんだ。あそこではロボットの開発が進んでいる」

スネーク　「それも和製アニメ(ジャパニメーション)の影響が大きいと？」
オタコン　「そうだよ。僕の人生はなにも核兵器を創る為にあるんじゃない」
スネーク　「科学者はみんなそう言う」
オタコン　「僕が科学者になったのも、アニメのようなロボットを創りたかったからなんだ。純粋にね」
スネーク　「言い訳にしか聞こえないぞ」
オタコン　「確かに、僕達にも責任はある。戦争があるから科学が発展する。科学者の欲があるから殺戮兵器が生まれる」
――感慨深げなオタコン、何か決断したようにスネークを見る。
オタコン　「でも、今日で終わりだ。もう殺戮行為に手は貸さない」
――スネーク、オタコンの所に歩いて行く。
スネーク　「すまないが、俺には知識だけを貸してもらう」
オタコン　「僕はこの研究所、いや基地に詳しい。ここの事やレックスの事なら遠慮なく聞いてくれ…」

オタコン　「それとステルス迷彩だから、食料貯蔵庫と弾薬庫に出入りできる。レーション
　　　　　や弾薬が欲しい時は届けてあげるよ」

——オタコン、ステルス迷彩のスイッチを入れると、すっと消える。

オタコン　「周波数は141．12だ。それじゃ……」

——扉が独りでに開いて、見えないオタコンが出ていくと、再び閉まる。

【メリルを探せ01メリル接触デモ】

——核保存棟B1。敵兵士に変装したメリルとの合流を図ったスネークは、「女が一人になるところ」女子トイレの中に入っていく敵兵士を捕捉した。
——それを追って女子トイレの中に入り込むスネーク。
——しかし女子トイレの中には追ってきたはずの敵兵士（メリル）の姿がない。
——トイレには三つの個室ブースがある。
——スネークは個室ブースの足下を覗いていく。
——左、中央のブースには人の気配はない。
——スネークは一番右のブースの足元に兵士のブーツを発見する。
——この時、メリルが隠れているのは洗面台の下。

——スネーク、中央のブースに飛び込む。

——しかしブースの中には便座の前に兵士のブーツがあたかも、人が座っているように見えるように置かれているだけだった。

——水洗タンクの上に軽装備兵の迷彩服、スカルキャップが掛けられている。

メリル「動かないで!!」

メリル「2度も後ろを取られるなんて、伝説の男が聞いてあきれるわ」

——スネーク、振り向くとメリルが立っている（メリルは洗面台の下に隠れていた）。

——ファマスの銃口を下げるメリル。

——メリルは既に軽装備兵の服装を脱ぎ捨て、タンクトップ姿に着替えている。ノーブラの為、乳首がシャツの下から突き上げているのがわかる。

——軽装備兵から奪った弾帯、ハーネスを付けている。

——弾帯には弾倉入れ（ポーチ）、救急キットが取り付けられ、ぴっちりとした皮のパンツに大振りのサバイバルナイフを太股に下げている。

スネーク「君がメリル……?」

——しばらくメリルの容姿に息を飲むスネーク。

スネーク　「男になりきるには無理があるな？」
メリル　「どういう意味、ここは男子禁制よ」
スネーク　「君がこんなに女らしいとは思わなかった」
　　――少し、むっとするメリル。
メリル　「こんな所で言う口説き文句ではないわね」
メリル　「まあ、私を口説いても無駄よ。入隊時に異性に興味を抱かないサイコセラピーを受けてるから」
スネーク　「その口のきき方、メリルに間違いないようだ。怪我は無いか？」
メリル　「今の所はね。ゲノム兵の振りをしてたから……」
スネーク　「着替えたのか？　その格好よりは奴等の兵装の方がましだぞ」
メリル　「もう自分を偽るのやめたの…」
　　――意味有りげにうつむくメリル。メリルの左肩に旧FOXHOUNDエンブレムのタトゥーが見える。
メリル　「本当は、服に血の臭いがして……」

スネーク　「そのマークは？」

――腰を回して、肩のタトゥーを覗き見るメリル。

メリル　「これ？　ペイント・タトゥーよ。本物じゃない。私、この頃のFOXHOUND（フォックスハウンド）が好きなの。伯父やあなたがいた頃の……」

――と、スネークを見つめる。

メリル　「今のように遺伝子治療（ジンー・セラピー）もなかった。伝説の英雄（ヒーロー）達がいた」

スネーク　「戦場に英雄（ヒーロー）はいない。俺の知っている英雄はみんな死んだか刑務所に入っているかのどちらかだ」

――スネークの答えにやや困惑するメリル。

メリル　「スネーク、あなたは英雄（ヒーロー）よ。違うの？」

スネーク　「戦場でしか自分の意味を見出せない男だ。傭兵には勝敗など意味がない。戦争で勝利を収めるのはいつも民衆だ」

メリル　「そうなの、あなたは人の為に闘ってるわ」

スネーク　「誰かの為に闘った事は一度もない。俺には生きる目標はない。生き甲斐もない……」
メリル　「そんな？」
スネーク　「戦場で死をかいくぐっている時だけだ。生きてる事を実感するのは」
メリル　「人の死を見て、生を感じるなんて？　戦争を愛して止まない。歴戦の兵士って、そういうものなの？」
——メリルの疑問をはぐらかすように。
スネーク　「なぜ連絡しなかった」
メリル　「無線機が壊れたの」
スネーク　「それだけか？」
メリル　「こうして逢えたから、よかったじゃない？」
——と、沈んだ雰囲気を一新するかのように、ファマスを壁に立てかけるメリル。
メリル　「でも、よく私がわかったわね？」
スネーク　「一度、逢った女は忘れない」

メリル　「やっぱり。私に気があるのね？」

スネーク　「君のお尻に魅かれたんだ」

　　——スネーク、目線でメリルの下半身を示す。

メリル　「お尻？」

メリル　「へぇ、最初は眼で今度はお尻？　次はどこかしら」

スネーク　「戦場で次を考えない方がいい」

　　——顔を見合わせる二人。しばらく沈黙……。

　　——メリル、太股のナイフ抜いて、手首を小刻みに振る（ポリスノーツのメリルの癖）。

メリル　「で、スネーク、交渉はどうなってるの？」

スネーク　「進展はない」

メリル　「つまり、あなたにかかってるわけね？」

スネーク　「とにかく、奴等が核を撃つのを食い止めるしかない」

メリル　「方法は二つ。メタルギアを破壊するか……」

スネーク　「起爆コードを解除するか。ベイカー社長から鍵（PALキー）を預かってるな」

メリル　「これね？」

――ナイフを仕舞い、懐から鍵を取り出すメリル。
――メリルの掌には一つしか鍵がない。

スネーク　「鍵（PALキー）は三つあるはずだが？」
メリル　「これしか預かってないわ」

――鍵を受け取るスネーク。疑問を呈する。

スネーク　「残る二つは……何処に？」
メリル　「わからないけど、きっとどこかにあるはずよ。でも、鍵がないとなると本体を破壊するしかないわね」
スネーク　「メタルギアはこの北の地下整備基地にあるそうだ…」
メリル　「私も連れてって。ここなら私の方が詳しい」
スネーク　「足手まといだ。君は実戦経験が少ない」

――メリル、スネークの腕を取って、身体を正面へ向ける。
――二人の背後の鏡に二人が投影される。

メリル　「足手まといにはならない。誓うわ」
スネーク　「もしそうなったら？」
　　――スネークの目を見ながら真顔で答える。
メリル　「かまわず私を撃って」
　　――表情一つ変えずにスネーク。
スネーク　「……弾の無駄使いはしない」
　　――スネークを離して、洗面台に移る自分を見ながら。
メリル　「わかった。ケリは自分でつけるわ」
メリル　「私、普通の女の子みたいに化粧なんてしない……」
メリル　「だから、鏡に向かうなんて習慣もない。そういう女になるの、嫌いだった」
メリル　「ずっと軍人になるのが、夢だったの」
　　――鏡の後ろでじっと聞くスネーク。
メリル　「でも違った…。それは自分の夢じゃなかった。私の父、小さい時に戦争で死ん

だの」

スネーク「親の遺志を継いで?」

メリル「いいえ、軍人になれば死んだ父の事が理解できると思ったの」

スネーク「それで、軍人に?」

メリル「今日までそう思っていた。でも今わかった。――本当は自分を見るのが恐かっただけ、自分で生き方を決めるのが恐かったのよ……」

メリル「もう自分を偽りたくない。自分を見つめる勇気を持ちたい」

メリル「私が何者であるか、何ができるか、私が生きてきた人生は何だったのか、確かめたい…」

――おもむろに自分の装備を支度するスネーク。

スネーク「よく見とけよ。しばらく鏡は見られなくなるぞ。顔も洗えなくなる」

メリル「ええ……」

スネーク「これは訓練ではない。生死をかけた闘いだ。英雄(ヒーロー)もヒロインもいない。負ければただの犬死にだ」

メリル「ええ……」

――手の甲で軽く涙を拭うメリル。

スネーク　「そのファマスは使えるのか？」

――スネーク、壁に立てかけたファマスを指す。

メリル　「生憎、弾切れよ」

――メリルのデザートイーグルを見るスネーク。

スネーク　「そのデザート・イーグルは？」

メリル　「偶然、武器庫で見つけちゃった」

メリル　「口径は50アクション・エキスプレス【注5】」

メリル　「ソーコムピストルが置いてあったけど、こっちにしたの」

スネーク　「ああ、俺のは残り物か……」

――自分のソーコムを見るスネーク。

スネーク　「その銃、女にはデカすぎる」

メリル　「そういう時だけ女扱いする？」

スネーク　「俺の45口径を使え」
メリル　「大丈夫、この銃なら8歳の時から使ってる。ブラジャーよりも付き合いが長いわ」
——メリル、デザートイーグルにマガジンを入れ、重いスライドを引いて、バシャッ！　と初弾を装填する。
メリル　「北に行くにはこのフロアの所長室を抜けなければいけない」
メリル　「地上のルートは氷河で塞がれているの」
メリル　「所長室のセキュリティ・レベルは5。この鍵（カード）で開くわ」
——メリル、カードをスネークに渡す。
——それを受け取るスネーク。
メリル　「偶然、兵士の服に入ってたの」
スネーク　「見かけによらず、結構重要な所を警備していたらしい」
——装備を確認し終わると、南側の扉の前で構えのポーズを取る。
メリル　「さあ、行きましょう。ここでは私が先輩よ」
メリル　「私が前衛（ポイントマン）になるわ。ついてきて」

――メリル、先に南側の扉を潜る。遅れてスネーク、外へ出る。
――トイレの外に出るスネーク。
――先に出ていたメリルが扉の前で辺りを警戒している。
――敵兵の姿は全くない。

メリル　「変ね。見張りがいないわ」

――さっきまで流れていたマンティスの「歌」が流れていない。

スネーク　「歌が聴こえない？」
メリル　「私が警戒してるから、今のうちに装備を整えてね」

【メリルを探せ02マンティスの思念が入り込むデモ】

――所長室へと向かうスネークとメリル。所長室のあるエリアの扉をくぐる。
――扉を潜ると、それまでとはまるで違う世界、豪華な洋館の廊下。
――赤い絨毯が敷かれ、由緒正しい3つ星ホテルのような内装。
――長い廊下の突き当たりに所長室の扉が見える。
――スネークが廊下を進むと、メリルが後ろから追い抜いて、所長室前で止まる。
――マンティスの「歌」が徐々に聴こえてくる。

――メリル、歌が聞こえ出すと、しゃがみ込み、頭を抱え出す。

メリル「頭が！　……痛い!!」

スネーク「どうした？」

――スネークがメリルに近付こうとすると、強く拒絶するメリル。

メリル「来ないでスネーク!!」

【メリルを探せ03メリル操られるデモ】

――サイコ・マンティスの主観（所長室の中から見た絵）がザッピングしてくる。マンティスの主観と、ゲーム俯瞰画面を高速でフラッシュバックさせる。

――マンティスの主観は、所長室の室内から扉を突き抜けて、廊下へ出たあと、メリルとスネークを捉える。マンティスの主観がメリルの頭に突入したようなイメージ、絵創り。マンティスの歌、増幅する。

――メリルはしばらく苦しんだ後、がっくりと膝をついてぐったりとなる。

スネーク「大丈夫か？」

――メリル、我に返ると頭を振りながら立ち上がる。

スネーク　「どうした？」
メリル　「大丈夫」
——メリルは何もなかったように冷静な口調。
メリル　「さぁ…、いくわよ」
——メリル、何かに憑依されているような歩き方で進む。
——所長室の部屋の前で静止するメリル。
メリル　「どうぞ、ＦＯＸＨＯＵＮＤの旦那。所長がお待ちよ」

【マンティス戦０１メリル、マンティスに操られるデモ】

——所長室にスネークが入ると、遅れてメリルが入ってくる。
——室内に人気はない。
——赤い絨毯が敷き詰められており、壁には大きな書庫。中央に所長が使っていたと思われる大きな机、背もたれの高い椅子、壁には歴代所長や表彰状等の額縁。卓上にはパソコンと書類、灰皿等。
——左手には基地全体を表すホログラム模型（通信棟）。

――右手には来客用の椅子。
――所長机の背面に「アウター・ヘブン」のマークが貼られている。
――きれいに整頓され、ついさっきまで人が居た気配がする。
――ただひとつ、東側にある等身鏡が割られており、砕け散った鏡の破片が床に散乱している。
――磨き上げられた床に室内の壁や調度品、家具が映り込んでいる。
――突き当たりの本棚で洞窟への扉は見えない。
――室内に入るとより一層、歌が大きくなる。
――室内を自由に動き回るスネーク。
――一定時間経過すると歌は最大ボリュームとなり、その瞬間メリルは電撃を受けた様に身体を仰け反らせる。

メリル「あぁっ…」

――そしてスネークに向かってゾンビのようにぎこちなく歩み出すメリル。
――メリル、眼の焦点が合っていない。
――片手のデザート・イーグルを前に突き出して歩み寄るメリル。
――訓練されたシューティング・ポーズではなく、手首をパペット用の糸で引っ張られている感じ。

メリル「スネーク…、私の事、好き?」

——本人の意志とは思えない苦しげな口調で語りかけてくる。声質は次第にガスマスクを通したような篭った声になる。息が苦しそう。（マンティスと同化している）メリルの背後に一瞬、マンティスの姿が現れて消える。

スネーク「これは？」

——目を疑うスネーク。

メリル「ねえ、好き？」

——後ずさりするスネーク。

スネーク「どうした？」

——再び、メリルの背後にマンティスの姿が見える。

スネーク「お前は!?」

——銃を降ろし銃口をスネークに向ける。メリルの視線はスネークを見ていない。

——メリル、スネークに襲いかかる。

【マンティス戦02マンティス出現デモ】

——なんとかメリルを気絶させることに成功したスネーク。

——マンティス、ステルス迷彩を解き、空間の中から現れる。床から数十センチくらい浮遊している。

マンティス「役にたたん女だ」

スネーク「ふん、ステルス迷彩か。手品のタネはいつも幼稚なものだ」

——マンティス、スネークの言葉にプライドを傷つけられた表情。

マンティス「貴様…、俺の力を信じてないな」

——警戒したままメリルの側に行き、メリルの脈（首）を確認するスネーク。

マンティス「世界最高の読心能力(リーディング)と念力(サイコキネシス)、今からお前に見せてやる」

マンティス「いや、声に出す必要はない、スネーク」

マンティス「俺はサイコ・マンティス」

——心の問いかけを言い当てられて戸惑うスネーク。

マンティス　「そうだ。これにはタネはない。正真正銘の力だ」

――ソーコム（ファマス）を構えて、銃を撃とうとするスネーク。

――マンテイス、両手を45度に広げるように伸ばしたまま、宙に浮いている。

マンティス　「無駄だ。言っただろう、貴様の心は全て読める」

――マンティス、（一）プレイヤーのこれまでの行動、（二）セーブデータの内容、（三）接続機器の状況をみて、会話を続ける。

（一）プレイヤーのこれまでの行動

――発見された回数（A）、敵に殺された回数（B）、トラップで死んだ回数（C）の順で判定。プレイヤーの行動パターンを予測して、マンティスに語らせる。

マンティス　「貴様の性格を当ててやろう。いや…、貴様の過去というべきかな」

○パターン1

（A）敵に発見された回数が多い

マンティス　「大ざっぱな性格だな」

（B）敵に殺された回数が多い

マンティス　「おまけに戦闘が苦手のようだな」

（C）トラップで死んだ回数が多い／少ない
マンティス　「トラップに関しても同じだ」
マンティス　「しかし、トラップに関しては用心しているようだ」
（B）敵に殺された回数が少ない
マンティス　「しかし、戦闘が得意のようだ。まさに肉体派……」
（C）トラップで死んだ回数が多い／少ない
マンティス　「だが、トラップに関する用心が足りない」
マンティス　「トラップに関しても用心深い」

○パターン2

（A）敵に発見された回数が少ない
マンティス　「随分と慎重な性格だな、石橋を叩いて渡るタイプだな」
（B）敵に殺された回数が多い
マンティス　「その割には、戦闘が苦手のようだな」
（C）トラップで死んだ回数が多い／少ない
マンティス　「同じく、トラップに関しても用心が必要だ」
マンティス　「そのせいか、トラップに関しては用心してるようだ」

（B）敵に殺された回数が少ない

マンティス　「戦闘も得意のようだ。潜入任務（スニーキング・ミッション）に向いているな」

（C）トラップで死んだ回数が多い／少ない

マンティス　「しかし、トラップに関してだけは用心がないな」

マンティス　「トラップに対する警戒も怠っていない。よほどの慎重派か…、根性無しに違いない……」

（二）セーブデータの内容

――プレイステーションにささっているメモリーカードの中身を見て、どういうゲームのセーブデータがあるかでセリフを変える。ただし、チェックはコナミ商品に限る。

マンティス　「まだ信じないようだな。貴様の趣味を言ってやろう」

※セーブデータがない場合

マンティス　「うーん、何もないようだな。貴様の記憶はカラッポ……」

※セーブデータがある場合

マンティス　「うーん、見えるぞ。貴様の記憶が……」

○タイトルで判定する

1.「ときメモ」関連ソフトのデータが多い場合

マンティス　「ときメモが好きなようだな」

2.「ポリスノーツ」のデータがある時

マンティス　「ポリスノーツが好きなようだな」

○ジャンルで判定する

1．アドベンチャーのデータが多い場合（スナッチャー／ポリスノーツ／ドラマシリーズ）

マンティス　「アドベンチャーが好きなようだな」

2．RPGのデータが多い場合

マンティス　「RPGが好きなようだな」

3．アクションのデータが多い場合

マンティス　「アクションゲームが好きなようだな」

4．スポーツもののデータが多い場合

マンティス　「スポーツ物が好きなようだな」

5．アーケード落としのデータが多い場合

マンティス　「アーケードゲームが好きなようだな」

○ゲーム会社で判定する

1．コナミの商品が多い場合

マンティス　「コナミのゲームが好きなようだな」

小島監督　「いつも応援してくれてありがとう……」

○メタルのセーブデータで判定する

1．セーブデータが多い場合

マンティス　「うーむ、まめにセーブしているようだ。慎重なようだな」

2．セーブデータが少ない場合

マンティス　「うーむ、セーブを怠ってるようだ。大胆なようだな」

3．セーブデータがない場合

マンティス　「しかも、セーブを怠ってるようだ。後悔するぞ」

マンティス　「どうだ。貴様の事は手にとるようにわかる」

(二) アナログ・コントローラが接続されている場合

マンティス　「まだ信じないようだな。俺の念力(サイコキネシス)を見せてやろう」

マンティス　「床の上にコントローラーを置いてみろ」

マンティス　「いいか、できるだけ平らな床だぞ。いいな」
マンティス　「いくぞ、今からそのコントローラーを俺が念力(サイコキネシス)で動かしてみせる！」
マンティス　「ふえあぁっ！」
　――振動スイッチをオンにすると、振動で床の上をコントローラーが動く！
マンティス　「どうだっ!!　俺の力がわかっただろう！」
　――デモンストレーション終わり。
マンティス　「よし…、デモンストレーションはこのくらいにしておこう」
　――マンティス、実体化して（空中浮遊）攻撃をしてくる。
　――ある程度ダメージを与えると。再びメリルを操る。
　――メリルを再度気絶させると。
マンティス　「確かに貴様は大した奴だ」
マンティス　「しかし貴様の弱点はわかってる」
マンティス　「さぁメリル。この男の前で」
マンティス　「自分の頭をぶち抜くんだ!!」

メリル　「ああっ…」

——マンティスに操られ、自分の頭に銃口を向けるメリル。

——スネークはすぐさまメリルに近寄り、メリルの発砲を阻止する。

スネーク　「やめろ！　メリル!!」

——メリルは気絶し、マンティスとの闘いが再開される。

マンティス　「そ…そんな馬鹿な！　クソッ！」

【マンティス戦03マンティス倒れるデモ】

——マンティスとの死闘に勝利するスネーク。

——マンティス、ステルス迷彩を解き、床に膝をつく。

——スネーク、無線でキャンベルにメリルの無事を報告する。

【マンティス戦04マンティス打倒後無線機デモ】

スネーク　「大佐、あんたの姪は何とか無事だ」

キャンベル　「すまない、世話をかけた」

スネーク　「マンティスが倒れたなら、メリルの洗脳も解けるはずだな、ナオミ？」

ナオミ　「ええ……。でも、なぜそこまでして彼女を助けようとしたの？　キャンベルさんのため？　……それとも…。彼女が好きなの？（自覚のない嫉妬まじり）」

スネーク　「…目の前で女が死ぬのは見たくない」

ナオミ　「（手厳しく）あなたは人の死なんて気にもとめないんじゃや？」

キャンベル　「（諭すように）ナオミ、確かに彼は多くの人間を殺してきた。だが殺人鬼ではないよ」

スネーク　「人殺しには違いないさ」

ナオミ　「……」

【マンティス戦05マンティス死亡デモ】

――闘いに敗れ、あお向けに倒れたマンティス。気を失って地に伏したままのメリル。

――マンティスに歩み寄るスネーク。

マンティス　「そうか…、もうひとつの…」

マンティス　「俺には……予知能力は無かった」

スネーク　「予知能力なんかいらない。未来を変えていく勇気があれば充分だ」

――メリル、気を取り戻す。頭を軽く振る。
――マンティス、腹部を撃たれて汚物まみれの内臓が出ている。
――マンティス、内臓が流出しないように懸命に手で押さえている。
――息を吹き返したメリルを横目で見ながら、息も絶えだえに話す。

マンティス　「…そうか。その未来とやらを教えてやろう」
マンティス　「メタルギアの地下整備基地へ行くには、そこの隠し扉を抜けるしかない。本棚の裏に隠し扉がある」
マンティス　「地上ルートは氷河で埋まってしまっている。通信棟を超えて行け。その通信棟の渡り廊下を使うんだ」

――あお向けに倒れているマンティス。
――その傍らで片膝をついているスネーク。
――少し離れたところから気味悪そうに見下ろしているメリル。

スネーク　「どうして俺に?」
マンティス　「俺は人の心が読める。今まで何千人の心と過去、未来へ繋がる現在(いま)を覗いてきた」

――メリル、警戒しながら、スネークの隣に近付く。

――スネーク、マンティスのマスクを取る。下から、マンティスの素顔が現れる。

メリル　「ひどいっ……」

――マンティスの顔には皮膚はなく、落ち込んだ眼窩と、額と口に縫い合わされた跡がある。眼には光彩がなく、充血した白目のみ。

――話を続けるマンティス。縛られた口ではなく、心に直接語りかけている。

――マスク独特の呼吸音はない。

マンティス　「どいつの腹の中にも、欲という名の夢、種の保存という名の利己的な理想が詰まってた。反吐（へど）が出るほど……。地球上のあらゆる生命は子孫を引き継ぐために生きる。そう設計されている。その方程式が故に争う」

マンティス　「しかし、貴様は違う……」

マンティス　「むしろ俺達と同じだ。過去も未来もない。この瞬間だけを生きる、それだけの存在だ」

マンティス　「人間は人を幸福にするようには創られていない。この世に生まれ落ちた時から、人を不幸にするように運命づけられている」

マンティス　「俺が初めて人の心に侵入(ダイブ)した相手は、実の親父だった」

マンティス　「親父の心の中には、俺に対する殺意しかなかった。母親が死んだのは俺の出産が原因だと……」

マンティス　「俺は親父に殺されると思った……」

マンティス　「あの時——、俺の未来が消えた。過去も亡くした。気がついた時、村は炎に包まれていた……」

スネーク　「過去を清算するために村を焼き払ったというのか」

マンティス　「お前の中にも同じトラウマがあるな。くっくっく（暗い愉悦に満ちた不気味な笑い）お前は俺と同じだ……」

マンティス　「俺はそんな貴様に賭けてみたくなった」

マンティス　「俺はボスの蹶起(ケッキ)に賛同したのではない。奴の目的にも、理想とやらにも興味はない。ただ、殺戮に至る正当な理由が欲しかった」

メリル　「なんて奴」

スネーク　「言わせておけ、こいつはもうすぐ死ぬ」

マンティス　「俺は本当の悪魔を見た。スネーク…、貴様を見ると、落ちつく。貴様はボスと

同じ……いや、それ以上だよ。俺はまだまともだ……」

——スネーク、マンティスの身体に手を伸ばす。

——メリルの方を一瞥しながら。

マンティス　「……その女の心を読んだ」

スネーク　「メリルの？」

——ゆっくりとうなずくマンティス。

マンティス　「女の心にお前がいた。お前が心の中で大きな存在として……」

スネーク　「大きな存在？」

マンティス　「大きくなりつつある……」

マンティス　「これが、お前達の未来かどうかはわからん」

——横で聞いているメリルの頬が赤くなる。スネークの手を軽く引いて、注意を自分に向ける。

マンティス　「頼みがある」

スネーク　「なんだ？」

マンティス　「マスクを被せてくれ」
スネーク　「わかった……」
マンティス　「このままでは……人の思念が入ってくる。最期くらいは自分でいたい。俺だけの世界にこもりたい」

――マスクを被せるスネーク。
――うれしそうに安堵の息を吐き出すマンティス。

マンティス　「そこの扉を開けてやろう。未来が知りたければ扉をくぐればいい」

――マンティスの最後の念力で後ろの重い本棚が動く。
――本棚の後ろに扉が現れる。
――この扉は以降、開いたまま。
――最後の力を使いマンティス、力無く笑う。

マンティス　「力を誰かの為につかったのは……これが初めてだ」
マンティス　「妙だ。懐かしい…感覚がする…」

――と、息絶えるマンティス。マンティスの死体を置いて、立ち上がる。

【マンティス戦06メリルとのデモ】

——息をひきとったマンティス。

——スネーク、死体を捨て置いてたち上がり、開いた扉に歩み寄る。

——扉の先を伺うスネーク。メリルの方を振りかえる。

スネーク「行こうか、メリル？」

——メリル、下を向いたまま、力無くつぶやく。

メリル「ごめん……」

——スネーク、振り向いてメリルを見る。

スネーク「メリル？」

メリル「私、捕まった時にマンティスに暗示をかけられていたみたい」

スネーク「後悔するのなら、ここに置いていくぞ」

メリル「そうね」

——元気を取り戻すメリル。

スネーク　「後悔するよりも反省する事だ。後悔は人をネガティブにする」

メリル　「わかった。ごめんなさい。もう迷惑はかけないわ」

——外へ向かおうとするスネークを呼び止めるメリル。

メリル　「スネーク——、ちょっといい？」

スネーク　「まだ泣き言か？」

メリル　「さっきの話だけど……マンティスの言った事……」

スネーク　「さっきの……なんだ？」

メリル　「いえ……」

——話題をかえてごまかそうとするメリル。

メリル　「教えて？　スネーク、あなたの名前はなんて言うの？　本当の名前？」

——しばらく間を置いて……振り返るスネーク。

スネーク　「戦場では名前なんて意味がない」

メリル　「歳は？」

スネーク　「君よりは死人を多く見てきている」
メリル　「家族は？」
スネーク　「育ての親ならいくらでもいる」
メリル　「好きな人は？」
――メリルの質問攻めに困惑しながら。
スネーク　「他人の人生に興味を持った事は無い」
メリル　「そう…、マンティスが言ってたように、あなたには何も無いのね」
スネーク　「他人の人生に介入すれば、自分を守れなくなる」
メリル　「悲しい人」
スネーク　「さぁ、行くぞ……」

【ウルフ戦01メリルと北へ向かうデモ】

――画面は俯瞰。所長室・本棚の後ろの扉をくぐると、氷の洞窟に出る。
――鍾乳洞の様な自然が作りだした洞窟に、ランタン等を壁に配置、簡易的に使用している。
――いくつかのランタンは切れかけた蛍光灯の様に瞬いている。

——天井にいくつか穴がぽっかり空いており、そこから雪が入り込んでいる。
——堅い岩盤には水分をふくんだ苔類が凍り付いている。
——洞窟は狭く、折れ曲がっており、迷路のよう。
——所々、アーチ状に天井が低く落ちている。
——洞窟内に入ると、狼のような遠吠えが聴こえる。

メリル　「狼がいるのかしら？」
スネーク「狼犬、ウルフドッグだ」
メリル　「詳しいのね？」
スネーク「これでも犬ぞり使い、マッシャーだ」

——メリルが先に歩き出す。

メリル　「私が前衛（ポイントマン）を務めるわ。スネーク、私についてきて」

——と、メリルは先にどんどんと進んで行き、画面内から消える。
——中庭（広場）にウルフドッグが2匹おり、近付くと襲ってくる。
——犬を連れた状態でメリルの待つ出口付近へ来ると、ウルフドッグは尻尾を振って、大人しくなり、持ち場へ帰っていく（スナイパー・ウルフと同じ臭いがする為）。

――犬が帰っていく際のメリルのセリフ。

メリル　「スネーク…、狼犬（ウルフドッグ）の扱いに慣れているんじゃなかったかしら？」

【ウルフ戦02メリルと地下道を行くデモ】

――画面は俯瞰。氷の洞窟を抜けると、通信棟へまっすぐに伸びた地下道に出る。
――通信棟への距離は60メートル以上。
――地下道の壁面はコンクリートで固められている。
――押し寄せた氷河により、地上の床（地下道の天井）が陥没した為。
――穴からは地上の雪が入りこんできている。
――所々、コンクリートが剥がれ落ちて鉄柱が覗いている。
――床には天井から吹き込む雪が溶けて水たまりを作り、床全面がてらてらと爬虫類の肌のように光っている。
――左右の壁面に沿って等間隔で照明が埋め込まれている。
――地下道に入ると、メリルが再び先頭に立つ。

メリル　「ここは地雷原よ。私が前衛（ポイントマン）になるから、離れてついてきて」

スネーク　「だが、レーダーが効かない。地雷探知機もつかえんとなると……」

メリル　「私にまかせて」

——メリル、クレイモアを避けながら、進んでいく。

——地雷原を超えると、メリルが立ち止まり、振り返る。

メリル　「どう、私もたいしたもんでしょ？」

スネーク　「なぜ地雷の位置が？」

メリル　「マンティスに侵入（ダイブ）はされたけど、その時、ここの地雷のイメージが見えたの。見直した？」

スネーク　「ああ、少しは……」

メリル　「ちぇっ、少しなの？」

【ウルフ戦03メリルが狙撃されるデモ】

——地下道に仕掛けられた地雷原を回避して見せたメリル。

——その肩をなぞるように走る赤い光点の存在に、スネークは気付く。

——訝しむスネーク。

——メリル、その表情に気付く。

スネーク　「メリル…？」

メリル　「どうしたの？」

——光点はメリルの身体を嘗めるように移動していく。

——スネークの表情変化を察し、頭を前方に戻し、自分の胸のあたりを見るメリル。ちょうど胸のあたりに赤い光点が移動している。

——掌を光点に掲げて見る。

——光点が手の甲に移る。ようやく、メリルにも光点の正体がわかる。

スネーク　「メリル、伏せろっ!!」

——スネークの叫びもむなしく、右膝を撃ち抜かれる。

メリル　「あぁっ!!」

スネーク　「メリル!!」

——その場に跪くメリル。続いて、左太股を撃ち抜かれる。

メリル　「ああぁっ！」

スネーク　「メリル!!」

——メリルはその場に仰向けに転がる。みるみる間にメリルが血に染まっていく。メリルが起きあがろうとすると、今度は左腕に被弾。メリルはそのショックで手にしていたデザートイーグルを弾かれてしまう。

メリル　「あううっ！」

——全く動けなくなるメリル。
——メリル、血溜まりの中、辛うじて顔をスネークに向ける。
——スネーク、すかさず、右手の遮蔽物（壁）に身を隠す。

メリル　「スネーク…、私を置いて逃げて……」
スネーク　「メリル……」
メリル　「私、本当…新米ね。二度も……」

——壁際からメリルを覗き込むスネーク。

スネーク　「大丈夫だメリル。狙いは俺だ」
メリル　「いくら私でもわかるわ。こんな古典的な罠……」
メリル　「スナイパーよ。私は囮、あなたが出てくるのを待ってるんだわ」

スネーク「クソッ！」

メリル「私を撃って!!」

——大きく首を横に振って拒絶するスネーク。

スネーク「だめだ」

メリル「銃が……自分ではカタを着けられないわ」

——メリルの手から少し離れた所にデザートイーグルが転がっている。

スネーク「早まるな」

メリル「足手まといにならないって誓ったもの！」

——血に染まりながら、声を上げるメリル。

メリル「私、こんなだけど……あなたを助けたい！　役に立ちたい！」

スネーク「黙ってろ、体力を消耗するぞ」

——首をおろして、涙ぐむメリル。

メリル「私が甘かった。軍人なんかに憧れて……」

メリル　「戦場には何も無い。戦争では何も生まれない」

――大粒の涙が頬を伝う。

メリル　「私の代わりに生き抜いて、スネーク。そして……人を好きになって」

メリル　「私の言葉を忘れないで」

――スネークの無線機のCALL音が鳴る！

メリル　「……さあ、行って!!」

――スネーク、無線を受信する。

【ウルフ戦04メリル狙撃後無線機デモ】

キャンベル　「……メリル………」

ナオミ　「キャンベルさん？」

キャンベル　「（メリルが心配でたまらないが、司令官として、その感情を押し殺している）くそっ!!　スネーク、それは罠だ。スナイパーが敵を誘い出す為に使う手だ。致命傷を避けて、君がメリルを助けに出てくるのを待ってるんだ……!」

ナオミ　「おそらく、相手はスナイパー・ウルフよ。FOXHOUND(フォックスハウンド)最高の狙撃手」
スネーク　「通常、狙撃兵は二人組だが…。それじゃ、相手は一人か」
ナオミ　「持久戦よ。彼女は何時間でも、何日でも何週間でもじっと待ち続けるわ。あなたを観察し、動くのを待ってる」
スネーク　「メリルの体力がもつかどうか……」
ナオミ　「スネーク、そこからウルフが見える？」
スネーク　「通信棟まで身を隠す所はなさそうだ…。おそらく通信棟の二階だろう」
キャンベル　「(無理して饒舌に) 通信棟からだとすると、ウルフからは君達が丸見えだ。狙撃には絶好の撃ち下ろし攻撃ポジション」
キャンベル　「その距離では通常の武器で攻撃するには遠すぎる。スナイパーライフルが必要だ」
スネーク　「…大佐、無理をするな」
キャンベル　「？」
スネーク　「メリルは必ず助ける」
キャンベル　「(嬉しい) ああ……すまない……」
ナオミ　「……」

スネーク「どうした、ナオミ」

ナオミ「知ってる？　あなたの遺伝子には殺人傾向を助長する因子が含まれているのよ」

スネーク「（皮肉）俺が他人の命を救うなどありえない、とでも？」

ナオミ「そこまでは言わないけど……」

スネーク「あいにく、俺は自分の遺伝配列に何が書かれているかなど知らない。俺は本能に従っているだけだ」

ナオミ「野蛮な人？」

スネーク「俺はメリルを助ける。理由なんかいらない」

ナオミ「そ、そう……」

スネーク「他人のためにも闘わない。自分のためにメリルを助ける。大佐、心配するな」

キャンベル「スネーク。ありがとう」

ナオミ「わかったわ…。ごめんなさい……」

【ウルフ戦05ウルフ死亡デモ】

――狙撃銃PSG1を手に入れたスネークは、遠距離からの狙撃によってスナイパー・ウルフを倒す。

スネーク　「やったかっ！」

【ウルフ戦06スネーク捕まるデモ】

――画面は俯瞰。ウルフを倒したスネーク。しかしメリルの姿はすでにない。
――スネークは独り通信棟への通路を進み、通信棟の地下入り口へと辿り着く。
――スネークが扉前5メートルくらいにまで接近する。

兵士　「動くなっ!!」

――両サイドの岩壁に重装備の敵兵が数名、待ち伏せをしている。頭上から、数名がロープですするすると音もなく降下してくる。
――兵士達、迅速に近寄り、スネークに銃口を向ける。
――取り囲まれたスネーク、両手をゆっくりと上げる。

【ウルフ戦07ウルフ登場デモ】

――兵士達に囲まれたスネーク。その胸部にレーザーサイトの赤い光点が這い登っていく。
――赤い光点を眼で追うスネーク。
――光点、スネークの額にのぼる。
――正面を向くスネークの眼に、スナイパー・ウルフの姿。

——銃を構えたままゆっくりと誇示するように出てくるウルフ。

ウルフ「こんなに近いと外す方がむずかしいわね」

ウルフ「武器を前に投げて！　ゆっくりね」

——スネーク、持っている武器を前方に捨てる。

——武器が床に落ちると、近くの兵士、素早く回収する。

——安全を確信すると銃口を下げてウルフ、歩み寄る。

——まわりの兵士もスネークを取り囲むように恐る恐る距離を縮める。

——ウルフとスネーク向き合う格好となる。

ウルフ「のこのこと戻ってくるなんて、バカな男……」

スネーク「女のスナイパーか？」

ウルフ「世界の一流暗殺者の65％が女だって事、知らないの？」

——両脇の兵士を一瞥し、今後の出方を思案するスネーク。

ウルフ「ここで死ぬか、あの女の死を確認してから死ぬか、どちらを選ぶ？」

スネーク「死ぬのは、お前を殺してからだ」

ウルフ　「そう。少しは芯があるのね」

——スネークの態度に興味を持ったウルフ、スネークの胸を触る。

——スネークの分厚い胸部から屈強な顎のラインを掌でなぞりながら。

ウルフ　「私はスナイパー・ウルフ。狙った標的は必ず、自分の手で倒す」

ウルフ　「お前だけは！　私が狩る……わかった?」

——スネークの頬を愛撫するように爪を走らせるウルフ、拒絶するかのように首を振るスネーク。

——ウルフの爪がスネークの眼の下（頬）を切る。

——傷口から流れた血が涙のように頬を伝う。

ウルフ　「標的に印を付けたわ。忘れない」

ウルフ　「お前をしとめるまで、お前しか見えない」

——ウルフ、スネークの背後にいる兵士に顎で合図する。

——兵士、スネークの後頭部をファマスの銃床で殴る。

——床に崩れるスネーク。

兵士　「スネークを運べ……」

【ウルフ戦08運ばれるスネークのデモ】

——画面スネークの主観。二人の兵士に両脇を抱えられ、床を引きずられていくスネーク。
——遠くに小さくなっていく通信棟の地下入り口。
——画面フェード・アウト。
——遠くで篭ったような声が聴こえる。

リキッド「まだ殺すな……生かしておけ」
オセロット「私にまかせて下さい」
リキッド「いいか、DARPA(ダーパ)局長の二の舞を演じるな」
ウルフ「この男は私がターゲッティングした」

——再びスネークの意識が遠のく……画面フェード・アウト。

【注1】詳しくは、ナスターシャの無線会話（P532）を参照。
【注2】1980年代のアメリカの戦略防衛構想。宇宙空間に配備したレーザー兵器などで、敵国の弾道ミサイルを迎撃するというもの。スターウォーズ計画とも呼ばれた。
【注3】カルフォルニア州リバモア市にある、核兵器開発のための研究所。
【注4】第二次世界大戦中の1942年に、アメリカのルーズベルト大統領が命じた、原子爆弾開発計画。1945年7月16日に核実験に成功。すぐさま、8月6日に広島、8月9日には長崎に核爆弾が投下された。
【注5】デザートイーグルが使用する弾丸3種のバリエーションのひとつ。357マグナムの約3倍の威力をもつ。

■忍者戦前　キャンベル

【M1戦車戦後、基本】

キャンベル「スネーク、メタルギア開発者のエメリッヒ博士を救出するんだ」

ナオミ「彼は核弾頭保存棟の地下二階に軟禁されているはずよ」

【核保存棟1F、ガス噴出状態】

キャンベル「スネーク、ガスだ！　息を止めろ！」

キャンベル「LIFEゲージの下にO2ゲージが出ている。空気を吸わなければゲージは減っていき、O2ゲージが無くなるとLIFEゲージが激減するぞ」

キャンベル「ガスマスクを探すんだ」

※一回目のみ

ナオミ「今散布されているガスは、多分有機リン系の神経剤よ。アセチルコリンなどの伝達物質の分解を阻害して、神経伝達系を破壊する毒物」

ナオミ「吸い込むだけでなくて、皮膚に付着しただけで体内に浸透・作用するの。吐き気、発汗、けいれん、頭痛、呼吸困難等起こした後、通常15分以内で死に至るわ」

ナオミ「あなたのスニーキング・スーツは対NBC兵器用簡易防護機能を装備してるし、塩化プロトパンを使った神経剤中和機能をもつナノマシンも注射してあるわ」

ナオミ「でもそれらは一時的な防護にしかならないの。長い時間は持たないわ。ガスマスクを探して！」

【核保存棟B2、オタコン救出前】

※忍者からの無線を聞いていない場合

キャンベル「エメリッヒ博士を救出してメタルギアの情報を聞き出すんだ」

ナオミ「博士がとらえられている研究室は、今あなたがいるフロアの北東にあるんじゃなかったかしら?」

※忍者からの無線を聞いた場合

キャンベル「今はディープ・スロートという男の言う事を信じてみよう。リモコンミサイルで核弾頭保存棟地下二階、北西の配電盤を

壊すんだ」
キャンベル「ガンカメラにミサイルを撃墜されないよう気をつけろ」

【核保存棟B1、配電盤破壊後】
キャンベル「配電盤の破壊に成功したな。床の高圧電流も消えたはずだ」
キャンベル「エメリッヒ博士を救出してメタルギアの情報を聞き出すんだ」

【核保存棟B2廊下、死体デモ後】
※一回目のみ
スネーク「この死体の山は一体…。皆、刃物で斬り殺されたようだ」
ナオミ「まさか…?」
スネーク「なんだ?」
ナオミ「……いえ……」
※二回目以降
キャンベル「博士が心配だ。スネーク、先を急いでくれ」

【核保存棟B2廊下、兵士串刺しデモ後】
※一回目
スネーク「さっきの忍者(サイボーグ)だ……」
ナオミ「えっ!」
キャンベル「なんだって?」
スネーク「あのステルス迷彩、奴だ。間違いない!」
キャンベル「スネーク! エメリッヒ博士が危ない。すぐに後を追うんだ!」
※二回目以降
キャンベル「スネーク! エメリッヒ博士が危ない。急げ!」

■メリル接触前 キャンベル

【研究室、忍者戦】
※一回目
キャンベル「FOXHOUND(フォックスハウンド)部隊の事なら、ドクター・ナオミの方が詳しい」
ナオミ「残念だけど、FOXHOUND(フォックスハウンド)にそんな隊員はいないわ」
ナオミ「現在のFOXHOUND(フォックスハウンド)は6人しかいない」

ナオミ「サイコ・マンティス、スナイパー・ウルフ、バルカン・レイブン、デコイ・オクトパス、リボルバー・オセロット…」
ナオミ「そして、リキッド・スネーク」
ナオミ「彼等が率いるゲノム兵は皆、次世代特殊部隊の隊員よ。FOXHOUND(フォックスハウンド)は常に少数精鋭」
スネーク「それは今のFOXHOUND(フォックスハウンド)という事だな？」
ナオミ「ええ……」
キャンベル「スネーク、その男は一体何者なんだ？ 敵なのか？」
スネーク「知りたいのはこっちだ。ナオミは本当に知らないんだな？」
ナオミ「……（内に怒りを秘めつつ）あなたの方こそ、覚えはないのかしら……？」
スネーク「どういう事だ？」
ナオミ「いいえ……なんでもない」
※二回目。以降A、Bのランダム
（A）
キャンベル「そいつに武器は通用しないようだ。何か他の方法を考えてみるんだ」

（B）
キャンベル「そいつは素早い。見失ったら主観でどこに逃げたか探すんだ」
※四回以上死んだ場合
キャンベル「スネーク、奴は明らかに君を挑発している。武器を捨てて奴の誘いに乗ってみろ」

【研究室、オタコン救出デモ終了後】
※一回目
キャンベル「とりあえず、博士の救出には成功したな」
スネーク「ああ。あのステルス迷彩があれば、安全に隠れていられるだろう」
スネーク「グレイ・フォックスのこともあるが……。問題はあんたの姪だ。（ちょっと心配）無線の切れ方が気になる。何かあったにちがいない……」
ナオミ「（ちょっと意外）心配なの？ メリルさんのことが？」
スネーク「まぁな。（天の邪鬼。本当はメリルの身が心配）彼女の持っている、起爆コードの

緊急解除／再入力用の鍵（PALキー）。あれ以外に
奴らの核発射を止める手段は残っていな
い」
ナオミ「（辛辣）冷たい人。仲間の無事よりも任務
の方が大切なの？」
スネーク「（ちょっと傷ついてやり返す）ここは戦場
だ。任務以外のものに思いをとらわれて
いたら、生き残る事はできない」
ナオミ「（納得せず）だからって……」
キャンベル「スネーク、とにかくメリルとの合流を急
いでくれ」
スネーク「わかった」
※二回目以降
キャンベル「メリルは、『君のすぐ近くにいる』と言っ
てなかったか？　とりあえずその建物か
ら探してみてくれ、頼む」
※核保存棟以外の場所にいる場合
キャンベル「メリルは、『君のすぐ近くにいる』と言っ
てたぞ。核弾頭保存棟の中にいるんじゃ
ないか？　そっちの方から探してみてく
れ」

※メリルと同じフロアにいる場合
キャンベル「メリルは敵兵に変装しているのか。だが
よく見ればわかるはずだ」
キャンベル「主観やビハインドを使って、よく観察しろ」
※ダンボールを持っている場合
キャンベル「ダンボールをかぶって張り込みをするの
もいいかもしれんな」

【核保存棟B1、女子トイレ】
※一回目のみ
スネーク「大佐、メリルを見かけたんだが……」
キャンベル「（嬉しい）本当か？　どこだ？」
スネーク「女子トイレ」
スネーク「だが、妙なんだ。確かにここに入って行
くのは見たんだが、中に姿が見えない」
※二回目以降
キャンベル「トイレの中を探してみるしかないな」
スネーク「そうだな…。順番に調べていくか」
※トイレから出てしまった場合
キャンベル「メリルを見つけたんじゃなかったのか？
もう一度よくさがしてみろ」

■マンティス戦前　キャンベル

【核保存棟B1、メリル合流後】

※一回目のみ

スネーク「大佐、あんたの姪は無事だ」

キャンベル「よかった……」

スネーク「まだ安心はできん。今のところはだ」

キャンベル「わかってる、スネーク……」

スネーク「あんたの姪はたいした女だよ」

キャンベル「私の口からメリルを頼むとはいえんが……」

スネーク「任務優先？」

キャンベル「私は間違っていたかもしれん。身内を戦場に送るとはな」

スネーク「彼女も気づいている」

キャンベル「そうか……」

スネーク「それよりも大佐。あんたは本当に今回の演習の目的を？」

キャンベル「知らない。私はただの使い走りに過ぎん」

スネーク「この無線は軍にも流れているか？」

キャンベル「当然だ」

スネーク「わかった。俺もあんたも、いつまで経っても主役は張れないようだ」

キャンベル「脇役でもストーリーを変える事はできる」

スネーク「なんとか、バッドエンディングは避けてみる」

※二回目以降

キャンベル「スネーク、メリルとともにメタルギアのある地下整備基地に向かってくれ」

【核保存棟所長室、メリル変異後】

※一回目のみ

スネーク「大佐、メリルの様子が変なんだが？」

キャンベル「緊張の連続で少し滅入っているんだろう？」

ナオミ「スネーク、何か歌みたいなものが聞こえない？」

スネーク「そうなんだ。さっきから聞こえている。これはなんだろう？」

※二回目以降

キャンベル「先を急いでくれ、スネーク。メタルギアの地下整備基地は北にあるんだろう？」

■ウルフ戦（1回目）前　キャンベル

【マンティス戦、メリル操られ1】CALL

キャンベル「スネーク、メリルは正気じゃないんだ。武器を使うな!!」

ナオミ「サイコ・マンティスよ。彼がメリルさんを操っているんだわ。その歌、彼の洗脳ミュージックなのよ」

キャンベル「武器はつかうな。気絶させるんだ」

【マンティス戦、メリル操られ2】

※一回目

スネーク「(苛立ち) マンティスの姿が見えない」

ナオミ「彼はエスパーよ。でも魔法使いじゃないわ」

スネーク「(気づく) そうか、ステルス迷彩?」

キャンベル「メリルは奴に操られているんだ」

キャンベル「武器はつかうな。気絶させるんだ」

※2回目

スネーク「俺の主観がおかしいんだ」

ナオミ「彼のビジョンがあなたにも流れ込んでいるのよ。そうだ、そのビジョンで彼の居る位置がわかるはず!」

※3回目以降

キャンベル「武器はつかうな。気絶させるんだ」

【マンティス戦】

※一回目のみ

ナオミ「彼はサイコ・マンティス……元KGB所属の超能力諜報部員よ。強力な念動力と読心(リーディング)が彼の能力なの」

ナオミ「ソ連崩壊後、職を追われアメリカに渡り、しばらくFBIに籍を置いてサイコメトラーとして幾つかの事件を担当していたわ」

ナオミ「でも5年前……連続殺人者の精神に没入・同化してしまった結果、猟奇殺人を犯してしまったの」

キャンベル「相手の狂気に侵されたのか……」

ナオミ「とにかく、彼は以降、フリーの諜報専門エージェントとして各地を渡り歩いた後、FOXHOUND(フォックスハウンド)にスカウトされたの」

ナオミ「彼は読心(リーディング)能力をもっている。だからスネークの行動は全て先読みされるわ」

スネーク「どうしたらいい。これでは勝ち目はない」

キャンベル「方法はあるはずだ」
ナオミ「彼は人の心を操るのが得意よ。スネーク！　誘導に引っかからないで！」
※二回目
ナオミ「見える物が真実とは限らないわ。敵の肉体を破壊するより、精神を破壊する方が有効なの」
キャンベル「奴に悟られるな。無心の境地だ。頭を空にするんだ。わかるな。頭を空にするんだ」
※三回目
キャンベル「奴は読心能力(リーディング)でお前の心を読んでいるにちがいない。何とか奴の裏をかけ！」
※四回目
キャンベル「奴はお前のコントローラ操作を読んで攻撃をかわしているようだ。奴にコントローラの操作を読まれないようにするんだ。考えろ、何か方法があるはずだ」
※五回目
キャンベル「わかったぞ。コントローラ端子だ！」
キャンベル「コントローラをコントローラ端子2に差すんだ。そうすれば、奴はお前の操作が読めなくなる！」
※プレイヤーのコントローラ端子2が壊れている可能性がある場合
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、コントローラ端子2が使えない理由でもあるのか？」
キャンベル「まあいい。部屋の両側に彫刻のようなものがあるだろう？」
スネーク「ああ。顔が革バンドでぐるぐる巻きにしてある、アレか」
キャンベル「そうだ。それを攻撃して、顔の封印を剥ぎ取るんだ」
スネーク「どうして？」
ナオミ「その彫刻は、マンティスの素顔をモデルにした物らしいの」
ナオミ「マンティスは自分の顔を見る事を極度に嫌っていたわ。だから彫刻の顔があらわになれば、彼の集中力を削ぐ事ができるかもしれない」
※二回目以降
キャンベル「スネーク、彫刻の顔を壊してマンティス

のリーディング能力を乱すんだ」

【マンティス死亡後】
※一回目のみ
キャンベル「とにかく、メリルが無事で良かった。ありがとう」
ナオミ「……」
※二回目以降
キャンベル「スネーク、もう時間は残っていない。急いでメタルギアのある地下整備基地に向かってくれ。所長室の北から行けるはずだ」

【洞窟、精神安定剤入手】
※ジアゼパム装備時にSEND
ナオミ「スナイパー・ウルフが使ってる精神安定剤ね。ジアゼパムよ」
スネーク「ジアゼパム?」
ナオミ「ベンゾジアゼピン系の抗不安薬。強い中枢神経作用があって、向精神薬としてよく用いられるの」
スネーク「それでどうして手ブレが止まるんだ?」

ナオミ「抗不安薬には、一般的に筋弛緩作用、抗けいれん作用もあるのよ。だから自律神経失調症などの精神身体症や、麻酔前投薬、中枢性筋けいれんの治療にも使われるわ」
スネーク「なるほど」
ナオミ「でも注意してね。ジアゼパムは大量長期間服用するとアルコールみたいに精神的肉体的依存を引き起こすわ。成人なら、1日1～4回、1回2～5ミリグラム程度が適量ね」
スネーク「(感心) まるで医者みたいだな」
ナオミ「科学者よ」

【洞窟、暗闇注意】
キャンベル「暗闇では狼犬(ウルフドッグ)の方が遥かに有利だ。夜行性の眼を持つうえに嗅覚が発達している。暗視ゴーグルを使うんだ」
暗視ゴーグルを持っていない場合
キャンベル「暗視ゴーグルがどこにあるかは、エメリッヒ博士に聞いてみろ」

■拷問前　キャンベル

【ウルフ戦、倒れているメリルを攻撃した場合】

キャンベル「(激怒) スネーク！　メリルを殺す気か!!」

ナオミ「(非難) いったい何を考えてるの!?」

キャンベル「(激怒) 馬鹿者!!　何てことをするんだ!!」

ナオミ「スネーク！　もうやめて!!」

ナオミ「ひどすぎるわ、スネーク!!」

※何度も攻撃した場合

キャンベル「(激怒) こんな男に任務を頼むんじゃなかった……！」

ナオミ「(徹底的な軽蔑) あなた…最低ね……」

【戦車格納庫運搬口、赤外線センサー】

キャンベル「ん？　そこに仕掛けてあった赤外線センサーはスイッチを切られたようだな」

【地下通路、ウルフ戦最初】

※一回目のみ

ナオミ「スナイパー・ウルフはFOXHOUND(フォックスハウンド)最高の狙撃手よ」

ナオミ「女性特有の忍耐力を最大限にいかして、1週間もの間、飲まず食わず、身動きもせずに狙撃姿勢を保ち続けることができるわ」

ナオミ「その上、彼女はジアゼパムという精神安定剤を使って、銃の手ブレを克服しているの」

※PSG1を取りに行こうとしない場合CALL

キャンベル「スネーク、メリルが撃たれる！　ウルフに対抗できるスナイパー・ライフルを探しに行くんだ。それしかメリルを救う方法はない！」

※二回目のみ

キャンベル「ウルフの射程の外から、スナイパー・ライフルでウルフを撃つんだ」

スネーク「だが、そのスナイパー・ライフルはどこにあるんだ？　メリルに聞くわけにはいかない」

ナオミ「エメリッヒ博士はどう？　この基地に長い彼なら何か知ってるかも……」

※三回目以降

※オタコンにスナイパー・ライフルのありかを聞く前

キャンベル「ウルフの射程の外から、スナイパー・ライフルでウルフを撃つんだ」

キャンベル「スナイパー・ライフルのありかはエメリッヒ博士に聞いてみろ」
※オタコンにスナイパー・ライフルのありかを聞いた後
キャンベル「(メリルの危機に切羽詰まっている) スナイパー・ライフルは戦車格納庫棟の地下二階にあると聞いただろう? それを手に入れてメリルを助けてくれ!」
【PSG1入手直後】CALL
キャンベル「PSG1を手に入れたんだな? それがあればスナイパー・ウルフに対抗できるはずだ。メリルを助けてくれ!」
【PSG1入手以降】
キャンベル「ウルフの射程の外から、スナイパー・ライフルでウルフを撃つんだ」
【地下通路、捕まるデモ前】
※一回目のみ
キャンベル「ウルフに勝ったんだな、スネーク。メリルは? 無事か?」
スネーク「わからない。姿が見えないんだ」
ナオミ「まさか、敵につかまってしまったの?」
スネーク「(焦り、心配) そうかもしれん。ウルフから聞き出してみる。まだ息はあればの話だが……」
ナオミ「(仲間を助けようと必死なスネークの姿に心を動かされかけている) スネーク……」
キャンベル「メリルのこと……よろしく頼む」
※二回目以降
キャンベル「スネーク、地下通路を北に向かってくれ」

■忍者戦前　メイ・リン

【核保存棟B2廊下、妨害電波の説明】
メイ・リン「スネーク、レーダーは使えないわ。妨害電波が出てるの」
メイ・リン「(心配げ) しかも……発信源はあなたのすぐ近くみたい。気をつけて」

■メリル接触前　メイ・リン

【忍者戦、妨害電波の説明】

メイ・リン「スネーク、妨害電波で撹乱されてレーダーは使えないわ。発信源はその忍者よ！」

【オタコン救出後】

メイ・リン「中国には『学者は之を行うを貴び、之を知るを貴ばず』っていうコトワザがあるの」

メイ・リン「学問をする人というのは、勉強した事を実行するのが大事であって、ただ知識を得るだけじゃダメって意味」

メイ・リン「……私がCMUやプリンストンじゃなくって、MITに入ったのは実践工学が盛んだから。理論研究ばっかりじゃなくて、実際に動くものを作りたかったの」

メイ・リン「ソリトン・レーダーとかリアルタイム・バースト通信を創ったのも、みんなの役に立つものが創りたかったから。……エメリッヒ博士もそうだと思う」

メイ・リン「（落ち込み）でも、そんな気持ちが利用されて、人殺しの道具を造らされてしまう…私たちエンジニアは……もう何も造らない方が、世の中のためなのかな……？」

【核保存棟B1、女子トイレの中】

※一回目

メイ・リン「（非難）スネーク！　そこは女の子用のトイレよ！」

スネーク「メリルがここに入っていくのを見たんだ」

メイ・リン「（怒）それなら、なおさら入っちゃダメじゃない！　ヘンタイ！　記録させないわよ！」

スネーク「そうは言うがな……。この基地の中で敵の目に触れずにメリルと話ができる場所というのは、ここしかないんだ」

メイ・リン「だからって……もう、知らない！」

※二回目以降

メイ・リン「……」

■サイコ・マンティス戦前　メイ・リン

【メリル合流後】

※一回目のみ

メイ・リン「メリルさんと逢えたのね、よかった……」

メイ・リン「作戦を指揮するっていう立場もあるし、多分口に出しては言わないだろうけど……キャンベルさん……ホント、嬉しそうな顔してたわよ」
スネーク「(嬉しい)……そうか」

■スナイパー・ウルフ戦前　メイ・リン

【洞窟、メリル狙撃前】
※一回目のみ
メイ・リン「スネーク、ソリトンレーダーは……」
スネーク「この洞窟みたいな狭い場所では使えない、だろ?」
メイ・リン「そうなの。ごめんなさい」
スネーク「謝ることは無い。どんな優れたものにも限界はあるさ」

【メリル狙撃後】
※一回目
メイ・リン「(責めるように)このままじゃメリルさん、死んじゃうわ。なんで早く助けにいかないの?」
スネーク「(悔しさに歯噛みしつつ)敵はメリルを餌にして俺を釣りだそうとしているんだ……。のこのこ出ていけば、すぐさまあのスナイパーの餌食になるだろう。その後にメリルも……」
スネーク「逆に言えば俺が出ていかない限り、奴もメリルを殺すわけにはいかないということだ」
メイ・リン「だからって、傷ついたメリルさんを放っておくっていうの?」
スネーク「そうだ。俺がそうすることはメリルもわかっているはずだ」
メイ・リン「ひどい……」
スネーク「その通りだ。だがまず生き残らなければ、そんな言葉を吐くことすらも許されない。それが戦場だ」

【ウルフ戦後の嫌な予感?】
※最後のセーブが、PSG1を取得してウルフと闘う以前のものであったならば、メイ・リンからのCALL。それ以外はSEND。
メイ・リン「スネーク? この辺で一度記録(セーブ)しておく

っていうのはどう?」

※セーブ記録がかなり前の場合
メイ・リン「しばらく記録(セーブ)してなかった事だし…ね?」

※一回目のみ
スネーク「どうしたんだ、突然?」
メイ・リン「……なんだか、嫌な予感がするの」
スネーク「嫌な予感?」
メイ・リン「ええ、なんとなくなんだけど……」
メイ・リン「生きてかえってきてね、スネーク…」

■忍者戦前・ナスターシャ

【核保存棟1F、ガス状態】
ナスターシャ「ガスを散布されているな。おそらくソマンか何かの有機リン系神経剤だろう」
ナスターシャ「スニーキング・スーツの防護機能と対BC兵器用ナノマシンの中和作用があるから、短い時間なら大丈夫のはずだが…過信はするな。ガスマスクを装備した方がいい」

※一回目のみ
ナスターシャ「有機リン系神経剤は、動物の神経を侵す毒ガスだ。兵器として実用化されたのは第二次大戦中。殺傷能力は極めて高い」
ナスターシャ「純度が高い場合、本来気体は無色無臭だ。そのガスが黄色いのは、わざと着色しているんだろう…。散布状況をわかりやすくして、味方の被害を抑えるためにな」

■メリル接触前・ナスターシャ

【核保存棟B2研究室、忍者戦】
ナスターシャ「そのけた外れの運動能力……。多分、そいつの体は強化骨格だ」

※一回目のみ
スネーク「強化骨格? 義手とか義足みたいなものか?」
ナスターシャ「いいや。根本的に違う。義手や義足は失われた部分を補うのが目的だ。だが強化骨格は人間以上の戦闘能力を実現するために、人の体を人工物に置き換える」
スネーク「戦闘機械、ということか……」
ナスターシャ「開発が行われているという噂は聞いたことがあったが、あくまで噂だと思っていた……。まさか本当に存在するとはな……」

【メリル接触前、女子トイレの中】
※一回目のみ
ナスターシャ「（非難）スネーク、そこは女子トイレだろう。……君がそんなに常識の無い人間だったとは……」
※二回目以降
スネーク「メリルがこの中に入っていくのを見たんだ」
ナスターシャ「だからといって！」
スネーク「二人きりになるチャンスは今しかない。確かにこの中にいるはず……」

■マンティス戦前・ナスターシャ

【メリル救出後】
※一回目のみ
ナスターシャ「（安心）メリルと無事合流できたんだな。キャンベルも安心した事だろう」
【メリルの様子がおかしい】
※一回目のみ
スネーク「メリルの様子がおかしいんだが……」
ナスターシャ「ストレス、かもしれないな……戦場とは過酷な場所だ。私の知り合いに『チェチェン症候群』になった人がいる。彼はチェチェンから帰還した半年後に妄想と不眠に悩まされた」
ナスターシャ「何の為に闘うのか、わからないまま戦争にかりだされ、同じ言葉を話す、同じ国民と闘った……」
スネーク「心的外傷後ストレス障害（PTSD）か？ ベトナム帰還兵に多かった？……」
ナスターシャ「アフガン症候群にも似ているな。メリルの場合は一時的なうつ状態だと思うが…」
※二回目以降
ナスターシャ「彼女は新兵なんだ。気遣ってやれよ」

■ウルフ戦（1回目）前・ナスターシャ

【マンティス戦、メリル操られ時】
ナスターシャ「メリルは明らかに正気じゃない。きっと何者かに操られているんだ」

【マンティス戦】
※一回目のみ
ナスターシャ「サイコソルジャーか……。公にはされないが、事実多くの国の特殊部隊や情報機関が超能力者を抱えている」
ナスターシャ「単にカンが鋭い程度から、自然災害級の破壊を引き起こす事のできる者まで、レベルは様々だがな」
※二回目以降
ナスターシャ「サイコ・マンティスは相当に強力な超能力者だ。気をつけろ」
【地下通路、メリル狙撃後】
ナスターシャ「（切迫）スネーク、スナイパー・ライフルなしでは勝ち目はない。彼女を助ける事もできないぞ。スナイパー・ライフルを手に入れるんだ。それしかメリルを救う方法はない」

■忍者戦前・マスター

【核保存棟1F、ガス噴出状態】
マスター「スネーク、そのガスはおそらく神経ガスだ。極めて危険な毒ガスだぞ。ガスマスクを使うんだ」

■メリル接触前・マスター

【核保存棟B2研究室、忍者戦】
マスター「それは挑発の一種だ。武器を捨ててみろ?」
【メリルを追ってトイレに入った】
マスター「スネーク、その部屋の中にメリルが潜んでいることは確実だ。よく探してみろ」

■マンティス戦前・マスター

【メリル合流後】
※一回目のみ
マスター「メリルとの合流に成功したんだな？ それはよかった。起爆コードを解除できる

という例の鍵（PALキー）も手に入ったんだろうな？
急いでくれよ、タイムリミットは近い」

■ウルフ戦（1回目）前　マスター

【マンティス戦、メリル操られ時】
※A、Bランダム
（A）
マスター「おそらくメリルは操られているだけだ。素手での近接戦闘（CQB）は得意だろう？　銃は使わず、彼女の動きを止めるんだ」
（B）
マスター「おそらくメリルは洗脳されているだけだろう。助ける方法はあるはずだ」
【マンティス戦】
マスター「相手は確かに超能力者だ。だがお前にも戦場でつちかったカンがある。奴に対抗できないはずはない！」

【マンティス死後】
※一回目のみ
マスター「サイコ・マンティスか……優れた資質を持って生まれながら、それを生かす事ができなかった哀れな男だな……」
【洞窟、ウルフドッグについて】
マスター「そこにいるのは狼犬（ウルフドッグ）。犬ぞりレースで使用するために、その名の通りハスキー犬とアラスカのオオカミをかけ合わせて作られた動物だ」
※一回目のみ
スネーク「従順なイヌにオオカミの忍耐強さと強靱さを取り入れようという試みだったんだ。だが期待されただけの持久力も運動能力も得られなかった」
スネーク「その上、性格はむしろオオカミに近く、ほとんど人になつかない。だから普及はしなかった」
マスター「（感心）そうか、お前は犬ぞり使い（マッシャー）だったな」
スネーク「ああ。２００２年に犬ぞりレースのレギ

ユレーションが変更され亜犬種の使用が禁止されてからは、あえて飼育しようという者もいなくなった」

スネーク「そのほとんどは安楽死させられたと聞いていたが……？」

マスター「捨てられた狼犬(ウルフドッグ)が野犬化しているという報告もある。野生での狼犬(ウルフドッグ)は、オオカミのように群れを作って行動するらしい。気をつけろよ」

■拷問前　マスター

【ウルフ倒した後（1回目）】

マスター「さすがだな、スネーク。潜入だけではなく狙撃の腕もなまってはいないようだ。だが安心するのは早いぞ。戦果をその目で確認するまでは気を抜くな」

■忍者戦前　メリル

【M1戦車倒した後】

※一回目核保存棟ガス室に入る前

メリル「（尊敬）すごいわ、スネーク！　戦車を倒したのね！」

スネーク「なに、大した事はない。だが君が訓練でやってたVRシミュレーションには、単独で戦車に立ち向かうなんて設定は、無かっただろうな」

メリル「ええ、勿論。でも、単独潜入してきた特殊部隊員と協力してテロリストと戦う、なんてシミュレーションもなかったわよ」

スネーク「現実では、予想していない事ばかりが起こるものだ。特に戦場ではな」

メリル「私はもう核弾頭保存棟にもぐりこんでる。エメリッヒ博士はまだ無事でいるみたいだけど、この先どうなるかはわからないわ…」

メリル「（ちょっと心細い）…早く来てね」

※二回目以降

メリル「エメリッヒ博士が閉じ込められているのは、戦車格納庫棟の北にある核弾頭保存

棟の地下二階よ」

【核保存棟1F、基本】

メリル　「エメリッヒ博士は地下二階の研究室エリアにいるはずよ」

メリル　「そのエリアでは重火器の使用は一切禁止になってたわ。爆発で核弾頭から、核物質が漏れ出したら大変なことになるから。気をつけてね」

※一回目のみ

スネーク　「奴等、ガスマスクを装備しているようだが?」

メリル　「それは重火器の攻撃ができないからね」

スネーク　「つまり、化学兵器を使うつもりか」

【核保存棟、ガス噴出状態】

メリル　「ガスマスクを装備すれば、ガスにも長い時間耐えられるはずよ」

※ガスマスクを持っていない状態

スネーク　「そのガスマスクはどこにある?」

メリル　「その建物の地下二階よ。だから、そこはガスマスクなしで切り抜けるしかないわね」

【核保存棟、音鳴り床】

メリル　「スネーク、そこの床は普通に歩くと大きな音が鳴るわ。敵に気付かれてしまう。ホフクで進んでみて」

【核保存棟B2、エア・クリーナー前】

スネーク　「メリル、ここにガスの噴出装置のようなものがあるんだが……」

メリル　「ああ、それはエアーで体に着いたほこりを吹き飛ばす、クリーナー・システムよ。研究室って、細かいほこりにも気を使うものなんでしょう?」

【核保存棟B2、エレベータを出たところ】

メリル　「エメリッヒ博士は、その階の東北にある研究室に捕らえられているはずよ。博士を閉じ込めておくためにガスがまかれているわ」

メリル　「でもガスマスクもその階にあったはずよ。それを使ってなんとか切り抜けて」

【核保存棟B2、忍者のヒントを聞いた後】
※一回目のみ
メリル「ディープスロート？　聞いた事ないわね」
スネーク「そうか……」
メリル「なぜあなたを助けようとするのかしら？」
スネーク「わからん」
メリル「……（怪訝そうに）罠？」
スネーク「かもしれんな。だが今は奴の言う事を信じてみるしかないようだ……」
※リモコンミサイル無い場合
スネーク「リモコンミサイルはどこにある？」
※二回目以降共通
メリル「リモコンミサイルは、核保存棟の地下一階にあったと思うわ」
【核保存棟B2廊下、死体デモ前】
メリル「スネーク、エメリッヒ博士はそこから北に行ってすぐの所に捕まっているはずよ」
【核保存棟B2廊下、死体デモ後】
スネーク「……メリル、ここの死体の山は、君の仕業か？」
メリル「まさか！」
※一回目のみ
スネーク「だろうな……」
メリル「一体誰が？」
スネーク「さあな。だが、そいつはきっとこの先にいる」
メリル「行って確かめるしかないってわけね」
【核保存棟B2、研究室扉前デモ後】
メリル「急いで！　エメリッヒ博士が危ないわ！」

■メリル接触前　メリル

【忍者戦、忍者戦中外に出ようとした場合】
メリル「忍者？　FOXHOUND（フォックスハウンド）にそんな隊員がいるなんて聞いたことないわ。でもエメリッヒ博士を助けるためには、そいつをなんとかするしかないみたいね」

■メリル接触前　オタコン

【核保存棟、メリル接触前】

※一回目のみ

オタコン「メリルとはまだ逢えないのかい?」

※同じ建物、違うフロアにいる時

オタコン「スネーク、君がいる核保存棟は地上一階、地下二階で構成されてるんだ。他のフロアも探してみたらどうだい?」

※同じ建物にいない場合

オタコン「『近くにいる』っていってたから、メリルは核保存棟のどこかにいるんじゃないかな?」

※同じフロアにいる場合。A、Bのランダム

(A)

オタコン「彼女はテロリストに変装している。だけど、それは見た目だけだよ。中身までは変えられない。彼女の歩き方に注目するんだ……」

(B)

※一回目のみ

オタコン「スネーク、彼女はテロリストに変装しているんだ。他の兵士が見てる時は嘘をつき通すんじゃないかな。二人だけの時じゃなければ、正体を明かしてはくれないと思うよ」

※二回目以降

オタコン「ああ見えても女だ。わかるだろ?　女しかいかない所があるじゃないか」

【核保存棟B1、女子トイレ】

※一回目のみ

オタコン「メリルを見つけたのかい?」

スネーク「ああ。確かにこの女子トイレの中に入っていくのを見たんだが……」

オタコン「そこ、出口は一つしかないよね?」

スネーク「ああ」

オタコン「それならまだ中にいるよ、きっと」

※二回目以降

オタコン「中に隠れられるところがあるんじゃないか?　探してみたら」

※トイレから出てしまった場合

オタコン「スネーク、メリルを見つけたんじゃなかったのかい?」

■サイコ・マンティス戦前・オタコン

【メリル合流後】

※一回目のみ

オタコン「(安堵)よかった。メリル、無事だったんだ。彼女、タフなんだね。見た目からは想像できないけど」

スネーク「歩き方からもか?」

オタコン「はは。とにかく安心したよ」

スネーク「メリルから鍵(PALキー)も受け取った。これがあれば核の発射を止められるんだな」

※二回目以降

オタコン「北にあるメタルギアの地下整備基地に行くんだ。起爆コード入力システムはそこにある」

■スナイパー・ウルフ戦前・オタコン

【マンティス戦、メリル操られ時】

※一回目のみ

オタコン「きっとメリルは、誰かに操られているんだ。何とかして助けてあげてよ」

スネーク「(焦り)どうすればいい？ そいつは一体どこにいるんだ?」

オタコン「多分、すぐ近くにいるよ。姿を消しているんだ」

スネーク「どうやって?」

オタコン「ステルス迷彩だよ。僕が開発した……」

オタコン「ステルス迷彩は光学的に光を屈曲させて相手の目をくらますんだ。サーマル・ゴーグルがあれば見えるはずだけど……」

オタコン「とにかく肉眼では見えないだけだ。きっとそいつを見つけ出す方法はあるはずだよ」

※二回目以降

オタコン「スネーク、メリルは操られてるだけだ。助けられるはずだよ」

【マンティス戦後】

※一回目のみ

オタコン「(同情)サイコソルジャーか…。彼、戦い以外の生き方、選べなかったのかな……?」

スネーク「……お前、奴に同情しているのか?」

オタコン「マンティスの超能力……あれは大きな力だよ。ひょっとしたら人を幸せにすることもできたかもしれない……。力は全て争いのために利用されてしまうんだとしたら、悲しすぎるよ……」
スネーク「……」
※二回目以降
オタコン「スネーク、メタルギアは北の地下整備基地だ。急いで！」

【洞窟、暗闇注意】
オタコン「スネーク、メタルギアは北の地下整備基地だ。急いで！」
オタコン「暗い場所は暗視ゴーグルを使った方がいいよ」
※暗視ゴーグルを持っていない場合
オタコン「暗視ゴーグルなら、核保存棟の研究室にある」

【洞窟、基本】
※一回目
オタコン「スネーク、犬を……、殺さないでほしいんだ」
スネーク「何を言ってる？　殺らなければ俺が殺られるんだぞ」
オタコン「でも、犬達に罪は無いだろ」
スネーク「罪があるなら殺してもいいのか？」
オタコン「…君だって、犬、飼ってるんだろ？」
スネーク「それがどうした！　ここは戦場だ。個人の私生活など何の意味も持たない」
オタコン「……」
※二回目以降
オタコン「スネーク、犬を……」
スネーク「くどい！」

【地下通路、メリル狙撃後】
※一回目
スネーク「オタコン、この基地でスナイパー・ライフルを見たことがあるか？」
オタコン「スナイパー・ライフル？」

スネーク「メリルがやられた。相手は凄腕のスナイパーだ」
オタコン「スナイパー……」
スネーク「奴に対抗するには高性能のスナイパーライフルが必要なんだ」
オタコン「……（渋々）ＰＳＧ１を戦車格納庫棟地下二階の武器庫で見かけた…」
スネーク「戦車格納庫棟の地下二階？　あそこまで戻るしかないのか？」
オタコン「そうだけど……」
スネーク「どうかしたのか？　オタコン？」
オタコン「あの……いや、何でもない」
※二回目以降
スネーク「オタコン、スナイパーライフルはどこにある？」
オタコン「……（渋々）ＰＳＧ１を格納庫棟地下二階の武器庫で見かけたけど……」

■拷問前　オタコン

【スナイパー・ウルフ戦】
オタコン「……」
スネーク「どうした？」
オタコン「……彼女……ウルフは……いや、なんでもない」
【ウルフ戦勝利後、捕まる前】
オタコン「……」

Section 3

Torture – vs Sniper Wolf (2nd)

拷問イベント～ウルフ戦 (2nd)

【拷問01スネーク覚醒デモ】 拷問部屋　主観

——黒からフェードイン。画面はスネークの主観。
——スネーク目覚める。拷問機に仰向けに両手両足を「X」の字に縛りつけられ、全く体の自由がきかない。
——必死に首を動かすが、天井のライト以外に見ることができない。
——しばらくするとプレイヤーのすぐ近くで声がする。声はOFF気味。

リキッド「気がついたか、ソリッド・スネーク?」

——そしてスナイパー・ウルフの冷徹な声。

ウルフ「思ったよりタフな男ね……」

リキッド「俺が誰だかわかるか?」

——スネーク、声の方向に頭を向けようとしているが、声の主を見ることはできない。

リキッド「いつか貴様に逢う事になると思っていた」

リキッド「俺から光の部分を奪い去った男……(激しい嫉妬)貴様のおかげで俺は……」

——キー入力受け付け時間。

――このデモでは、ウルフとリキッドの会話の間に、二十秒程度のキー入力受け付け時間が存在する。この間、ウルフとリキッドの会話は中断し、ユーザーのキー入力を受け付ける。入力されたキーによってオセロットの解説が入る。

――主観モードのボタン「△」、パンチボタン「○」、武器ボタン「□」等を押しても反応ない。「R2」、「L2」のボタンを押すとアイテムのウィンドウが出てくるが、それまで持っていた武器、アイテムは全て無くなっている。

※「L2」、「R2」キー

オセロット「無駄だ。お前が所持していた武器や装備は回収した」

オセロット「心配するな。すぐそこに保管してある。もう使う事もないだろうがな」

※アクションボタン、武器ボタン

オセロット「鋼鉄の鎖で固定されている」

※方向キー

オセロット「ダメだ。お前の身体はしっかりと縛り付けられている」

――ウルフとリキッドの会話1。

リキッド「俺か？　俺は貴様にポジティブな部分を奪われた男だ」

リキッド　「多くの兄弟達の犠牲の上に生まれ落ちて以来……まさに30年ぶりの感動の対面だ。『光』と『闇』のな」

——ウルフとリキッドの会話2。

ウルフ　「この男のゲノム情報も必要なの?」
リキッド　「ああ、殺す前に生きた組織を貰う。ゲノム兵達の奇病を治療するために」
ウルフ　「それで治るの?」
リキッド　「いや、ビッグボスのゲノム情報を手に入れなければ駄目だ」

——ウルフとリキッドの会話3。

ウルフ　「奴等は交渉に応じたの?」
リキッド　「まだだ」
ウルフ　「あいつらが交渉に応じるはずはない。あの連中は偽善者ばかりよ」
リキッド　「クルド人としての意見か」
ウルフ　「奴等、いつも政治を優先する」
リキッド　「心配いらん。奴らが何よりも避けたいのは、新型核兵器が明るみに出る事だ」

オセロット　「ボス、スネークがお目覚めのようです」

——スネークの載せられているベッド（拷問機）が回転して直角に起立する。

【拷問02拷問前デモ】　拷問部屋

——拷問機が直立し、天井を向いていたスネークは初めて拷問機が置かれている室内が見えるようになる。

——部屋はガラスで仕切られており、最新の医療設備が整っている。

——ガラスの向こうに独房らしき鉄格子が見える。

——床には自分の載せられている拷問機（ベッド）に繋がるケーブルが動脈のようにのたうっている。

——壁や机には人間の「輪切り」の写真が貼られている。

——スネークの左手でリボルバー・オセロットが拷問機の操作パネルを操っている。コートを脱ぎ、糊の効いた白いシャツの上に喪に伏すように黒いベストを着用。

——斜めにガンベルトを襷掛けして腰のホルスターにはシングルアクション・アーミーが収まっている。ただし、右手首が切断されており、包帯を巻いている。

——スネークの正面にはリキッド・スネーク。

——上半身、裸の上に皮のロングコートを羽織っている。

——大きくはだけた胸元から隆起した鋼のような筋肉が覗いている。その胸元には2枚のサイレンサーを付けたドッグタグが鈍い光を放っている。

——髪は肩まで届く長髪、軽くウエーブがかっている。浅黒い肌、紺碧の瞳、

——両手はコートのポケットにつっこまれたまま。

——スネークの右手にはスナイパー・ウルフが立っている。タイトなシャツに押し上げられた豊かな乳房。その肌は吸血鬼のように青白く透明。

——くっきりとした鎖骨の上に細い革製の首輪がかかっている。

——ウルフはスネークと眼があっても表情ひとつかえない。精神安定剤の入っているプラスチックケースをカチャカチャといわせ、黙ってスネークを見ている。

——リキッド、スネークに顔を鼻先まで近づけて覗き込む。

リキッド　「確かに似ているところもあるようだな。我が弟よ」

スネーク　「……」

——リキッドの突然の言葉に頭が回らないスネーク。

リキッド　「いや、兄貴というべきか？　……まあ、そんな事はどうでもいい」

——くるりときびすをかえして後ろに下がるリキッド。

リキッド　「お互い『ビッグボスの息子達』の数少ない生き残りだ」
　　――と、リキッドの無線機が鳴る。
　　――連絡が来ることを予期していたように、無線機をコートから出して、耳にあてるリキッド。スネークに背を向けて話を始める。
リキッド　「俺だ。……そうか」
　　――ウルフ、オセロット、リキッドの会話に注意をそそぐ。
リキッド　「で？　……ふざけた奴等め！」
　　――リキッド、ウルフとオセロットを見て、首を縦に振って合図を送る。
リキッド　「……わかった。レイブン、すぐに行く」
　　――無線機をコートにしまい、ウルフとオセロットを見る。一呼吸、置いて。
リキッド　「奴等は交渉に応じない。予定通り、十時間後に一発目を発射する」
ウルフ　「ちぃっ!!　アメリカ人め！」
　　――ウルフ、拷問機の角を拳で殴る。

――妙に冷ややかなオセロット。

オセロット「読みが外れましたね」

リキッド「これ程強気に出てくるとは……臆病者の政府らしくない。(少し考える) それとも、何か切り札を持っているのか?」

――オセロット、ちらりとスネークの方を見てから、

オセロット「さぁ? とにかくこれで記念すべき新型核弾頭の発射に立ち会えるわけですね……」

リキッド「俺は発射準備に入る。後を頼むぞ、オセロット」

――オセロット、うれしそうに頷く。ウルフに向かって。

オセロット「お前はどうする? 私のショーを見ていくか?」

ウルフ「私は興味がない」

――ウルフ、プラスチックケースをカチャカチャ振って中身を確認すると口元に持っていく。

――蓋を開けて、直接、精神安定剤(ジアゼパム)を2、3カプセル飲み込む。

ウルフ　「家族に食事をあげる時間だ」
オセロット　「そうか、私のショーより狼の方がいいか？」

——部屋から出ていこうとする、リキッド立ち止まり、オセロットに忠告する。

リキッド　「オセロット、局長のようにしくじるな」
オセロット　「わかってます。あれは事故だったんです」
オセロット　「ただの民間人があれほど我慢強いとは……」
リキッド　「おそらく催眠療法による精神防壁が張られていたんだ」

——オセロット、思い出したように。

オセロット　「ボス、あの忍者（サイボーグ）は？」
リキッド　「12人もやられた。あの男は既に正気を失っている」
オセロット　「私も腕を……どうして奴がここに？」
リキッド　「俺達の中にスパイがいるかもしれん」

——リキッドの意味有り気な言葉に顔を見合わせるウルフとオセロット。

リキッド　「マンティスは死んだ。ベイカー社長とオクトパスの死因も調べねばならん。人手が足りない。無駄な時間は取れんぞ。拷問もほどほどにしろ」

オセロット　「拷問？　これは事情聴取ですよ」

リキッド　「どちらでもいい。（スネークに向かって）じゃあな、兄弟」

――リキッド去っていく。続いて、ウルフ立ち去る。ウルフ、去り際にスネークの耳元に顔を近づけて囁く。

ウルフ　「女はまだこの世界にいる……」

スネーク　「メリル？」

ウルフ　「また……楽しみましょう」

――と、スネークの頬（傷口）に口づけをするウルフ。冷やかしの口笛を鳴らすオセロット。

オセロット　「あの女は標的を決めると、他には盲目になる」

オセロット　「時には恋愛感情さえ持つようになる」

――ウルフ、扉から出ていく。

――ウルフが出ていったのを確認すると、スネークに向きなおる。

オセロット　「さあ、これで二人っきりになれた」

オセロット　「どうだ、気分は？」

スネーク　「悪くはない。回転ベッドで熟睡させてもらった。一人で寝るにはもったいない」

オセロット　「そいつはよかった。このベッドは優れもんだ」

オセロット　「じっくりと教えてやる。これからな……」

スネーク　「俺の装備品は？」

――拷問機の隣にそれまでスネークが持っていた装備品、武器が入った箱が置かれている。

オセロット　「そこにまとめて置いてある」

オセロット　「しかしワシントンも大胆な賭けに出たもんだ。よっぽどお前の働きに期待しているんだな、運び屋(ベクター)？（からかい）」

スネーク　「？」

――オセロット、スネークが何も知らされていない事を察し、肩をすくめて同情してみせる。それが何を意味するジェスチャーなのか理解できないスネーク。

スネーク　「やはり――、メタルギアに装備されているのは新型の核弾頭なのか？」

オセロット「ああ。詳しくはキャンベルにでも聞いてみたらどうだ?」
スネーク「大佐に?」
——オセロット、これまでとは態度を変えて、囁くように尋ねる。
オセロット「ところで、あの光ディスクはベイカー社長から預かったものだな?」
スネーク「……それがどうした?」
オセロット「光ディスクはあれだけか? 他にデータは?」
スネーク「何のことだ?」
オセロット「コピーはないんだな? ……なければいい」
——ひとりうなずくオセロット。
——せわしく拷問機の回りを動きながら、マシンのセッティングを行う。
スネーク「メリルは無事なのか?」
——既にいつものオセロットに戻っている。
——オセロット、マシンのチェックをしながら、面倒臭げに答える。

オセロット　「女は死んでいない。ウルフが気紛れをおこしたおかげでな。だがこれからも生き続けられるかどうかは、お前次第だ」

オセロット　「お前、鍵(PALキー)を持ってたろ。残り２つの鍵(PALキー)はどこにある？　あの鍵(PALキー)の仕掛けとは何だ？」

スネーク　「仕掛け？」

オセロット　「あのタヌキ社長が仕組んだとかいうトリックの事だ」

スネーク　「知らん」

オセロット　「（あっさり）そうか。まぁいい」

オセロット　「（宣言）これはゲームだ、ソリッド・スネーク。お前がどれほどの男か試してやる。我慢できなくなったら服従しろ。そうすれば止めてやろう。だがその時は——、あの女の命をもらう」

オセロット　「〇ボタンを連打すればＬＩＦＥ(ライフ)が回復する。服従したければ、ＳＥＬＥＣＴボタンを押せ」

オセロット　「ＬＩＦＥ(ライフ)がなくなるとゲームオーバーだ。コンティニューはないぞ」

オセロット　「言っておくが——、連射パッドを使おうなどとは思うなよ」

※プレイヤーが最後のセーブをしたのが、もう一度プレイしなおすのが嫌になるほど前の場合

オセロット　「スネーク、お前がセーブをしたのは随分前のことのようだな」

スネーク　「それがどうした」

オセロット　「お前の体が拷問に耐え切れなければ、当然ゲームオーバーだ。お前はあの長い道のりをもう一度繰り返す気があるか？　悪いことは言わん。服従したほうがいいぞ」

オセロット　「高圧電流が貴様の身体を流れる。短時間であれば命に別状は無い程度のものだ」

スネーク　「そういう趣味はない」

オセロット　「まだ余裕があるようだな。いいか、スネーク。お前は戦争捕虜(POW)（プリズナー・オブ・ウォー）ではない」

オセロット　「お前は人質だ。ジュネーブ条約【注1】も関係ない。ここでは誰も助けてはくれん」

オセロット　「思いっきり感じてくれ！　気にすることはない」

オセロット　「よし、そろそろ始めようか？」

オセロット　「ではいくぞ」

【拷問03オセロットの説教デモ】　拷問部屋　主観

――画面はスネークの主観。拷問機に繋がれたまま、息も絶え絶えなスネーク。
――それを満足げに見下ろすオセロット。

オセロット　「なかなか強情な奴だな。今回の所はこれくらいにしておこう」

――拷問機が後ろに倒される。
――オセロットの話の間、スネークは再び天井しか見ることは出来ない。

※1回目
オセロット　「さすがはボスの兄弟。クールだ」
オセロット　「あの男、若いが大した奴だよ。ハインドでF16を撃墜するとはな。あのプロジェクト……恐るべき子供達(アンファン・テリブル)も失敗ばかりではなかったということか」

――スネークの手枷が解除される音……。

オセロット　「あんな奴は見たことがない。奴こそ、私の夢を実現してくれるかもしれん」

――スネークの足枷が解除される音……。
――独房に戻されるスネーク。

※2回目

オセロット「なげかわしい時代だよな」

オセロット「帝政、全体主義、ペレストロイカ【注2】……確かに20世紀のロシアは問題を抱えていたが、イデオロギーがあった。今のロシアにはなにも無い」

スネーク「自由と秩序の葛藤。混沌の中で再びナショナリズムに目覚めたか」

オセロット「GRU【注3】本部長とスペツナズ【注4】の最高司令官を歴任した実力者とも話がついている」

オセロット「彼は今回の新型核システムを購入してくれる。ハインドDはその前金だ」

スネーク「目的は金か？」

オセロット「金など必要ない…。ロシア再建、新らしい世界秩序」

——スネークの足枷が解除される音……。

——独房に戻されるスネーク。

※3回目

オセロット「お前にも理解できるはずだ」

オセロット「私達は今のような世界では生きては行けない」

オセロット　「私達には緊張が必要だ」

オセロット　「今の世界は腑抜けている。感情を押し潰した偽りの時代だ」

——スネークの手枷が解除される音……。

オセロット　「だから世界を目覚めさせ、本来の姿に戻す。欲望と猜疑、怯懦と蛮勇が入り混じる緊張に満ちた世界の実現」

オセロット　「それはお前が望むものでもあるんじゃないか？」

スネーク　「……」

——オセロット、感心と尊敬、嫉妬と自嘲が入り交じった口調。

オセロット　「リキッド・スネーク、たいした男だ。奴は本気でそれをやろうとしている……」

——スネークの足枷が解除される音……。

——独房に戻されるスネーク。

【拷問04服従デモ】

——画面は主観。

——拷問中に服従ボタン（SELECTボタン）を押すと電撃中であろうと、拷問をやめる。

オセロット「そうか、そうだな。お前も人の子だ」

オセロット「約束通り、これまでにしておこう」

オセロット「そのかわり、女はいただいた。じっくり、楽しんだ後に殺してやる」

スネーク「……メリル」

オセロット「いいぞ、そうやって悔いて、生きて行け」

——独房に戻されるスネーク。

【拷問05独房に戻されるデモ】 拷問部屋

——スネーク、拷問機から解放される。

——二名の兵士がぐったりしたスネークのもとに歩み寄る。

——両脇を捕まれ、兵士に引きずられて、独房へ連れて行かれるスネーク。

——スネーク、両足をだらりと垂らして、引きずられていく。

【拷問06拷問が始まるデモ】　独房　俯瞰

——画面俯瞰。独房に閉じ込められたスネークに、見張り兵が声を掛ける。

ジョニー　「スネーク、ショータイムだ。オセロットが呼んでる」

——両脇を抱えられて、拷問室に連れて行かれるスネーク。

——画面、フェードアウト。

※拷問部屋に戻されるデモへ。

【拷問07拷問部屋に戻されるデモ】　拷問部屋

——黒画面からフェード・イン。

——拷問部屋の天井が見える。

——画面外からオセロットの声。

オセロット　「いいか、もう一度言うぞ」

——同様の操作説明が入る。

オセロット　「私はアフガニスタン、モザンビーク、エリトリア、チャドでも闘った」

オセロット　「アフガンゲリラの間でシャラシャーシカの渾名で恐れられていた」
オセロット　「私のはGRU（グルー）仕込みだ」
オセロット　「KGBの連中とは違う……これは拷問ではない。スポーツだ」
スネーク　「サディストには違いない」
オセロット　「制服連中と一緒にされては困る」
オセロット　「よし、そろそろはじめようか？」
オセロット　「ではいくぞ」

【牢獄からの脱出01ダーパ局長発見デモ】独房

——拷問後、スネークは独房に閉じ込められる。
——独房は回りを鉄格子で囲まれている。出入口（扉）は小さな覗き窓がついた旧式の鉄扉のみ。
——独房内にはパイプベッドと便座が外れていた簡易トイレがひとつずつ。極めて不潔。
——独房の片隅に黒人男が壁を背にして倒れている。暗がりになってよくは見えない。
——その気配に気付いたスネーク、近付いて男をよく見る。

スネーク　「先客がいるらしい？」

――男、外傷はないが、目や口、鼻から血を流している。所どころに白い蛆が蝟集し屍肉を食らっている。
――全身の血を抜かれている為、ミイラのようにひからびている。
――男はアラスカには場違いなスラックスにワイシャツ、ネクタイを付けている。ワイシャツは以前は白かったと思われるが、今は血と汗にまみれている。また、所々、焦げたような痕も見られる。
（拷問機で焦げた痕）
――スネーク、死臭を嗅ぎ、顔をしかめる。
スネーク「局長？　……ひどい臭いだ」

【牢獄からの脱出02キャンベルとの無線機デモ】独房

――独房に入れられ、しばらく時間がたつとスネークの無線機が鳴る。
――無線を受信するスネーク。
キャンベル「スネーク、大丈夫か……」
スネーク「ああ……なんとか」
ナオミ「メリルさんは？」

スネーク　「……奴等に捕まってしまった」

キャンベル　「(沈痛) そうか……」

ナオミ　「キャンベルさん……」

キャンベル　「(平静になろうと努力) ああ……わかってる。スネーク、政府は彼らの要求に応じない事を決定した。今、時間稼ぎを試みている」

スネーク　「……そうやってシラを切っているつもりか。大佐? 確かにメリルの事はすまないと思っている。だがこれ以上の隠し事はやめてもらおう」

キャンベル　「なんのことだ」

スネーク　「メタルギアは新型核弾頭発射のために開発されたそうだな」

キャンベル　「!」

スネーク　「(苦々しく) やはり、初めから知っていたか」

キャンベル　「……」

スネーク　「なぜ隠していた」

キャンベル　「……すまない……」

スネーク　「一兵士には話せない、というわけか。変わったな、あんた」

スネーク　「メタルギアと新型核弾頭開発……。政府(ホワイトハウス)はどこまで絡んでいる？　どのレベルまで？」
キャンベル　「……少なくとも大統領は昨日までレックス計画の事を知らなかった」
スネーク　「『必要な者だけに知らせる、ニーズ・トゥ・ノウ』の原則か」
キャンベル　「核爆発のない未臨界実験でも大騒ぎされる繊細な時期だ」
スネーク　「厄介事ってわけだ」
キャンベル　「その上、大統領は明日、ロシアの代表と第三次戦略核兵器削減条約(START3)【注5】の調印を行う」
スネーク　「なるほど、タイムリミットはその為か？」
ナオミ　「そうよ、スネーク。だから、今回のテロが公になると大変なの」
キャンベル　「第三次戦略核兵器削減条約(START3)どころではない、第二次戦略核兵器削減条約(START2)の批准承認や戦略ミサイル防衛(TMD)の問題も蒸し返しだ。大統領の信用どころか、わが国の権威失墜につながる」
スネーク　「それで、隠密行動か。都合のいい話だ」
キャンベル　「スネーク、奴等をくい止めてくれ」

スネーク「勝手なことを……」
キャンベル「君が頼りなんだ」
スネーク「それじゃ、教えてもらおう。新型核弾頭の正体を？」
キャンベル「何度も言うが、内容は知らん」
スネーク「信じられんな」
キャンベル「……」
スネーク「それほど逼迫（ひっぱく）した状況なら、なぜ奴らの要求を飲まない？　ビッグボスの死体など、くれてやればいい」
キャンベル「それは……」
スネーク「それとも、どうしても要求を飲めない理由があるのか？　まだ俺には話していない理由が？」
――（政府が要求を飲まないのは、スネークを使った散布作戦を既に発動しているためだが、それをしゃべるわけにはいかない）
ナオミ「大統領は生命倫理にも厳しい政策を発表してきたの。軍でゲノム兵が実用されていた事を知られたくないのよ」

スネーク　「本当にそれだけか？」

キャンベル　「……」

スネーク　「くそっ、まぁいい」

キャンベル　「すまない……」

スネーク　「今、俺のとなりにＤＡＲＰＡ（ダーパ）局長の死体が転がっている」

ナオミ　「かわいそうに」

スネーク　「だが、妙なんだ。死後数日は経ってるように見える」

スネーク　「血液も抜き取られている」

キャンベル　「血が抜かれている……？」

ナオミ　「腐敗を防ぐ為かしら？」

スネーク　「わからん」

ナオミ　「局長が亡くなったのはほんの数時間前でしょ？」

スネーク　「そうだ。にもかかわらず局長の遺体はかなり傷んでる」

ナオミ　「どういうことかしら？」

スネーク　「血液になにか重要な物が？」

ナオミ　「いいえ、ナノマシンや発信機なら考えられるけど」
キャンベル　「局長は起爆コードを喋ったんだな?」
スネーク　「ああ、奴等はPAL(パル)を既に入手、発射準備を始めているらしい」
キャンベル　「まずいな。発射を防ぐ手だては?」
スネーク　「起爆コードを無効にする緊急解除装置があるらしい。アームズ・テック社が密かに開発していたものだ。特殊な鍵(PALキー)を三つ差し込んで解除するようだ」
キャンベル　「その鍵(PALキー)は?」
スネーク　「今の所、一つしか手に入れていない。あとの二つの鍵(PALキー)のありかは不明だ。といってもとらわれの身だがな」
キャンベル　「仕方がない。鍵(PALキー)は後回しだ。メタルギア自体の破壊を優先しろ。独房の君に全てを託すのも酷だが、君しかいない。そこから出て、通信棟へ向ってくれ」
キャンベル　「…それと……」
スネーク　「何だ?」
キャンベル　「……」
スネーク　「メリルか?」

キャンベル　「ああ……」
スネーク　「助けるさ」
キャンベル　「すまない」
　──拷問を1回も耐えきることができずに服従した場合、この会話の後に03　ナオミとの無線機デモ。

【牢獄からの脱出03ナオミとの無線機デモ】 独房

──二回目の拷問の後、しばらく時間がたつとスネークの無線機が鳴る。
──無線を受信するスネーク。

キャンベル　「スネーク、どうだ大丈夫か……」
スネーク　「ああ……状況は変わらない」
ナオミ　「スネーク、私にできることある?」
※拷問の後の場合
スネーク　「ああ、腕が痛い……」
ナオミ　「……そう、かわいそうに。鎮痛剤の量を増やしてみるわ」

スネーク　「眠くはない。デキセドリンは投与しなくていい。性欲を持て余す」

ナオミ　「それだけ元気があれば大丈夫ね……」

※拷問で、プレイヤーの○ボタンを連打した回数が一定数以上を超えていて、かつ、アナログコントローラを接続され、振動装置がONになっている場合

ナオミ　「スネーク、コントローラを腕にあててみて」

スネーク　「何だ？」

ナオミ　「いいから。あなたの痛みを癒してあげる」

スネーク　「？」

ナオミ　「じゃ、いくわよ」

——アナログコントローラの振動パックが震える！

スネーク　「(驚きの声)」

ナオミ　「どう、スネーク？　少しは楽になったかしら？」

スネーク　「(驚き、感心) いったいどうやったんだ？」

ナオミ　「ナノマシンの繊毛(せんもう)運動機能を使って、筋繊維を刺激してみたの。今の私にできるのはこの位だから……」

※服従した後の場合

スネーク　「俺は人類を救えるような男ではない」
ナオミ　「どうしたの?」
スネーク　「苦痛に屈したんだ……」
スネーク　「大佐、すまない。俺はメリルを売った……」
キャンベル　「(怒りと悲しみ、後悔とうしろめたさ)……スネーク……」
ナオミ　「自分を責めないで。あなたはまだがんばらなきゃいけない」

※拷問を1回も受けずに服従した場合はこの会話に続く。

スネーク　「ナオミ、何か話をしてくれ。苦痛をまぎらわしたい」
ナオミ　「どんな?」
スネーク　「何でもいい」
ナオミ　「私、自分から話すのは苦手……」
スネーク　「そう、君のことが聞きたい。君のことを話してくれ」
ナオミ　「私のこと?　……難しいわね」
スネーク　「家族は?」

ナオミ　「……私には愉快な話題じゃないわ」

スネーク　「俺には家族はいない…。いや、一人父親を名乗った男がいた……」

ナオミ　「その人は？」

スネーク　「殺した。俺がこの手で」

キャンベル　「……ビッグボス、か」

ナオミ　「えっ？　ビッグボスが？」

キャンベル　「君が知らないのも無理はない。6年前……ザンジバーランド…。真相を知る者は、今では私とスネークだけだからな」

ナオミ　「そんな…。ビッグボスは…。本当にあなたの？」

スネーク　「……奴はそう言った。それだけが事実だ」

ナオミ　「あなたは、それを知っていて、彼を？」

スネーク　「……ああ」

ナオミ　「どうして！」

スネーク　「……それを望んだからだ。俺も……そして奴も」

ナオミ　「そんな……親殺しなんて……」

スネーク　「ああ。……（今までに無く弱々しい）俺の人生のトラウマだ……。マンティスの言うとおりな」

ナオミ　「FOXHOUND（フォックスハウンド）を離れたのは、そのせいなの？」

スネーク　「……アラスカの厳しさが心地よかったのは確かだ……」

ナオミ　「スネーク……」

――ナオミ、スネークが心に深い傷を負っている事を初めて知り、意外さとともに同情を感じる。

ナオミ　「……私も……本当の家族はいない。大学まで進学させてくれた兄が一人。血はつながってない、兄と言っても歳は随分、離れていたけど」

スネーク　「その人は？」

ナオミ　「（怒りと悲しみ）……もういない……」

スネーク　「そうか……」

ナオミ　「スネーク、恋人とか……いるの？」

スネーク　「一度、戦場での緊張状態を経験すると、日常生活では誰も信用できなくなる」

ナオミ　「友達は？」

スネーク　「……キャンベル大佐」

キャンベル　「（自嘲の笑い）まだ私を友人と呼んでくれるのか……？」
ナオミ　「それだけ？」
スネーク　「いや、もうひとり…。フランク・イエーガー」
ナオミ　「えっ!?」
キャンベル　「ビッグボスから最も信頼され、部隊内で唯一FOX（フォックス）の称号を与えられた男…。グレイフォックスだ」
ナオミ　「……」
スネーク　「（懐かしげに）俺は奴から、いろんな事を学んだ」
ナオミ　「（ためらい）でも……殺し合ったんじゃ？」
スネーク　「確かにザンジバーランドで俺は奴と闘った。だが敵意があったわけじゃない。それぞれ敵と味方に振り分けられていただけだ」
ナオミ　「そんな友情なんて？」
スネーク　「ありえないか。戦いは友情を終わらせるものではない」
ナオミ　「そんなのおかしい」
スネーク　「奴と最初に逢ったのは戦場だ」

スネーク　「奴はアウターヘブンで捕虜となっていた。しかし、俺には奴が捕虜には見えなかった」
スネーク　「あくまでも冷静に的確に、新米だった俺をサポートしてくれた」
ナオミ　「それから、親密に？」
スネーク　「いや、プライベートでのつき合いはない。俺達は皆、そうだ」
スネーク　「次に戦場で逢った時は敵対する関係になっていた」
スネーク　「俺達は地雷原の中、素手で殴りあった……」
スネーク　「奇妙な程、健全な時間だった。正義も悪もない。スポーツのような一体感があった」
ナオミ　「おかしいわ。それもただの暴力よ。殺し合いよ」
スネーク　「ああ、そうだと思う」
ナオミ　「そんな関係なら、あの忍者（サイボーグ）はどう説明がつくの？」
スネーク　「わからない」
ナオミ　「あなたの遺伝子には殺戮を誘発するものが書き込まれているのよ！」
スネーク　「妙にこだわるな、その話……。君はどうして、遺伝子の研究を？」

ナオミ　「……私、両親の名前も顔も知らないから……。自分は一体誰なのか？　それが知りたかった」

スネーク　「それでＤＮＡを？」

ナオミ　「そう、私は遺伝子を突き詰める事で、私のアイデンティティを取り戻そうとしたのね」

ナオミ　「ゲノム情報を解析すれば、人の遺伝子に秘められた私の空白の記憶を取り戻せると思った」

スネーク　「そこに記憶はあったのか？」

ナオミ　「わからない。でも人の運命までもがたった４つの塩基配列で刻まれているなんて」

スネーク　「(気楽に) 俺のＤＮＡの未来は？　俺の塩基配列は知ってるんだろ？」

ナオミ　「(苦しげに) あなたに未来…。未来は…。ごめんなさい。わからないわ」

スネーク　「(ナオミの苦悩には気付いていない) だろうな。君は科学者だ。予言者じゃない」

ナオミ　「……」

【牢獄からの脱出04不幸な兵士ジョニー】　独房　俯瞰

——ゲーム画面。スネークが閉じ込められた独房には看守（見張り）が1名だけいる。この見張り（軽装備兵）はジョニー佐々木という名前で、以前、メリルに裸にされて服を奪われた兵士である。あの事件が原因で風邪を拗らせている。

※ジョニーの行動1　くしゃみ

——兵士はランダムでクシャミをして、悪態をつく事がある。

ジョニー「ハクション!!!　……くそっ、本格的にひいちまった」

ジョニー「あの女(アマ)、俺の服を!!!」

※ジョニーの行動2　下痢

——兵士は一定時間、見張りを続けていると、風邪からくる下痢の為、トイレに用を足しにいく行動をとる。

ジョニー「(グーっ!)おおおおぉおお!!!　……くそっ、腹が痛い……たまらん!」

ジョニー「(グーっ!)……またかっ!!　ひいぃ……」

——この後、兵士は拷問部屋脇のトイレに入り、用を足す。すっきりした後に再び、配置に戻る。

ジョニー　「ああ、すっきりした…」

※ジョニーの行動3　睡魔

——兵士は一定時間、見張りを続けていると、立ったまま眠ってしまう。これは風邪薬の副作用。眠りからさめると愚痴をこぼす。

ジョニー　「うっ!!　しまった寝てしまった。……あの風邪薬、効きは悪い癖に眠たくなる」

ジョニー　「眠くてたまらん。ちょっと歩くか……」

【牢獄からの脱出05オタコン登場デモ】　独房　俯瞰

——画面は俯瞰。独房からオタコンに無線で連絡を入れると、見張り兵士がトイレに行っている隙を見計らってオタコンがやってくる。

——独房のベッドに力無く座るスネーク。

——と、何処からともなく、オタコンの声がする。

オタコン　「おい！　こっちだ！」

スネーク　「何処だ？」

――声のする方を探すが、スネークの目には何も誰も映らない。オタコンはステルス迷彩をオンにしているので、視認できない。

オタコン　「僕だよ」

――ステルス迷彩のスイッチをオフにすると、鉄格子の向こうにオタコンの姿が現れる。

スネーク　「オタコン！」

オタコン　「君でも捕まったりするんだ？」

――オタコンのいる独房の角に走り寄るスネーク。

【牢獄からの脱出06オタコン登場デモ】

――スネーク、鉄格子の隙間から両手を出して、オタコンを引き寄せる。

スネーク　「早くここから出してくれ！　メリルも捕まっている」

オタコン　「いたいよ！　離してくれ！」

――オタコン、スネークの力に引き寄せられ、鉄格子に顔を押しつけられる。

スネーク「急いでいるんだ」
オタコン「それが人にものを頼む態度かよ？　離してくれ！」
——オタコンを離すスネーク。オタコン、少し距離を置く。
オタコン「まいったな。これじゃ、野獣の檻だよ。ひでぇ臭いだし」
スネーク「その男を見てみろ？」
——と、独房脇のパンパンに膨れ上がった亡骸を指す。オタコン、懐かしい死骸を一瞥する。
オタコン「あぁ！　DARPA（ダーパ）局長！」
スネーク「早くしないと俺もこいつの隣に並ぶ事になる」
オタコン「ひどい連中だ」
——オタコン、悪臭に耐えながらスネークに近付く。
オタコン「ここの鍵はセキュリティ・カードでは開かないんだ。兵士が持っている鍵でしか開かない」
スネーク「じゃあ、何しに来た？」

オタコン　「これを……お腹が空いただろうと思って」
オタコン　「食料なら、また持ってきてあげるよ」
　　　　　――オタコン、ポケットからレーション、ケチャップを渡す。
　　　　　――それを受け取るスネーク。
オタコン　「それと、カード6……そこの拷問部屋から出られる」
　　　　　――オタコン、カード6を渡す。
　　　　　――スネーク、受け取る。
オタコン　「あと、これも……」
　　　　　――オタコンが取り出したのは、女性物のハンカチ。しかも、かなり汚れている。
スネーク　「なんだこれ？」
オタコン　「ハンカチだよ。スナイパー・ウルフからもらった」
　　　　　――ハンカチを受け取るスネーク。ハンカチからウルフの臭いが微かにする。
スネーク　「どうして？」

オタコン「なぜだか、彼女だけは僕に優しいんだ」
スネーク「ストックホルム症候群か？」

――オタコン、ウルフを思い出すように語る。

オタコン「僕はここの狼犬（ウルフドッグ）の面倒を見てたんだ」
オタコン「テロが起こった時、奴等は犬を見殺しにしようとした」
オタコン「犬達にエサをやりたいと言ったら、彼女は許可してくれた」
オタコン「彼女も犬が好きなんだ。彼女は良い人さ。だから、彼女を傷つけないで」
スネーク「いいか、目を覚ませ！　その女にメリルは撃たれたんだ！」

――スネークの問いかけに、首を横に振って拒絶の意志を示すオタコン。

オタコン「僕ができるのはここまでだ」
スネーク「奴等は核を使うつもりだ。食い止めなければならない」
オタコン「あそこに行くには通信棟を越えないといけない」
スネーク「その前にここから出してくれ！」

――物足らないスネーク。手を伸ばして、オタコンを捕まえようとするが、身を引いて後ずさりするオタコン。

オタコン「わかってくれよ。これでも、がんばってるんだ」

――見張り兵がトイレの水を流す音が聞こえる。

スネーク「見張りがここの鍵を持ってる。あいつを倒してくれ！」

――オタコン、それを聞いて震え出す。

オタコン「冗談じゃない。僕は兵士じゃない。そんな事できない！」

スネーク「やるんだっ！」

オタコン「殺されるに決まってる」

――「ばたん！」と兵士がトイレの扉を閉める音が聞こえる。

【牢獄からの脱出07オタコンとの別れデモ】独房

――画面は俯瞰。

スネーク　「ん？」

オタコン　「それじゃ、見張りが戻ってくるから。じゃあ」

——オタコン、ステルス迷彩をオンにして消える。独房部屋の扉が開き、部屋から透明な影が出ていく。

スネーク　「待てっ!!」

——オタコン、戻ってこない。

——独房に独りとり残されるスネーク。

【牢獄からの脱出08脱出1ベッド下に隠れる】　独房　俯瞰

——画面は俯瞰。見張りが独房に戻って、独房を覗く（拷問の時間に呼びに来る）際、スネークがベッドの下に隠れている場合。

ジョニー　「んっ!!　奴がいない！」

——と言って、独房の鍵を開けて独房の中央まで入ってくる。兵士は辺りをキョロキョロしてからスネークがいないのを確認すると、ベッドの下を覗く。この間にベッドの下から這い出て、敵兵を倒して脱出する。

【牢獄からの脱出09脱出2ケチャップを使う】　独房　俯瞰

——画面は俯瞰。牢獄内でケチャップを装備したまま、ホフク状態で動かずにいるとケチャップが床に流れ出てまるでスネークが流血したような状況になる。

※この状態で静止したまま、見張りが来ると……

ジョニー　「どうした!?」

——と言って、扉を開けてくれる。ジョニーを倒し、扉を抜けると脱走できる。

※ジョニーが見ている前でケチャップを使うと……

ジョニー　「ケチャップで遊んでどうする?」

——と言って、笑われる。1度、使用すると使えなくなる。

ジョニー　「遊んでどうする?」

【牢獄からの脱出10脱出3忍者による救出】　独房　俯瞰

——画面は俯瞰。三回目の拷問の後、見張りがいなくなった途端、唐突に扉に衝撃が走り、ドアノブが壊れる音がして、扉がゆっくりと開く。

スネーク　「オタコンか？　そうか助けに来てくれたんだな？」
　　　　　――と、喜んだ瞬間、ステルス迷彩がチラついて、一瞬、忍者の姿が見える。
スネーク　「忍者（サイボーグ）？」
　　　　　――再び、忍者はスウッと宙に消える。スネークは独房を脱出する。

【オセロットの罠01爆発後無線機デモ】拷問部屋

――独房からの脱出を果たし、拷問部屋で取り上げられた装備を取り戻したスネーク。
――しかしその装備の中には、オセロットが仕込んだ時限爆弾が紛れ込んでいた。正体不明の存在ディープスロートからの無線連絡などにより、間一髪で爆弾の存在に気付いたスネークはことなきを得る。
――爆弾処理後、キャンベルからの無線を受信するスネーク。

キャンベル　「なんとか、間にあったようだな、スネーク」
スネーク　「オセロットめ、ふざけた真似を……」
※ディープスロートからの無線を聴いている時
スネーク　「あのディープ・スロートという男も妙だ。内部の者に違いない」

キャンベル　「内通者か？　それとも裏切り者か？」
キャンベル　「どうやら、別の目的で動いている連中がいるようだ」

【オセロットの罠02メリル思い出しデモ】　通信棟への地下通路

――独房から脱出したスネークは、メタルギアのある地下格納庫を目指して再び通信棟へと向かい、メリルが狙撃された地点に到達する。
――メリルが倒れていた雪上の血だまりを目にしたスネークは、その傍らに立ちつくし頭をたれる。

スネーク　「……」

――メリルとの最後を思い出すスネーク。
――メリルが撃たれているシーンの回想。画面はモノクロ。
――血に染まりながら、声を上げるメリル。

メリル　「私、こんなだけど……あなたを助けたい！　役に立ちたい！」
スネーク　「黙ってろ、体力を消耗するぞ」

――首をおろして、涙ぐむメリル。

メリル「私が甘かった。軍人なんかに憧れて……」

メリル「戦場には何もない。戦争では何も生まれない」

——大粒の涙が頬を伝う。

メリル「私の代わりに生き抜いて、スネーク。そして……人を好きになって」

メリル「私の言葉を忘れないで」

——画面は通信棟への地下通路に戻る。

——しばしうなだれるスネーク。キャンベルから無線連絡が入る。

——スネーク、無線機を受信する。

【オセロットの罠03ナオミのおいたち無線機デモ】

キャンベル「スネーク、メリルのことだが……」

スネーク「大佐、俺は……」

キャンベル「……聞いてくれ」

スネーク「俺はメリルを守ることができなかった」

※メリル死んでる場合

キャンベル　「（無理して悲しみを自ら振り払うように）スネーク、もういい。もういいんだ。言わんでくれ」

スネーク　「大佐……」

キャンベル　「（自分に言い聞かせる）あの子も軍人だ。わかっていたさ。戦場で兵士が死ぬのは、悼むべきだが理不尽なことではないと……」

※メリル生きてる場合

キャンベル　「スネーク、あの子も軍人だ。捕虜になる事態もありうるとわかっているさ」

キャンベル　「自分の意志で任務についたんだ。覚悟は、できていたはずだ」

スネーク　「いや、そうじゃない……」

キャンベル　「？」

スネーク　「メリルは自分が軍人にならなければいけない、そう思い込んでいただけだ。亡くなった父親に近づくために」

キャンベル　「あの子がそんな事を？（自分が父親なので驚き）」

スネーク　「彼女はまだ戦場に立つべきではなかった。戦場で傷つく覚悟もできていなかったはずだ。俺がもう少し……」

マスター　「らしくないな、スネーク」
キャンベル　「マスターがどうして？」
マスター　「盗み聞きしていたようで悪いんだが、我慢できなくなってな」
スネーク　「マスター……」
マスター　「スネーク、反省はいい。後悔するのも勝手だ。だが過去の過ちをただ否定的に捉えて自分を責めるのはやめた方がいい。それは何も生み出しはしない」
メイ・リン　「そうよ。落ち込むなんて『伝説の男』には似合わないわ」
※メリル死んでる場合
メイ・リン　「それにメリルさん、本当は無事かも知れないじゃない？」
※メリル生きてる場合
メイ・リン　「メリルさん、きっと無事でいるわよ」
※合流
スネーク　「メイ・リン……」
キャンベル　「スネーク、リキッド達を止めてくれ。……メリルもそれを望むはずだ」
スネーク　「そうだな。……メリルならそう言うだろうな」

ナオミ　「……スネーク？」
スネーク　「なんだ」
ナオミ　「メリルさんって、あなたにとって、やっぱり特別な人なのね（嫉妬）」
スネーク　「特別といえば特別だ。あれ程の跳ねっ返り、そうはいない」
ナオミ　「……そういうことじゃなくて（嫉妬イライラ）」
スネーク　「大佐の姪で……今は戦友だ」
ナオミ　「それだけ？　嘘（嫉妬）」
スネーク　「……警察の尋問みたいだな」
ナオミ　「そんなこと……」

――ナオミとスネークのやりとりの微笑ましさに、メリルについての悲しみを一時忘れ、救われた気分のキャンベル。少し軽めに。

キャンベル　「家系かもしれんな……」
スネーク　「家系って？　突然なんだ、大佐？」
キャンベル　「いやな、ナオミのお祖父さんの話を思い出したんだよ。聞けば、ナオミのお祖父さんはエドガー・フーバー時代にＦＢＩ【注6】長官補佐まで勤め上げたらしいじ

やないか」

スネーク　「そうなのか？」

ナオミ　「（突然振られて少しびっくり。反射的にいままでついてきた嘘を繰りかえす）え、ええ。日本人で、マフィアの㊙特別捜査官もやってたらしいわ」

マスター　「いつの時代だ？」

ナオミ　「……1950年代だったかしら？」

マスター　「どこで？」

ナオミ　「……ニューヨークだったと思う？」

スネーク　「ナオミ、家族はいないんじゃなかったのか？」

ナオミ　「……（少し動揺）大人になってから調べたのよ。お祖父さんのこと、知った時にはもう亡くなっていたわ。実際には会ったこともないの……」

キャンベル　「そうか……」

ナオミ　「……スネーク、負けないでね」

キャンベル　「頼んだぞ」

【通信A棟01アンテナ爆発デモ】

通信A棟

――通信棟は高さ100メートル強、一辺が20メートル弱程のA棟、B棟、2本の巨大な柱によって支えられており、それらの天井には半径数十メートルもある巨大なパラボラアンテナが載せられている。

――A棟とB棟には標高50メートル付近に1つ、最上階のアンテナの設置されている天井に1つ、両棟を繋ぐ渡り廊下がつくられている。

――A棟屋上に辿り着いたスネーク。パラボラアンテナ近くを通過しようとすると、突然、「シュッ!」というミサイル発射音と、共に大きな爆発が起こる。

――反射的に地面に伏せるスネーク。わずかに顔を上げると巨大なアンテナが爆発炎上しているのが見える。

――間を置かずに続いて、再び「シュッ!」というミサイル発射音と共に、2回目の爆発が起こる。固定されていた円盤状のアンテナが解き放たれ、ゆっくりと傾く。アンテナは加速しながら渡り廊下の鉄骨を組みしいていく。

――再び小さな爆発が起こり、円盤は回転を止め、爆炎に包まれながら、ゆっくりと横転。大きな振動と共にスネークに襲いかかるアンテナの破片。両腕で顔や腹を庇うスネーク。再び爆発とスパークが起こる。

――横転したアンテナは辛うじて渡り廊下の鉄柵に引っかかって動きを止めている。手すり越しに東へ移動、被害状況を黙視するスネーク。横転したアンテナはB棟への通路を完全に塞いでしまっ

ている。

スネーク　「クソッ!!」

——状況を理解したスネークは立ち上がって舌打ちする。

——と、燃え盛るアンテナの向こうから、大きな羽音と共にハインドDの鼻面が上昇してくる。ヘリの巻き起こす強風でスネーク、立っていられなくなる。手すりに掴まり、前傾姿勢をとるスネーク。両手で顔を庇いながら、目を凝らすスネーク。

——炎越しのコックピットに自分と同じ顔を発見する。ハインドを操縦しているのは紛れもなくリキッド・スネーク、その人である。

リキッド　「スネーク!!」

——コックピットから拡声器で叫ぶリキッド。

リキッド　「残念だが、ここから先は通すわけにはいかない!」

スネーク　「リキッド!?」

リキッド　「これ以上進ませるわけにはいかん。死ねー!!」

——スネーク、手すりの向こうに身を乗り出し、遥か下の渡り廊下を見やる。

――50メートル眼下にB棟を繋ぐ、もうひとつの架け橋、残された唯一の渡り廊下が見える。この距離だと渡り廊下はわずか数ミリの糸のよう。

スネーク　「下までかなりあるが……ロープがあればいける」

※既にラペリング用のロープがある場合

スネーク　「さっきのロープなら使えるはず」

※ラペリング用のロープがない場合

スネーク　「ロープを探すんだ。どこかにあるはずだ」

――スネーク、手すりを2、3度揺らして強度を確認する。スネークの態度に不信を抱くリキッド。

リキッド　「どうするつもりだ。生身でハインドに楯突くつもりか？」

――辛抱を切らして、スネークの目前にホバリングしながら近付くリキッド。スネーク、リキッドと目が合う。

――ハインドの起こす強風で、バランスを保っていたアンテナが傾ぐ。アンテナを見るスネーク。決断を迫られている。

リキッド　「さあ、いくぞ!!」

――危機一髪のスネーク。

スネーク　「ここにいても殺られる」

【通信A棟02ラペリング準備デモ】　通信A棟屋上

――スネーク、ロープを取り出して、手すりに結びつける。結び目を確認、強度を試した後、手すりを跨ぎ越してラペリングの準備をする。片手でバランスを取り、もう片方の手で体重を支える。ビルの壁面をブーツの裏で捕らえ、体重を支える片方の手の握りを調整する事で、降下速度を操る。

【通信A棟02aラペリング無線デモ】　通信A棟屋上

――キャンベルより強制コール。ラペリングの操作説明入る。

キャンベル　「スネーク、ラペリング中の操作はこうだ」

キャンベル　「×ボタンを押すと壁をける。壁から離れている間に方向キーの下を押せば下に降りる。方向キーの左右を押しながら壁をければ、その方向に大きく跳ぶことができるぞ」

キャンベル　「○ボタンを押している間は壁をつたって歩く。○ボタンを押しながら方向キーを押せば、その方向に少しずつ移動する事ができる」

キャンベル　「ハインドの掃射を微妙にかわす事もできるはずだ。攻撃をよけながら下まで降りろ。君なら出来る！」

【通信A棟03ラペリング成功デモ】　通信A棟　ラペリング

——スネーク、ハインドDの機銃掃射をかわしながら、A棟壁面を降下し、めざす渡り廊下まで数メートルというところまで辿り着く。

——しかし、ここでロープの長さが足らないことに気付く。これ以上ロープで降下することはできない。

——スネーク、意を決して飛び降りる。

スネーク　「(数メートルを飛び降りる時の気合)」

——スネーク、尻餅をついた状態だが、なんとか着地する。

スネーク　「(着地の衝撃によるうめき)」

【ハインドD戦01オタコン遭遇デモ】

通信B棟　螺旋階段

――渡り廊下に降り立ったスネークは、通信B棟の螺旋階段を登る。

――渡り廊下のある「B4」フロアにはエレベータホールがあり、エレベータをCALLできる操作パネルがある。本来なら、エレベータを呼ぶと、エレベータは呼ばれた階に昇降してくるが、電源がオフになっている為か、制御パネルを押して（アクションボタン）も反応がない。

――照明が極めて少なく、目を凝らしても10メートル以上先は見えない。

――敵兵はおらず、スネークの他に誰もいない螺旋階段にハインドの獲物を待ち受ける羽音だけが聴こえる。

――スネークがB6のフロアを上がり、階段を左折しようとした際、何かを壁にぶつけるような音がする。

――さっと物音のした方角に銃口を向けるスネーク。

オタコン「撃たないで!!」

――螺旋階段の踊り場に人影がヌっと現れる。

――躊躇なく撃とうとするスネーク。

――人影はステルス迷彩。

――人型をしたシルエットは両手を上げて懇願する。

オタコン　「僕だよ！　撃たないで!!」

——射撃姿勢を崩さないスネーク。

——ステルス迷彩のスイッチが切られると、ノイズ混じりのオタコンの冴えない姿が唐突に実体化する。一歩、踏み出してもう一度、云う。

オタコン　「僕だよ！　スネーク」

——オタコンを確認して、銃を下ろすスネーク。

スネーク　「オタコンか……どこから来た？」

オタコン　「君みたいにスリリングな事はしちゃいない。高いとこは苦手なんだ」

スネーク　「見てたのか？」

オタコン　「ああ、見てたよ。僕は奴等のトラックに便乗したんだ。ステルス迷彩のおかげさ」

——オタコン、自分の白衣（ステルス迷彩）の裾を自慢げにたくし上げる。

スネーク　「どうやって上がってきた？」

オタコン　「勿論、エレベータだよ」

——少し考え込むスネーク。腑に落ちない態度のオタコン。

スネーク「螺旋階段は1階の近くで爆破されていた」
オタコン「だから、エレベータで……」
スネーク「エレベータが動いていたんだな？」
オタコン「ああ、そうだよ」

——ますます訝しげなスネーク。
——スネーク、何かを考えるそぶりをしながら、エレベータ・ホールをのぞき込む。その困憊した横顔を見て、オタコンは全身血塗れ、煤まみれのスネークを改めて確認する。
——スネークを狙うハインドの羽音が聴こえる。
——オタコンは、上空を旋回するヘリを指すように上を指す。

オタコン「君は大した男だ。さっきはまるで映画みたいだったよ」
スネーク「映画みたいにはいかない。英雄（ヒーロー）のように、女を助ける事はできない……」
オタコン「メリルの事かい？」

——オタコン、その人の名前を言いかけて止める。

オタコン　「……いや、なんでもない」

——沈黙する二人。オタコン、奈落の下を覗き込んだまま口を開ける。

オタコン　「スネーク、君にどうしても聞きたいことがあるんだ」
オタコン　「ここまで来たのも、その為なんだけど……」

——少しの間の後、オタコン、思いきって聞く。

オタコン　「君は人を好きになった事あるかい？」
スネーク　「そんな事を聞くために？」
オタコン　「いや…、傭兵でも人を好きになるのかなって」
スネーク　「何がいいたい？」
オタコン　「君に確認したいんだ。戦場でも愛は芽生えるかどうか？」

——唐突な質問に戸惑うスネーク。

スネーク　「たとえどんな状況でも、どんな時代でも……人は人を愛する事ができるはずだ。
ただし、愛を享受したければ、その人を守り抜く事」

——心の中で頷く、オタコン。スネークの言葉を聞いて、元気を取り戻す。

オタコン　「そうだよね」

——スネーク、エレベータ・ホールから顔を上げ、

スネーク　「頼みがある」

オタコン　「えっ？」

——ややたじろぐオタコン。

スネーク　「難しいことじゃない」

オタコン　「ああ……でも、前にも言ったけど、僕は人を傷つけたりはできない」

スネーク　「そんな事ははなから期待していない」

——気分を害してむっとするオタコン。しかし、壁にもたれたまま。

オタコン　「それじゃ？」

——首を左右に振りながら、後ずさりするオタコン。螺旋階段の壁面に到達して、ぎっくりする。

スネーク　「この下にエレベータが止まっている。あのエレベータを動かして欲しい」
スネーク　「見えるだろう？」
　　　　　——エレベータのカット挿入。
オタコン　「変だな？」
スネーク　「動いていたはずのエレベータが動かない」
オタコン　「……パネルの故障かな？」
スネーク　「頼めるか」
　　　　　——高所恐怖症も忘れて、スネークと並んで、奈落を見おろすオタコン。
オタコン　「さっきまで動いていたんだ。メカなら、まかしてくれ」
　　　　　——視線を上げて、二人向き合う。と、ハインドの羽音が一段と大きくなる。
　　　　　——スネーク、上空を回るハインドを指さして。
スネーク　「俺はこれからうるさい蝿を落としてくる」
オタコン　「わかった。こっちは帰り道を確保するよ。じゃあ…」

――スネークを残してステップから階段に降り立つオタコン。煤と油にまみれたオタコンの汚れた顔を見て、スネーク。

スネーク「ひどい顔だぞ？　まいっているようだが？」

――オタコン、立ち止まって、両手で顔を拭う。無精ひげが掌に当たる。

オタコン「大丈夫さ。こうすれば関係なくなる」

――と、オタコン、ステルス迷彩のスイッチを入れる。

オタコン「僕はここには存在しないんだ。そう思えば恐怖もなくなる」
スネーク「変な理屈だな。頼んだぞ」

――階段を降りていくオタコン。階段を降りる足音だけがこだまする。

【ハインドD戦02ハインド登場デモ】

通信B棟　屋上

――スネーク、通信B棟を登りきり、屋上に降り立つ。
――爆音と共に、ハインドDのノーズが屋上のラインから現れる。コックピットにリキッドの影。

リキッド　「やっと上がってきたか？　準備運動は万全だな？　兄弟？」

スネーク　「なぜ俺を兄弟と呼ぶ？　お前は何者だ!?」

リキッド　「俺は貴様だ。貴様の影だ！」

スネーク　「なに？」

リキッド　「詳しいことは貴様が殺した親父に聞け。あの世でな!!」

【ハインドＤ戦０３ハインドＤ墜落デモ】　通信Ｂ棟　屋上

――遂にハインドの撃墜に成功するスネーク。

――ハインド、機体の側部（エンジン部）から煙を出しながら、高度を下げていく。

【ハインドＤ　コクピット】

――リキッド、懸命に操縦桿を操り、制御を試みるが、うまくいかない。

リキッド　「落ちるなっ！」

【通信Ｂ棟　屋上】

――ハインド、不規則な飛行軌跡を描く。それを目で追うスネーク。

【コックピットのリキッド】

——ますます高度を失う。通信棟に衝突しそうになりながら、懸命に操縦桿を引く。計器類が狂ったように踊っている。警告ランプが点滅し、警告ブザーが悲鳴を上げている。

リキッド　「くそっ!!」

【通信B棟　屋上】

——ハインド、さらに高度下げ、スネークの視界、屋上の柵のラインから消える。

——スネーク、ハインドを追って手すりに走り寄る。長い黒煙を漆黒の世界にまき散らしながら、ハインドは視界から消える。ハインドの排出する黒煙で視界がほとんど効かなくなっている。

【ハインドD　コクピット視点】

——アラスカの永久凍土の固い大地が猛スピードで接近する。

——急降下していく中、屋上を見上げるリキッド。屋上に遠ざかるスネークの姿が見える。

リキッド　「スネークっ!!」

——リキッドの絶叫の後、ハインドが地上に激突した際の爆発が起こる。

スネーク　「地獄に堕ちたか……リキッド」

——ガソリンに引火したのか、続いて爆発が起こる。

スネーク　「火葬も済んだようだ」

——と、きびすを返したスネークに無線機のＣＡＬＬ音がなる。
——無線機をオンにするスネーク。

【ハインドＤ戦０４ハインドＤ墜落後無線機デモ】

オタコン　「スネーク、エレベータが動き出したよ」
スネーク　「直ったのか？」
オタコン　「いや、それが変なんだ。突然、動き出したんだ。今、ホールに向かってる」
スネーク　「そうか、わかった」
オタコン　「さっきの爆発、なんだったの？」
スネーク　「ヘリを一機落としただけだ」
オタコン　「ヘリ？　凄いじゃないか、スネーク！」
スネーク　「オタコン、もう一度、確認するぞ。メタルギアの整備されている基地はこの先な

んだな?」

オタコン「ああ、この先の雪原の奥に地下整備基地への入り口があるんだ」

スネーク「わかった。お前はどこかに隠れてろ。今から下に降りる」

オタコン「言われなくたって、わかってる」

スネーク「妙な事をして俺の邪魔はするなよ」

オタコン「何かあったら、無線連絡をくれよ」

【ハインドD戦05エレベータ内無線機デモ】　通信B棟エレベータ

——通信B棟エレベータに乗り込んだスネーク。重量オーバーの警告音が鳴るが、エレベータは動き出す。しばらくしてオタコンから無線が入る。

——無線を受信するスネーク。

オタコン「スネーク、さっき言い忘れてたんだけど」

スネーク「どうした?」

オタコン「僕の研究室には、ステルス迷彩の試作品が5セットあったんだ」

スネーク「それで?」

オタコン「僕が着ている物を除いてあと、4着ある」

スネーク　「そんな引き算なら小学生でもわかる」

オタコン　「スネークにも渡そうと思って取りに行ったんだ。そしたら、」

スネーク　「そしたら?」

オタコン　「残りの4セットがなくなってるんだ」

スネーク　「…?」

オタコン　「それで、さっき調べたエレベータだけど……」

オタコン　「どうもおかしいんだ。どうやら、誰かが停めてたみたいなんだ」

スネーク　「おまえが乗った時も、重量オーバーの警告が鳴ったか?」

オタコン　「それなんだよ。気になるのは」

オタコン　「警告が鳴ったんだ。エレベータには僕一人だったのに」

スネーク　「おまえ、体重は?」

オタコン　「62キロ。そのエレベータは積載量300キロ程度のタイプだから……」

スネーク　「つまり、ここに最低5人は乗ってる!?」

オタコン　「ま、まずいよ!　スネークっ!」

オタコン　「ステルス迷彩を着た奴が乗ってるんだ!!!」

【ハインドD戦06ステルス迷彩兵襲撃デモ】 通信B棟エレベータ

——画面は俯瞰。

敵兵　「気づくのが遅すぎる！　死ねっ、スネーク!!」

【ウルフ戦2ND01ウルフとオタコン無線機デモ】 大雪原

——通信B棟から北へ出ると、見渡す限りの大雪原が広がっている。険しい嶺や山中にぽっかりと空いた広場のようなもの。あたりは暗く、吹雪とアイスフォッグのため、視界は極めて悪い。

——メタルギア地下基地への入り口を求めて雪原をさまようスネークは、狙撃による攻撃を受ける。後退して態勢を立て直すスネークに、オタコンからの無線連絡が入る。無線を受信するスネーク。

オタコン　「大丈夫かい!?　スネーク?」

スネーク　「教えてくれ！　ステルス迷彩に予備はあるのか?」

オタコン　「試作品は5着だけだよ」

スネーク　「じゃあ、これはステルス迷彩ではないな……」

オタコン　「何の事?」

スネーク　「今、狙撃を受けてる。こんなブリザードの中でだ……」

オタコン　「……彼女だ！」

スネーク　「ウルフ？　……スナイパー・ウルフか！」

オタコン　「きっとそうだよ。彼女だよ」

スネーク　「オタコン、おまえ、喜んでるのか？」

オタコン　「……違うよ」

スネーク　「どうした？」

――なかなか言い出せないオタコン。しばしの間の後、思いきって言う。

オタコン　「スネーク…。彼女を殺さないでくれ」

スネーク　「(激しく) 目を醒ませっ!!」

オタコン　「(必死に) 彼女、良い人なんだ。きっと話せばわかってくれる……」

スネーク　「あの女はそんな甘い世界に生きてはいない」

――と、無線機にウルフが乱入してくる。

ウルフ　「ここからはお前がよく見えるわ。(再会の嬉しさに笑いがこぼれる) ふふ。言ったでしょ？　お前だけは私が狩る。今度は逃がさない」

オタコン　「ウルフ！　ダメだよっ!!」
ウルフ　「子供は出しゃばるんじゃない!!」
スネーク　「この嵐で狙撃するとは大した腕だ」
ウルフ　「わかる？　女の方が戦士には向いてるんだ」
オタコン　「ウルフ、止めてくれ!!」
ウルフ　「スネーク、私は近くにいるわ。お前の近くにね」
スネーク　「自ら存在をアピールするとは、スナイパー失格だ」
ウルフ　「そう思う？　私の宣言は死の宣言…。近くにいるって事は死が近いってこと」
オタコン　「お願い！　スネークっ!!　ウルフ！」
ウルフ　「うるさいっ!!　誰にも邪魔はさせない」
スネーク　「メリルの借りは返す……」
ウルフ　「男は詰めがあまい。最後の最後で音をあげる……」

【ウルフ戦2ND02ウルフ虫の息デモ】 大雪原

――スネークはウルフとの二度目の闘いにも勝利する。
――スネーク、力尽き倒れたウルフに近づいていく。

――胸から血を流し、仰向けに倒れているウルフ。スナイパーライフル、PSG1はウルフの手から離れ、脇に転がっている。空を見つめ、掌で雪を受けるウルフ、表情はなぜか静かである。赤く染まったシャツに押し上げられた豊満な胸が不規則に上下している。
横たわるウルフにそっと近付くスネーク。
――ウルフ、スネークの存在を気にせず、空をみつめたまま。

ウルフ「私は……ずっと待っていた」
――スネーク、ウルフの言葉を聞き取る為にウルフの脇にかがみ込む。

ウルフ「私はスナイパーだ。待つのが任務……」
――静かに聞き入るスネーク。生命の灯火が急速にしぼんでいくのがその声からもわかる。

ウルフ「微動だにせず、ただひたすら……」
――苦しそうに、せき込むウルフ。ブスブスと肺に血が流れ込む音がする。
――胸から流れ落ちた血溜まりがさらに拡がる。

ウルフ「肺をやられた。もう助からない。お前ならわかるな？　楽にしてくれないか…？」
――ウルフの願いに即座にこたえられないスネーク。そのスネークをみて、ウルフ、再び空を見て

語り始める。

ウルフ　「私はクルド【注7】だ。ずっと落ちつける所を探してきた」

スネーク　「狼（クルド）？　……それでウルフか」

――クルド難民の歴史と苦悩。

――ニュースフィルム（クルド難民、湾岸戦争、アルビル侵攻等）挿入。

ウルフ　「私は戦場で生まれた。育ったのも戦場だ。銃声や怒号――、悲鳴が私の子守歌だった。来る日も来る日も狩りたてられ、憑（つ）かれたように戦う。それが私の日課だった……。朝、目覚めると仲間や家族の死体が累々（るいるい）と横たわっていた。私たちは朝日を見ながら…、今日の命を祈った」

ウルフ　「政治や歴史は、単に私達をなぶるだけの存在でしかなかった。そんな時、あの人が現れた。あの人――、英雄サラディンが助けてくれた」

スネーク　「サラディン？　ビッグボスの事か……」

ウルフ　「私はスナイパーになった。身を隠し、スコープから世界を傍観する立場になった。戦場を内からではなく、外から客観的に観る立場に」

ウルフ「私はそうやって、戦場の外から殺戮を…、人の愚かな歴史を見てきた」

ウルフ「私は世の中に復讐する為にこの部隊、この蹶起（ケッキ）に参加した」

ウルフ「しかし、私は…狼（クルド）としての誇りを失ってしまった。復讐の念が、身も心も私を変えてしまった。今の私は犬（ドッグ）同然」

——と、涙を流すウルフ。ウルフの涙を拭うスネーク。

スネーク「狼（クルド）は高潔な生き物だ。犬（ドッグ）とは違う。ユーピック語では狼（クルド）の事をケグルネクと言い、高貴な生き物として崇めている」

——初めて、スネークの方に顔を向けるウルフ。

スネーク「俺達のような傭兵は『戦争の犬（ドッグオブウォー）』と呼ばれている。確かに俺達は消耗品だ。しかし、お前は違う。狼（クルド）だ、犬（ドッグ）ではない」

ウルフ「お前は誰なの？　もしかしてサラディン？」

——視力のなくなりつつあるウルフはスネークの正体を見定めようする。

スネーク「お前は……メリルを助けてくれた」

ウルフ　「たとえ傍観者でも女や子供が血を流すのは観たくない」
スネーク　「安心しろ。ウルフらしく、気高く死ねる」

──ウルフ、スネークの目を見て、納得したように軽くうなずく。

ウルフ　「今、わかった。誰かを殺す為に潜伏していたんじゃない」
ウルフ　「殺されるのを待っていたんだ」
ウルフ　「お前のような男に……」
ウルフ　「お前は英雄だ。私を解放してくれる……」

──銃（ソコムかファマス）をウルフにそっと構えるスネーク。
──と、雪を踏みしめる足音がする。男のすすり泣きと共に雪の上を足跡だけが近付いてくる。ゆっくりと実体化するオタコン。

オタコン　「どうしてなんだ……」

──オタコン、ウルフの側まで行かずに雪面に膝をついてくず折れる。

オタコン　「愛してた……」

──ウルフに聴こえないような小さな声でつぶやく。オタコンの位置からも死に行くウルフがわかる。

──ウルフ、スネークに何かを求めるように手を伸ばす。

スネーク「どうした？」

ウルフ「銃を……私の銃を近くに……」

──オタコン、PSG1にかけより、銃を大事に持ち上げ、うっすらと被った雪を払い落とす。

ウルフ「銃は身体の一部なの」

──オタコン、PSG1をウルフの身体に立てかけてやる。

──落ちついたようにほほえむウルフ。目を合わせる事のできないオタコン。

──と、大雪原に狼の遠吠えがする。次々と連鎖して悲しき咆吼が拡がる。

ウルフ「みんな…、いるわね……」

ウルフ「さあ、英雄（ヒーロー）。私を解放して…！」

──目でウルフに合図するスネーク。ウルフ、微かに頷き、空を見上げる。

──オタコン、両耳をふさいで、ウルフに背を向ける。

オタコン　「さよなら……」

——大雪原に一発の銃声がこだまする。ウルフドッグ達が悲しそうに咆吼を続ける。

——横たわるウルフを見おろすスネークとオタコン。

オタコン　「スネーク…、戦場でも愛は享受(きょうじゅ)できるって言ったよね？」

スネーク　「……」

オタコン　「僕は何もできなかった……」

——スネーク、アイテムからハンカチを取り出し、ウルフの顔に被せる。

オタコン　「それは？」

スネーク　「持ち主に返す。俺にハンカチは必要無い」

——立ち上がるスネーク。

オタコン　「どうして？」

スネーク　「涙は既に涸れている」

——スネークの答えに再び泣き出すオタコン。狼の弔いのラメントが消える。

スネーク　「地下整備基地に潜入する。時間が無い」
オタコン　「わかってる」
スネーク　「自分の身は自分で守れ。誰も信用するな」
オタコン　「ああ……」
スネーク　「メタルギアの破壊に失敗すれば、恐らくここは空爆を受けるはずだ」
オタコン　「……そうだね」
スネーク　「もう逢う事も無いかもしれん」
オタコン　「無線機は手放さないよ。ずっと追跡してる」
スネーク　「いつでも逃げていい。残りの人生、好きなように生きろ」

——スネーク、オタコンを置いて歩き出す。
——オタコン、肩を落として、ウルフの遺体を見つめる。
——と、何かを思い出したように、振り返る。

オタコン　「スネーク！」

——足を止めるスネーク。

オタコン　「彼女は何の為に闘ってたのかな!?」

——何も答えないスネーク。

オタコン　「僕は何の為に!?」

——沈黙を守るスネーク。

オタコン　「スネークは何の為に!?」

——スネーク、振り返り、オタコンに告げる。

スネーク　「生きて逢えたら、答えを教えてやる」

——オタコン、にっこりと笑い、子供のように手を振る。

オタコン　「わかった。その時までに…僕も答えを探しておくよ」

——オタコン、ステルス迷彩のスイッチを入れ、暗闇にとけ込んでいく。

——オタコンの規則的でリズミカルな雪上の足跡がスネークとは反対側に伸びていく。

——足跡の上にポタポタとオタコンの涙の飛沫が光る。

【注1】１９２９年に制定された戦争時における捕虜の処遇を定めた条約。捕虜は、名前・階級・認識番号・生年月日の申告以外の義務を負わないと定められている。
【注2】１９８５年に書記長となったゴルバチョフが、ソ連経済を立て直すために行った政策のこと。
【注3】旧ソ連の参謀本部情報総局（Glavnoye Razvedyvatelnoye Upravlenie）の略称で、下部組織に特殊部隊スペッナズを要する。ソ連崩壊後もロシア軍として活動を続けている。
【注4】旧ソ連軍時代から軍の情報・偵察行動を担当した特殊部隊。ソ連崩壊後もロシア軍の特殊部隊として存続している。
【注5】詳しくは、ナスターシャの無線会話（Ｐ５３２）を参照。
【注6】Federal Bureau of Investigation の略。合衆国司法省に属する連邦犯罪捜査の本部。スパイ行為、破壊活動など、国家保管に関わる犯罪や組織犯罪、テロなどの操作にあたる。
【注7】トルコ、イラン、イラク、シリアにまたがる国境地域地域。または、その地域に居住する民族。１９８８年にはイラクが化学兵器を使用して、５０００人ものクルド人を虐殺するという悲劇があった。

■拷問脱出前　キャンベル

【医療室、無線デモ後】
※順番にA、B、C。以降はランダム
(A)
キャンベル「スネーク、脱出のチャンスは必ずあるはずだ。辛抱強く待て」
(B)
キャンベル「見張りも人間だ。眠りもすればトイレにも行く。その隙をつけ」
(C)
キャンベル「スネーク、そこは独房だ。中から扉を開けるのは無理だろう。なんとかして見張りに鍵を外させるしかない」
スネーク「だが、どうやって?」
ナオミ「姿を消してみるっていうのはどう?」
【医療室、ケチャップ入手後】
キャンベル「ケチャップは何色だ? 使い方によっては見張りをだませるかもしれん」
ナオミ「スネーク、それを使って死んだ真似をするっていうのはどう?」

【ジョニーを倒して脱出可能状態】
キャンベル「うまく看守を倒したな。今のうちに脱出しろ」
スネーク「そのつもりだ。これ以上、オセロットに付き合うのはご免だからな……」
※服従していない場合
ナオミ「体の方は大丈夫なの? スネーク」
スネーク「ああ。サディストの遊びでくたばる程ヤワじゃない」
【忍者によって脱出可能状態】
※一回目のみ
キャンベル「よくわからんが、とにかく扉が開いたんだな」
スネーク「ああ。だが、ステルス迷彩の影が……」
キャンベル「ステルス迷彩? エメリッヒ博士が?」
スネーク「いや、オタコンとは思えない」
キャンベル「では? ……まさか、グレイ・フォックス?」
スネーク「ああ。おそらくは……」
ナオミ「…彼は……友達を助けに来たというの?」

スネーク「さぁな。こんな牢獄では死ぬな、というだけのことかもしれん」
ナオミ「……わからないわ。彼の考えていること……」
※二回目以降
キャンベル「スネーク、考えるのは後だ。今のうちに脱出しろ」

■ハインドD戦前　キャンベル

【医療室、装備未回収】CALL
キャンベル「スネーク、ちょっと待て。装備を回収するのを忘れるな」
ナオミ「きっと拷問機の近くにまとめておいてあるはずよ」

【荷物爆弾未確認、爆発0~30秒前】CALL
キャンベル「スネーク、装備から爆弾を捨てるんだ！」
キャンベル「装備ウィンドウで爆弾を選んで、○ボタンで解除できる」
キャンベル「いそげっ！　早く捨てるんだ！」

【風邪状態】CALL
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、ナオミから話がある」
ナオミ「身体の具合はどう、スネーク？」
スネーク「そういえば身体がだるい。クシャミが出る……」
ナオミ「こっちでもモニターしてるけど……熱があるようね。リンパ腺も腫れてる。でも、心配はいらないわ。軽い流感のようね」
スネーク「あの兵士にうつされたか？」
ナオミ「栄養剤と糖分を多くしておくわ」
スネーク「治せないのか？」
ナオミ「ナノマシンには抗生物質は入れてないもの」
ナオミ「どこかにニンニクがあればいいけど。ニンニクには抗生物質が含まれているの。ビタミンとミネラルもね」
スネーク「ニンニクは勘弁してくれ」
※二回目以降
キャンベル「その基地にも風邪薬くらいあるはずだ。そいつを飲めば風邪は治る」
キャンベル「そうでなければ、自然に治るのを待つしか

ないな……」
【医療室～通信A棟着まで】
キャンベル「メタルギアの地下整備基地に行くには、洞窟の北にある通信棟を登るしかない。スネーク、通信棟に向かえ」
プレイヤーが武器庫にいる場合
ナオミ　「待って、スネーク。そこは武器庫なんでしょ？　弾薬を補充しておいてはどう？」
【通信A棟、９F扉確認前】
※一回目のみ
キャンベル「新型核弾頭発射の刻限が迫っている。メタルギアの地下整備基地に急いでくれ」
キャンベル「地上は氷河に塞がれて通れない。通信棟を登って氷河を迂回するんだ」
※二回目以降
キャンベル「通信棟はA棟とB棟からなっている。君のいるA棟からB棟へ行くには、屋外の渡り廊下を使うしかないようだ」
ナオミ　「暗い場所は、危ないわ。敵がどこから出てくるか分からないもの。暗視ゴーグルかサーマル・ゴーグルを使って」
【通信A棟9F、扉開かない事を確認した後】
※一回目のみ
キャンベル「渡り廊下の扉が開かないのか？」
スネーク　「ああ。何か手はないか？」
キャンベル「エメリッヒ博士に聞いてみてはどうだ？」
ナオミ　「スネーク、メイ・リンが解析してくれた衛星写真を見ると屋上にも渡り廊下があるみたいよ」
キャンベル「それを渡れば向こう側にいけるな」
ナオミ　「気をつけて」
※二回目以降。A、Bのランダム
(A)
キャンベル「スネーク、屋上の渡り廊下を使うんだ。屋上まで駆け上れ！」
※一回目のみ
スネーク　「簡単に言ってくれる……」
(B)
キャンベル「追ってくる敵兵は投げで下に叩き落として

やれ」

グレネードを持っている場合

キャンベル「グレネードで吹き飛ばすのも有効だ。近くで爆発させるように、信管を抜いてから4秒程待って、投げつけるようにしてみろ」

【通信棟屋上、ハインドD登場前】

※一回目

スネーク「ふう、屋上に着いたぞ」

ナオミ「お疲れさま」

スネーク「(つよがり)別に疲れてはいない」

ナオミ「でも、心拍数が上がってるわよ。呼吸も荒い。ちゃんとモニターしてるんだから」

スネーク「……」

キャンベル「アラスカ暮らしで体がなまっていたのか、スネーク?」

※二回目以降

キャンベル「B棟を下りて北へ向かってくれ」

【通信棟屋上、渡り廊下発見デモ後】

キャンベル「目の前に渡り廊下が見えるだろう? それを渡ればB棟だ。B棟を下りて北へ向かってくれ」

【渡り廊下発見デモ後、屋上以外】

キャンベル「どこへ行く、スネーク? 屋上の渡り廊下を通って通信B棟へ急ぐんだ」

【通信棟屋上、ハインドD登場後】

※一回目のみ

キャンベル「通信A棟屋上の渡り廊下を破壊されたか……。だがこれで道が閉ざされたわけじゃない」

※ロープを入手していない場合

キャンベル「どこかに、ロープはないか? ロープがあれば通信A棟の屋上から壁面をつたって下の渡り廊下に降りられるはずだ。ラペリングは得意だろ?」

※ロープを入手している場合

キャンベル「通信A棟の屋上、北の出張りからラペリングで下の渡り廊下へ降下するんだ」

※一回目のみ

ナオミ　「危険よ！　ハインドがスネークを狙ってるわ。それにロープを使えば、両手がふさがる」
キャンベル「その通りだが、やるしかない。幸いハインドは小回りがきかない。そこに賭けるんだ」
ナオミ　「無茶よ。そんな……」
スネーク「他に方法はない」
【ラペリング中】
キャンベル「スネーク、ラペリング中の操作はこうだ」
キャンベル「×ボタンを押すと壁をける。壁から離れている間に方向キーの下を押せば下に降りる。方向キーの左右を押しながら壁をければ、その方向に大きく跳ぶことができるぞ」
【通信棟渡廊下、A棟扉】
キャンベル「スネーク、渡り廊下からA棟への扉はどうなってるんだ？　その様子を見に行ってみろ？」

【通信棟渡廊下、狙撃時】
※一回目のみ
ナオミ　「スネーク、あなたは、視界の外から攻撃を受けているわ」
スネーク「どうすれば？」
※二回目以降
キャンベル「おそらく射程外からの攻撃だ。まず敵の位置をつかめ。双眼鏡を使うんだ。攻撃はPSG1かリモコンミサイルを使え」
【スティンガー入手前】
※オタコンにスティンガーがある事を聞く前
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、ハインドはまだ通信棟の上空を旋回している」
スネーク「（悔しさに歯噛み）くっ、だがこちらには奴と戦える武器がない」
※二回目以降
キャンベル「エメリッヒ博士なら、ハインドに対抗できる武器のありかを知っているかもしれん。聞いてみてはどうだ？」

※オタコンにスティンガーがある事を聞いた後
キャンベル「スネーク、早くスティンガーを手にいれろ。エメリッヒ博士によれば、B棟の渡り廊下入り口にあるんだろう？」
【障害箱発見後、破壊階段発見前】
キャンベル「上へ行く道がふさがれているのか……。それは後で考えるとして…とりあえず下の様子を見に行ってみてはどうだ？」
【破壊階段発見後、オタコン遭遇前】
キャンベル「階段が破壊されているとはな。下へ行くには中央のエレベータを使うしかないという事か。状況は分った。上へ向かえ、スネーク」
【通信B棟螺旋階段、スティンガー入手後】
※一回目
キャンベル「どうやらリキッドはどうしても君と決着をつけたいようだ。今、メイ・リンが解析処理した衛星映像を見ている」

ナオミ　「スネーク、彼はあなたを待っているようだわ。獲物を狙うハゲタカのよう……」
スネーク「みんな揃って、ライブ中継をお楽しみって事か？」
キャンベル「すまない。ここからは援助できん」
ナオミ　「スネーク、私……恐い。屋上へは行かないで」
スネーク「いや、逃げるわけにはいかない」
※二回目以降
キャンベル「リキッドは依然、通信B棟の屋上を旋回している。君を待っているんだ……」
キャンベル「スネーク、奴と決着を着けてこい！」

■ウルフ戦（2回目）前　キャンベル

【通信B棟屋上、ハインドD戦】
※一回目のみ
キャンベル「リキッドは、どうしてもスネークと決着をつけるつもりだ。これは明らかに仕組まれている」
ナオミ　「ひょっとしたら、エレベータの一件も罠かもしれない」

スネーク「俺を屋上に誘うために、エレベータに細工を?」
※二回目以降
キャンベル「ハインドを倒すしかないぞ、スネーク」
※A、Bランダム
(A)
キャンベル「ハインドの機影はレーダーに表示されている。見失ってもレーダーを見れば奴の位置は確認できるはずだ」
(B)
キャンベル「耳をすませるんだ、スネーク。ローター音でハインドのいる方向がわかるはずだ」
音声モノラルの時、一回目のみ
キャンベル「(意外)ぬっ、ひょっとしてスネーク、君はモノラルなのか?」
メイ・リン「(驚き)そんな?」
ナオミ「(唖然。今どきモノラルなんて信じられない)モノラル……」
キャンベル「(困る)う〜む……」
ナオミ「(ひそひそとフォロー)し、仕方ないわよ、キャンベルさん…」

キャンベル「そうだな……」
キャンベル「……(白々しく慰める)スネーク、大丈夫だ。なぁに、モノラルかステレオかで人間の価値が決まるわけじゃない。そのままがんばってくれ……」
メイ・リン「……モノラル……」

【通信B棟、ハインドD撃墜後】
※一回目のみ
キャンベル「遂にハインドを落としたな、スネーク!」
ナオミ「本当に、心配したんだから……」
キャンベル「おそらくリキッドも生きてはいまい」
スネーク「……どうだかな。だが、リーダーが倒れたからといって奴等が要求を取り下げることはないだろう。おそらく連中は核の発射を強行する」
キャンベル「確かにな。もう時間が無い」
※二回目以降
キャンベル「急いでくれ。地下整備基地は通信棟の先だ。エレベータはもう動いているんだろう?」

【通信B棟エレベータ内、ステルス兵戦】
※オタコンSEND前
キャンベル「相手はステルス迷彩だ。肉眼では見えない。音に注意してみろ。耳をすませるんだ」
ナオミ「そのステルス迷彩って、どのタイプかしら？」
ナオミ「光学的なものか化学的なものか……わかる？　スネーク？」
キャンベル「ステルス迷彩の開発者に聞いてみるんだ。何かわかるかもしれん」
※オタコンSEND後
キャンベル「スネーク、相手が見えなくては話にならん。サーマル・ゴーグルを使うんだ」
※サーマル・ゴーグルを持っている場合
キャンベル「スネーク、五感を張り詰めろ。サーマル・ゴーグルが無くても君なら勝てるはずだ」
※サーマル・ゴーグルを持っていない場合

【通信B棟、基本】
キャンベル「メタルギア地下整備基地への入り口は、通信B棟の北にある、雪原の奥だ。急いでくれ」

【雪原、入口】
※一回目のみ
キャンベル「また天候が悪化しているようだ。双眼鏡を使ってみろ」
スネーク「人工衛星からのデータはどうなってる？」
メイ・リン「ゴメン。それがダメなの。衛星からでは入り口はわからないわ」
スネーク「何か熱源は？　排気口とか？」
メイ・リン「確認できないわ。ただ、南東の位置に大きな熱源が複数ある」
キャンベル「おそらく、墜落したハインドの残骸だ」
メイ・リン「スネーク、そこはちょうど広場のような所よ。見えないでしょうけど…。切り立った岸壁に囲まれている。そのどこかに地下への入り口があるはず」
メイ・リン「だから、壁に突き当たったら、壁に沿って歩いてみて。そうすれば迷うことはないと思う」

※二回目以降
キャンベル「スネーク、君が最後の希望なんだ。核の発射を阻止してくれ」

【雪原、パラシュート発見】ＣＡＬＬ
※一回目のみ
スネーク「（深刻）大佐、聞いてくれ。ハインドの残骸の中に、パラシュートを見つけた」
※リキッドの生存を知らない場合
キャンベル「パラシュート？ まさかリキッドが……？」
スネーク「いや。ハインドからパラシュートで脱出するなんて狂気の沙汰だ。操縦席から飛び出した途端にローターで切断されてしまう」
ナオミ「……じゃあ、そのパラシュートは？」
スネーク「わからん」
キャンベル「罠か？」
スネーク「あるいは俺へのアピールか……」
キャンベル「……自分は死んでいない、と？」
スネーク「さぁな。俺を吊るしてやる、ということかもしれん」
ナオミ「……」

キャンベル「わかった…。とにかく警戒は怠るな」
スネーク「ああ」

【雪原、レーション凍結状態】
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、レーションを見てみろ。凍っているぞ。凍ったレーションは使用できない」
ナオミ「レーションがとけるまで体力の補給はできなくなるわ。慎重に行動して」
キャンベル「だが暖かい所ならば、凍ったものもとけるはずだ。肌で直接あたためてもいいだろう」

■地下基地潜入前　キャンベル

【雪原、ウルフ戦（2回目）】
キャンベル「相手はスナイパー・ウルフか。ＰＳＧ１で狙撃するしかないだろうな」
ナオミ「（心配そう）スネーク、ウルフはその雪原のどこかに隠れながらあなたを狙っているのよ。まず彼女がどこに隠れているか、それを見つけ出して」

キャンベル「ウルフが君を撃つために身を乗り出した所を狙うんだ」

【ウルフ倒した後、ウルフ死亡デモ前】
キャンベル「ウルフは倒れたようだ。メタルギアの地下整備基地に向かってくれ」

【ウルフ死亡デモ後】
※一回目のみ
キャンベル「クルドの狙撃手か。悲しい運命だな」
スネーク「どんな境遇に生まれようと、そこから先の人生は、本人が自分の意志で選び取っていったものの積み重ねだ」
スネーク「それを運命や宿命などという言葉で片づけてしまうのは、どうだろう……」
ナオミ「……そうかしら？（同情。自分も戦場で生まれた）もしも戦場なんかに生まれなければもっと別の、もっと幸せな生き方ができたかもしれない……。人殺しなんてしないで済む人生を……」
スネーク「……」

※二回目以降
キャンベル「スネーク、メタルギアの地下整備基地に急いでくれ。入り口は雪原の奥にあるはずだ」

■拷問脱出前　メイ・リン

【医療室、未服従】
※一回目
メイ・リン「大丈夫、スネーク？　大変なことになっちゃったわね……」
スネーク「（強がり）なに、捕虜になったというだけだ。全く予想外の状況というわけじゃない」
メイ・リン「（安心）さすがは伝説の英雄ね」
メイ・リン「でも無線機が耳小骨（じしょうこつ）埋め込み式でよかったわ。敵に取り上げられずにすんだし。おかげで、いつでも連絡がとれるもの」
メイ・リン「……あなたの無事も確かめられる」
※二回目以降
メイ・リン「とりあえず、キャンベル大佐に連絡してみたらどう？　あの人なら何か逃げ出せる方法を考え付くかもしれないし」

【医療室、服従後】
※一回目
スネーク「……（傷心）メイ・リン……俺を、軽蔑するか？」
メイ・リン「……スネーク、あまり自分を責めないで」
メイ・リン「あなたは……」
スネーク「悪くないとでもいうのか？　俺はメリルを……」
メイ・リン「（遮るように）聞いて。……中国の格言にはね…」
メイ・リン「…（言葉を探す少しの間）……」
メイ・リン「いいえ、自分の言葉で言うわ」
メイ・リン「スネーク、元気出して」
メイ・リン「あいつの言った事なんて信用することないわ。あんなのハッタリよ、きっと……」
スネーク「（絶望）奴等はそれほど甘くない……」
メイ・リン「（必死に元気づけようとする）でも、そこで落ち込んでてもしょうがないでしょ」
メイ・リン「まずはそこから脱出する事を考えないと……？」
スネーク「（沈黙でしか答えられないスネーク）……」
メイ・リン「……くじけないでよ、スネーク…」
メイ・リン「……そんなあなた……私、見たくない……」
スネーク「（いたわるように）わかった。もういいよ、メイ・リン」
スネーク「……ありがとう……」

■拷問脱出前　ナスターシャ

【医療室、監禁状態】
ナスターシャ「例え捕虜になったとしても、脱出のチャンスがないわけではない。あきらめずに隙をうかがうんだ」
キャンベルと話していない場合
ナスターシャ「とりあえずキャンベルに指示を仰いでみてはどうだ？」
【医療室、脱出可能状態】
ナスターシャ「スネーク、そこはそんなに居心地がいいのか？　早く脱出しろ」

【医療室、装備未回収】
ナスターシャ「装備はどうした？　ここまで集めた装備を放り出していく手はないだろう？　早く取り戻せ」

■ハインドD戦前　ナスターシャ

【医療室、装備回収後】
ナスターシャ「スネーク、早く通信棟へ向かえ」

【爆弾処理後】
※一回目のみ
ナスターシャ「危なかったな。まさか装備に爆弾を仕掛けてくるとは……卑怯な連中だ」

【風邪ひき状態】
※一回目のみ
ナスターシャ「ん？　風邪を引いているみたいだな。早くなおした方がいいぞ」

【通信A棟内部、暗部にて】
ナスターシャ「暗い場所なら暗視ゴーグルかサーマル・ゴーグルを使うべきだ」

【通信A棟、ロープ入手時】
ナスターシャ「ロープ？　最低、直径12ミリ以上、軽量で切れにくいものであれば、ラペリングにも使えるはずだ。ああ、麻製ではないだろうな？」
スネーク「いや。ナイロン繊維が織り込んであるようだ」
ナスターシャ「それならいい。麻は濡れると柔軟性がなくなるからラペリングには不向きなんだ。大丈夫。そのロープなら十分使用に耐えられるはずだ」

【通信B棟屋上、ハインドD戦】
※A、Bランダム
（A）
ナスターシャ「ハインドDを倒すには地対空ミサイル（SAM）が必要だ。自動小銃などでは撃ち落とせない。

スティンガー・ミサイルがあればいいのだが」

（B）

ナスターシャ「このブリザードの中でハインドを飛ばすなんて、その男、常軌を逸している。おそらく、計器には頼っていないはず。マニュアル操縦だろう。そうなると、チャフは効果がないぞ」

【ラペリング成功後】

ナスターシャ「ハインドは逃げたわけじゃない。アレに対抗するには地対空ミサイル（SAM）が必要だ。例えば、スティンガーのような……」

【渡廊下、狙撃】

※一回目

ナスターシャ「遠距離からの狙撃をうけているようだな。君もスナイパー・ライフルで対抗するんだ」

【通信B棟、スティンガー入手後】

ナスターシャ「スティンガーを入手したな。これでハインドに勝てる確率があがった……」

※一回目のみ

スネーク「確率があがったって？」

ナスターシャ「そうだ。互角とはとても言えないからな。相手は怪物ヘリだ。勝てる確率はわずかしかない。勿論、ゼロではないが……」

スネーク「アナリストというのは薄情だな」

ナスターシャ「ハインドを落とすには、視界のいいところでないと無理だ。渡り廊下あたりで戦おうとしても、建物の陰に入り込まれるとどうしようもない。屋上で対決するのが賢明だ」

■スナイパー・ウルフ戦前　ナスターシャ

【通信B棟屋上、ハインD戦】

※一回目

ナスターシャ「ハインドの旋回中、ノーズがこちらを向くまでの間がチャンスだ。その隙を逃すな。ヤツの尻に、スティンガー・ミサイルを叩きこんでやるんだ」

※二回目

ナスターシャ「ハインドの機銃をまともにくらったら、ひ

とたまりもない。機銃が君の方を向いている時は、屋上の建物の陰に身を隠すのが賢明だ」

※三回目
ナスターシャ「スティンガーを使用中は移動ができない。ハインドが尻を向けた瞬間を狙って、照準を合わせるんだ。機首がこちら向いた時は、すばやく隠れる。R1ボタンを有効に使え」

※四回目
ナスターシャ「ハインドには前方監視赤外線装置(フリアー)や暗視装置等が装備されている、だから、暗闇の中でも飛ばすことができる。だが…」

※共有
ナスターシャ「このブリザードの中でハインドを飛ばすなんて、その男、常軌を逸している。おそらく、計器には頼ってないはず。マニュアル操縦だろう。そうなると、チャフは効果がないぞ」

【ハインドD撃墜後】
※一回目のみ
ナスターシャ「まさか、本当にハインドを落とすとは…」
※スティンガーについてのヒントを聞いている場合
スネーク「スティンガーなら奴を落とせると言ったのは、あんただが。……本当に勝てるとは思ってなかったのか?」
ナスターシャ「そういうわけではないが……」
ナスターシャ「あのハインドはF16を二機撃墜してるんだ。それが生身の人間一人殺すことが出来ず、逆に落とされるなんて……」

【通信B棟エレベータ、ステルス兵戦】
※オタコンにSEND前
ナスターシャ「ステルス迷彩か? やっかいだな…。光を捻じ曲げて身を隠す最新式の迷彩服…。開発者に聞いてみる方がいいと思う」
※オタコンSEND後
※サーマル・ゴーグルを持っている場合
ナスターシャ「エメリッヒ博士の言うとおり、サーマル・ゴーグルを使うんだ」

※サーマル・ゴーグルを持っていない場合
ナスターシャ「サーマル・ゴーグルが無いのなら仕方がない。大気のわずかなゆらぎを見逃すな。そこにステルス迷彩兵はいる」

■地下基地潜入前　ナスターシャ

【雪原、ウルフ戦（二回目）】
※一回目のみ。以降は狙撃ウンチク
ナスターシャ「スナイパー・ウルフ……狙撃手が自分の存在を明かしてから攻撃してくるとは、常軌を逸している。それだけ君への執念が凄まじいということだろう」
ナスターシャ「おそらく前回のようにはいかないぞ」

■拷問脱出前　マスター

【医療室、拷問後】
※服従していない場合
※一回目のみ
マスター「通常、軍人は捕虜になった場合、ビッグ4、つまり氏名、認識番号、階級、生年月日以外は口にしてはならない。だが今のお前は軍人ですらない」
マスター「何一つ喋ることは許されんぞ」
※二回目のみ
マスター「尋問者を刺激し、怒らせるような発言は控えろよ。相手の敵意を買えば、それだけ拷問は激しくなる。体力を消耗するだけだ」
※三回目のみ
マスター「食べる機会があったら絶対逃すなよ。捕虜に食事が与えられ続けるとは限らんからな。体力を温存して、脱出の機会をうかがうんだ」
※四回目以降
マスター「スネーク、脱出のチャンスは必ずある。絶対にあきらめるな」
※服従している場合
スネーク「マスター、俺は……」
マスター「言うな、スネーク。任務はまだ終わってはいない。今はそれを完遂する事だけを考えろ」
※無線デモを聞いていない場合追加
マスター「とにかく、キャンベルと連絡をとってみた

らどうだ？」

【看守を倒して脱出可能状態】

マスター「スネーク、今だ。この機会を逃がすな。脱出するんだ」

■ハインドD戦前　マスター

【医療室、装備未回収】

マスター「スネーク、装備はどうした？　まさか丸腰で任務を続行するつもりではないだろうな？　装備を取り返すんだ」

【時限爆弾爆発前】

マスター「せっかく取り戻した装備だ。よく点検しておけよ。装備の動作不良は戦場では死と直結するからな」

【爆弾処理後】

※一回目

マスター「危なかったな、スネーク」

スネーク「ああ。随分としゃれたプレゼントだった」

マスター「（抑制した怒りと不信。爆弾の件はオセロットの独走）しかし装備に爆弾を紛れこましておくとは、あの男……まあいい。脱出は果たしたんだ。地下整備基地へ急げ。時間が無いぞ」

【風邪状態】

マスター「風邪を引いているのか、スネーク？　体調を保ち続ける事も戦闘技術のうちの一つだぞ。風邪薬か何かないのか？」

【洞窟、ウルフドッグおとなしい】

マスター「狼犬（ウルフドッグ）がおとなしくなった？　何か攻撃衝動を抑えるようなものを持っているんじゃないか？」

■地下基地潜入前　マスター

【雪原、レーション凍結】

※一回目のみ

マスター「レーションが凍った？　凍ったレーションは絶対に食べるな。体温との温度差が生じ

て、体内に吸収するために体力をつかうか
らだ。食べるのは、とかしてからにしろ」

【ウルフ倒した後】

マスター「ウルフを倒したか。一度敗北した時と同じ
戦術で挑むとは愚かな女だ。だが先程の例
もある。戦果を確認するまで油断はするな」

【ウルフ死亡デモ後】

※一回目のみ

スネーク「マスター、俺達は……やはり犬に過ぎない
のだろうか？」

マスター「らしくないな、スネーク？……スナイ
パー・ウルフの言葉に影響されたか？」

スネーク「……」

マスター「……戦う意義を自問しない兵士などいな
い。いればそいつはただの殺人狂異常者だ」

マスター「だが戦いの目的を自らの死の中に見出して
しまった者は、決して勝利する事はない。
ウルフのようにな」

マスター「死を懇願した時、勝負は決まる」

マスター「お前はそうなるなよ、スネーク……」

■拷問脱出前　オタコン

【医療室、拷問後】

※一回目のみ

スネーク「オタコン、まだ無事か？」

オタコン「ああ、ステルス迷彩のおかげでね」

スネーク「頼みがある。助けて欲しい」

オタコン「そうくると思った。何をしたらいい？」

スネーク「奴等に捕まった。独房で休憩中だ」

オタコン「どこの独房？」

スネーク「近くに大きな拷問機がある」

オタコン「ああ、わかった。今近くにいる。すぐ行く
よ」

スネーク「頼む」

※二回目のみ

スネーク「オタコン」

オタコン「今そっちに向かってるよ。意外とせっかち
なんだね」

スネーク「居心地がいいんでな。時間が経つのが長く
感じる」

オタコン　「了解。できるだけ急ぐよ」
※三回目以降～オタコン独房到着まで
オタコン　「今そっちに向かってるよ。意外とせっかちなんだね」
【医療室、オタコンが独房前に立っている状態】
オタコン　「(馬鹿にしたように)なんで無線なんか使うんだい？　ここにいるよ、僕は」
【医療室、ケチャップ入手後】
オタコン　「ケチャップは使ってくれたかい？　探すのに苦労したんだよ、アレ。ちょうどいい色合いと粘り気のやつがなかなか無くってさ」
オタコン　「うまく使ってくれよ。じゃ」
※ケチャップ脱出失敗後
オタコン　「僕ができるのはここまでだ…」
【医療室、看守倒して脱出可能状態】
オタコン　「何してるんだ？　今のうちに逃げるんだよ、スネーク！」

【医療室、忍者によって脱出可能状態】
※一回目のみ
スネーク　「オタコン、いるか？」
オタコン　「どうしたんだい？」
スネーク　「今、扉を開けたのはお前か？」
オタコン　「なんのこと？」
スネーク　「やはり、お前じゃなかったか。……ということは…？」
※二回目以降
オタコン　「扉が開いたんだろ？　それなら早く脱出しなきゃ」
スネーク　「そうだな…」

■ハインドD戦前　オタコン

【医療室脱出後、装備未回収】
オタコン　「装備なら君が捕まってた独房の近くにあったよ。取りに行ったら？」
※独房でオタコンとあった場合一回目のみ
スネーク　「知っていたなら、なぜ持ってきてくれなかった？」

オタコン「見張りがいて怖かったんだよ」
スネーク「……」

【風邪状態】

スネーク「この基地に風邪薬は？」
オタコン「なんだい、スネーク。君が風邪かい？」
オタコン「所長室のフロアにあると思う。核弾頭保存棟の地下一階南西に薬剤保管室があるんだ。他にも薬があったと思う」
オタコン「一度、風邪をひいた兵士を案内してあげたことがあるよ」
スネーク「……その男にうつされたらしい」

【医療室、時限爆弾捨てた後】

※一回目、ケチャップで脱出した場合
オタコン「やはり、僕の作戦をわかってくれたんだね？」
スネーク「こんな手が通用するとはな」
※ケチャップを貰っても別の脱出方法で逃げた場合
オタコン「無事に脱出できたようで、よかったよ」
スネーク「薄情な奴だ」
オタコン「残念だな。僕の作戦を理解してくれると思ったのに」
スネーク「なんのことだ？　まぁ奴等の警戒がずさんで助かった」

【医療室〜通信A棟まで】

オタコン「洞窟の北の地下通路をまっすぐ進めば通信棟に着く。通信棟の渡り廊下を使えば、道をふさいだ氷河も迂回できるはずだ。通信棟に向かってくれ」

【通信A棟、入り口から4Fまで】

オタコン「スネーク、通信棟の中は暗い。暗視ゴーグルかサーマル・ゴーグルを使った方がいいよ」
※サーマル・ゴーグルを持っていない場合
オタコン「サーマル・ゴーグルなら、僕の研究室のあったフロアにあるよ」
※暗視ゴーグルを持っていない場合
オタコン「暗視ゴーグルは研究室の近くにあった」
※一回目のみ

オタコン「あと、通信棟にはいつもたくさんの兵士が詰めているから見つからないようにね」
※二回目以降
オタコン「通信棟の真ん中あたりに渡り廊下がある。そこまで一気に上ってくれ」

【通信A棟9F、渡り廊下扉前】CALL
※ハインド遭遇前、一回目のみ
オタコン「スネーク、そこが渡り廊下への扉だよ」
スネーク「カードを使っても開かないぞ」
オタコン「(急に気付いた) えっ? あっそうか。忘れてたよ。そうだった、そうだった」
スネーク「何か知ってるのか?」
オタコン「外側が凍りついて開かなくなることがよくあるんだ。渡り廊下の扉は…」
スネーク「先に言ってくれ、そういうことは……で、どうすれば開けられる?」
オタコン「中から開けるのは無理だね。いつもは外側からC4か何かで爆破するんだけど…」
スネーク「外側から? 中から開ける事はできないのか?」

オタコン「ごめん、無理なんだ。でも安心してくれ。通信棟のA棟とB棟をつなぐ渡り廊下は二つあるんだ。もう一つが、屋上にある」
オタコン「屋上の渡り廊下を使えばいいと思うよ」
※ハインド遭遇後
オタコン「(緊迫) 駄目だ、スネーク。そこの扉は凍り付いてるみたいだ。開けるには外側から爆破するしかない」
オタコン「でも屋上の渡り廊下が壊されたから、B棟へ行くには、その扉の向こうの渡り廊下を通るしかないんだ」
オタコン「ロープでもあれば、A棟の屋上から、向こう側へ降りられるかもしれないけど…」

【通信A棟、扉開かないとわかった後】
オタコン「スネーク、屋上にも、渡り廊下があるんだ。そっちを使ってもいいと思うよ」

【通信棟屋上、ハインドD登場前】
※一回目のみ
スネーク「オタコン、屋上に着いたぞ」

オタコン　「歩いて上がったにしては早かったね？」
スネーク　「俺としてもゆっくり行きたかったんだが、急かす奴等がいたせいでな」
オタコン　「ふーん。通信B棟にはエレベータがついているから安心していいよ」
※二回目以降
オタコン　「渡り廊下を進めば、通信B棟だ」

【通信棟屋上、渡り廊下発見デモ後屋上以外で】
オタコン　「スネーク、渡り廊下は通信A棟の屋上だよ」

【通信B棟屋上、ハインドDデモ後】
※一回目のみ
オタコン　「スネーク、生身でハインドと闘うつもりなのかい？」
スネーク　「俺もそこまで無謀じゃない。何か、奴に対抗できる武器はないか？」
※二回目以降
オタコン　「スティンガー・ミサイルが通信B棟にあるよ。確か渡り廊下の入り口にある資材置き場に置いてあったはずだ。ロープか何かがあれば、屋上から降りられるんじゃないか？」
※ロープを入手していない場合
オタコン　「ロープなら、A棟の一番下の階で見かけたよ」

【ラペリング中】
※一回目のみ
オタコン　「(憧れ) 凄いよ、スネーク。アクション映画みたいだね！」
スネーク　「まるで違う」
オタコン　「え？」
スネーク　「これは現実だ。成功するように計算されたスタントじゃない。失敗してもリテイクはないんだ」
オタコン　「そうか……そうだね」
※二回目以降
オタコン　「スネーク、その通信棟の壁面には、棟内暖房用の蒸気が漏れて吹き出してる所があるから注意してくれ。あたるとすごく熱いよ」

【ラペリング成功】
オタコン　「お見事。無事に降りられたね」
※ラペリングで死んだ場合
スネーク　「楽ではなかったがな」
※ラペリングで死ななかった場合
スネーク　「軽いものだ」
※扉が凍っている事を聞いている場合
オタコン　「今のうちにA棟の凍りついた扉をC４で爆破して通れるようにしておいたらどうだい？」
※扉が凍っている事を聞いていない場合
オタコン　「スネーク、渡り廊下からA棟への扉が凍りついて開かないみたいだ。C４で爆破すれば通れるようになるよ」

【通信棟渡廊下、狙撃中】
オタコン　「攻撃されているのかい？　でもスティンガーの置いてある資材置き場に行くにはその廊下を通り抜けるしかないよ」

【通信B棟、スティンガー入手前】
オタコン　「スティンガーはB棟渡り廊下入り口の資材置き場にあるよ」

【通信B棟、オタコン遭遇前】
※一回目
オタコン　「スネーク、実は今、そっちに向かってるんだ」
スネーク　「何だって？」
オタコン　「どうしても聞いてみたい事があって……」
スネーク　「聞きたいこと？　なんだ？」
オタコン　「うん……それは……（しばし逡巡）逢ってから聞くよ。じゃあ後で……」
スネーク　「ちょっと待て」
※二回目以降
オタコン　「スネーク、今そっちに向かってるんだ。ちょっと待っててくれないか？」

【通信B棟螺旋階段、ハインドD戦前】
※一回目
オタコン　「ついにハインドと闘うんだね？」

スネーク「ああ」

オタコン「（心配げ）ローターの音がずっと鳴り止まない。……この通信棟の上を回り続けてるんだ。あいつ、君を待ってるみたいだね」

スネーク「その羽音も、もうすぐ聞こえなくなるさ」

オタコン「……わかった。それまでにはエレベータを使えるようにしておくよ」

※二回目以降

オタコン「君がハインドと戦っている間に、僕はエレベータを直す。負けないでくれよ、スネーク」

■スナイパー・ウルフ戦前　オタコン

【通信B棟屋上、ハインドD戦】

オタコン「スネーク！　無事なのかい？」

スネーク「今の所はな。そっちの方はどうだ？」

オタコン「ごめん、エレベータはまだ動かない。どうも変なんだ。動力系に異常はないし、電源も生きてるのに。もう少し待ってくれ…」

【通信B棟屋上、ハインドD撃墜後】

オタコン「よくわからないけど、とにかくエレベータは動きだしたよ。通信B棟の一番下までおりて、外にでれば雪原だ」

オタコン「地下整備基地の入り口は雪原の北側にあるよ」

【通信B棟エレベータ、ステルス兵戦】

※一回目のみ

スネーク「オタコン、奴等の姿が見えない！　どうすればいい？」

オタコン「そうだね……ステルス迷彩は光学的に自然光を屈折させて非可視状態を作り出すものなんだ。だから目には見えない」

オタコン「だけど僕のステルス迷彩には熱を遮蔽する機能はついていないんだ」

※二回目以降

オタコン「サーマル・ゴーグルを使うんだ、スネーク。サーマル・ゴーグルなら彼らの体温を補足できる。姿が見えるはずだよ」

※サーマル・ゴーグルを持っていない場合

オタコン　「えっサーマル・ゴーグルを持ってないのかい？　そうか…でも、目を凝らしてよく見れば、君ならなんとかできるはずだ」

【雪原、入り口】

スネーク　「オタコン、メタルギアの地下整備基地はどっちの方角だ？」

オタコン　「通信B棟から、雪原を北に抜けた所だよ。扉のセキュリティ・レベルは6だ」

※雪原、一回目のみ

オタコン　「とにかく天候が悪い。迷わないように気をつけてくれ」

オタコン　「それから言うまでも無いと思うけど、屋外は酷寒だ。ここはアラスカだからね。大雪原での長居は危険だよ」

■地下基地潜入前　オタコン

【雪原、ウルフ戦（2回目）】

スネーク　「PSG1の弾丸はどこにある？」

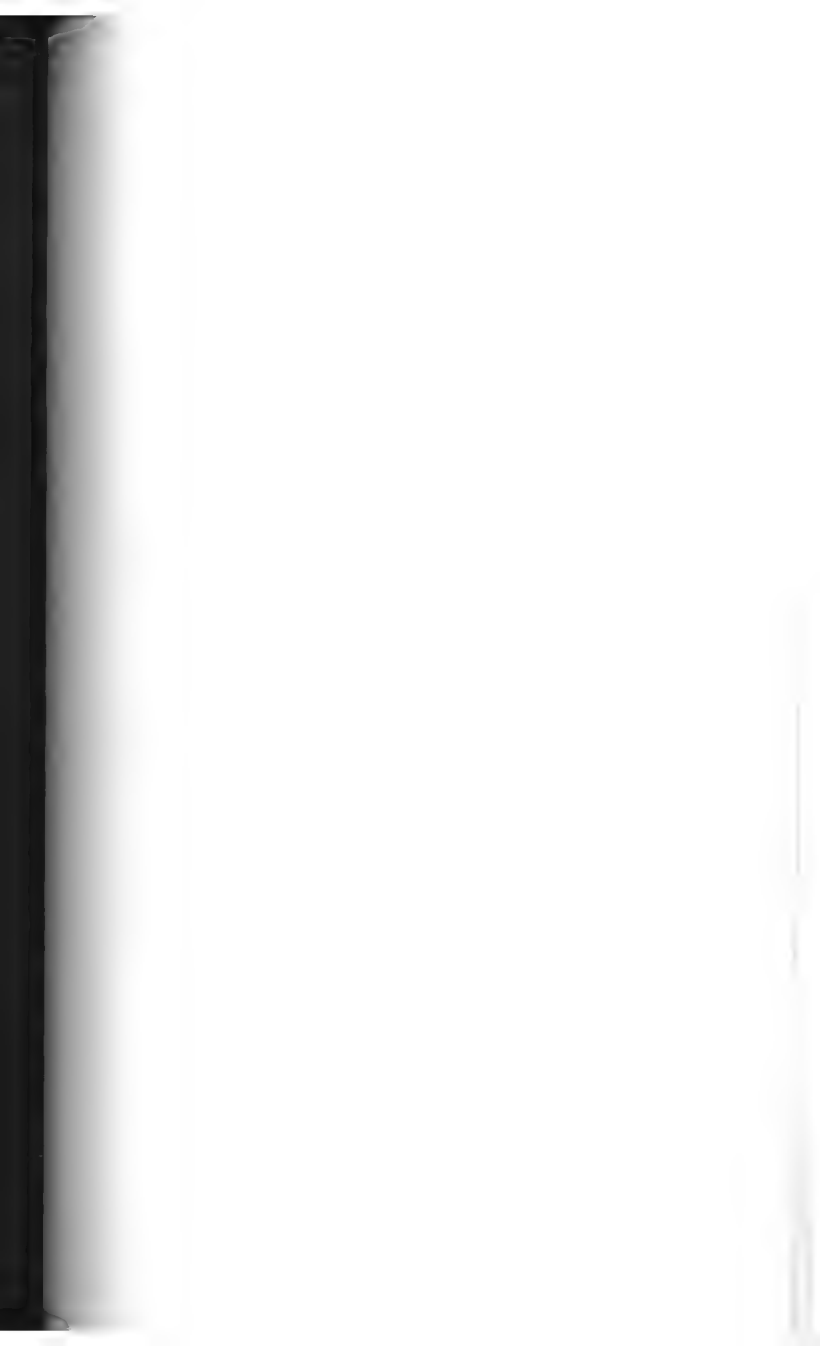
オタコン　「僕は……答えられないよ。」

【ウルフ戦勝利後、ウルフ死亡デモ前】

オタコン　「……」

【ウルフ死亡デモ後】

オタコン　「地下整備基地の入り口は雪原の北にある」

オタコン　「……僕はずっと見てるよ、スネーク……」

Section 4

Undergroung Base – vs Liquid Snake (Jeep)

地下基地～ジープ戦

【地下基地へ01ナオミはスパイだ無線機デモ】 大型エレベータ

――ウルフにとどめをさしたスネークは、大雪原の先にある溶鉱炉から大型斜行エレベータに乗り、地下基地へと向かう。

――エレベータが降りるに従って次第に寒くなっていく。エレベータ孔のパイプも凍り付いている。地下80メートルくらいまで降下すると無線機が鳴る。

――無線を受信するスネーク。

マスター 「いいか、スネーク。ナオミ・ハンターという女の事だが？」

スネーク 「ナオミが、どうかしたか？」

マスター 「この会話は盗聴されているのか？」

スネーク 「大丈夫だ。今、モニターを切っている」

マスター 「そ、そうか…」

スネーク 「どうした？」

マスター 「私はＦＢＩに身を置いていたこともある」

スネーク 「それは知らなかった。それで？」

マスター 「ドクター・ハンターの身の上話だが…。彼女の祖父がＦＢＩ長官の補佐官であったという…」

スネーク　「ああ」

マスター　「それにニューヨークでマフィアの囮捜査をしていたという話……」

スネーク　「それがどうかしたのか?」

マスター　「すべてデタラメだ」

スネーク　「何だって?」

マスター　「ずっと引っかかっていたんだ。どうしてそんな嘘をつくのか?」

スネーク　「嘘?」

マスター　「彼女はスパイかもしれん」

スネーク　「馬鹿な」

マスター　「いいか、こんな嘘は高校生でも見抜ける」

マスター　「ナオミの祖父は日本人だと言っていたな?」

スネーク　「ああ」

マスター　「その頃、東洋人の捜査官は一人もいなかったはずだ」

マスター　「さらに、50年代にはまだマフィアの囮捜査は行われていなかった。初めての潜入捜査は60年、しかもシカゴからだ」

スネーク「しかし……」

マスター「調べてみた方がいい。局長や社長の死、例の忍者…。腑に落ちないことが多すぎないか？」

スネーク「……ナオミがそれを仕組んだとでも？」

マスター「わからん。あるいはテロリストと繋がっているかも知れん」

スネーク「……そんな事が？」

マスター「何かわかったら連絡しよう。とにかく、気をつけろ！」

【レイブン戦01レイブン登場デモ】レイブンの部屋

——大型エレベータで地下基地入り口の扉の前に降り立ったスネーク。

——扉をくぐると、40メートル四方の部屋が拡がっている。壁や天井、床は永久凍土を掘削したそのままの状態。壁や天井には落盤を防ぐ、補強材が張り巡らされている。補強材の「x」が幾何学模様にも見える。掘削途中の工事現場のようなありさま。

——天井や壁を支える鉄柱には申し訳程度の照明（ランタン）が備え付けられている。暖房はいっさいなく、凍えるような寒さ。

——部屋の中央には弾薬の入ったコンテナが整然と並べられている。

——部屋の中央の暗がりにあるコンテナ。その上に黒い固まりがうずくまっている。

――高さ2メートルくらい。スネーク、目を凝らすと、黒い固まりはかすかに脈動する。
――警戒しながら固まりに歩み寄るスネーク。と、固まりはさっと分散して宙に舞う。カラスの大群がスネークの顔面を襲う！

スネーク 「!!」

――とっさに腕で顔を庇うスネーク。カラスの大群は飛び去り、カラスの巣への抜け穴（扉の上にある通気孔）に入っていく。
――カラスが去った後にバルカン・レイブンが下を向いて、静かに跪（ひざまず）いている。
――バルカン・レイブン、ゆっくりと立ち上がり、バルカン砲を構える。
――コンテナの上に立つレイブン、2メートルを超える身長、威圧感を与える。

レイブン 「ようこそ、白人（カサック）!!　ここから先は通さん！　なあ、みんな!?」

――バルカンが叫ぶと、巣で様子を伺うカラス達が騒ぐのが聴こえる。

レイブン 「あいつらも興奮している……」

※エレベータや巣でカラスを殺している場合

レイブン 「よくも俺の同志を殺してくれたな……」

※共通

レイブン　「大鳥は決して残飯処理ではない」

レイブン　「不要なものを自然界に返すだけだ。そして、時に怪我をした狐を襲うこともある」

スネーク　「M1戦車に乗っていた男か？　その巨体でよく我慢できたな？」

――スネークのあからさまな侮辱に豪快な笑いで答える。

レイブン　「ハッハッハハハハ……あれは、闘いとは呼ばない」

――コンテナから飛び降りて、着地するレイブン。その巨体からは想像できない程、身軽な動きである。

レイブン　「お前がいかなるものか、カラス達と傍観していたのだ」

――カラス達がレイブンの言葉を理解したように騒ぐ。

レイブン　「結論は出た。カラス達はお前を戦士として選んだ」

――と、バルカンは苦痛をこらえるような表情をみせる。バルカンの額にあるカラスの入れ墨が盛り上がり、生き物のように額から抜け出す。

――バルカンの額の入れ墨から抜け出したカラスがゆっくりと飛び立つ。

スネーク　「幻覚？」

――カラスはスネークの肩に止まり、大きな翼を畳む。

スネーク　「う、動けない……」

レイブン　「今、お前は死の宣告を受けた」

――しばらく動けないスネーク。

レイブン　「お前、東洋人の血が流れているな……」

――レイブン、スネークの心を深く覗く。

レイブン　「なるほど、お前も俺達と同じモンゴル系か」

レイブン　「アラスカ・インディアンは日本人に近い。祖先が同じだとも言われている」

スネーク　「カラスに親戚はいない」

レイブン　「いいだろう。蛇(スネーク)は好かんが、同族なら相手に不足はない。手加減はしない」

――レイブン、カラスに合図をするようにカチリとバルカン砲の銃口を上げる。

――スネークの頭の上のカラス、スッと消える。呪縛を解かれるスネーク。

レイブン「お前もアラスカに住む人間だ。世界エスキモー・インディアン・オリンピックを知っているな?」
スネーク「その怪力……『棒引き』や『四人運び』で鍛えたのか」
レイブン「そうだが、俺の強さは力だけではない」
レイブン「オリンピックに『耳引き』という競技がある」
レイブン「紐で互いの耳を引っぱり合い、酷寒の厳しさに耐える力を養う競技だ。強さは精神面から来る……」
スネーク「それを今から?」
レイブン「形は変わるが主旨は同じだ。喜べ、お前は俺に認められている」
スネーク「これは競技ではない、ただの殺し合いだ。暴力はスポーツではない!」
レイブン「さあ、お前が何者かじっくりと見せてもらおう!!」
——いつのまにかレイブンの額にカラスが戻っている。

【レイブン戦02レイブン死亡デモ1】

レイブンの部屋

——バルカン砲の猛威をくぐりぬけ、レイブンを倒すスネーク。

——レイブン、力つきて壁際にもたれ掛かる。が、膝を決して折らない。
——バルカン砲は地面に向けたまま。自分の身体を辛うじて支えている。レイブンにちかづくスネーク。

レイブン　「ボスの言う通りだった……」

レイブン　「どうやら、不要な存在は…俺の方だったらしい」

——と、レイブンの肩に一羽のカラスが降り立つ。

レイブン　「だが——、俺の残骸は残らない」

——肩のカラスを見やって続けるレイブン。

レイブン　「俺の魂も肉もこいつらに同化する」

レイブン　「俺の骸（むくろ）は自然に還る」

——レイブンに答えるように身じろいで騒ぐカラス。

レイブン　「スネーク、俺はお前を見てるぞ。いいか……」

——レイブン、最後の力で背筋を伸ばして、懐からセキュリティ・カードを取り出す。

レイブン　「セキュリティ・カードだ。これでそこの扉が開く」

——手を伸ばすレイブン、カードを受け取るスネーク。

スネーク　「どうして？」

レイブン　「お前は自然が創りだした蛇ではない」

レイブン　「お前もボスも、違う世界から来た……俺達の知る世界ではない」

レイブン　「決着をつけて来い。俺は最後を見ている……」

レイブン　「お前にひとつヒントをやろう」

レイブン　「お前の目前で死んだ男……」

【レイブン戦03回想局長死亡デモ】

DARPA(ダーパ)局長の独房

——局長の話を聞いているスネークの映像。音声はレイブンの語りが入る。

レイブン　「あれは……DARPA(ダーパ)局長ではない」

——突然、苦しみだす局長。

——局長、胸をかきむしり、悶え苦しむ。

——局長、スネークの両方に縋る。

——同独房内（それから数分後）。

——スネークが去った後の独房。レイブンが現われ、局長の死体に近付く。レイブン、横たわる男の仮面（特殊メイク）を剥ぐ。下から現れたのは鼻も耳もなく、赤ら顔のデコイ・オクトパス。

——映像にレイブンのモノローグがかぶる。

レイブン「あいつはデコイ・オクトパス。俺達と同じFOXHOUND（フォックスハウンド）だ」

——デコイの死体は局長に成りすましていた為、首から上だけが妙に白い。

レイブン「奴は変装の名人だった……」

——オクトパスを見おろすレイブン。

レイブン「オクトパスは血液まで偽装する。その為にDARPA（ダーパ）局長の血を全て抜き取って、入れ替えた」

——オクトパスの死体を肩に担ぐレイブン。遺体を運ぶレイブン。

レイブン「しかし、死神（＝フォックスダイの事）までは騙せなかったわけだ」

スネーク「死神？」

――レイブンの肩で揺れるオクトパスの顔。

【レイブン戦04レイブン死亡デモ2】

レイブン部屋

――再びレイブン部屋。レイブンと向き合うスネーク。

スネーク「そんな手間を掛けてまで……なぜ局長のふりを？」

――レイブン、微かに笑う。

レイブン「ヒントはここまでだ。この先は自力で解明するんだな」

――カラスの大群が巣から飛び立ち、レイブンの方に向かってくる。

――スネーク、通風口を見る。通風口からカラスの群が入ってくる。カラスは壁際に寄り掛かるレイブンに蝟集する。動かなくなったレイブンにカラスが覆い被さり、黒い大きな固まりとなってゆく。カラス達はレイブンの皮膚を喰いちぎり、肉をついばむ。歓喜とも哀歌ともとれるカラス達のざわめきが洞窟に木霊する。

――黒い球体からレイブンの最後の声がする。

レイブン「蛇(スネーク)よ自然界には限度を超えた殺戮は存在しない」

レイブン「必ず終わりがある。だが、お前は違う」

——自問自答しながら歩き出すスネーク。

スネーク「俺には終わりがないというのか……」
レイブン「お前の進む先に、終着駅(ターミナル)はない」
レイブン「どこまで行っても、いくつ屍を乗り越えようと……」

——レイブンを後に扉に向かうスネーク。カラス達のざわめきは次第に落ちついていく。

レイブン「終わりのない殺戮だ。救いのない未来……」
レイブン「いいか——、蛇(スネーク)よ！　俺は見ている!!」

——振り向く、スネーク。
——カラスが一斉に飛び立つ。後にはレイブンの姿はない。
——無線機の呼び出し音が鳴る。スネーク、無線を受信する。

【レイブン戦05レイブン死亡後無線機デモ】

マスター「スネーク、私だ……」
スネーク「マスター？」

マスター　「ナオミ・ハンターの件だが…。モニターはオフに……」
キャンベル　「ナオミがどうした？」
マスター　「！」
スネーク　「大佐、そこにナオミはいるのか？」
キャンベル　「いや、席を外している。少し仮眠を取っているところだ」
スネーク　「そうか……」
キャンベル　「で、ナオミがどうかしたか？」
マスター　「わかった。キャンベルにも聞いて貰った方が良いかもしれん」
スネーク　「ああ、マスター……つづけてくれ」
マスター　「ナオミ・ハンターだが、大佐の側にいるのは偽物だ」
キャンベル　「何だと!?」
マスター　「彼女の生い立ちを聞いてから、不審に思って調べてみた」
スネーク　「それで……」
マスター　「確かに、ナオミ・ハンターという人物は実在する。いや、実在した」
マスター　「しかし、彼女とは全くの別人だ。中東で行方不明になっている。彼女はその『ナ

オミ・ハンター』の戸籍を何処かで入手したにちがいない」
キャンベル「では、彼女は何者だというんだ!?」
マスター「おそらくは……スパイ」
キャンベル「スパイだと!!」
マスター「ああ……今回の作戦を妨害する為に……」
キャンベル「テロリストの仲間だとでもいうのか?」
スネーク「……俺も信じたくはない。だが彼女もFOXHOUND(フォックスハウンド)の人間だ……」
キャンベル「共に蜂起(ホウキ)してもおかしくはない?」
マスター「あるいは別の組織かもしれんぞ?」
――国防省情報局に誘導しようとしている。
キャンベル「別の……？　ありえんことだ……」
――逡巡するキャンベルに対し、冷酷に宣言するマスター。
マスター「あの女を拘束しろ、キャンベル」
キャンベル「何！」

マスター　「ナオミ・ハンターが我々を裏切っているのは確実だ。彼女を尋問して何が目的か吐かせるんだ」

キャンベル　「（深刻に）彼女が奴等のスパイだとすると大変な事になる……」

――（大佐はフォックスダイの事を言っている）

スネーク　「何の事だ!?」

キャンベル　「い、いや……」

マスター　「キャンベル、彼女に何か重要な機密をまかせているのか？」

キャンベル　「……」

マスター　「もしかして、DARPA（ダーパ）局長や、アームズ・テック社長が変死した事と関係が？」

――フォックスダイのことを聞き出そうとしている。

キャンベル　「私は……知らん」

マスター　「とにかくこれ以上、その女を作戦に参加させるのは危険だ」

キャンベル　「まっ、待ってくれ。彼女抜きでは本作戦は完遂できん」

スネーク　「やはり、隠しているな？」
キャンベル　「私にも時間をくれ。彼女を洗ってみる……」
マスター　「急げよ。一刻も早く彼女の目的をつかむんだ」
キャンベル　「わかった」
スネーク　「スネーク、時間をくれ」
　　　　　「こっちには時間が残されていないがな」

【メタルギア格納庫01オタコンからの無線機デモ1】

メタルギア格納庫一階

――レイブンを倒し、スネークはメタルギアの格納庫に潜入する。
――格納庫は吹き抜けになっており、中央にメタルギアが置かれているセリ台がある。メタルギアはセリ台に固定され、整備に必要な様々なパイプやケーブル、整備員が行き来するキャットウォーク等が網の目のように張り巡らされている。10メートルを超えるメタルギアを収納する為、天井は20メートル以上、オフィスビルの4階分の高度は充分ある。メタルギアを整備する為に設置されたキャットウォークを含むフロアは3階に別れている。フロアをつなぐのは階段ではなく、人一人が通れる幅の梯子である。
――メタルギアを載せているセリ台の下は一段（1フロア）低くなっており、脇に排水溝が流れている。排水溝には青白く発光する濁んだ液体、核廃棄汚染物質が流れている。この基地に保管され

ている廃棄処分の核兵器、放射性物質から漏れた汚染物質が排水口に侵入しているのが原因。

――二階への梯子を登ろうとするスネークに対し、オタコンからの無線連絡が入る。

無線を受信するスネーク。

オタコン「スネーク、僕だよ……」

スネーク「どうした？　うまく身を隠しているか？」

オタコン「ああ、ステルス迷彩のおかげだ」

オタコン「奴等、メタルギアの準備を完了したらしいよ」

スネーク「どこで情報を？」

オタコン「奴等の会話を傍受したんだ。今、どこ？」

スネーク「そのメタルギアの前だ…。しかし、どうも変だ」

オタコン「何が？」

スネーク「誰もいない。見張りも整備士も…。静かすぎる」

オタコン「準備完了ってことじゃないか。PAL（パル）コードは入力済みのようだし」

スネーク「どうすればいい？」

オタコン「ベイカー社長の言ってた解除システムを使うしかない」

スネーク　「しかし、鍵（PALキー）は三つのうちの一つしかない。それにオセロットが言っていた。この鍵（PALキー）には何か仕掛けがあると……」
オタコン　「まかせといてくれ……」
スネーク　「何か方法があるのか？」
オタコン　「実は今、コンピュータ・ルームにいるんだ。端末からベイカー社長の極秘ファイルにアクセスしようとしてる所さ」
スネーク　「ベイカー社長のファイル？　パスワードは？」
オタコン　「勿論、知らないよ。でも……」
スネーク　「（ちょっとびっくり）お前、ハッカーだったのか？」
オタコン　「そう、もっとも僕らしい呼び方だ」
スネーク　「できそうか？」
オタコン　「まだわからない。でも、やってみるよ」
スネーク　「頼む……」

【メタルギア格納庫02オタコンからの無線機デモ2】

メタルギア格納庫二階

――二階から三階への梯子を登ろうとするスネーク。そこにオタコンからの無線連絡が入る。無線を受信するスネーク。

オタコン　「スネーク、僕だよ……」

スネーク　「どうだ？」

オタコン　「なんとかね……三つ目のセキュリティに取りかかってる。こいつが結構、厄介で！」

スネーク　「なんとかなりそうか？」

オタコン　「僕はハッカーとしては一流なんだ」

スネーク　「わかった……」

【メタルギア格納庫03オタコンからの無線機デモ3】

メタルギア格納庫三階

――三階はメタルギアの上部と同じ高さ。メタルギアのランドセル（核モジュール）、レドーム部分、レールガンユニット、コックピットにそれぞれキャットウォークが伸びている。

――スネークが三階への梯子を上がるとメタルギアの背部（ランドセル）の核モジュールの上に出る。核モジュールの中央にさしかかった所で、オタコンからの無線連絡が入る。

――無線を受信するスネーク。

オタコン「スネーク、……やったよ！」

スネーク「セキュリティを破ったのか？」

オタコン「ビンゴ!!!」

スネーク「大した奴だ。それで？」

オタコン「メタルギアの極秘ファイルにアクセスした」

スネーク「ベイカー社長の言っていたＰＡＬ（パル）コードの解除方法は？」

オタコン「それはまだだけど……」

スネーク「そいつが必要なんだ」

オタコン「でもスネーク、わかったんだよ！」

スネーク「何が？」

オタコン「新型核弾頭の正体さ！」

オタコン「僕のにらんだ通り、レールガンで核弾頭を大砲のように射出するものだった…」

オタコン「燃料を必要としないから核ミサイルじゃない。だからいろいろな条約にも抵触しないはずだ」

スネーク　「詭弁だな」
オタコン　「有効な主張だよ。でも、この弾頭の本当の恐ろしさは別にある」
スネーク　「どういうことだ?」
オタコン　「(吐き捨てるように) ステルスなんだよ」
スネーク　「レーダーに映らないという意味か?」
オタコン　「うん。実はステルス・ミサイルの研究は1970年代後半から始まっていたんだ」
スネーク　「それがなぜ今まで実現されなかったんだ?」
オタコン　「ロケット噴射を隠すことが出来なかったからさ。敵の軍事衛星からね」
スネーク　「そういうものなのか」
オタコン　「だけどレールガンで射出するこの核弾頭は推進剤を燃やすことはない。だから既存の弾道ミサイル検知システムに捉えられる事はないんだ」
スネーク　「見えない核弾頭……」
オタコン　「当然、迎撃も不可能 (怒)」
オタコン　「しかも地下基地用に対処された地表貫通核弾頭だ」

スネーク　「湾岸戦争の教訓だな」

オタコン　「まさに世界を終わらせる悪夢だよ」

スネーク　「絶対的な軍事力。それでいて政治的にも核削減条約や核査察の網の目を抜ける事ができる」

スネーク　「大佐、そう言うことだ？　聞いているか？」

キャンベル　「聞こえている……」

スネーク　「第三次核兵器削減条約（START3）調印を控えて、こんな核兵器が暴露されると大変だな」

オタコン　「モチ、交渉は決裂。国連で非難され合衆国の権威は失墜……大統領は落選」

スネーク　「知ってたのか、大佐？」

キャンベル　「すまない…」

スネーク　「あんたは変わったな…」

キャンベル　「言い訳はせんよ」

オタコン　「スネーク、聞いてくれ。新型核弾頭だけど、完成していたのはあくまでも、シミュレーション上の事なんだ」

スネーク　「仮想実験での、という意味だな」

オタコン「だから彼らは、今回の演習を行ったんだ。シミュレーションを裏付けするデータを収集するためのね」
スネーク「演習の結果は？」
オタコン「想像以上にうまくいったようだ。ただし、その全記録データが見あたらない。このネットワーク内のどこにも見あたらないんだ。一番重要なデータのはずなんだけど……」
スネーク「そのデータならベイカー社長から預かった。光ディスクでな」
キャンベル「なんだと！　今も持っているのか？」
スネーク「いや、オセロットに奪われた」
キャンベル「なんてことだ……」
オタコン「リキッド達は、模擬弾頭を本物の弾頭にすり替えたんだ。だから起爆コードを入力するだけで発射が可能なんだ」
スネーク「撃てるんだな？」
オタコン「実験で使われた模擬弾と何もかも同じものだからね」
スネーク「解除方法は？」

オタコン　「それはまだわからない。別のファイルみたいだ。だから今、ベイカー社長の個人ファイルを調べてる」

スネーク　「頼むぞ……」

【メタルギア格納庫04オタコンからの無線機デモ4】指令室前

――三階西側にはメタルギアの管制を行う指令室があり、起爆コードの解除もここで行われる。

――スネークが指令室の前に到着した所で、オタコンからの無線連絡が入る。

――無線を受信するスネーク。

オタコン　「スネーク？」

スネーク　「わかったか？」

オタコン　「いや解除方法はまだだけど、ベイカー社長の思惑がわかった」

スネーク　「ただの金儲けだろ？」

オタコン　「アームズ・テック社の経営は僕が知ってた以上にあぶなかったみたい」

スネーク　「次期主力戦闘機の入札に失敗、ＳＤＩの中止と軍縮……」

オタコン　「吸収合併の話も上がってたようだ」

スネーク　「今回のプロジェクトにかけていたんだろうな」
オタコン　「DARPA局長に多額のワイロを渡して抱き込んでいたようだ」
スネーク　「金か？」
オタコン　「彼はかなりの核抑止論者だったようだよ」
スネーク　「そうか……。それで解除方法は？」
オタコン　「もう少し待ってくれ……」

【メタルギア格納庫05起爆コード入力デモ】　メタルギア格納庫三階　指令室前

――ステップを上がり、司令室の扉に近付くスネーク。扉は開放されている。中から、緊張した男たちの声が聴こえる。スネーク、足音を忍ばせながら、扉に近付き、壁に背を押しつける。

オセロット　「核発射暗号PAL（パル）を入力、安全装置（セイフティ）を解除しました」

――スネーク、扉越しに格納庫司令室を覗く。

――司令室に男が二人、立っている。一人はリボルバー・オセロット、もう一人は背を向けている為、確認できない。男は長髪で、上半身裸、かなりの筋肉質。

オセロット　「いつでも発射可能です」

リキッド「まだワシントンからの返答はない。俺達が腰抜けでない事を教えてやらねばならんようだ」
オセロット「目標をロシアのチェルノートンにセットしますか?」
リキッド「いや、変更だ。目標は……中国、ロプノール」
オセロット「どこですって? ボス?」
リキッド「お前もゴルルコビッチも自国に核が落とされるのを見たくはなかろう?」
——ボスと呼ばれた男、こちらを振り返り、オセロットに背を向ける。
——リキッドの顔がスネークにも確認できる。
スネーク「リキッド……」
——見つからないように、頭を少し下げるスネーク。
オセロット「どうして……あそこには何もありません」
リキッド「いや! 核実験場がある」
オセロット「核実験場?」
リキッド「いきなり都市に核を撃ち込んでは、全てが終わってしまう」

リキッド　「だが核実験場での核爆発ならば事実の隠蔽も不可能ではないだろう?　報復攻撃を回避するためにワシントンは躍起になって、もみ消しにかかる……」

オセロット　「両政府のトップ同士による極秘交渉ですね……」

リキッド　「勿論、中国も黙ってはいまい。その過程で新型核弾頭の存在も明らかになる。アメリカ政府の立場はどうなる?　そして大統領の立場は?」

オセロット　「包括的核実験禁止条約(CTBT)【注1】の手前、インドや中国は……そうか…!」

――オセロット、リキッドのしたたかさに頷く。

リキッド　「それに新型核弾頭の存在を知った各国は、我々に接触(コンタクト)を試みてくるはずだ。ワシントンも新型核弾頭の機密が他国に渡るとなれば、今回のように冷静を装ってはいられまい?」

――リキッド、オセロットに歩み寄り。

リキッド　「(自信たっぷりに)大統領は必ず折れる。彼等は交渉に応じる」

オセロット　「ビッグボスのDNA情報と5000万ドル……」

スネーク　「5000万ドル?　金か……」

リキッド　「これでゲノム兵達の奇病にも対処できる」
リキッド　「FOXDIE（フォックスダイ）の血清も上乗せした」
オセロット　「……局長に化けたオクトパス、アームズ・テック社長……。老人は早く発症するという情報は事実でしたね」
オセロット　「マンティスはマスクをしていた為に感染しなかったのかもしれません」
リキッド　「ウルフも発病しなかった。いつも飲んでいた精神安定剤のせいか……」
オセロット　「血中のアンフェタミンやアドレナリン濃度との関係ですか？　開発段階からいきなりの実戦投入、やはり確実性に欠けますね。奴らも切羽詰まっていたということですか……」
リキッド　「まぁ、いい。スペツナズ時代のお前の上官、元GRU（グルー）の——セルゲイ・ゴルルコビッチ大佐からの連絡は？」

——メタルギアの煽り映像。

オセロット　「彼はまだメタルギアの性能に疑問を持っています。我々との合流は、メタルギアの試射を確認した後にしたい、ということです」
リキッド　「（皮肉っぽく）随分と用心深い男だ」

オセロット「なに、心配はいりませんよ。メタルギアと新型核弾頭。大佐は喉から手が出るほど欲しいはずです」

オセロット「ロシアがかっての軍事的地位を取り戻すには、核先制使用権を振りかざしていくしかありません。撃墜不能の核弾頭。メタルギアは現代に、先制核攻撃の脅威を蘇らせることができる」

リキッド「弱体化した通常戦力を核兵器で補うつもりか……（吐き捨てるように）ゴルルコビッチという男、戦士ではなく政治屋だな」

オセロット「ですが、大佐からはハインドを始め、多くのロシア製重火器を預かっています」

リキッド「奴の部隊は千人を超える。我々と合流すればかなりの間、抵抗できるな」

リキッド「マンティスが死んで、ゲノム兵達の洗脳が解除されつつある。士気の低下が心配だ」

リキッド「彼等と合流して士気を高める」

オセロット「という事は？」

リキッド「俺達はどこにも行かない。ここに腰を下ろす。長い戦いになる」

オセロット「脱出をするのでは？」

リキッド　「俺達には新型核がある。そして、ゴルルコビッチ大佐の部隊も合流する」

オセロット　「世界を敵に回すつもりですか？」

リキッド　「いけないか!?　世界を敵に回して？」

リキッド　「俺達はここから新型核弾頭を自由に撃てるのだ。撃墜はおろか、追尾すらできないステルス弾頭を！　しかも、ここには核兵器が無尽蔵にある」

リキッド　「金とDNA情報が入れば、後は俺達のものだ」

オセロット　「ボス？　それでは――、ゴルルコビッチ大佐との約束は？」

リキッド　「ロシアの再建など、興味はない」

オセロット　「……まさか、ビッグボスの遺志を？」

リキッド　「今日から、ここをOUTER HEAVEN（アウターヘブン）と呼ぶ」

――スネーク、衝撃を受け、その場に座り込む。

スネーク　「ビッグボスの遺志……」

――オセロットの背後の監視カメラ（東側）、ややパンして、スネークの隠れている扉を映し出す。カメラがズームすると、スネークの横顔が大きく映る。

――オセロット、あたかもスネークの存在に気づいたように、続ける。

オセロット「ボス、PAL（パル）を解除される恐れは？　もう一度、起爆コードを入力すれば無効になるはず」

――3つのPAL用端末が点灯している。端末の背後にはメタルギアの巨大な頭部が見えている。

リキッド「心配はいらん。DARPA（ダーパ）局長もアームズ・テックの社長も死んだ」

オセロット「スネークが解除方法を？」

リキッド「拷問の際に調べたはずだ」

――拷問シーンを回想するかのように頭を軽く振るスネーク。

オセロット「奴は持っていませんでした」

リキッド「もう誰もメタルギアを止められはしない」

――窓際に身を乗り出して、リキッド、メタルギアを見る。

――スネークの姿が大きく、映っている。

――再び真顔になる二人。オセロット、辺りを見回しながら。

――（実はこの時のスネークの姿は監視カメラで発見されている）

オセロット「ところで、あの女はどうします？　やりますか？」

リキッド　「生かしておけ。キャンベルの姪だ。最後の手段に使える。スネークの奴にもな」

——メリルの情報にハッとするスネーク。

スネーク　「メリル……生きているのか」

——と、無線機が鳴る!!　ＣＡＬＬ音はスネークの耳にしか聴こえない。

——スネーク、無線を受信する。

【メタルギア格納庫０６起爆コード解除法無線機デモ】

オタコン　「スネーク？　ベイカー社長の極秘ファイルに侵入した」

スネーク　「でかしたぞ」

オタコン　「そっちの状況は？」

スネーク　「奴等、ＰＡＬ(パル)コードを入力済みだ」

スネーク　「オタコン、解除方法は？」

オタコン　「いいかい、スネーク。ベイカー社長の言っていた解除方法だけど……」

オタコン　「これは同時に起爆コードの入力にもなるようなんだ」

オタコン　「一度、入力すれば、起爆コードが解除される。そして解除された状態で入力すると再びロックされる仕組みだ。しかも、一回しか使えないんだ」

スネーク　「たったの一回か」

オタコン　「入力には鍵（PALキー）が必要だ。しかも三つの鍵（PALキー）だ」

スネーク　「そのうちの一つは持っている。残りは？」

オタコン　「急ぐなよ。そこがミソなんだ。君は三つの鍵（PALキー）を既に持っている」

スネーク　「もったいぶるなっ！」

オタコン　「いいかい、鍵（PALキー）は形状記憶合金で出来ている」

スネーク　「形状記憶合金？」

オタコン　「そうだよ。温度変化で形状が変わる金属だ。鍵（PALキー）はその材質で作られている」

スネーク　「この鍵（PALキー）が？」

オタコン　「温度変化で違う形の鍵（PALキー）になる仕組みさ」

スネーク　「つまり、この鍵（PALキー）が三つの鍵（PALキー）の役割をするのか？」

【メタルギア格納庫07鍵紛失デモ　メタルギア格納庫三階】指令室前

——司令室扉に身を隠すスネーク。オタコンに言われた形状記憶鍵を取り出す。
——鍵をつまみ上げ、見つめるスネーク。鍵がスネークの眼前でゆっくりと回転する。
——無線機を通して、オタコンが続ける。

オタコン　「そこから入力装置が見えるかい？　司令室の中央」

——首を伸ばして、司令室を覗きこむスネーク。リキッドとオセロットはモニターに向かって（立ったまま）何やら調整をしている。
——中央に置かれた3つの端末が見える。

スネーク　「見えるぞ」
オタコン　「その3つのラップトップ型の端末が入力装置だ」

——スネーク、双眼鏡で端末をクローズアップする。

オタコン　「端末にマークが書かれているだろ？」

——双眼鏡で端末の下を見る。机の上に図形。

オタコン「そのマークが各鍵に対応している」

オタコン「左から順番に入力する。左・中央・右の順番だ」

——双眼鏡で端末をパン。

オタコン「左が常温時の鍵…。図形を確認して」

——双眼鏡で左の端末をUP。

オタコン「隣が低温時の鍵…。図形を確認して」

——双眼鏡で中央の端末をUP。

オタコン「右が高温時の鍵」

——双眼鏡で右の端末をUP。

スネーク「わかった。温度によって鍵の形を変え、順番に入力すればいいんだな?」

オタコン「そうだよ。鍵は差し込むだけでいい」

オタコン　「各モジュールに鍵（PALキー）が挿入されるとハードディスクが読み込まれる。3つのハードディスクが全て読み込まれればコード入力は完了する」

オタコン　「ただし、鍵（PALキー）を3回使用すると、もう鍵（PALキー）は使えなくなる。一度しか使えない緊急用のシステムなんだ」

——再び、鍵を見つめるスネーク。

キャンベル　「その鍵（PALキー）に世界がかかってる」

——カメラ視点、監視カメラにスネークが映っている。カメラ、ズームしてスネークを大写しにする！

オセロット　「誰だっ！」

——オセロット、左腕で素早く銃を引き抜き、スネークに発砲する！　弾はスネークの眼前に跳弾、その衝撃で弾かれたように鍵を手放してしまうスネーク。

スネーク　「しまった!!!」

——鍵は回転しながら（スローモーション）、ゆっくりと奈落の底へ落下していく。階下の排水溝内に「ポチャリ！」という落下音がする。

スネーク　「鍵（PALキー）が排水溝に……！」

──手を伸ばし、階下を悔しそうに見るスネーク。基地内に警報がなる！

リキッド　「スネーク!!」

──リキッドの叫びに顔を上げるスネーク。司令官室の重厚な扉がさっと閉まる。

リキッド　「ここは防弾ガラスだ。俺が見ていてやる。そこで死ぬがいい」

──リキッド、楽しそうに肩をいからせて笑っている。オセロット、銃をホルスターに納める。なぜか余裕の二人。（スネークにコードを入力させる為）無線機からキャンベルの声が響く！

キャンベル　「いいか、鍵（PALキー）を拾うんだ！」

【形状記憶合金鍵01第一のコード入力デモ】

メタルギア格納庫三階　指令室

──入力された起爆コードを解除するために、スネークは水溝に落ちた形状記憶鍵を拾い、指令室に舞い戻った。

──端末に鍵を差し込むスネーク。モニターに確認のサインが表示され、タワー型がゆっくりと沈下して行く。

——モニターにインプットされた数万行のコードがもの凄いスピードで表示されていく。
——モニターを見つめるスネーク。
——司令室内にコンピュータヴォイスが鳴り響く。

アナウンス「第1のPAL(パル)コードが入力されました」

——端末に取り込まれていたカードキーが押し戻されて出てくる。

アナウンス「第2のPAL(パル)コード入力待機」

スネーク「まずは第1のPAL(パル)コード入力終了」

——スネーク、鍵を入手する。

スネーク「次は第2のコード入力。鍵(PALキー)を冷却させる」

【形状記憶合金鍵02第二のコード入力デモ】

メタルギア格納庫三階　指令室

——レイブンの部屋で形状記憶合金鍵を冷却・変形させたスネークは、指令室で第二の起爆コードの入力を行う。
——端末に鍵を差し込むスネーク。モニターに確認のサインが表示され、タワー型がゆっくりと沈下して行く。

──モニターにインプットされた数万行のコードがもの凄いスピードで表示されていく。
──モニターを見つめるスネーク。
──司令室内にコンピュータヴォイスが鳴り響く。

アナウンス　「第2のPAL（パル）コードが入力されました」

──端末に取り込まれていたカードキーが押しもどされて出てくる。

アナウンス　「第3のPAL（パル）コード入力待機」
スネーク　「第2のPAL（パル）コード入力終了」

──スネーク、鍵を入手する。

スネーク　「次は第3のPAL（パル）コード入力。鍵（PALキー）を暖める」

【形状記憶合金鍵03無線機デモ】　メタルギア格納庫三階　指令室

──形状記憶鍵を暖めて変形させるため、再び大型エレベーターに乗り溶鉱炉へと向かうスネーク。
──そこにマスターからの無線連絡が入る。

マスター　「スネーク。ナオミ・ハンターの事だが？」

スネーク　「その話なら、大佐が調査中だ」
マスター　「モニターをオフにしてくれ」
スネーク　「オフにした。作戦室には聞かれていない。話してもいいぞ？」
マスター　「すまない。キャンベルにも聞かれたくない」
スネーク　「で、どういう事だ」
マスター　「国防総省（ペンタゴン）に私の知り合いがいる」
スネーク　「ああ……」
マスター　「その友人から聞き出したんだ。……国防省情報局（DIA）主導で最近、ある暗殺兵器が開発されていたらしい」
スネーク　「暗殺兵器？」
マスター　「スネーク、FOXDIE（フォックスダイ）という言葉を聞いた事があるか？」
スネーク　「いや……」

——かぶりを振るスネーク。だが途中で司令室でのリキッドとオセロットの会話を思いだし、はっとする。

スネーク　「FOXDIE（フォックスダイ）？　……確かリキッド達が……」

マスター　「そうか。それは特定の人物だけを死に至らしめるウイルスらしい。私も詳しいことは聞いていないのだが……」

――マスターのまだるっこしい言い方に、スネーク、イライラする。

スネーク　「何がいいたい？」

マスター　「似ているんだよ」

スネーク　「何が？」

マスター　「死因だ。アームズ・テック社長とDARPA（ダーパ）局長、いや…デコイ・オクトパスか？二人とも心臓発作のようだったな？」

スネーク　「ああ」

マスター　「FOXDIE（フォックスダイ）による死も一見、心臓発作で倒れたように見えるらしい」

スネーク　「……」

――考え込むスネーク。しばらくして口を開く。

スネーク　「まさか、ナオミがそれを仕組んだと言いたいのか？」

マスター　「スネーク、よく思い出してくれ。ナオミに注射か何か、打たれなかったか？」

――絶句するスネーク。

スネーク　「……あのナノマシン」

マスター　「彼女が一番可能なポジションにいるのは確かだ。動機も目的もわからんが……」

スネーク　「……大佐はその事を？」

マスター　「わからん。まだあの女を尋問していないようだしな」

スネーク　「わかった。大佐に聞いてみる」

スネーク　「大佐、ナオミの件はどうなった？」

キャンベル　「ナオミなら……たった今、拘束した」

スネーク　「拘束？」

キャンベル　「アラスカ基地方面に向けて暗号を送っていた。信じたくはないが…。彼女はテロリストの一味だ」

スネーク　「確かなのか？」

キャンベル　「そうだ、間違いない。今、尋問中だ」

スネーク　「どんな尋問だ？」

キャンベル　「手荒いマネは避けたいが、ここには自白剤（チオペンタール）もない」

スネーク「何かわかったら、教えてくれ」

マスター「やはり、そうだったか？」

スネーク「ナオミが……信じられん」

マスター「おそらくFOXDIE（フォックスダイ）の血清があるはずだ」

スネーク「やけにこだるな？」

マスター「君も感染しているかもしれんからな」

スネーク「今は……大佐にまかせるしかない」

【形状記憶合金鍵04ナオミ自白無線機デモ】大型エレベーター

――溶鉱炉で形状記憶合金鍵を暖め、変形させたスネークは大型エレベーターでメタルギア指令室に向かう。

――スネークの無線機の呼び出し音が鳴る。無線を受信するスネーク。

ナオミ「スネーク、聴こえる？　私よ……」

スネーク「ナオミ!?　……君は一体」

ナオミ「（小声、早口、焦っている様子）今、キャンベルさん達の目を盗んで別の無線機で話を

しているの」

スネーク「ナオミ、大佐の話は本当なのか？」

ナオミ「……ええ。でも、全てが嘘ではないわ。本当の部分もある」

スネーク「君は誰なんだ？」

ナオミ「私にもわからない。親の顔も名前も…。今の名前や戸籍はお金で買ったもの。……私が遺伝子に固執した理由は本当よ」

スネーク「自分を知りたいから。そう言ったな？」

ナオミ「ええ、私は自分が誰だがわからない。年齢も、人種さえも……」

スネーク「ナオミ……」

ナオミ「私はローデシアで拾われた…。孤児だったの。80年代のこと」

スネーク「ローデシア？　ローデシア独立戦争の頃か？」

ナオミ「ジンバブエはイギリス領だった。当時はインド人が多く働いていた。だから、私の肌の色はその為かもしれない。でも、それもわからない……」

スネーク「ナオミ、どうして過去にこだわる？　今の自分を理解できればいいじゃないか？」

ナオミ　「今の私を理解？　誰も私を理解などしてくれなかったわ」
ナオミ　「私はずっと自分を探してた…。兄とあの人に逢うまではね」
スネーク　「兄？」
ナオミ　「そうよ。フランク・イエーガー」
スネーク　「なんだって？」
ナオミ　「兄も少年兵士だったわ。ザンベジ川で餓死寸前の幼い私を拾って、自分の食べ物を割(さ)いてくれた」
ナオミ　「そう、あなたが廃人にしたフランク・イエーガーは私の兄。唯一の家族」
スネーク　「馬鹿な…。グレイフォックスが？」
ナオミ　「私達はあの地獄で生きのびた。兄が守ってくれた。兄は私の全てだった。私の存在を、私という個人を証明する唯一の寄り所だった」
スネーク　「奴が君をアメリカに？」
ナオミ　「いいえ。モザンビークであの人に助けられた」
スネーク　「あの人？　……ビッグボスか？」
ナオミ　「ええ…彼は私達をこの自由の国へ導いてくれた」

ナオミ　「でも、兄はあの人とまた戦場へ戻っていったわ。そして戻ってきた時には……」

ナオミ　「私は復讐を誓った。兄を廃人とし、あの人を殺したあなたに。FOXHOUND（フォックスハウンド）に入ったのはそのためよ。ここにいれば、必ずあなたに逢える、そう思ったから……」

スネーク　「……思いは果たせたな？」

ナオミ　「そうね、2年も待ったわ……」

スネーク　「俺を殺す。ただそれだけの為に？」

ナオミ　「ええ……。そう、2年……。この2年間、ずっとあなたを待っていた。あなただけを……。恋焦がれるように……」

スネーク　「今も、憎いか？」

ナオミ　「……少し違う。あなたのこと、誤解していた所もある」

スネーク　「リキッド達とは？」

ナオミ　「（激しく）彼等も兄の仇よ」

スネーク　「まさか、君の前任者を殺したのも？　グレイ・フォックスをゲノム兵の実験体にしたという……」

ナオミ　「クラーク博士のこと？　いいえ、彼を殺したのは兄よ。私は事件を隠蔽（いんぺい）し、兄をかくまった……」

——気まずい、しばしの間。

スネーク　「……忍者（サイボーグ）…。グレイ・フォックスは俺を殺すためにここに？」

ナオミ　「……違う、と思う。兄はただあなたと闘う為だけに……。初めは分からなかったけど、今はわかる気がするわ。あなたとの闘い。それだけのために兄は生きているのよ、きっと……」

スネーク　「（友情と憐れみ）……フォックス……」

——スネーク、フォックスとの思い出にひたり、しばし沈黙。

スネーク　「ナオミ、教えてほしい……」

ナオミ　「……ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）の、こと？」

——しばしの間の後、つらそうに語り始めるナオミ。

ナオミ　「ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）は特定人物だけを死に至らしめるレトロウイルスよ」

ナオミ　「まずは体内のマクロファージ【注2】に感染する」

ナオミ　「FOXDIE(フォックスダイ)にはタンパク質工学(プロテイン・エンジニアリング)で生み出された認識酵素、特定の遺伝子配列に反応するようプログラムされた酵素が導入されているの」

スネーク　「その酵素で暗殺ターゲットのDNAを認識している?」

ナオミ　「認識酵素が反応して活性を示すと、FOXDIE(フォックスダイ)はマクロファージの組織を使って、TNFε(イプシロン)を作りはじめる」

スネーク　「何?」

ナオミ　「サイトカイン【注3】の一種で細胞死を誘発するペプチドよ。TNFε(イプシロン)は血流に乗って心臓に達し、心筋細胞のTNFレセプターに結合する」

スネーク　「それで、心臓発作を?」

ナオミ　「刺激を受けた心筋細胞は急激なアポトーシス【注4】を起こすわ。そして、その人物は…。死ぬ」

スネーク　「アポトーシス、細胞が自殺するための遺伝子プログラムか……」

——またもきまずい沈黙。

スネーク　「……ナオミ……」

ナオミ　「……なに？」

スネーク　「……当然俺も殺すようにプログラムしたんだろ？」

ナオミ　「……」

スネーク　「まだ、時間はあるのか？」

ナオミ　「……」

スネーク　「ナオミ、俺は君に殺されても仕方がない男だ。だが死ぬわけにはいかない。まだ
やる事が残っているんだ」

ナオミ　「……聞いて、ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）の使用を決定したのは私ではないわ」

スネーク　「君じゃ、ない？」

ナオミ　「あなたにＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）を注入したのは、作戦の一部。それをあなたに伝えたくて
……」

――少しの沈黙。

――ナオミ、意を決して口を開く。

ナオミ　「……私、自分に素直じゃない」

スネーク　「ナオミ？」

ナオミ　「私があなたに本当に伝えたかったのは……」
ナオミ　「スネーク……私……」
男の声　「おい、何をしている!」
ナオミ　「きゃっ!」

——無線の向こうから争う音。ビンタ。殴打。悲鳴。

ナオミ　「……ううっ…。スネーク……」

——無線、ノイズ音に変わる。

スネーク　「ナオミ!?」
キャンベル　「……スネーク、ナオミとの交信はこれ以上許されん」
スネーク　「何!」
キャンベル　「ナオミは作戦から外された」
スネーク　「ナオミをどうした?　FOXDIE(フォックスダイ)が作戦の一部とはどう言う事だ!?　大佐、彼女と話をさせろ!」
キャンベル　「できん、彼女は監禁した」

スネーク　「（怒）大佐！　……裏切ったな!?」

キャンベル　「（うしろめたい）今は余計な事を考えるな。メタルギアをくい止める事が先決だ」

キャンベル　「……スネーク、いいな」

【マスターの正体01第三のコード入力デモ】　メタルギア格納庫三階　指令室

――溶鉱炉で形状記憶合金鍵を暖めて変形させたスネークは、指令室で第三の起爆コードの入力を行う。

――右端の端末に鍵を差し込むスネーク。モニターに確認のサインが表示され、タワー型ハードディスクがゆっくりと沈下して行く。モニターにインプットされた数万行のコードがもの凄いスピードで表示されていく。

――モニターを見つめるスネーク。

アナウンス　「第3のPAL（パル）コードが入力されました」

――司令室内にコンピュータヴォイスが鳴り響く。

――端末に取り込まれていたカードキーは帰って来ない。

アナウンス　「全てのPAL（パル）コードを入力終了」

――3つの端末のモニターが全て、赤色に点滅する！

アナウンス　「起爆コードが入力されました」

――発射可能の警報が鳴り響く！　スネーク、予想外の反応に訝しがる。

スネーク　「なぜだ！」

――司令室のウィンドウ越しに見えるメタルギアに灯がともる（電源が入る）。
――まるで、生命が宿ったように輝く。

アナウンス　「発射準備完了しました」

スネーク　「俺は解除したぞ！」

――うろたえるスネークに対し、マスターから無線が入る。それを受信するスネーク。

【マスターの正体02マスターはリキッド無線機デモ】

マスター　「ありがとう、スネーク。これで起爆コードの入力は完了した」

マスター　「もうメタルギアを止める事はできない」

スネーク　「マスター、これは？」

マスター「わざわざ鍵（PALキー）を見つけてくれた上、起爆コードの入力までしてくれて、本当に恩に着る」

マスター「形状記憶合金とはお粗末な話だったが…」

スネーク「何のことだ？」

マスター「ＤＡＲＰＡ（ダーパ）局長の起爆コードは入手できなかったんだよ。マンティスの能力をもってしても読む事はできなかった。オセロットは起爆コードを聞き出す前に殺してしまった」

マスター「つまり、俺達は核を撃つことはできなかった。威嚇発射さえもな。まさに八方塞がりだった。核が撃てなければ、我々の要求は叶えられない」

スネーク「マスター、何を言ってる？」

マスター「（構わず）起爆コードを入手できなくなった以上、別の方法を探すしかない。そこでスネーク、貴様に賭けてみる事にした」

スネーク「何？」

マスター「デコイ・オクトパスをＤＡＲＰＡ（ダーパ）局長に変装させたのも、その一つだ。貴様から情報を得ようとしたのだが…。ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）とはな」

スネーク　「(怒り)全て最初から仕組まれていたというのか？　俺に起爆コードを解除させるために…」

マスター　「ん？　もしや、ここまで来れたのは自分一人の才能だと思っているのか？」

スネーク　「(怒り)マスター、あんたは？　あんたはスパイか？」

マスター　「(無視)とにかくこれで核発射準備は整った。新型核を撃ち込んで見せれば、政府の連中もＦＯＸＤＩＥの血清を渡さざるを得まい。奴らの切り札も無効になる…」

スネーク　「切り札？　一体？」

マスター　「お前を使ったペンタゴンの目論見は既に達せられているんだよ。あの拷問部屋で。(嘲笑)知らないのはお前だけだ。惨めだな、スネーク？」

スネーク　「貴様、誰だ!?」

マスター　「全て教えてやる。もしも俺の元まで辿り着けたら、な」

スネーク　「何処にいる？」

マスター　「すぐ近くさ」

――キャンベル、無線に割り込んでくる！

キャンベル　「スネーク、そいつはマスター・ミラーではない！」
マスター　「キャンベル、今頃気づいても遅いな」
キャンベル　「マスター・ミラーの遺体が彼の自宅で発見された。死後3日経ってる」
キャンベル　「マスターとの無線がオフにされていたので、わからなかった。メイ・リンによる
と発信源はその基地内だ」
スネーク　「じゃ、お前は？」
キャンベル　「お前が話していたのは…」
マスター　「俺だ兄弟」

——マスターの顔、サングラス取る。

スネーク　「まさかリキッドか!!」

——マスター、髪の毛を解くとリキッドの顔！

マスター　「貴様の役割は済んだ。あの世へ行けっ!!」

【マスターの正体03オタコンへ連絡無線機デモ1】

――毒ガスの噴霧された司令室に閉じ込められたスネークは、オタコンに無線で連絡をとる。

オタコン　「スネーク、そこは防弾ガラスだ。通常兵器では爆破できない！」
スネーク　「ここのセキュリティを解除できないか？」
オタコン　「やってみる。待っててくれ！」

【マスターの正体04オタコンへ連絡無線機デモ2】

※前項のデモ1後、一定時間以内にオタコンに無線連絡した場合

※一回目

スネーク　「まだか？　急いでくれ！」
オタコン　「待ってくれ！」

※二回目

スネーク　「もうもたん…」
オタコン　「もう少しだ、待ってくれ！」

※三回目

スネーク　「オタコン」

オタコン　「もう少しだ、待ってくれ！」

【マスターの正体05オタコンへ連絡無線機デモ2】

オタコン　「セキュリティに潜入した」

オタコン　「スネーク！　扉を開けるね！」

――扉が開くデモ（俯瞰ゲーム画面）。

スネーク　「はぁ…」

【マスターの正体06メタルギア始動デモ】　メタルギア格納庫3F

――スネークが3Fに降りると、メタルギアのノーズ（コックピット）に繋がるキャットウォークに走っていくリキッドが見える。リキッド、上半身裸のいでたち。ちょうどコックピットへのコーナーを曲がるところ。

スネーク　「リキッド!!」

――スネークの問いかけに、リキッド、立ち止まってこちらを向く。

リキッド　「スネーク!!　俺のサングラスもイカスだろ?」
　　　　――再び、キャットウォークを走り出すリキッド。
　　　　――スネーク、すかさず後を追う。
　　　　――リキッド、メタルギアのコックピットの前で立ち止まる。
　　　　――コックピットの扉は開いている。リキッド、余裕の態度(踊るように)でゆっくりと振り返る。
　　　　スネーク、キャットウォークの途中で立ち止まり、ソーコムか、ファマスを構える。
スネーク　「クソッ」
リキッド　「兄弟に銃を向けるのか?」
スネーク　「なぜマスターに化けた?」
　　　　――銃口をリキッドに向けるスネーク。銃を気にもせず答えるリキッド。
リキッド　「無論、貴様をうまく操る為だ。実際、お前はよく働いてくれた」
スネーク　「(悔しさに歯噛みする)クッ」
リキッド　「(嘲笑)国防総省(ペンタゴン)の連中もそう思ってることだろうよ」
スネーク　「さっきから何を言っている?」

リキッド　「与えられた命令を疑いもしないとは…。戦士の誇りを失い、駒に成り果てたか、スネーク？」

スネーク　「何？」

リキッド　「核発射の阻止、人質の救出、全て偽りの任務だ」

スネーク　「偽りだと？」

リキッド　「国防総省（ペンタゴン）としては、貴様と俺達が接触（コンタクト）するだけでよかったんだ。アームズ・テックの社長とデコイはそれで始末された」

スネーク　「まさか…」

リキッド　「（尊大に）そうとも。俺達だけを暗殺し、莫大な予算を投じたゲノム兵の遺体とメタルギアを無傷で回収するため。貴様は初めからＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）の運び屋（ベクター）として国防総省（ペンタゴン）に送り込まれたんだ！」

スネーク　「ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）…馬鹿な…ではナオミは…国防総省（ペンタゴン）と組んでいたのか？」

リキッド　「連中はそのつもりでいたようだが…。あの女、ただ利用されるような甘い女ではなかった」

スネーク　「何？」

リキッド「国防総省(ペンタゴン)に潜り込ませたスパイが突き止めた。作戦直前、ナオミはFOXDIE(フォックスダイ)のプログラムを改竄(かいざん)していたらしい。だがその理由も目的も不明だ」

スネーク「まさか——ナオミを逮捕させたのは、彼女の目的を掴むため？」

リキッド「その通りだ。くだらない恨みとは思わなかったが…しかし結局ナオミがFOXDIE(フォックスダイ)にどのような改変を加えたかは今もわからない…」

スネーク「血清があるのか？」

リキッド「まぁ、それももういい。俺は既に政府(ホワイトハウス)への要求に血清を上乗せしてある」

——リキッドの予期せぬ答えに銃口をやや下げるスネーク。

リキッド「あるはずだ。あの女にしかわからんがな…」

——首を横に振って否定する。

リキッド「だが…もうそれも必要無いかもしれんな」

スネーク「なぜだ？」

——再び、銃口をリキッドに向けるスネーク。

——リキッド、狭いキャットウォークを左右に行き来し出す。

リキッド　「貴様は潜入に成功、奴等が処分したかった俺達は目論見通り暗殺ウイルスに感染した」

リキッド　「オクトパスやアームズ・テック社長の死因は確かにウイルスだ」

リキッド　「しかし、オセロットも俺も――、そして運び屋(ベクター)である貴様にもまだその兆候が現れていない」

スネーク　「FOXDIE(フォックスダイ)の標的プログラムにバグが？」

リキッド　「さぁな。だが貴様に効果が無い以上、俺も安全だ。俺と貴様の遺伝コードは同じなのだから」

スネーク　「やはり俺とお前は…」

リキッド　「そうとも。だがただの双子ではない。遺伝子に呪いを込められた双子。恐るべき子供達(アンファン・テリブル)」

リキッド　「貴様はいい。親父の優性遺伝子を全てもらった」

リキッド　「俺は劣性遺伝子ばかりを受け継いだ。全ては貴様という優性種を作り出す為の仕掛けだ。俺という存在はお前の創造の為にだけにあった」

スネーク　「俺が優性だと？」

リキッド「そうだ。俺はその絞りカスだ。貴様にわかるか!? 生まれ落ちた時からクズと見なされ続けた惨めさが!」

スネーク「……」

——スネークの様子を見ながら、じりじりと移動するリキッド。

——リキッド、コックピットに片足を乗せる。

リキッド「だが——、親父は俺を選んだ」

スネーク「それがビッグボスにこだわる理由か? 歪んだ愛情だな」

リキッド「ハッ、愛情だと? 憎しみだよ。劣っていると知って俺を選んだことへの復讐だ!!」

——スネーク、リキッドの言う意味が分からず呆然とする。

リキッド「(嘲笑)これも貴様にはわかるまい。実の親父をその手で殺すことが出来た貴様には!」

リキッド「俺は復讐の機会すら貴様に奪われた。だから俺は、親父の遺志を実現してみせる。親父を越え、親父を殺す」

スネーク「おまえもナオミと同じだ(遺伝子に固執している)」

リキッド　「俺は貴様とは違う。自分の遺伝子に刻まれた運命を誇りに思っている」

——ヒラリと、コックピットに乗り込むリキッド。

——スネーク、立ち上がり、構わずトリガーを引く！

※残り弾数がある場合。しかし、銃弾はメタルギアの嘴フレームに跳弾する。

リキッド　「わざとはずしたのなら、一生後悔するぞ！」

※残り弾数がない場合。しかし、弾がない為に空撃ち。

リキッド　「わざとなら、一生後悔するぞ！」

——リキッド、コックピット内の計器類を点検、スイッチを叩く。

——リキッドの言葉が終わらないうちに、コックピット（嘴）が閉まる。

——スネーク、銃を連射するが、メタルギアには刃が立たない。

リキッド　「スネーク、この歴史的な兵器を拝みながら死んでゆけ」

リキッド　「兄弟へのせめてもの気遣いだ」

——メタルギア、微動を始める。ターボ音のような甲高い音が鳴り始める。メタルギアはT－REXのように、一度、空に向かって大きく、咆吼する！

——つづいて、メタルギアを載せているセリ台がゆっくりと上昇し始める。

リキッド　「今から、見せてやる。21世紀を導く悪魔の兵器をな」

——スネーク、激震に体勢を崩す。

——キャットウォークから階下の奈落を覗き込む。セリ台が上昇してくるのが見える。

——メタルギアに連結されていたガイドやケーブル等が次々と落下して行く。金属の軋む音、網膜を焼くスパークと小さな爆発！

——スネークの眼前を巨大なメタルギアの脚部がセリ上がっていく。

——天井からは様々な破片やパーツが落下してくる。落下物をよけながら、必死に手すりに掴まるスネーク。

——コックピットから豆粒のように遠ざかっていくスネークが見える。

——セリ台が3Fのキャットウォークに到達！

——スネークはたまらなくなって、セリ台に飛び移る。その直後、セリ台に弾かれて、それまでスネークが乗っていたキャットウォークが破壊される。

——セリ台に立つスネーク、メタルギアを煽りで見上げる。なおも上昇を続けるセリ台。

——メタルギアの足の爪、パイロンが巨木のようにデカイ！

スネーク　「動き出してしまった…」

スネーク　「こいつを止める方法は!?」

——メタルギア上昇。メタルギア、上階の天井を超える。

【メタルギアREX戦01グレイフォックス最後のデモ】

メタルギア搬出口

――レドームが炎に包まれる。スティンガー・ミサイルを構えたスネーク越しにメタルギア、膝を折って静止する。レドームは黒く焼け焦げたかに見える。

スネーク「やったか!?」

――スティンガーを肩から外して、メタルギアに接近してコックピットを凝視するスネーク。と、一度は停止したと思われたメタルギアのレドームが息を吹き返したように動く。

スネーク「クソッ!!」

――スネークの舌打ちを感知したように、立ち上がるメタルギア。メタルギア、膝を伸ばして大きく伸びをして咆吼する! スネーク、その巨大さに圧倒され、数歩後ずさりする。

――メタルギア、前傾姿勢で首を斜めに揺すりながら、鼻面をスネークに近づける。スネーク、後ずさりするが、背後の壁に行き着き、進路を塞がれる! メタルギアの嘴がスネークの眼前に迫る!

メタルギアのコックピットからリキッドの声!

リキッド「甘いぞっ! スネーク!! 死ねっ!」

――メタルギアの嘴、獲物を狙うT・REXの顎のようにスネークに伸びる。成すすべもなく、身体を硬直させるスネーク。

――と、スネークの前に立ちはだかる影！　スネークをたたき潰そうとした嘴は忍者によってがっしりとくい止められている。忍者は肩で嘴を捉え、全体重でかろうじて動きを制している。

忍者「早く逃げろっ！」

――スネーク、反射的に右前方へ飛び退く。

――メタルギア、首をスネークの方向へ向けようとするが、忍者ががっちりと抑えている為、ままならない。忍者、メタルギアを制止しながら、スネークに顔を向ける。忍者のフェイスが開いており、グレイ・フォックスの懐かしい顔が覗いている。フォックスの瞳にはスネークがつき合っていた頃の「知性と理性」の光が湛えられている。忍者の右上腕部がレーザーガンになっている。

忍者「早く逃げろ！」

スネーク「グレイ・フォックス！」

忍者「懐かしい名前だ。ディープ・スロートよりは聞こえはいい」

スネーク「やはり、お前だったのか？」

忍者「見ていられないぞ、スネーク。歳を取ったな」

リキッド「死に損ないめ！」

――メタルギア、体幹を震わせ忍者を吹き飛ばす。後方に弾き飛ばされる忍者。メタルギアは間髪入れず踏み潰しにかかる。忍者、それを横っ飛びで瞬時にかわし、そのまま宙転、着地、同時に右腕のレーザーガンをメタルギアに構える。

――忍者のレーザーはレドームを直撃、メタルギアの動きが一瞬混乱する。生じた隙を見逃さず、バルカンの火線をぬって、忍者は吹き飛ばすようなタックルをスネークに食わせ、共に物陰（側溝）に倒れ込む。

スネーク「フォックス、なぜだっ！　なぜ、俺にこだわるっ！」

忍者「俺は死の囚人だ。お前だけが俺を解放してくれる」

スネーク「フォックス、もうこんな事に関わるな……。ナオミはどうする？　ナオミはお前の為に復讐を……」

忍者「ナオミ……」

スネーク「ナオミを止められるのはお前だけだ」

――忍者、力なく首を振る。

忍者「俺にはできない」

スネーク「どうして？」

忍者　「ナオミの両親を殺したのは俺なんだ」

スネーク　「……!!」

忍者　「まだ若かった俺は、あいつまでは殺せなかった……。あいつを拾ったのは、後ろめたさに耐え切れなかったから。あいつの世話をしたのは、痩せこけた良心を満足させるため。それでも……ナオミは俺を兄と慕ってくれた」

スネーク　「フォックス……」

忍者　「はたから見れば俺達は仲の良い兄妹に見えたかもしれん。だが……あいつに瞳を覗かれる度、俺はいつも怯えていた」

スネーク　「……」

忍者　「お前から伝えてくれ。本当の仇はこの俺だと」

――メタルギア、二人を見つける。

リキッド　「そこか?」

――轟々たるバルカンの掃射。見る間に二人の隠れる物陰が削り取られていく。跳弾の火花に照らされるスネークと忍者。

忍者　「そろそろ決着をつける時だな。ディープ・スロートからの最後のプレゼントだ」

――忍者、スティンガーのミサイルを用意している。側溝の少し離れた所に忍者が持ってきたミサイルアイテムBOXが回っている。

忍者　「俺が奴の動きを止める！」

スネーク　「フォックス!!」

――スネークが止める間もなく、メタルギアに向かって飛び出す忍者。

――待ち構えていたメタルギアのバルカンが火を噴く。分身など、忍法の体術を駆使して掃射をかわし、瞬く間にメタルギアに肉迫していく忍者。だがその全ては避け切れず何発か食らい、体中からスパークが飛び散っていく。それでも忍者はメタルギアの下方、バルカンの死角に滑り込むことに成功。勝利を確信したようにレーザーガンを構える忍者。だがその瞬間、メタルギアの凶悪な顎が肉食獣の動きで一瞬にして忍者を捉えた。

リキッド　「中東では狐狩りの代わりにジャッカルを狩る。狐狩り(フォックスハウンド)ならぬ、ロイヤル・ハリヒア」

――さらに、力を増すメタルギア。その駆動音がより大きくなる。忍者、壁に挟まれる。忍者の身体からスパークが起こる。

スネーク　「フォックス！」

リキッド　「（挑発）強化骨格が何処まで保つかな？　スネーク！　こいつを見殺しにするつもりか？」

——忍者、レーザーガンをレドームに向けて連射する。全弾、レドームに命中する。センサーが消滅。

忍者　「追い込まれた狐はジャッカルより凶暴だ！」

——エネルギー弾を撃ちつくし、レーザーアームからカートリッジが床に落ちる。メタルギアのレドーム、完全に破壊される。忍者、左手が吹き飛ばされているため、腰のエネルギーパックを取る事ができない。

——破壊されたレドームを見て、スネーク。

スネーク　「レドームが壊れた？」

リキッド　「さすが、ＦＯＸの称号を持つ男！　だが、それまでだ」

——メタルギアの嘴状のコックピットがプシューッ！　と開閉する。嘴が上下に開き、中で操縦しているリキッドが露出する。忍者とリキッド、視線が合う。忍者、開いた下顎にさらに押される。フォックス、吐血する！

忍者　「うぐっ!! 今だっ！　スティンガーを撃ち込め！」
スネーク　「フォックスー」
リキッド　「撃てるか？　こいつも死ぬぞ！」
——勝利に酔うリキッド。スネーク、スティンガーを構える。忍者、ハッチを力尽くでスネークの方向に向けようとする。フォックス、スネークを見て言う。
忍者　「おまえの前で……これで本当に死ねる」
忍者　「ザンジバーランドの後、俺は戦いを取り上げられた……生きる実感の無い、ただ死んでいないだけの無意味な生。長かった。それが今、ようやく終わる」
——メタルギア、忍者を放して、一歩後退する。スネーク、さっとスティンガーを構えるが、コックピットが狙えない。忍者、壁からドサリと落下する。
——うつ伏せの忍者、顔を上げてスネークを見る。
リキッド　「死ね！」
——メタルギア、躊躇もなく忍者を踏みつぶす。強化骨格は一度はメタルギアの体重を受けとめる。巨大な足の間から忍者の最後の言葉が聴こえる。

忍者　「スネーク！　俺達は政府や誰かの道具じゃない！」
忍者　「戦うことでしか……自分を表現できなかったが……」
忍者　「いつも自分の意志で戦ってきた……」
　　　――メタルギアの足の下から血溜まりが拡がっていく。
忍者　「スネーク……、さらばだ」
　　　――メタルギアの足に力を入れるリキッド。
　　　――虫けらの様に潰されるフォックス。
スネーク　「フォックスっ!!」
リキッド　「愚かな男だ」
　　　――メタルギア、忍者の死体を駄目押しに踏みにじる。メタルギアの足の裏に小さな爆発と血飛沫が上がる。
リキッド　「(吐き捨てるように)死を懇願した時、勝敗は決まる」
　　　――メタルギア、大きな咆吼の後、頭を振ってスネークを見る。コックピットに乗るリキッドが見える。

リキッド　「わかったろう！　貴様は誰も守れやしないっ！」

リキッド　「自分の身さえな！　死ね！」

――メタルギア、バルカン砲で攻撃を開始する。メタルギア、バルカン砲で攻撃を開始する。

【メタルギアREX戦02VSメタルギア】　メタルギア搬出口

――むき出しになったメタルギア・コックピットのリキッドに向けてスティンガーミサイルを放つスネーク。

――リキッドにミサイルが命中する度に、リキッドがうめく。

リキッド　「うわっ!!」

リキッド　「やるなっ！」

【メタルギアREX戦03メタルギア爆発デモ】

メタルギア搬出口

――スネークの攻撃により、メタルギアのコックピットからスパークが上がる。
――リキッド、メタルギアの制御ができなくなる。
――制御不能となって、千鳥足のような不安定な歩行を行う。
――スネーク、様子を伺いながら、メタルギアに接近する。

リキッド「スネーク、踏み潰してやる！」

――リキッド、なんとかコントロールしようと躍起になるが、コックピットのスパーク、一段と激しくなる。メタルギア、フラフラと数歩歩いた所で立ち止まり、「ビクンっ」と身体を一度、伸ばして（痙攣したように）そのままの状態で通路の壁に凭れるように倒れる。メタルギアの衝突で、大きなスパークが起こり、続いて爆発が起こる。爆風がスネークを襲う！　スネーク、そのまま後方に弾き飛ばされ、搬出用の扉（壁）に後頭部を強く打ちつける！

スネーク「うぐっ!!」

――画面はスネークの主観（画面にブラー効果あり）。メタルギア、西側の壁に寄り掛かるように倒れている。コックピットから黒煙が上がったり、フロアには鉄骨などの落下物が転がっている。
――メタルギアのコックピットからフロアに降り立つリキッドの影。
――人影はスネークに近付いてくる。

――意識を失うスネーク。

――画面フェードアウト。

【全ての謎解き01スネーク覚醒デモ】　メタルギア上部　スネークの主観

――画面は強制主観モード。拷問時と同様。

――意識が回復するスネーク。

――画面フェードイン。

――スネークの右側には上半身裸のリキッドが立っている。

――リキッドはスネークに語りながら、メタルギア上部を左右に歩き回る。

リキッド「相変わらず、目覚めは悪いようだな?」

スネーク「リキッド……生きていたか?」

リキッド「俺は死なん。貴様が生きている限りは…」

スネーク「残念だったな、蹶起(ケッキ)とやらは失敗だ」

リキッド「(闘志)メタルギアを失った程度で、俺は闘いを終わらせる気はない……」

スネーク「闘い?　貴様の本当の狙いはなんだ!?」

リキッド「俺達のような戦士が活かされる時を再び築き上げる事」

スネーク　「それはビッグボスの妄想だ」
リキッド　「遺志だ！　親父の……冷戦の時、混沌の時……世の中が俺達を欲した」
リキッド　「俺達を評価した。俺達は必要とされた」
リキッド　「だが今は違う。偽善と欺瞞が横行し、争いがこの世から消えていく……」
リキッド　「自分を生かす場が失われる空しさ。時代から必要とされなくなる恐怖……。お前にはよくわかるだろう？」
スネーク　「……」
リキッド　「俺は新型核を利用して当面の運動資金を得る。そして世界的なテロを行い、このふやけた世の中を再び混沌の世界へと誘う」
リキッド　「紛争が紛争を呼び、新たな憎しみを生む。そして、俺達の生態圏は拡大していく」
スネーク　「人の支配が続く限り、世界中の何処かで紛争は起こっている」
リキッド　「バランスが問題なんだ。親父の目指したバランスが」
スネーク　「それだけの理由で？」
リキッド　「充分な理由だろう？　俺や貴様にとっては」
スネーク　「俺はそんなものは望まない！」

リキッド　「ハッ。嘘をつけ。ではなぜ貴様はここにいる？　仲間に裏切られながらも任務を投げ出さずになぜここまで来た？」

スネーク　「……」

リキッド　「俺が代わりに言ってやろう」

リキッド　「殺戮を楽しんでいるんだよ、貴様は」

スネーク　「何を！」

リキッド　「（スネークを遮って）違うとでもいうのか？　貴様は俺の仲間を大勢殺したじゃないか？」

スネーク　「それは……」

リキッド　「（含み笑い）とどめを刺す時のお前の顔……実に生気に満ちていたぞ」

スネーク　「（ムキになって否定）違うっ！」

リキッド　「自分の内の殺人衝動、それを否定する必要はない。俺達はそのように創られたんだからな」

スネーク　「つくられた……だと？」

【全ての謎解き02スネーク覚醒デモ】　メタルギア上部　客観

――手錠を填められているスネークの眼前で演説をするリキッド。ここで初めて、俯瞰遠景カットを見せて、ユーザーにスネークのいる位置関係を理解させる。メタルギアの大きさと高さを強調する。スネークは上半身裸。

リキッド「アンファン・テリブル、恐るべき子供達。その計画はそう呼ばれた。1970年代のことだ。最強の兵士を人為的に生産しようという計画だった。雛型として選ばれたのは、当時生きながら、伝説の傭兵として名を馳せていた男……」

スネーク「……ビッグボスか」

リキッド「だが親父は戦場で負傷、既に不能者だった。だから俺達は親父の体細胞を使って造られた。前世紀のアナログクローン技術とスーパーベイビー法によって」

スネーク「スーパーベイビー法？」

リキッド「細胞核を使って造られた受精卵を分割、8人のクローンベイビーを子宮に移す。その後、ある時期で6つの胎児を意図的に間引き、犠牲にすることで成長能力を増大させる手法だ。俺達はもともと8つ子だったんだよ」

スネーク「8つ子……」

リキッド　「そう、俺達を造るために6人の兄弟が殺された。俺達は生まれ落ちる前から人の死に関与していたんだ」

――ショックを受けるスネーク。それをなぶるように続けるリキッド。

リキッド　「そして、俺と貴様。同じDNAを持つ2つの受精卵が生き残った。だが――、それで終わりじゃない」

リキッド　「俺は生贄にされた。優性遺伝子だけを発現させた表現型……貴様を造るために。劣性遺伝子ばかりを発現させられた」

リキッド　「貴様は、兄弟の命を奪って生まれたんだ！」

――愕然とするスネーク。それを見たリキッド、愉悦に満ちた笑みを浮かべてさらに続ける。

リキッド　「だが――、残った兄弟は俺と貴様だけではないぞ」

スネーク　「何？」

リキッド　「ゲノム兵達だよ。彼等も親父の遺伝子を受け継いでいる。俺達と違って、デジタルな方法で」

――DNA解析、ターゲッティングの実験風景の映像を挿入。

リキッド　「前世紀にヒトゲノム計画が完了し、遺伝子の働きが調査された」

リキッド　「親父の遺伝情報のおかげで、すでにソルジャー遺伝子はキラー・インスティンクトと言われるものも含めて、60以上、発見されている」

リキッド　「判明したソルジャー遺伝子はその都度、遺伝子治療（ジーンセラピー）を経て次世代特殊部隊隊員に組み込まれる。それがゲノム兵だ」

——メタルギア上部、客観。

リキッド　「そうとも、お前がこの基地で殺してきたゲノム兵は、俺達と同じDNAを持つ兄弟なんだよ」

——ショックを受けるスネーク。

スネーク　「ゲノム兵が……」

リキッド　「ああ。親父の遺伝配列から作為的に造り出された、いびつな生き物。彼等は同胞だ。多くの犠牲の末に生まれたという意味でも」

スネーク　「犠牲？」

リキッド　「人体実験だ」

——湾岸戦争のニュースフィルム
——ガルフウォーシンドロームなどの映像を挿入。

リキッド　「91年、湾岸戦争。軍は極秘裏にソルジャー遺伝子を、兵士に注入していたんだ。帰還兵の間で問題になっている『湾岸戦争症候群（ガルフ・ウォー・シンドローム）』【注5】はこの副作用だ」

スネーク　「馬鹿な。湾岸戦争症候群（ガルフ・ウォー・シンドローム）の原因は劣化ウラン弾の放射能や、殺虫剤が原因のはずだ」

リキッド　「（嘲笑）みな国防総省（ペンタゴン）が流したカバーストーリーだ。他にも神経症説、化学兵器説、細菌兵器説……いろいろある。毒ガス探知車の導入や対サリン薬の投与も遺伝子実験を隠蔽するための策略だった」

スネーク　「それでは…、帰還兵の家族で起こっている『ガルフ・ウォー・ベイビー』も……」

リキッド　「そう。彼等こそ俺達の最初の兄弟だ」

スネーク　「それで完成したのが次世代特殊部隊？」

リキッド　「（嘲笑）完成？　馬鹿を言うな。出来損ないだ」

スネーク　「？」

リキッド　「俺達は滅びかけているからな」

スネーク「何？」
リキッド「左右非対称の理論という言葉を聞いた事があるか？」
スネーク「…？」
――スネークの回りを歩き回るリキッド。目でリキッドを追うスネーク。
リキッド「自然界では左右非対称が標準だ。逆に絶滅種には左右対称の兆候が見られる。ゲノム兵にも現われているんだよ、その左右対称の兆しが。それは俺にも……そして貴様にもあるはずだ」
スネーク「！」
リキッド「そうだ、俺達は皆、遺伝子レベルで死にかけている」
リキッド「いつ発病するかわからん。それを調べる為にも親父のゲノム情報が必要なのだ」
スネーク「ビッグボスの遺体を要求したのは、同族を救うためだとでもいうのか？」
リキッド「(嘲笑)兄弟同士は子を為さない。それにも関わらず助け合うのは、なぜだか知っているか？」
リキッド「同種の遺伝子を後世に伝える確率が高くなるからだ。自然選択の末、血縁は互いに利他行動をとるようになった。遺伝子には血縁を助けるよう記されている」

スネーク「ゲノム兵を助けるのは、遺伝子の命令だと？」

リキッド「誰も遺伝子に逆らう事はできない。それは運命だ。まして俺達は——親父の遺伝子を再現する為にだけ生み出された存在だ。だから…俺は自分の遺伝子に従う」

リキッド「そしてそれを乗り越える。呪われた運命を打ち破るために」

スネーク「……」

リキッド「（静かな殺気）そのために……まず貴様を殺す」

——リキッド、スネークの前に身を屈める。睨み合う二人。

【全ての謎解き03メリル発見デモ】

——リキッド、2、3歩後退して、スネークの背後を指す。

リキッド「後ろを見てみろ！」

——スネーク、首を回して、核モジュールの方角をみる。

スネーク「メリル！？」

——傾いた核モジュールの先端にメリルが縛り付けられている。メリルはうつむいたまま、身動きしない。死んでいるようでもあり、生きているようにもみえる。

スネーク　「生きているのか？」

リキッド　「どうかな？　数時間前までは息をしていた」

リキッド　「何度も、貴様の名前を呼んでいた……」

※拷問イベントで服従しているとメリルは既に死んでいる。

スネーク　「メリル……」

リキッド　「馬鹿な女だ。名前もない男に惚れるとはな」

スネーク　「俺にも名前はある」

リキッド　「無い！　俺達には過去も未来もない」

リキッド　「あると、すれば……親父から受け継いだ遺伝子に刻まれている運命が全てだ」

スネーク　「メリルを放せ！」

リキッド　「お前との決着をつけたらな。俺達にはもう時間がない」

スネーク　「……ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）のことか？」

リキッド　「いや――、メタルギアの破壊を知った国防総省（ペンタゴン）はある決定を下したそうだ。もはや目標破壊評価（ボンダー・レポート）の必要も無い」

リキッド　「詳しくは聞き耳を立てているご立派なキャンベルに聞いてみるがいい」

【全ての謎解き04キャンベル更迭無線機デモ】

スネーク「聞こえるか？　大佐！」
キャンベル「ああ……聞いている」
スネーク「国防総省（ペンタゴン）は何をしようとしているんだ。大佐、答えろ！」
キャンベル「……国防省長官自らが作戦の指揮に乗り出した。早期警戒管制機（AWACS）でそちらへ向かっている」
スネーク「何のために？」
キャンベル「空爆だ」
スネーク「なんだって？」
キャンベル「それだけじゃない。先程B2爆撃機がカレーナ基地を離陸した。地表貫通式戦術核爆弾B61・13を搭載してな」
スネーク「まさか。メタルギアは破壊した。ちゃんと、国防長官に伝えろ！」
キャンベル「長官はナオミの裏切りを知って、FOXDIE（フォックスダイ）の効果に疑問を持った。スネークのメタルギア破壊で核攻撃を受ける恐れもなくなった今、彼はもっとも直接的な方法で事実の隠蔽を図るつもりなんだ」

スネーク　「……全ての証拠とそれを知る者をこの基地ごと核で吹き飛ばすつもりか」
キャンベル　「スネーク、だが心配するな。核攻撃は私が中止させる」
スネーク　「何？」
キャンベル　「例え形式だけであっても、本作戦の指揮権は私にもある。私が爆撃中止命令を出せば命令系統が混乱し、少なくとも時間は稼げるはずだ。その間に脱出してくれ」
スネーク　「大佐、そんなことをすれば……」
キャンベル　「いいんだ、スネーク。……実は極秘裏にFOXHOUND（フォックスハウンド）の内偵捜査は行われていたんだ。そしてメリルは蜂起（ホウキ）当日にこの作戦に編入された。私を脅迫する材料として……」
スネーク　「くだらん」
キャンベル　「……すまなかった。メリルの命と引き替えに協力を強いられていたのだ」
キャンベル　「さぁ早く逃げろ、スネーク」
スネーク　「いいのか？　……全てを失うぞ」
キャンベル　「構わんさ。本当に失ってはいけないものを、守ることができる」
スネーク　「大佐……」

キャンベル　「さあ爆撃中止命令を出そう。これで後戻りは出来んな…。何をする！」

——無線機の向こうで銃声と物音。

メイ・リン　「スネーク!!」
スネーク　「メイ・リン、大佐はどうなった！」
メイ・リン　「……信じられない」
スネーク　「どうした！」
メイ・リン　「スネーク、大佐が!!」

——ノイズと共に国防長官登場!!

長官　「ロイ・キャンベルはたった今、解任した」
長官　「私は国防省長官、ジム・ハウスマンだ」
スネーク　「大佐をだせ！」
長官　「機密漏洩と国家に対する反逆罪で逮捕監禁した」
スネーク　「馬鹿な……」
長官　「そう、馬鹿な男だ。指揮権を与えられたと、本気で信じていたとはな…」

スネーク　「貴様……！」
長官　「全てを海に沈める。大統領もそれを望んでおられるだろう」
スネーク　「大統領命令か？」
長官　「大統領は忙しい。私が全責任を負っている」
スネーク　「アメリカ国内を核攻撃してマスコミにどう説明する？」
長官　「心配するな、隠蔽用のカバーストーリーは用意してある。テロリストが核を暴発させたという事にする」
スネーク　「くそっ！」
スネーク　「ここの研究員もゲノム兵の連中もみんな死ぬぞ」
長官　「ドナルド…。DARPA局長は死んでしまった……」
スネーク　「やはり、DARPA局長は殺すつもりはなかったんだな？」
長官　「奴は親友だった」
スネーク　「他の連中は、どうでもいいっていうのか？」
長官　「そうだな、光ディスクの内容を転送すれば考えてやってもいい」
スネーク　「なんのことだ!?」

長官　「今回の演習データだ。ドナルドが持ち帰るはずだった」
スネーク　「持っていない」
長官　「そうか、まあいい……」
長官　「貴様ら二人は、70年代の恥部だ。誰もが蒸し返したくない暗部だ。このまま生かしておくわけにはいかない」
長官　「爆撃までの時間、せいぜい仲良くな。旧態政府の亡霊達」
——無線機切れる。

【全ての謎解き05VSリキッド前デモ】　メタルギア上部

——リキッド、笑いながら、スネークに近付く。
リキッド　「お互い脱出路は断たれたようだな」
——リキッド、スネークの手錠を解く。
——スネーク、手首を動かして、関節と筋肉を柔軟にする。リキッド、スネークに背を向けたまま、核モジュールの方へ歩いていく。
リキッド　「空爆の前に決着をつけよう」

――スネーク、身体のなまりを解くようにゆっくりと立ち上がる。

リキッド　「貴様は俺から何もかも奪った」

――リキッド、縛られているメリルの方へすたすたと歩いていく。

リキッド　「貴様を、貴様の遺伝子をここで否定することで、俺はその全てを取り返してみせる」

――リキッド、メリルの顎を右手で軽く上げてみせる。

――スネーク、リキッドの行動が読めない。

リキッド　「お前との決着には美しい生け贄だ」

――リキッド、メリルの顎を降ろして、スネークを見る。

リキッド　「見えるか？」

リキッド　「これは俺達の決着を刻む砂時計だ」

リキッド　「この女を死へ誘うと同時に、この核モジュールも吹き飛ぶ仕組みになっている」

リキッド　「貴様が勝てば、女は助かるかもしれない」

――メリル、意識はない。死んだように眠っている。

リキッド　「空爆までの一時(ひととき)を女と愛しあう事もできる」

リキッド　「このラインを超えるとここから落下する。この高さだ…、ひとたまりもない」

――足下を覗く、スネーク。床の鉄板まで十数メートルある。

リキッド　「いくぞっ！　スネーク!!」

――リキッド、人間離れした跳躍をして、核モジュールからメタル頟に降り立つ。

――ファイティング・ポーズを取るリキッド。同じく、ファイティング・ポーズを取るスネーク。

【最後の死闘01メリル再会デモ（死）】

メタルギア上部

※拷問イベントで服従している場合、メリルが既に死んでいる。

――メリルに駆け寄り、メリルの呪縛を解くスネーク。崩れるように倒れるメリルを抱き止める。

しかし、メリルは既に冷たくなっている。

スネーク　「メリル？」

――メリルの頬に手を置くスネーク。頬から首筋に恐る恐る、手を這わせる。

スネーク「……メリル？」

──首筋からは脈動は感じられない。メリルの死を理解するスネーク。

スネーク「メリル!?」

──スネーク、天を見上げて声の限り叫ぶ。スネークの絶叫が誰も居ないフロアに響く。スネーク、核弾頭の上でしばらくメリルを抱きしめたまま打ちふるえる。

──スネーク、メリルを床に降ろす。

スネーク「……済まない」

──メリルの身体が壊れた人形のように床に倒れる。当然、メリルから返答もない。

スネーク「くそっ!!」

──スネーク、拳で床を思いっきり叩く。

スネーク「俺は恐怖に屈した。苦痛に服従した……痛みから逃れるために君の命を売った……」

──床を叩き、叫び続けるスネーク。

スネーク「俺は敗者だ。君の望んだようなヒーローではない！」

スネーク「……負け犬だ！」

——既に嗚咽気味のスネーク。

スネーク「メリル、済まない。許してくれ……」

——再び、メリルを抱き起こすスネーク。メリルの鼓動亡き胸に顔を深く埋める。

——突然、虚空に響くオタコンの声。

オタコン「メリルはもう誰を許すこともできないよ」

スネーク「オタコン？」

——オタコンがステルス迷彩を解きながら、フッと静かに現れる。

オタコン「彼女は逝ってしまった……」

スネーク「……俺のせいでな」

——オタコン、怒るでもなく、叱咤するでもない静かな口調で、無表情に語る。

オタコン「そうやって、自分を責めるのは楽だろうね。そうする事で、彼女の死から目をそ

らすことができる」

スネーク「お前に何が分かる！　メリルは死んだ。俺は負けたんだ!!」

オタコン「じゃあ、ここで死ぬかい？　彼女と一緒に」

スネーク「……」

オタコン「スネーク、人は死ぬ。でも死は敗北ではない。……ヘミングウェイの言葉だ」

スネーク「……」

オタコン「僕もウルフを失った。でもそれは敗北じゃない」

オタコン「僕もウルフもこれからなんだ。敗北したわけじゃない」

スネーク「これから？」

――メリルを床に戻すスネーク。

オタコン「確かに命は失われたけど、恋は失ってはいない……」

オタコン「人生に勝ち負けなんてないよ。そうだろ？」

スネーク「……」

――沈黙したままメリルを見るスネーク。

オタコン　「生き抜こう、スネーク？」

——スネークの肩に軽く手を置く。

オタコン　「この隣に駐車場がある。そこから地上へ抜けられる。さあ？」

オタコン　「セキュリティは解除した。大丈夫さ。逃げられる……」

オタコン　「この僕が保証するよ」

——オタコンの変わりようにビックリするスネーク。

スネーク　「オタコン？　おまえ……」

——オタコン、両手をあげて陽気に続ける。

オタコン　「もう、過去を悔いる生き方はやめたんだ」

オタコン　「人生は失うばかりじゃない……」

——と、空爆開始の轟音が響きわたる。オタコン、大きく振動する天井を見てつぶやく。

オタコン　「始まった……あいつら、物を壊す時だけせっかちなんだ」

オタコン　「破壊するがいい……でも人の勇気を壊すことなんかできない」

——そこへ2発目の振動。今度のは大きい。続いて、また振動。爆発の切れ目が次第に短くなっていく。

——スネーク、オタコンの仕草を見て決意する。

スネーク「わかった。行こう!」

——スネーク、立ち上がり、メリルを一瞥する。

スネーク「メリル、俺を見ていてくれ……」

スネーク「伝説の男かどうかを……」

——メタルギア脚部前。

——地上に降りた二人、メタルの足下にある扉を目指す。

スネーク「さあ、急ごう!」

オタコン「スネーク、外は寒い。そのままじゃ、凍死するぞ」

——メタルギアの巨大な脚部の陰にスネークのスニーキングスーツが転がっている。

スネーク「俺のスニーキング・スーツだ」

——スネーク、服を着るため、陰に入る。

オタコン「急いで」

——大きな爆発が再び襲い、オタコン不安げに天井を見上げる。メタルギアが爆発の振動で大きく傾く。壁にかろうじて引っかかっていたメタルギアが少しずつスライドする。

オタコン「早くっ！」

——スネーク、着替えて登場。いつものスニーキング・スーツを着用している。

オタコン「やっぱりそれが君の制服だ」

——二人、扉を潜る。一瞬遅れて、メタルギア、崩れ落ちて二人の通った小さな通用口を塞ぐ！

【最後の死闘02メリル再会デモ（生）】

※拷問イベントで服従していない場合、メリルは生きている。

——スネーク、メリルに駆け寄り、メリルの呪縛を解くスネーク。崩れるように倒れるメリルを抱き止めるスネーク。

スネーク　「メリル？」

——メリルの頬に手を置くスネーク。

スネーク　「メリル!?」

——メリル、ややあって意識を取り戻す。

メリル　「スネーク!?」

——焦点がまだ合わないメリル。

メリル　「あなたなの？」

——目の前のスネークを確認してすがりつくメリル。

メリル　「スネーク!!　生きてたのね！」

——しばらく、スネークの首に腕を巻き付けてはしゃぐメリル。

メリル　「よかった……」

——これまでのメリルとはまるで別人。感情を素直に出している。そんなメリルの抱擁に面食らうスネーク。

スネーク　「メリル？」

——怪訝な態度を示すスネークにメリル、さっと腕を放す。

スネーク　「メリル、大丈夫か？」

メリル　「大丈夫か、しか言えないの……？」

スネーク　「メリル。つらい思いをさせた」

——メリル、甘えるようにゆっくりと首を振る。

メリル　「いいえ。つらくはなかったわ。奴等の拷問に私、屈しなかった」

スネーク　「拷問？」

メリル　「……それ以上のひどい事も……」

——メリルの受けた仕打ちに気付き、一瞬言葉を失うスネーク。

メリル　「私も闘ってたの。あなたと同じように」

――スネーク、感心。メリルを認める口調。

スネーク　「強くなったな」

メリル　「闘うことで、あなたに近づけた感じがする。あなたの存在を身近に感じたわ。だから、耐えられた」

――メリル、少しうつむく。大柄な肢体が妙に小さく見える。

メリル　「けど……、恐かった……」

――スネークはメリルが自分のような戦士ではなく、一人の強がりな女の子だと言う事実に気づく。

スネーク　「すまん」

メリル　「あやまらないで」

スネーク　「……」

メリル　「でもおかげで気付くことができたわ。恐怖と恥辱の中…、ひとつだけ確かな気持ちがあったの。それにすがる事ができたから耐えられた。あの間……願った事はひとつだけ……」

——メリル、顔を上げスネークを見つめる。潤んだ瞳いっぱいに、今まで押さえつけてきた感情があふれている。

メリル　「(少し泣き) スネーク、あなたに…逢いたかった……」

スネーク　「メリル……」

——見つめあう二人。

——スネークの無線機の呼び出し音がなる!

メリル　「……!!」

スネーク　「無線だ」

——スネーク、無線を受信する。

【最後の死闘03メリル再会後無線機デモ】

オタコン　「スネーク、僕だよ」

スネーク　「オタコン、いいニュースだ。メリルは無事だ」

オタコン　「よかった!!! そうか、無事だったんだ。やったじゃないか?」

スネーク　「悪いニュースもある。もうすぐ空爆が始まる」
オタコン　「そうか、やっぱり僕たちは見捨てられたんだ」
スネーク　「ここから脱出できるか?」
オタコン　「脱出?　……ああ、できる。そこから地上への搬出用道路がある」
オタコン　「スネーク達がいる、その隣に駐車場があるんだ。そこから地上へつながっている」
スネーク　「正面の扉か?」
オタコン　「いや、正面扉の西に小さな出入口がある」
スネーク　「セキュリティは大丈夫なのか?」
オタコン　「たった今、解除したところさ。僕を誰だと思ってるんだい?　脱出路の方もこれからかかる……」
スネーク　「お前はどうする?」
オタコン　「僕?　僕は…。ここに残る」
オタコン　「脱出路を確保するには、もう少し時間が必要なんだ」
スネーク　「しかし……」
オタコン　「脱出路の解除はかなり厄介なんだ!　僕にしかできない」

スネーク　「オタコン?」
オタコン　「心配はいらないよ。僕はここに残る。自分の意志で決めた事だ」
スネーク　「地下基地といえども地表を貫通する核爆弾だ。容赦ないぞ」
オタコン　「もう、過去を悔いる生き方はやめたんだ」
オタコン　「人生は失うばかりじゃない……」
スネーク　「……」
オタコン　「スネーク、僕は以前より充実してる。生きる目的ができたんだ」
スネーク　「わかった。死ぬなよ」
オタコン　「それはお互い様。メリルと仲良くな」
スネーク　「ああ……」
オタコン　「じゃあ、切るよ。必ず脱出路を何とかするから」
スネーク　「ありがとう」
オタコン　「ありがとう、か…。いいもんだな…」
スネーク　「……信じてるぞ」
オタコン　「ああ。ありがとう、スネーク」

――無線機を切るスネーク。

【最後の死闘04メリルとの脱出デモ】

メタルギア上部

――メリル、通信内容をわざと聴かなかった振りをして気遣う。しばらくの沈黙の後、スネークが切り出す。

スネーク 「さぁ、脱出するぞ」
メリル 「彼は？」

――静かに首を振るスネーク。

メリル 「オタコンはどこに？」
スネーク 「奴は…今闘っている」
スネーク 「今までの自分と、これからの自分の為に……」
メリル 「そして、私達の為に？」
スネーク 「そうだ、奴の勇気を無駄にはしない」
メリル 「わかったわ」

――スネーク、メリルの手を引いて、核モジュールから離れる。
――メタルギア脚部前。
――メリル、メタルの脚部から飛び降りる。下でメリルを受けとめるスネーク。メリルを抱きとめたスネーク。メリル、両手をスネークの首に回している。しばらく目を見つめ合う二人。メリルを抱き抱えるスネークの両手に力が入る。

スネーク「メリル！」
メリル「スネーク……」

――初めてロマンチックな雰囲気になる二人。顔を寄せ合うスネークとメリル。
――と、空爆開始の轟音が響きわたる。スネーク、大きく振動する天井を見てつぶやく。

スネーク「始まったぞ」

――振動は地下基地にも伝わり、バランスを崩しそうになるスネーク。

メリル「重いでしょ、私？」
スネーク「どうも俺達にラブシーンは似合わんようだ」

――メリルを降ろすスネーク。

メリル　「そうね。お互い様……」
　　——メリル、スネークの胸をこづいて笑う。
　　——そこへ2発目の振動。
　　——今度のは大きい。
　　——続いて、また振動。爆発の切れ目が次第に短くなっていく。
スネーク　「さあ、急ごう！」
メリル　「スネーク、外は寒いわ。服を着た方がいい」
　　——メタルギアの巨大な脚部の陰にスネークのスニーキングスーツが転がっている。
スネーク　「俺のスニーキング・スーツだ」
　　——スネーク、服を着るため、陰に入る。
メリル　「早くしてね」
　　——大きな爆発が再び襲い、メリル不安げに天井を見上げる。
　　——メタルギアが爆発の振動で大きく傾ぐ。
　　——壁にかろうじて引っかかっていたメタルギアが少しずつスライドするのがわかる。

メリル　「急いで！」
　　　　――スネーク、着替えて登場。
　　　　――いつものスニーキング・スーツを着用している。
メリル　「その方が素敵よ、スネーク」
メリル　「早く！」
　　　　――二人、扉を潜る。
　　　　――一瞬遅れて、メタルギア、崩れ落ちて二人の通った小さな通用口を塞ぐ！

【脱出01ジープ発進】　ジープ駐車場

――メタルギアの残骸フロアから扉を潜ると、駐車場に出る。駐車場は10メートル四方程度の小規模の物。駐車スペースにちょうど2台のジープが停まっている。駐車場から北に向かってまっすぐに脱出路が伸びている。脱出路の道幅はちょうどジープが横にぎりぎり2台並ぶ程度。
――駐車スペースに人影はない。駐車スペースから脱出路の間に簡素なバリケードがある。

※メリル死んでいる場合はオタコンが運転。オタコンが運転、スネーク射撃
※メリル生きている場合はメリルが運転。メリルが運転、スネーク射撃

――オタコンもしくはメリルがジープに乗り込む。

オタコン「運転は僕がする」

メリル「運転は任せといて！」

――ジープは左側に駐車している方。右側のジープの運転席を覗くオタコン（メリル）。

オタコン「だめだ。キーがないっ！」

メリル「ちいっ！　キーがないわ！」

――右側の運転席を見るオタコン（メリル）。

オタコン「ついてる！　動かせるぞっ！」

メリル「ラッキー！　キーがついてる！」

――エンジンをかけようとするオタコン（メリル）。しかしエンジンは起動しない。物音をききつけた敵兵が数人登場、スネーク達に攻撃を仕掛けてくる。

――エンジンがかかるまでの間、スネークは敵兵と闘う。

オタコン「スネーク、いいぞっ！　乗れっ！」

メリル 「スネーク、いいわ。乗って!」

——スネークがジープに近付くと、ジープに飛び乗り、自動的に銃座につく。

——プレイヤーは銃座を使って敵兵をせん滅できる。エンジンがかかった後、プレイヤーが車に飛び移らないと、催促のセリフを言う。

オタコン 「スネーク、早く、乗れっ!」

メリル 「スネーク、早く、乗って!」

——エンジンがかかり、スネークが銃座に乗り移ると、ジープが発進する。発進の際は映画のようにタイヤの回転数を極限まで上げている演出、煙を入れる。ジープは脱出路を塞ぐ、バリケードへ直進する。

オタコン 「スネーク、つかまってろよ!」

メリル 「スネーク、つかまってっ!」

——バリケードを破って、脱出路に侵入する二人。

——しばらく追跡の気配はない。脱出路はしばらく直線が続く。敵もトラップも何もない。

——ただし、空爆による振動や爆発はさらに強くなってきている。

【脱出02リキッド追跡デモ】　脱出路

——後方から、もう一台のジープで追跡してくるリキッド。

——リキッド、片手でファマスを持ち、残る片手でハンドルを握っている。

リキッド「スネークッ！　まだだっ！」

リキッド「まだ、終わってないっ！」

——銃座を後ろに向けるスネーク。

スネーク「リキッド！」

【脱出03クラッシュデモ】　脱出路　最後の直線

——脱出口への最後の直線。リキッド、執拗に攻撃を続ける。それまで続いていた空爆が嘘のように鳴り止む。

——前方に明かりが見えてくる。

オタコン「見ろ、スネーク、出口だ！」

メリル「見て！　スネーク、出口よ！」

――リキッドのジープ、急加速をして、スネーク達のジープを抜き去る。
――リキッドのジープ、スネーク達のジープの進路に躍り出る。地上への出口は目前。
――リキッド、急ハンドルを切って、ジープを反転させようとする。
――減速したリキッドのジープの脇腹に突っ込むスネーク達のジープ！

オタコン　「ダメだっ！」
メリル　「避けられない！」

――ジープ主観でスネークのジープ、リキッドのジープに激突クラッシュ！

スネーク　「（クラッシュの悲鳴）」
オタコン　「（クラッシュの悲鳴）」
メリル　「（クラッシュの悲鳴）」
リキッド　「（クラッシュの悲鳴）」

――ホワイトフェード

【注1】詳しくは、ナスターシャの無線会話（P530）を参照。
【注2】体内に侵入した異物やウイルスなどを取り込んで除去する細胞。
【注3】細胞の増殖、分化、死などを制御する、細胞間情報伝達物質。タンパク質の一種。
【注4】遺伝子が傷ついたり、体に不必要になったりした細胞は、分解され消滅し、まるで自殺したように見える。これをアポトーシスという。
【注5】1982年の湾岸戦争に従軍した兵士が経験したとされる一連の症状のこと。帰国した兵士は、頭痛、疲労感、不眠など、さまざまな症状を訴えているが、その原因は特定できていない。

■バルカン・レイブン戦前　キャンベル

【溶鉱炉、基本】
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、そこは溶鉱炉だ」
スネーク「溶鉱炉？　何のためにこんなものが？」
キャンベル「その基地には飛行場がない。だから資材の運び込みが難しいんだ。おそらく、不足した建材を自前で精製するために溶鉱炉を作ったんだろう」
スネーク「なるほどな。ああ、汗が噴き出してきた。外の雪原からは考えられない暑さだ」
ナオミ「また風邪なんかひかないように気をつけてね」
※エレベータ確認する前
キャンベル「メタルギアの地下整備基地はそこのさらに下だろう。どこかに下へ行くためのエレベータがあるはずだ。それを探すんだ」
※エレベータ確認した後
キャンベル「地下整備基地へのエレベータは一番下の階の北東にあっただろう？　急ぐんだ、スネーク」

【溶鉱炉、昇降機が使えない】
スネーク「大佐、昇降機があるんだが、下の階に停止したままなんだ」
キャンベル「その昇降機は下から動かすしかないんだろう」
キャンベル「降りる方法は必ずあるはずだ。探してみろ」
ナオミ「基地の中はエメリッヒ博士が詳しいんでしょ？　聞いてみたら？」

【溶鉱炉、ボイラー室】
キャンベル「噴き出してくる蒸気は危険だ。主観で蒸気が噴き出す位置をよく確認しながら、よけて進め」
※一回目のみ
スネーク「ああ。サウナは嫌いじゃないが、こういうのはごめんだな」

【貨物用昇降機（上層）前】
キャンベル「スネーク、そこにあるエレベータがメタルギア地下整備基地に通じるエレベータじゃないのか？」

スネーク　「だが、エレベータを呼ぶボタンがないぞ」
キャンベル「待っていれば来るんじゃないか？」
ナオミ　　「エメリッヒ博士に聞いてみたら？」

【貨物用昇降機（上層）、操作前】
キャンベル「メタルギアはその下だ。急いでくれ」
※一回目のみ
キャンベル「時間がない。奴らも全ての準備を終えているだろう」
スネーク　「交渉の余地は本当にないのか」
キャンベル「政府がテロリストに屈するわけにはいかない」
スネーク　「奴らが撃とうとしているのは核なんだぞ」
キャンベル「決定に変更はないだろう」
スネーク　「……なぜ政府はそこまで強気でいられるんだ？」
キャンベル「……」
スネーク　「大佐、まだ俺に隠していることがあるのか？」
キャンベル「……頼む、スネーク。今は核攻撃の阻止だけに集中してくれ」

【貨物用昇降機（上層）、敵兵戦闘状態】
キャンベル「スネーク、エレベータは密室だ。敵を全て排除しない限り、地下整備基地へは進めない。敵を倒すんだ」

【貨物用昇降機中間駅】
キャンベル「君の乗ってきたエレベータは、そこから下には行かないようだ。となりのエレベータに、乗り換えるんだ」

【貨物用昇降機（下層）、可動時】
キャンベル「スネーク、そのエレベータで地下整備基地まで下りるんだ」

【貨物用昇降機（下層）、無線機デモ後】
※一回目のみ
スネーク　「……大佐、ナオミは？」
ナオミ　　「なぁに？　スネーク？」
スネーク　「君は……いや、何でもない」
ナオミ　　「へんなひと？」
※二回目以降

キャンベル「スネーク、奴らは核発射の準備を完了しているはずだ。急いでくれ」

【貨物用昇降機（下層）、カラスの巣】

キャンベル「スネーク、奴らは核発射の準備を完了しているはずだ。急いでくれ」
キャンベル「その先がメタルギアの地下整備基地だ」
ナオミ「外気は零下30度以下よ……」
※風邪治った場合
ナオミ「さっきまで風邪ひいてたんだから気をつけて」
スネーク「……」
ナオミ「どうしたの?」
スネーク「いや、ありがとう」
ナオミ「?」
キャンベル「そんなところに長居は無用だぞ、スネーク。時間がない、急いでくれ」

【カラス一定数以上殺した場合】CALL

キャンベル「スネーク、カラスを殺しても、どうなるものでもないだろう?」
ナオミ「そうよ、かわいそうだわ。何か嫌な事でもあったの?」

■メタルギア格納庫潜入前　キャンベル

【地下倉庫、レイブン戦】

※一回目
ナオミ「バルカン・レイブンは、シャーマンとして育てられ、何か超自然的な能力を秘めているという話よ」
ナオミ「海が凍結した時にはベーリング海を渡って、ロシアにも出入りしていたらしいわ。旧ソ連時代にロシアで極秘特殊部隊ビンペルと共に特殊任務を行っていたんだけど――」
ナオミ「93年、『モスクワ騒乱事件』でエリツィン大統領から左遷されたのをきっかけにロシアに見切りをつけて傭兵になったそうよ」
ナオミ「その後、傭兵派遣会社アウターヘブンに参加、リボルバー・オセロットの紹介で、FOXHOUND（フォックスハウンド）にスカウトされたの」
キャンベル「奴が手にしているのは本来戦闘機に搭載する20ミリバルカンだ。まともにやり合った

ら勝ち目はないぞ」
ナオミ　「彼は体力だけじゃないわよ。アラスカ大学出のエリートなの。頭の回転も早いわ」
キャンベル「とにかく正面からの攻撃では歯が立たない。20ミリバルカンの弾幕には通常兵器は無力だ。背後や側面からの攻撃を考えろ」
※二回目以降、A、B、Cのランダム
（A）
キャンベル「正面から挑んでは不利だ。リモコンミサイルで攻撃してみろ。コンテナの間をぬうように飛ばして、奴の背後に命中させるんだ」
キャンベル「だがミサイルのスピードが遅いと撃墜されるぞ。トップスピードで接近させるか、曲がり角で狙え」
（B）
キャンベル「身を隠す遮蔽物が全て破壊されれば終わりだ。コンテナが破壊される前に奴をしとめろ！」
（C）
キャンベル「奴がどこに動くかを予想してC４を仕掛け、タイミングをはかって爆破するのも手だ」

■メタルギア戦前　キャンベル

【地下基地、ナオミ自白前】
※一回目のみ
キャンベル「スネーク、ナオミの件なら調査中だ。もう少し時間をくれ」
スネーク　「彼女は？」
キャンベル「まだ、仮眠中だ」
スネーク　「そうか……DARPA（ダーパ）局長も偽者……その上ナオミも……。一体何がおきているんだ？」
スネーク　「……大佐、あんたはまた『知らない』と言うんだろうな」
キャンベル「すまない、スネーク」
スネーク　「世界が核攻撃の危機にさらされている。確かな事実はそれだけというわけか……」

【地下基地、基本】
キャンベル「スネーク、核発射を止めてくれ。メタルギア整備基地の司令室に向かうんだ」

※オタコンに司令室の場所を聞いている場合
キャンベル「司令室は整備基地の三階だろう？ 急ぐんだ」
※オタコンに司令室の場所を聞いていない場合
キャンベル「エメリッヒ博士と連絡をとってみろ」
キャンベル「もう時間がない！」
【地下基地以外】
キャンベル「スネーク、メタルギアの地下整備基地へ急げ。レイブンと戦った倉庫の北だ」
【地下基地、廃水溝】
キャンベル「スネーク、その水には核廃棄物が混じっているようだ。中に入るとダメージを受けるぞ」
スネーク「核廃棄物だと？」
キャンベル「廃棄物の管理はかなりずさんなようだな。そのあたりのことは、ナスターシャが詳しいはずだ」

【地下基地、ネズミを一定数殺した】
キャンベル「スネーク、鼠にかまっている暇はないぞ。核の発射を阻止してくれ」
※さらにたくさん殺した場合
ナオミ「スネーク、ネズミを殺すのがそんなに楽しい？ 小動物を虐待するなんて心が歪んでる証拠よ」
【地下基地、PALキー入手】
キャンベル「奴等は起爆コードの入力を終わらせたようだ。こうなったら、例の鍵（PALキー）を使って、起爆コードを再入力する以外に核発射を食い止める手段はない！」
キャンベル「鍵（PALキー）を見つけだすんだ。廃水溝に落ちたはずだ」
※排水溝近くでセンド
キャンベル「地雷探知機を使ってみろ」
スネーク「地雷探知機？」
キャンベル「そうだ。その地雷探知機は金属探知器と同じ働きをする。レーダーに鍵の位置が表示されるはずだ」

※ネズミが鍵を飲み込んでいる場合
マスターから鼠の話を聞いた後
キャンベル「ネズミから鍵（PALキー）を取り返せ、スネーク。ネズミの移動ルートを読んでC4を仕掛けるんだ」

【地下基地、PALキー入手後】
キャンベル「鍵を手に入れたんだな、スネーク。すぐに司令室に向かえ。PAL（パル）コードを再入力するんだ。核の発射を止めろ！」

【常温以外の形に変形している場合】
キャンベル「スネーク、鍵が変形しているぞ。それでは駄目だ。通常の形にもどすんだ」

【司令室、監視カメラ注意】
キャンベル「スネーク、監視カメラがあるぞ。見つからないように鍵（PALキー）を入力するんだ」
※チャフを持っている場合
キャンベル「チャフを使ってみろ」
※ダンボールを持っている場合
キャンベル「ダンボールを使うのもいいかもしれん」

【常温鍵セット後、冷却鍵変形前】
キャンベル「鍵（PALキー）を冷却する必要がある。どこか温度の低い場所を探すんだ！」

【冷却鍵変形後、セット前】
キャンベル「よし、鍵（PALキー）が変形したな。司令室に急げ、スネーク」

【鍵の形が常温に戻ってしまった場合】
キャンベル「スネーク、鍵（PALキー）をよく見ろ。元の形に戻っているぞ。もう一度形を変えなければ駄目だ」

【鍵が温熱に変形した場合】
キャンベル「スネーク、鍵（PALキー）は暖めるんじゃない。冷却するんだ。温度の低い場所を探せ」

【冷却鍵セット後、温熱鍵変形前】
キャンベル「次は鍵（PALキー）を暖めるんだ。どこか温度の高い場所を探せ！」

※ナオミスパイ、無線機デモ後
スネーク「ナオミは？」
キャンベル「すまない……調査中だ」

【温熱鍵変形後、セット前】
キャンベル「鍵（PALキー）は変形したようだな。スネーク、司令室に急ぐんだ。最後の鍵（PALキー）を入力しろ」

【鍵が冷却に変形した場合】
キャンベル「スネーク、何をしてる？　次の鍵は暖めるんだ。冷やすんじゃない。温度の高い場所を探せ」

【ナオミ自白無線機デモ後】
※一回目のみ
スネーク「大佐、ナオミは？」
キャンベル「……尋問中だ。……スネーク、ナオミの事はこちらに任せてくれ。今はメタルギアを止めることだけを考えるんだ」
スネーク「……」
キャンベル「頼む」

キャンベル「……私は君を友人だと思っている。そのことを、信じてほしい」
スネーク「……」
キャンベル「核の発射を止められるのは君だけなんだ。時間はもう、いくらも残っていない。司令室に向かってくれ」

【司令室、ガス状態】
※一定時間未満
キャンベル「スネーク、ガスだ！　そのままではやられる！」
キャンベル「そうだ！　スネーク、エメリッヒ博士だ！　彼ならそこのセキュリティを破れるかもしれん。連絡を取ってみるんだ！」
※オタコン連絡後
キャンベル「スネーク、エメリッヒ博士がドアを開けてくれるはずだ。彼を信じて持ちこたえろ！」

【司令室、脱出可能状態】
キャンベル「スネーク！　早くリキッドを追え！」

■リキッド・スネーク戦前　キャンベル

【メタルギア戦、脱出扉前】
キャンベル「何をしてるんだ、スネーク！　逃げ道は無いぞ！　メタルギアを止めてくれ！」

【メタルギア戦、オタコンSEND前】
キャンベル「遂にメタルギアが動き出してしまったか……」
キャンベル「君だけが頼みだ。何としてもくい止めるんだ！」
スネーク「どうやって？」
キャンベル「開発者のエメリッヒ博士に聞くしかない」

【メタルギア戦、オタコンSEND後】
キャンベル「メタルギアを破壊してくれ。時間がない」
※一回目のみ
キャンベル「もし無理なら、最後の手段を使う……」
スネーク「最後の手段？」
キャンベル「原潜から核ミサイルを撃ち込む様に指示されている」
スネーク「なんてこった!!」

【メタルギア戦、忍者デモ後】
※一回目のみ
スネーク「大佐、フォックスが死んだ……」
キャンベル「(悲嘆) ああ……。例え戦士といえども、人は戦いだけのために生きるべきではない。戦いの他にも人生はある。それをどこかで見つけてくれていれば……」
スネーク「純粋で不器用な男だ。この世界には……あいつが信じられるものは、わずかしかなかっただろう」
キャンベル「……そうだったな……。フォックスが望んでいたのは、本当に死だけだったのか？」
スネーク「さあな。だが……死んで得られる幸福があるとは、俺には思えない」
スネーク「(決然と) 俺は生きてここを出る」
キャンベル「ああ。(強い願い) 必ず、戻ってきてくれ」
※二回目以降
キャンベル「むき出しのコックピットにスティンガーを撃ち込んでやれ。勝つんだ、スネーク！」

■バルカン・レイブン戦前　メイ・リン

【ナオミスパイ、無線機デモ後】

スネーク「メイ・リン、ナオミは?」

メイ・リン「(質問の意図がわからない)え?　別に。元気だけど?」

スネーク「そうか……」

メイ・リン「(ちょっと嫉妬)何よスネーク、ナオミさんが気になるなら、直接話せばいいじゃない?」

スネーク「いや……ああ。そうだな……」

メイ・リン「へんなひと?」

■メタルギア格納庫潜入前　メイ・リン

【レイブン死亡後無線機デモ後】

スネーク「……ナオミの様子、どこかおかしなところはなかったか」

メイ・リン「いいえ……ナオミさんが敵のスパイだなんて、私、絶対信じられない」

スネーク「俺だって信じたくはないさ。だが……」

メイ・リン「(強い拒否)スネーク、言わないで」

■メタルギア戦前　メイ・リン

【ナオミ自白無線機デモの後】

メイ・リン「スネーク、ナオミさんは拘束されたわ……」

スネーク「そっちでは一体何が起こってるんだ?」

スネーク「大佐は何を考えている?」

メイ・リン「キャンベルさんは……」

メイ・リン「ごめんなさい。言えないの……」

メイ・リン「でも信じて。私はあなたをサポートするわ。最後まで……」

■リキッド・スネーク戦前　メイ・リン

【リキッド戦、基本】

メイ・リン「私、あなたの手助けになることなんて何もできない……だからせめて精いっぱい応援するわ。がんばって!」

■ジープ戦前　メイ・リン

【ジープ戦、基本】

※一回目のみ

メイ・リン「スネーク、キャンベルさんも逮捕されたわ。私もどうなるかわからない。多分……これが最後の記録（セーブ）になると思う」

スネーク「もう格言も聞けなくなるな」

メイ・リン「スネーク……」

スネーク「メイ・リン、頼みがある」

スネーク「これまでの会話データをハード・コピーしておいてくれ。保険にしたい」

メイ・リン「わかったわ。そっちは任せて」

メイ・リン「スネーク……無事でね。お願い」

■バルカン・レイブン戦前　ナスターシャ

【溶鉱炉、基本】

ナスターシャ「見通しはいいものの足場が狭く、行動の自由がきかない地形だな…。そういう場所では、PSG1で先に敵を排除しておけば、効果的だ」

■メタルギア格納庫潜入前　ナスターシャ

【地下倉庫、レイブン戦】

※一回目

ナスターシャ「レイブンが持っているのはおそらくM61・20ミリ多砲身機関砲。F16に搭載されている戦闘機用機関砲だ」

ナスターシャ「6本の砲身を回転させながら毎分4000発の20ミリ弾を発射し、狙いも正確だ。正面から行ってはミンチにされるのがオチだぞ」

※二回目以降

ナスターシャ「相手の正面をさけて隠れながら攻撃するんだ。リモコンミサイルやC4を使ってみろ」

【ナオミスパイ、無線機デモ後】

スネーク「ナスターシャ、FOXDIE（フォックスダイ）と今回の作戦…、あんた、何か知らないか?」

ナスターシャ「すまない。私も何も聞かされていないんだ」

スネーク「大佐も同じようなことを言っていたな」

ナスターシャ「…」

スネーク「すまない。皮肉じゃないんだ。あんたの言

うこと、信じるさ…」

■メタルギア戦前　ナスターシャ

【司令室、ガス状態】

※オタコン連絡前

ナスターシャ「スネーク、そのままじゃ危ない！　なんとか脱出するんだ」

スネーク「どうやって？」

ナスターシャ「誰か基地に詳しい人間…。そうだエメリッヒ博士ならなんとかできるかもしれない」

※オタコン連絡後

ナスターシャ「エメリッヒ博士が扉を開けてくれるのを待つしかない。何とか耐えるんだ」

【司令室脱出可能状態】

ナスターシャ「スネーク、何をしてる？　早くリキッドを追え！」

■リキッド・スネーク戦前　ナスターシャ

【メタルギア戦、オタコンSEND前】

※奇数回

ナスターシャ「私も軍事アナリストとして生活をしているが、メタルギアのことはわからない」

ナスターシャ「エメリッヒ博士に聞いてみてくれ？」

※偶数回

ナスターシャ「電子装置で目標を認識している点は戦車と同じはずだ。チャフを使えば、しばらくはごまかせるかもしれない…」

【メタルギア戦、オタコンSEND後】

※一回目

ナスターシャ「レドームはレーダードームの略だ。鋭敏な電子機器を保護するためのカバー。大概の航空機の先端はレドームになっている」

ナスターシャ「メタルギアのレドーム内にはレーダーだけでなく、赤外線センサー、動体センサー、各種のセンサー類がつまっているはずだ」

ナスターシャ「まさに目であり、耳であり、鼻なんだ。確かに、それを潰せば勝機が見えるかも…」

※二回目

ナスターシャ「スティンガー・ミサイルは大切に使用しろ。もし弾が切れたら、君に勝ち目はない」

■ジープ戦前　ナスターシャ

【リキッド戦】

ナスターシャ「スネーク、肉体と肉体の戦いだ。私がアドバイスする事は何もない」

ナスターシャ「自分を信じて！　必ず勝つんだ!!」

■バルカン・レイブン戦前　マスター

【貨物用昇降機（上層）、敵兵戦闘状態】

マスター「密室では、当然、行動範囲が制限される。だからといって、じっとしていては自ら的になるだけだ。相手の動きを読み、機敏に動きまわって勝機をつかめ」

【貨物用昇降機（下層）、可動中】

※一回目のみ

スネーク「マスター、やたらとカラスがいるんだが…

…」

マスター「それはレイブン、大ワタリガラスだ」

※共有

マスター「ワタリガラスには死を予言する能力があるとも言われている。詩人のマーロウは、『死を予感するワタリガラスは病人の死が間近になった事を鳴いて知らせる』と書いている」

スネーク「不吉な話だ」

マスター「ところで…」

スネーク「どうした？」

※二回目のみ

マスター「知ってるか？　カラスは人の三倍、ワタリガラスはその三倍生きる、という言い伝えがある」

マスター「まあそれは伝承に過ぎないが、カラスが鳥類の中でも長命な種である事は事実だ。ワタリガラスは70年近く生きる場合もある」

※三回目のみ

マスター「カラスは植物質も動物質も、ゴミも農産物も何でも食べる。いじきたないようだが、その採餌（さいじ）行動の多様さがこの極地でも生存を可能にしているんだ」

【ナオミスパイ、無線機デモ後】
スネーク「さっきのナオミの件だが」
マスター「詳細は今調べている。だが怪しい事は間違いない。……今までにあの女の挙動について、何かおかしいと思ったことはなかったか?」
スネーク「……」
マスター「……気を許すなよ」

【貨物用昇降機（下層）、カラスの巣】
※共有
マスター「そのあたりは永久凍土の真ん中に位置している。永久凍土とはその名の通り凍てついてとけることのない大地だ。アラスカ全域の85%は永久凍土だと言われているな」
マスター「そこの気温はおそらく零下30度を下回る。スネーク、急がないと寒さでレーションが凍りついてしまうぞ」
マスター「レーションを凍らせない方法は装備して体温で暖めておく事だ」

■メタルギア格納庫潜入前　マスター

【地下倉庫、レイブン戦】
※一回目のみ
マスター「そこの気温は零下30度を下回る。スネーク、急がないと寒さでレーションが凍り付いてしまうぞ」
※二回目以降A、B、Cのランダム
(A)
マスター「レーションを凍らせない方法は装備して、体温で暖めておく事だ」
※既に凍ってしまっている場合
スネーク「もう凍ってしまった」
マスター「装備して体温で暖めろ。しばらくすれば、とけて使えるようになるはずだ」
(B)
マスター「アラスカのインディアンか。アサバスカン族だろう。アリゾナ州のアパッチ・ナホバ族と同族だ」
マスター「日本人と人類学的に近く、言葉も日本の古語とよく似た言葉を使っている。お前と奴は、祖先が同じというわけだ」

スネーク「……マスター、俺に日本人の血が流れている事、あんたにしゃべったことがあったか?」
マスター「……」
(C)
マスター「『四人運び』は大人四人をぶら下げて距離を競うものだが、レイブンは六人もの人間を運んだそうだ」

【レイブン死亡後無線機デモ後】
※一回目のみ
マスター「スネーク、あのナオミという女がスパイだというのは確実だと思う。だが、キャンベルも何かを隠しているようだ…。信用するなよ」

■メタルギア戦前　マスター

【地下基地、PALキー落とす前】
マスター「スネーク、起爆コードの入力システムは司令室にあるんだろう?　司令室に急げ」

【地下基地、PALキー入手前】
マスター「鍵(PALキー)をなくした?　すぐに探し出すんだ!　奴等は起爆コードを既に入力した」
マスター「あの鍵(PALキー)を使ってもう一度起爆コードを入力し、システムをロックしない限り、核発射を止めることはできない」
※地雷探知器を持っている場合
マスター「例え廃水溝の中でも地雷探知機を使えば、どこに落ちたか分かるはずだ。何としても鍵(PALキー)を探し出せ!」

【廃水溝アイテム全て取得】CALL
※服従していない場合、鍵を鼠が飲んでいるヒント
※一回目のみ
マスター「スネーク、鍵(PALキー)は見つかったか?」
スネーク「いや、それがどこにもないんだ」
マスター「そんな馬鹿な。確かにその廃水溝に落ちたんだろう?」
マスター「その廃水溝……何か、おかしなところはないか?」
スネーク「いいや。でかい鼠がいるくらいだ」

マスター「それだ、スネーク！　鼠がのみ込んでいるんだ！」
スネーク「そんな馬鹿な」
マスター「いや、それ以外に考えられない。ハタネズミは雑食だ。鍵(PALキー)を飲み込んだとしても、なんの不思議もない」
※二回目以降
マスター「スネーク、鍵(PALキー)はネズミが飲み込んでいる。ネズミから鍵(PALキー)を取りもどせ。ネズミの移動ルートを読むんだ！」

【地下基地、PALキー入手後】
マスター「鍵(PALキー)を手にいれたな？　よくやった。早く司令室に向かえ」

【常温鍵セット後、冷却鍵変形前】
マスター「鍵(PALキー)を冷やすんだ。寒い場所を探せ！」

【冷却鍵変形後、セット前】
マスター「鍵(PALキー)の形が変わったな。急いで司令室にいって鍵(PALキー)を入力するんだ」

【冷却鍵セット後、温熱鍵変形前】
マスター「次は鍵(PALキー)を暖めるんだ。どこか暖かい場所に行く必要がある」

【フォックスダイ無線機デモ後】
※一回目のみ
マスター「ナオミはやはりスパイだったか。キャンベルも何かを隠している……」
マスター「だがそれもいい。FOXDIE(フォックスダイ)はウイルス兵器だ。必ず血清がある。それは後で手に入れるとして、スネーク、今は起爆コードを再入力することだけを目指せ。いいな」

【温熱鍵変形後、セット前】
マスター「（喜喜として）鍵(PALキー)が変形したな。急いで司令室に向かうんだ。最後の鍵(PALキー)を入力しろ！」
※一回目のみ
スネーク「……マスター、いやに喜んでるな？」
マスター「……」

【ナオミ自白無線機デモ後】
※一回目のみ
マスター「私怨を晴らすために、FOXDIE（フォックスダイ）を利用したという事か……」
スネーク「だがナオミはFOXDIE（フォクスダイ）の使用を決めたのは自分ではないと言っていた。作戦の一部だともな」
マスター「キャンベルまで絡んでいるとなると、彼から血清を手に入れるのは難しいかもしれんな……まあいい」
※二回目以降
※鍵が温熱変形している場合
マスター「今はとにかく司令室に急げ。最後の鍵（PALキー）を入力するんだ」
※鍵が温熱変形していない場合
マスター「今は最後の鍵（PALキー）を変形させる方が先だ」

■バルカン・レイブン戦前　オタコン

【溶鉱炉、基本】
オタコン「一番下の階の北東に資材運搬用エレベータがあるんだ。それに乗ればメタルギア地下整備基地に行ける。大きなパトライトがついてるから、すぐわかるはずだよ」
【溶鉱炉、昇降機使えない】
※一回目
スネーク「昇降機が下に停止したまま上がってこない。他に地下へのエレベータまで行くルートは、あるか？」
オタコン「そうだな……ルートはあるよ」
スネーク「どこだ？」
オタコン「溶鉱炉の西の方は見えるかい？」
オタコン「クレーンがあるだろ？　そこのステップを歩けば、多分向こう側に行ける」
スネーク「そんな所を歩いた奴なんているのか？」
オタコン「いや、ネズミが走ってるのなら見た事がある」
スネーク「俺にネズミになれと？」
オタコン「クレーンにも気をつけて」
※二回目以降
オタコン「西側のステップを張り付いて渡れば、向こう側まで行けるよ、多分」

【溶鉱炉、ボイラー室】
オタコン「ボイラー室にいるのかい？　そこのパイプはかなり老朽化してて、たまに蒸気が噴き出すんだ。気をつけたほうがいいよ」
スネーク「これが、たまに、か？」

【貨物用昇降機（上層）前】
オタコン「そこにある資材運搬用エレベータで下りていけば、メタルギアの地下整備基地に着くよ」
※エレベータが来ていない場合
オタコン「自動運転で溶鉱炉とを地下整備基地を往復しているんだ。まだエレベータが来ていないなら待つしかないね」

【貨物用昇降機（上層）、可動前】
オタコン「スネーク、エレベータはスイッチを入れなければ動かないよ。操作盤があるだろ。近寄ってアクションボタンを押すんだ」

【貨物用昇降機（上層）、敵兵戦闘状態】
オタコン「スネーク、そのエレベータには逃げ場はない。戦うしかないよ！」

【貨物用昇降機（上層）戦闘前、後】
オタコン「そこのエレベータは地下整備基地に建材や車輌を運ぶためのものなんだ」
※一回目のみ
スネーク「だからこんなにでかいのか」
オタコン「今、スネークが乗っているのは、一号エレベータだ。一号エレベータは途中までしか降りていかないから、中継地点で二号エレベータに乗り換えてくれ」

【貨物用昇降機中継駅】
※一回目のみ
オタコン「スネーク、そこが一号エレベータと二号エレベータの中継地点だ」
スネーク「どうしてこんな構造になっているんだ？」
オタコン「うん、本来は一本のエレベータで下まで行くはずだったんだけど、岩盤の強度とか構

造の問題から二本に分けた、と聞いている
よ」
オタコン　「横に二号エレベータが来ているだろ？　そ
っちに乗り換えるんだ」
※二回目以降
オタコン　「そのエレベータで降りていくと、倉庫に出
る。そのすぐ先がメタルギアの地下整備基
地だ」
【貨物用昇降機（下層）、基本】
スネーク　「……カラス」
オタコン　「何？」
スネーク　「カラスがたくさんいる」
オタコン　「カラスは前からいたんだけど。FOXHOUND（フォックスハウンド）がここにやってきてから
急にそのあたりに集まりだしたんだ。そう
いえば不思議だな。どうしてなんだろう
…？」
【貨物用昇降機（下層）、カラスの巣】
スネーク　「しかしなんだこのカラスの大群は？」
オタコン　「ああ、カラスか」
オタコン　「カラスは前からこの基地にいたんだけど、
FOXHOUND（フォックスハウンド）がここにやってきてか
ら、急にそのあたりに集まりだしたんだ。
そういえば不思議だな。どうしてなんだろ
う…？」

■メタルギア格納庫前　オタコン

【地下倉庫、レイブン戦】
オタコン　「メタルギア地下整備基地の建設を優先した
せいで、その部屋はまだ工事中なんだ。で
もその分コンテナの陰とか、隠れる場所
は多いだろ？　それを利用したらどうだ
い？」
【レイブン死亡後無線機デモ後】
※一回目のみ
オタコン　「僕は、ドクター・ナオミがどんな人なのか
知らないから、なんとも言えないけど…」
※二回目以降
オタコン　「スネーク、そのことはいったんキャンベル

大佐に任せて、君は司令室に向かった方がいいんじゃないかな?」

■メタルギア戦前　オタコン

【地下基地1F】

※オタコンからの無線機デモ1に続いて

オタコン「その間にスネークは司令室に向かってくれ」

オタコン「PALの緊急入力システムは司令室にある」

オタコン「司令室は君がいる整備基地の三階だ」

オタコン「メタルギアの横にハシゴがあるだろ?」

オタコン「そこを登って行けばいい」

【地下基地、オタコン無線機デモ1後】

スネーク「オタコン、どうだ?」

オタコン「まだだよ。もう少し、時間をくれ」

【地下基地、オタコン無線機デモ2後】

スネーク「どうだ?　調子は?」

オタコン「もう少し、待ってくれ」

【地下基地、オタコン無線機デモ3後】

スネーク「どうだ?　解除方法のファイルは?」

オタコン「まだだよ。もう少し、時間をくれ」

※一回目のみ

オタコン「新型核弾頭についてなら、いろいろわかった」

オタコン「弾道ミサイルが発射されてから着弾するまでの過程は、4段階に分かれるんだ。最初が、ブースト段階。発射されてから大気圏の外に到達してロケット燃料が燃えつきるまで」

オタコン「次がポストブースト段階。燃焼が終わってから再突入体を放出するまでだ。その次が中間コース段階。再突入体を放出してから弾道飛行し、大気圏に再突入するまで」

オタコン「最後が終末段階。大気圏に再突入してから地上の目標に到達するまで」

オタコン「ミサイル防衛システムは、軍事衛星でブースト段階のロケット噴射を感知して発動するんだ。でも新型核弾頭はブースト段階をレールガンの超高速射出機能を用いて代行

する」

オタコン「だから、既存のミサイル防衛システムで発見する事はできないんだ！」

オタコン「その上、再突入体は完全なステルス……。円形半数必中界(CEP)も50メートルと、最高のICBM並の命中精度だ」

スネーク「正確無比で迎撃不可能、どこから撃たれたのかすら、わからない核攻撃……」

オタコン「しかもそれだけじゃない。弾道ミサイルの推進装置には通常、二段ないし三段の固形燃料式ロケットが用いられるんだ」

オタコン「でも、これは開発コストがかさむ上に、特に固形燃料の保守と発射の準備に大変な手間がかかる」

オタコン「核弾頭発射レールガンはこの問題をクリアした、低コストで即時発射可能な核兵器でもあるんだよ」

スネーク「まさに完全無欠。夢の核兵器か」

オタコン「ただし、悪夢のね」

【司令室前】

スネーク「解除方法のファイルはどうなった？」

オタコン「あと少しだけ待ってくれ」

※一回目のみ

オタコン「軍需産業ついてなら、いろいろわかった」

オタコン「冷戦の終結後、アメリカの国防予算は15%以上削られた。当然軍需産業はジリ貧さ」

オタコン「結果、業界では派手な企業間の合併・買収が横行したんだ。今ある大手兵器企業の中には、10年さかのぼってみると、20社以上に分かれてしまうって所も珍しくない」

オタコン「AT社もそのうちの一つさ。だけど次期主力戦闘機の入札からは漏れ、民需転換(デュアル・ユース)にも結局失敗。会社はいよいよやばくなってきていた」

オタコン「だけどやばいのは国防総省も同じでね。大幅に予算を削られたものだから、民間にも費用を負担させなければ兵器開発費をまかなえなくなっているんだ」

オタコン「それに、国の研究開発レベルを低下させないために、政府の研究開発へ民間技術を積

極的に導入しようという方針も打ち出されている」

オタコン　「結果行われているのが、国防総省と民間による新型兵器の共同開発だ。だけど、お互いの苦しい財政事情のおかげで当然そこには癒着が生まれる」

オタコン　「DARPA(ダーパ)局長と癒着してのメタルギア開発は、必然的な背景があったんだ。必ずしもAT社を存続させたいっていうベイカー社長の独走だけじゃなかったみたいだね……」

【地下基地、基本】

オタコン　「テロリストは起爆コードの入力を終了してしまった！」

オタコン　「核の発射を止めるには、もう一度起爆コードを入力して起爆装置をロックするしかない。それにはあの鍵(PALキー)が必要なんだ。鍵(PALキー)を探すんだ、スネーク！　他に方法はないよ」

【PALキー入手後】

オタコン　「鍵(PALキー)を見つけたんだね？　まずは常温状態の鍵(PALキー)だ。司令室の一番左の端末に差し込むんだ」

【PALキー見つけた後、一回目】

オタコン　「その鍵(PALキー)は、接続端子と基盤の一部に形状記憶合金を使ったICカードなんだ」

オタコン　「正しい形に変形させないと、司令室のPALコード入力端末が認証せず、起爆コードは再入力されない仕組みになってる」

【常温鍵以外の形に変形している場合】

オタコン　「スネーク、鍵(PALキー)の形が変わっちゃってるよ。常温状態に戻さなきゃ駄目だ」

【常温鍵セット後、冷却鍵変形前】

オタコン　「次は鍵(PALキー)を冷すんだ」

スネーク　「どこで冷やせばいい？」

オタコン　「ここはアラスカだ。外にでればどこでも寒い」

オタコン「でも、そこからだと君がレイブンと戦った倉庫が近いね。あそこは永久凍土の真ん中で、暖房もついてないから」

【冷却鍵変形後、セット前】

オタコン「スネーク、鍵(PALキー)はちゃんと変形してるみたいだよ。指令室の真ん中の端末に差し込むんだ。鍵(PALキー)が暖まって元の形に戻る前にね」

【鍵が元の状態に戻ってしまった時】

オタコン「スネーク、鍵(PALキー)を見てみるんだ。形が元に戻ってるよ！　もう一度変形させなきゃ駄目だ！」

【フォックスダイ無線機デモ後】

※一回目のみ

オタコン「ドクター・ナオミが敵のスパイだったたって？　……そんなことってあるのかな？」

スネーク「俺だって信じたくはない。だが……」

オタコン「スネーク、今はキャンベル大佐に任せて、君は起爆コードを再入力する事に専念した方がいいよ」

スネーク「ああ……」

【冷却鍵セット、温熱鍵未変形】

オタコン「温度が高い所？　溶鉱炉があるじゃないか？　だけど、帰る途中に寒い所を通ると鍵(PALキー)が変形してしまう。急いで駆け抜ける必要があるよ」

【温熱鍵変形後、セット前】

オタコン「鍵(PALキー)はちゃんと変形したようだね。最後の鍵(PALキー)は、司令室の右端の端末に差し込めばいい」

オタコン「でも気をつけるんだ。寒い所に長居をすると鍵(PALキー)がもとの形に戻ってしまう。急いで駆け抜けるんだ」

【ナオミ自白無線機デモ後】

※一回目のみ

オタコン「僕はドクター・ナオミを責める事はできないな……彼女、かわいそうな人だよ」

オタコン「……昔から自分のファースト・ネームが嫌いだったんだ、僕…」
スネーク「HAL(ハル)が?」
オタコン「うん…。僕はコンピュータじゃなくって人間だから」
オタコン「それに、祖父さんがマンハッタン計画に参加していた事も……、親父がヒロシマに原爆が落とされた日に生まれたって事も……。みんな嫌だったんだ」
オタコン「名前とか親とか祖父さんとか……そういうものみんなが、僕の人生を束縛してるように、感じてた……」
オタコン「でも、それは恵まれた事だったんだと、今は思う」
オタコン「少なくとも自分が生まれてきて、生きている事の証(あかし)になるから」
オタコン「ドクター・ナオミは親の事も、自分の名前さえ知る事ができなかったんだ。寂しかったと思うよ、すごく……」
スネーク「オタコン……」
オタコン「ごめん、スネーク。今はPAL(パル)コードを再入力する事を考えた方がいいね」

※二回目以降、鍵温熱状態の場合
オタコン「まだ最後の鍵が入力されてない。司令室に急ぐんだ」
※鍵が温熱状態に変化していない場合
オタコン「鍵の形が正しくないよ。早く暖めるんだ。溶鉱炉が一番いいと思うよ」

【司令室扉開いた後】
オタコン「何してるんだい? 扉は開けたよ、スネーク。早くリキッドを追いかけなきゃ!」

■リキッド・スネーク戦前　オタコン

【メタルギア戦、戦い方】
オタコン「スネーク、レックスの装甲は完璧だ。今、持っている火器では破壊する事はできないよ」
オタコン「レックスは最新式の複合装甲を採用しているんだ。高性能の成形炸薬(HEAT)でも使わない限り、破壊はできない」
スネーク「では、どうすればいい?」

オタコン「レックスの操縦席は一種のVRシステムと同じなんだ」
オタコン「あらゆるセンサーを通し、ハイテク機器を介して操縦している」
オタコン「完全に外界から閉鎖された密閉型だ」
スネーク「肉眼では見ていない？」
オタコン「そうだよ。だから、センサーを破壊すれば……」
オタコン「レックスの左腕のように見える円盤があるだろう？」
スネーク「ああ、盾のようなやつか？」
オタコン「それがレドームだ。あそこを破壊すれば電子装置は効かなくなる」
スネーク「盲目になるってことか？」
オタコン「ああ、レドームにスティンガー・ミサイルを撃ち込めばいい」
スネーク「それで動きは止まるんだな」
オタコン「いや、レックスは肉眼でも操縦できるようになっている」
スネーク「ご丁寧だな」
オタコン「くちばしのような部分が、操縦席なんだ。非常の際はそこが開閉する」
オタコン「レックスの装甲は頑丈だ。破壊はできない」
スネーク「それはわかってる」
オタコン「でも、内側からなら話は別だ」
スネーク「なるほど……まずレドームを破壊して、操縦席を開かせるって訳だ」
オタコン「そうだよ。操縦席の内部にスティンガー・ミサイルを直撃させれば、コンピュータ制御系を破壊できる」
スネーク「そんな弱点を残したまま開発してたのか？」
オタコン「弱点じゃない。弱みだよ。人も兵器も弱みがないと可愛くないじゃないか。そうだろ？」
スネーク「わかった。お前に感謝したい気持ちだ」

【メタルギア戦、オタコンSEND後】
※一回目
オタコン「まずレドームをスティンガーで破壊して、電子装置を使えなくするんだ」

※二回目

オタコン「例のベイカー社長の極秘ファイルにあったんだけど、レックスの股間に設置されているのは自由電子レーザーらしい」

オタコン「巨大な電磁石で加速した電子ビームの中にレーザービームを入射して、出力を大幅に増幅させるレーザー兵器なんだ」

オタコン「100メガワット近い超高出力を発生させる事ができる。通常の化学レーザーの10倍だ」

※三回目

オタコン「レックスに踏まれたら、ひとたまりもないよ。近づく時は注意してくれ」

※四回目

オタコン「レックスの両膝には対戦車ミサイルが装備されている。ワイヤーを使わないレーザー・セミアクティブ誘導方式だ」

オタコン「射手がレーザー照準機で目標にレーザー光線を発射し、ミサイルはその目標からの反射光を感知して追尾する。命中率は極めて高いよ」

オタコン「弾頭はおそらく成形炸薬(HEAT)で、対人榴弾は使ってないと思うけど、直撃すれば勿論ただではすまない。気をつけるんだ」

※五回目

オタコン「レールガンは磁力で弾を撃ち出す兵器だ。砲弾の加速プロセスを最適化する事によって、弾丸の初速は、毎秒100キロを越える」

オタコン「SDI計画では、宇宙空間で敵国のICBMを撃墜するために使われるはずだったんだ。それが核弾頭の射出に使われるなんて…。皮肉なものだね」

※六回目

オタコン「レックスは試作一号機だけど、バーチャル・プロトタイピングを行ってるんだ。設計段階からVRシミュレーションの中で生産評価・改良のサイクルを何度も繰り返してる」

オタコン「だから試作機といっても完成度は高いよ。気をつけてくれ！」

■ジープ戦前　オタコン

【リキッド戦】

※A、Bのランダム

(A)

オタコン　「スネーク、格闘の事は僕にはわからない。でも、なんとしてもリキッドを倒すんだ」

(B)

オタコン　「レックスの背中から落ちそうになったら、ボタンを連打するんだ。早く這い上がれるよ」

Section 5

Finale

エンディング

【エンディング01基地外】

――2台のジープが脱出口で衝突（クラッシュ）、そのまま地上へ乗り上げる。2台のジープは横転、バウンドしながら、十数メートル暴走した所でようやく静止する。

――スネーク達のジープは横転して、海面側にジープの腹部を晒し、断崖から後部座席を少し飛び出させた格好で制止している。

――ジープは真横ではなく、凸凹のある氷の固まりに乗り上げている為、逆さま（転覆）に近い角度まで倒れ込んでいる。

――リキッドの車はバウンド後、奇跡的に四輪を地上面につけている。操縦席にリキッドの姿はない。ジープのノーズでスネーク達のジープを断崖から押し出すような格好で静止している。

――脱出路の入り口（本当は基地の入り口のひとつ）にあたるこのスペースは20メートル四方の平坦な空間が広がっている。

――表面は潜入部分の地面と同じく、コンクリートや鉄板で舗装されているが、自然物と思わせる工夫（空から見た時の偽装）が施されている。

――日は既に中空に昇っており、眩しい程の輝きを放っている。雲一つない青い空が広がっている。それまで執拗に行われていた空爆や爆撃機の影すら確認できない。断崖から数メートル下を見ると、凍り付いた海面の所々（ひび割れた間隙や氷が溶けてできた穴等）から、太陽を反射するきらめきが見える。氷河の衝突でできた氷の瘤が太陽によって溶解され、宝石のように輝いている。ここから見ると、孤島である事が意外に思える程、水平線の向こうにフォックス諸島の山々がく

つきりとみえる。

――スネーク、意識を取り戻す。スネークは反転気味のジープの下（影）にホフク状態（うつ伏せ）で倒れている。ジープの全重量を銃座が支柱代わりに支えている。その支柱（機銃）がスネークの身体に覆いかぶさって（ハーネスやストラップが絡まっている）、身動きが取れない。スネークの左手に座席に座ったまま宙吊りのメリル（オタコン）が見える。

スネーク　「メリル、大丈夫か？」

スネーク　「オタコン、大丈夫か？」

オタコン　「……なんとかね」

メリル　「……ええ、まだ生きてるわ」

――スネーク、ジープから這い出そうと試みるが、機銃がハーネスのストラップに引っかかっているらしく、動けない。

スネーク　「動けるか？　メリル」

スネーク　「動けるか？　オタコン」

――メリル（オタコン）、ゆっくりとした動作でシートベルトを引っ張るが、動きはしない。

オタコン　「……ダメだ。動けない」
メリル　「チッ、動けないわ！」
　――スネーク、少しでも辺りの様子を伺おうと、身体を這い出す努力をする。スネーク達のジープに突っ込むような形でリキッドのジープが見える。自分たちのジープが傘のように視界を限定している。スネークからの位置ではジープが見えるだけで、リキッドの姿は見えない。
スネーク　「リキッドはどうなった？」
オタコン　「さすがの奴も死んだんじゃ？」
メリル　「私からも見えないわ」
スネーク　「リキッドが死んだ……」
　――身を低くして目を凝らすスネーク。
　――ジープからヨタヨタと降りてくるリキッド。スネーク達、ジープの影から這い出る。
　――二人の前によろめきながら近付くリキッド。
スネーク　「しまった！」
リキッド　「スネーク」

——膝を折り、地面に崩れ落ちるリキッド。

リキッド　「ス……！　スネーク……」

リキッド　「フォッ……？　フォックス……？」

——スネーク、リキッドの続きを呟く。

スネーク　「死ね」

——うつ伏せに突っ伏して痙攣するリキッド。目はスネークを見ている。スネークに身体を預けて、目をそらすメリル（オタコンは引っ付かず、腕で目を隠している）……

——なにか云おうとして手を上げるリキッド。

——スネーク、リキッドの心が読めるように呟く。

スネーク　「奴が死んだという事は……」

——メリル（オタコン）、スネークの口を手で塞ぎ、（オタコンはしない）言葉を制する。

オタコン　「考えない事だよ、スネーク」

メリル　「言わないで、スネーク」

――力無く笑いながら、絶命するリキッド。リキッドは上半身裸。

リキッド　「……」

――遂に絶命したリキッドをしばらく見つめる二人……（空撮）。

――スネーク、空を見上げて訝る。

スネーク　「空爆はどうなったんだ……」

スネーク　「ステルスの影も見えない……」

――スネークの無線機がなる。無線を受信するスネーク。

【エンディング02エンディング無線機デモ】

キャンベル　「スネーク、聞こえるか？」

スネーク　「大佐！」

キャンベル　「無事だったか？」

スネーク　「大佐、どうして？」

キャンベル　「国防省長官はたった今、逮捕された。退任だ」

スネーク　「逮捕？」

キャンベル　「大統領と連絡が取れた。メタルギア、新型核弾頭の開発、今回の演習……全て、国防省長官の独断で行われた」

スネーク　「これが独断……」

スネーク　「空爆や核の投下はどうなった？」

キャンベル　「攻撃命令は解除。F117もB2スピリットも基地に帰還した。再び作戦指令の権限は私に戻った」

スネーク　「なるほど……」

キャンベル　「政府（ワシントン）は秘密を守る為に核を使用する程、愚かではない」

スネーク　「怪しいものだ」

キャンベル　「とにかく、危機は去った…。ありがとう」

※メリルが助かった場合

スネーク　「大佐、メリルは無事だ。安心してくれ……」

キャンベル　「そうか…。ありがとう、スネーク。ありがとう」

※メリルが死んでいる場合

スネーク　「大佐、メリルの事だが……」
キャンベル　「(悲痛) わかってる……」
キャンベル　「……(長い沈黙)」
スネーク　「大佐?」
キャンベル　「……メリルは……私の娘だった」
スネーク　「何?」
キャンベル　「知ったのはつい最近だ。あの子の母親、死んだ弟の妻が手紙をくれたんだ……。
この作戦が終わったら、私はメリルにその事を打ち明けるつもりだった」
スネーク　「大佐……」
キャンベル　「いいんだ、スネーク。ありがとう」
キャンベル　「スネーク、君にはいろいろ隠し事をして、すまなかった」
スネーク　「大佐、いいんだ」
キャンベル　「スネーク、私は大佐ではない」
スネーク　「そうだったな」
キャンベル　「君にプレゼントがある」

キャンベル　「近くにスノーモービルがある。メイ・リンが衛星写真で確認した」
キャンベル　「この時期、氷河も落ちついている。凍結した海を渡ればいい」
キャンベル　「国防省情報局(DIA)や国家安全保障局(NSA)の連中が君たちを無事に帰すとは思えない」
スネーク　「同感だ。勿論、のこのこ戻る気はない」
キャンベル　「君達はジープでアラスカの海中に沈んだ…。ということにしてある」
スネーク　「あやうく現実になりそうだったが…」
キャンベル　「フォックス諸島でヘリを用意している」

※メリルが助かった場合

スネーク　「基地内にハル・エメリッヒ博士がいるはずだ。彼の回収も頼む」
キャンベル　「わかった。そっちの方は安心しろ」
スネーク　「ありがとう。キャンベル……そっちは大丈夫なのか？」
キャンベル　「お互い保険は用意している。メイ・リンのデータをハードコピーしている。これがある限り、君も私も……メイ・リンも大丈夫だ」
スネーク　「ナノマシンのバッテリーも尽きる。俺達を追跡する事はできまい」
キャンベル　「もう逢うこともないな」

スネーク　「いや、そのうち遊びに行く」
キャンベル　「そうか、期待してるよ」
スネーク　「キャンベル、ひとつ教えてくれ」
キャンベル　「なんだ?」
スネーク　「FOXDIE(フォックスダイ)の事だ」
※メリルが助かった場合のみ
キャンベル　「メリルなら大丈夫だ。プログラムの対象には入っていなかったようだ」
スネーク　「俺はどうなる?　リキッドも死んだ」
キャンベル　「その事についてなんだが、ナオミから話があるらしい」
スネーク　「彼女は今?」
キャンベル　「大丈夫だ。メイ・リンが付いていてくれている」
キャンベル　「今、ナオミと替わる」

——ナオミからの連絡。無線機がナオミに替わる。

ナオミ　「スネーク、私よ……」
スネーク　「ナオミか?」

ナオミ　「聞いたわ…、兄のこと」
スネーク　「ああ、その…。いや、フランクから伝言がある」
ナオミ　「え？」
スネーク　「『俺の事は忘れて、自分の人生を精いっぱい生きろ……』」
――（実際に聞いた事とは違う嘘を云うスネーク）
ナオミ　「（涙ぐむ）兄がそんな事を？」
スネーク　「君の事を愛している……とも言っていた」
スネーク　「ナオミ、俺や世界を救ったのは……フランクだ」
スネーク　「奴は最後まで自分の意志で闘っていた」
ナオミ　「兄は……これで解放されたと思う」
ナオミ　「兄は、既に死んでいたの。ザンジバーランドであなたと闘ってから。既にゴーストと変わりがなかった」
ナオミ　「死に場所を求めて、さまよう亡霊……」
――（言葉にならない嗚咽が続く……）

スネーク　「ナオミ、リキッドもFOXDIE（フォックスダイ）で死んだ。設定はいつだ。いつウイルスが活動する？」

ナオミ　「それはあなた次第」

スネーク　「どういう意味だ？」

ナオミ　「あらゆる生命には寿命がある」

スネーク　「いつまで保（も）つんだ？」

ナオミ　「限られた時間を使うのはあなたよ」

ナオミ　「生きてね、スネーク。私からはそれだけ……」

スネーク　「……」

【エンディング03エンディングデモ】基地外

――スネークとメリル（オタコン）、歩き出す。

――ジープの残骸、リキッドの死体を横目で見ながら歩く。二人、断崖の比較的ゆるやかな箇所を降り、キャンベルの指示したポイントを探す。

――断崖のくぼみを覗くスネーク。くぼみにスノーモービルがある。喜ぶメリル（オタコン）。スノーモービルを引き出す二人。スノーモービルの点検をする二人。エンジンを試しにかけるス

ネーク。エンジン、かかる。

――ナオミの声が無線機から聞こえてくる。

ナオミ「人はそれぞれ生まれた時から運命づけられているわ。遺伝子の中に刻まれてね」

ナオミ「……でも人の人生はそれだけじゃない。私もようやくわかった」

ナオミ「前にも言ったわね。私が遺伝子――、DNAに関心を持った理由(わけ)」

ナオミ「自分は一体、誰なのか？　どこから来たのか知りたかったから……」

ナオミ「DNAを解析すれば、私が誰だかわかる、私の逢ったことのない両親の事がわかる……自分が何者かわかれば、進む道がわかるかもしれない。そう思ってた」

ナオミ「でもそれは違う。何もわからなかった。何も見つからなかった」

ナオミ「ゲノム兵も同じ。遺伝情報をインプットするだけでは最強の戦士を創り出す事はできない」

ナオミ「DNA情報は――あくまでも力や運命を秘めているという事だけしか言えないわ」

ナオミ「運命に縛られてはいけない。遺伝子に支配されてはいけない。生き方を選ぶのは私達なのよ」

ナオミ「スネーク…、プログラムされたかどうかは問題ではないわ」

ナオミ「重要なのは、あなたが選ぶ事」
ナオミ「そして生きる事」
ナオミ「そうでしょ？　スネーク…」
ナオミ「心配はいらない。私も、生きていくわ」
ナオミ「これまで、生きる理由ばかり探してた。でも、これからは…生きる事が私の目標なの」
ナオミ「遺伝子の存在意義は…子孫を通じて、願いを未来に託す事……」
ナオミ「生きる事は未来へ繋がる。あらゆる生命はそうやって未来へ繋がっていくの」
ナオミ「愛し合い、語り継いでいく……そして、世界を変えていく」
ナオミ「ようやく、わかったの。生きる事の意味が……」
ナオミ「スネーク…、ありがとう」
——ナオミからの無線、とだえる。

【エンディング04メリル生存エンディングデモ】基地外

——スノーモービルの運転席にスネーク、乗っている。後部座席に乗るメリル。

――メリル、後部座席から二周目用オマケ・アイテムを見つける。
――アイテムは全ての武器が無限大に使える「無限バンダナ」。

メリル　「こんなものがあったけど？」
スネーク　「とっておこう。記念にな」
メリル　「何の記念？　任務成功の？　それとも、私達の出会い？」
スネーク　「新しい生き方を知った事のだ」
メリル　「ん？」
スネーク　「俺は今まで自分の為だけに生きてきた。死にたくはないっていう、生存本能が俺の人生の動機だった」
メリル　「みんなそうよ。あなただけじゃないわ」
スネーク　「死への恐怖の中でしか、生きる意味を見出せなかった」
スネーク　「いや――、俺の遺伝子にそう記されていたのかもしれない」

――後部座席から身を乗り出して聞くメリル。

メリル　「今はどうなの？　あなたの未来は？　どう書かれているの？」

——何処か遠くを見ながら答えるスネーク。

スネーク「人の為に生きるのもいいかもしれない」

メリル「人の為に生きる？」

——スネーク、メリルの顔を覗き込んで云う。

スネーク「そうだ、君の為に生きる……それが本当の生きる事かもしれない」

——スネーク、スノーモービルの最終調整を終える。

メリル「さあて、スネークどこへ？」

スネーク「デイビッドだ。俺の名前は」

——戸惑いを一瞬見せるメリルだが、すぐに笑顔を見せる。

メリル「デイブ、どこへ行きましょう？」

——延々と続く流氷原を見渡してスネーク。

スネーク「そうだな…、俺達の——新しい道を見つけよう」

メリル　「あたらしい道？」
スネーク　「新しい目的……」
メリル　「見つかる？」
スネーク　「見つかるとも」
　――自分に言い聞かせるように呟くスネーク。
スネーク　「見つけるとも……」
　――水平線の彼方にカリブーの親子の姿が見える。子連れのカリブー達は首を伸ばして、スネーク達を興味深げに見ている。カリブーを指さして、聞くメリル。
メリル　「あれは？」
スネーク　「カリブーだ。ここではカリブーは生のシンボルなんだ」
スネーク　「ここももうすぐ春だ」
　――スネークの腰に腕を回すメリル。
メリル　「私達も……」

——メリルの腕に自分の掌を添えて……

スネーク「そうだ…。生きる物全てに春は来る」

スネーク「希望を持つことだ」

——スネーク、アラスカの青い空を見上げてしみじみと云う。

スネーク「ここに住んで長いが……」

スネーク「アラスカがこんなに美しく見えた事はない」

スネーク「空も……海も……カリブーも……そして……」

——スネーク、首をメリルに向ける。

スネーク「君も」

——メリル、スネークの背中に頬を付ける。スネークの体温、力強い生へのリズムがメリルにも伝わってくる。

メリル「素敵ね。生きるって」

——正面を向いて、静かにスネークが云う。

スネーク　「さあ！　人生を楽しもう！」

――スノーモービルは発進して、2人、道無き大氷原を行く……

【エンディング05メリル死亡エンディングデモ】基地外

――スノーモービルの運転席にスネーク、乗っている。後部座席に乗るオタコン。

スネーク　「俺はいままで自分の為だけに生きてきた。死にたくはないっていう、生存本能が俺の人生の動機だった」

オタコン　「みんなそうだよ。君だけじゃない」

スネーク　「死への恐怖の中でしか生きる意味を見出せなかった」

スネーク　「いや、俺の遺伝子にそう記されていたのかもしれない」

――後部座席から身を乗り出して聴くオタコン。

オタコン　「今はどうなんだい？」

スネーク　「人生を楽しみたい。素直にそう思う。オタコンはどうなんだ？」

オタコン　「僕かい？　……なんだか、すっきりした」

スネーク「これからどうする？　また研究を続けるのか？」

オタコン「科学やテクノロジーもいいけど……やっぱり、人間に興味がわいた」

スネーク「そうか……」

オタコン「僕が科学や研究に逃避したのは、人付き合いが苦手だったから」

オタコン「……人が恐かった、生命（いのち）が恐かったんだ」

オタコン「理解できなかったんだ。論理的に説明できなかったからね」

オタコン「でも、僕でも人を好きになる事ができたんだ。恐がる必要なんてないんだ」

スネーク「俺もお前も同じようなもんだな……」

オタコン「ウルフじゃないけど、僕はもう、傍観するのはやめる」

オタコン「僕は自分の足で歩いていく。自分を隠すのもやめる」

スネーク「姿を隠すのもやめろよ」

オタコン「ああ、そうだった……」

オタコン「これ、あげるよ」

——しばらく笑いあう二人。しかし、失った人への寂しさが拭えない。

——2周目アイテム、「ステルス迷彩」入手。

オタコン「……さあ、彼女達ともお別れだ」
スネーク「……」

——スネーク、スノーモービルの最終調整を終える。

オタコン「僕が運転しようか？」
スネーク「いや、遠慮しておく。身体(からだ)が持たない……」
オタコン「そうかい。スネーク何処へ？」
スネーク「俺の名前はデイビッドだ。オタコン？」

——戸惑いを一瞬見せるオタコンだが、すぐに笑顔を見せる。

オタコン「僕はハルだよ。デイブ？」
スネーク「そうだったな、ハル……ハルに、デイブか、これは笑える」

——さわやかに笑う二人。

スネーク「木星へも行けそうなコンビだ」
オタコン「デイブ、何処へ行こうか？」

——延々と続く流氷原を見渡してスネーク。

スネーク「そうだな、新しい道を見つけよう」

オタコン「あたらしい道？」

スネーク「新しい目的……」

オタコン「見つかる？」

スネーク「見つかるとも……」

——自分に言い聞かせるように呟くスネーク。

スネーク「見つけるとも……」

——スノーモービルは発進して、２人、道無き大氷原行く……

【エンディング06ラストエンディングデモ】

——ＢＧＭスタート：ケルト音楽

「ＢＥＳＴ　ＩＳ　ＹＥＴ　ＴＯ　ＣＯＭＥ」

歌：イーファ・ニ・アーリー

――右上に日本語字幕で歌詞の内容がでる。縦書き（映画文字）。
――アラスカの大自然のニュースフィルム（実写カラー）が流れる。
――アラスカの山々、雄大な氷河、カリブーの群、ブルーベリーの実等……
――次第に内陸部へ……雪解けが始まる。
――映像にスタッフクレジットがかぶさる。下から上へスクロール。
――フィルムは途中でF．O．して、黒バックにクレジットのみが流れる。
――監督　小島秀夫
――スタッフクレジット終了。
――画面中央にテロップ、F．O．
――核兵器保管と削減の現状、ＳＴＡＲＴ、ＣＴＢＴ等の進行状況、１９９８年現在の核兵器廃棄保管数等をテロップで表示。

【テロップ】
１９８０年代、世界には常時六万発以上の核兵器が存在した。
その破壊力はヒロシマ型原爆の１００万発分に相当する。
１９９３年１月にＳＴＡＲＴ２が結ばれアメリカ・ロシアは
西暦２０００年12月31日までに戦略核弾頭の配備数を
それぞれ３０００〜３５００発に削減する事に同意した。

しかし1998年現在、世界にはなお二万六千発の核兵器が存在している。

ナオミ　「運命に縛られてはいけない」
ナオミ　「遺伝子に支配されてはいけない」
ナオミ　「生き方を選ぶのは私達なのよ」
ナオミ　「重要なのは」
ナオミ　「あなたが選ぶ事」
ナオミ　「そして…」
ナオミ　「生きる事」

【黒画面】　　——無線機の音声のみ（黒バック）。

オセロット　「はい、全員死亡しました……」
オセロット　「あの二人は生存しています」

オセロット「運び屋の方はもうすぐFOXDIEが、はい……そうです」
オセロット「はい、模擬核弾頭演習のデータは私が回収しました」
オセロット「ええ……、誰も私の正体に気づいてはおりません」
オセロット「はい、正体を知るDARPA局長は始末しました」
オセロット「はい…」
オセロット「結局は劣性が勝った事になります」
オセロット「そうです。リキッドは最後まで自分が劣性だと思い込んでいたようです」
オセロット「ええ、そうですね。世界を引き継ぐ者は劣性でも優性でもありません」
オセロット「ええ、あなたが3人目、ソリダスである事もつかんでいません」
オセロット「あの女は、どうします?」
オセロット「はい、監視を続けます」
オセロット「はい、ありがとうございます。大統領」

Distant Dialogues

無線会話集

■序盤操作説明　キャンベル

【無線機使い方】

キャンベル「よく連絡してくれたな、スネーク。念のために無線機の操作説明をしておこう」

キャンベル「スネークから送信する時は、セレクトボタンを押してくれ。無線機モードに入る」

キャンベル「無線機モードに入ったら、方向キーの左右で周波数を合わるんだ。それから方向キーの上か○ボタンを押せば、その周波数で通信をする事ができる」

キャンベル「無線機には一度会話した相手の周波数を記憶しておく機能もついている。無線機画面で方向キーの下を押せば、メモリーウインドウが開く」

キャンベル「メモリーウインドウの中には、記憶された周波数のリストが表示される。通信したい周波数を選択して、○ボタンを押すだけで、その周波数で通信をする事が出来るぞ」

キャンベル「メモリーウインドウから通常の無線機モードに戻りたい場合は、×ボタンを押せ」

【危険、回避モード説明】

キャンベル「万が一見つかってしまったら、敵は一斉に君を攻撃してくる。その状態が危険モードだ」

キャンベル「そうなったら、危険を脱する方法は二つしかない。追いかけてくる敵をすべて倒すか、一定時間逃げきるか、だ」

キャンベル「どれだけの時間逃げればいいかは、画面右上を見ればいい。レーダー部分にカウントダウンされていく数字が表示されているはずだ」

キャンベル「その数字が0になるまで、君が逃げきる事ができたら、敵は攻撃をやめ、回避モードになる」

ナオミ「回避モードになったからといって気を抜かないで。敵はまだあなたを探しまわっているわ。見つからないようにうまく隠れて」

ナオミ「レーダー部分に表示されている数字が0(ゼロ)になるまで発見されなければ、敵は自分の持ち場に戻っていく。そうなれば、ひとまず安全よ」

キャンベル「とにかく敵に見つからない事を一番に考えろ。無用の戦闘は絶対に避けてくれよ」

【格闘戦の説明】

※武器なし状態で

キャンベル「君はまだ武器を手に入れていない。戦闘になったら素手で切り抜けるしかないぞ」

キャンベル「いいか、スネーク。素手で敵と戦う場合の基本はパンチだ。アクションボタンを押せ。連打すれば連続技(コンボ)で敵を吹き飛ばす事が出来るぞ」

キャンベル「武器を装備していない場合のみ、敵に接近して方向キーを押しながら武器ボタンで投げ技が使える。パンチよりも大きなダメージを与える事が出来るぞ」

キャンベル「方向キーを押さずに武器ボタンを押した場合、絞め技になる。一時相手を気絶させる事ができるぞ。そのまま絞め続ければ、相手を倒す事も出来る。活殺自在だ。うまく使うんだぞ」

【O2ゲージ】

キャンベル「水中やガスをまかれた状況ではO2(オーツー)ゲージが表示される。O2(オーツー)ゲージが一回の息継ぎに相当する」

※一回目のみ

キャンベル「O2(オーツー)ゲージが0(ゼロ)になると続いて、LIFE(ライフ)が減るぞ。注意するんだ」

【イントルードモード】

キャンベル「スネーク、狭い所に入り込んだ時は、自動的にイントルードモードになる。方向キーの上で前進、下で後退、左右はそれぞれの方向を向く」

※一回目のみ

キャンベル「敵の様子を伺いつつ、身を隠しながら進むんだ。絶対に見つかるんじゃないぞ」

ナオミ「イントルードモードでは、攻撃をすることは出来ないの。注意して」

キャンベル「敵に追われている状態でイントルードモードに逃げ込んでも、手榴弾で追いうちを食らうぞ」

【ビハインドモード】
キャンベル「スネーク。物陰の角に張り付くと、自分は隠れながら背後の様子を覗き見る事ができる。それがビハインドモードだ。これを利用して敵の隙を伺い、発見されないように進むんだ」
※一回目のみ以下を追加
ナオミ「ビハインドモードではアクションボタンを押せば、壁を叩いて物音を立てることができる」
スネーク「敵をだまして、おびきよせることもできるな」
ナオミ「騙すのはお得意なんでしょ」
スネーク「美人相手でなければ、その甲斐もないがな」
【主観左右ステップの説明】
キャンベル「スネーク、主観モードの時にR1ボタンを押すと右、L1ボタンを押すと左に、一歩ステップすることができる」
スネーク「物陰からさっと体を出して、先の様子を伺うことができるわけか」

ナオミ「ええ。でも物陰から出てる間は当然見つかりやすくなるわ。だから敵が迫ってきたらボタンを離してすぐに物陰に戻る事を忘れないで」
【ホフク説明】
キャンベル「スネーク、ホフクは狭い所にもぐりこむ時には便利だが、自分から攻撃することはできなくなる。気をつけろ」
キャンベル「立ち上がりたくなったら、もう一度ホフクボタンを押せばいい」
【主観でアイテムボックスを見る】
キャンベル「アイテムボックスを見つけたら、取る前に近寄って主観で見てみるといい。ボックスの中に何が入っているか表示されるぞ」
【敵兵を盾にする説明】
キャンベル「敵の首を絞めると、手を離さなければ、そのままひきずって移動する事ができる。つまり、敵を自分の盾にする事も可能だ」

■その他特定条件　キャンベル

【煙草喫煙状態】

※1回目のみ

ナオミ「（軽蔑）煙草を吸ってるの？」

スネーク「ああ。それが？」

ナオミ「ねぇ知ってる？　煙草に含まれる化学物質、多環式芳香族炭化水素は肺ガンと深く関わっているのよ」

ナオミ「多環式芳香族炭化水素は体内に取り込まれるとベンゾピレンジオールエポキシドに変化して、肺ガンの原因といわれているP53遺伝子に結合する事が知られているわ」

ナオミ「ベンゾピレンジオールエポキシドがP53の特定の3カ所に結合して突然変異をおこす事が肺ガンの原因とされているの」

スネーク「化学式を理解しても煙草の良さはわからんよ」

【ダンボール入手】

キャンベル「ほう、ダンボール箱を見つけたか！」

スネーク「ああ、懐かしいだろう」

キャンベル「らしくなってきたな、スネーク。いつものようにそれで敵をあざむくんだ」

【扉の前】

※カードを持っていない場合

キャンベル「スネーク、その扉はセキュリティシステムで保護されている。セキュリティ・カードが無ければ開ける事は出来ないぞ」

※カードを持っている場合

キャンベル「扉はカードを装備すれば開けられる。しかしカードのセキュリティレベルが扉のレベル以上でなければ開かないから注意してくれ」

■セーブ後の会話　メイ・リン

【ことわざ　序盤編】

(1)

メイ・リン「中国にはね、『匹夫の勇、一人に敵するものなり』っていうコトワザがあるの。無闇に戦いを求める愚か者の勇気は、一人の敵を相手にするのが精いっぱいって意味よ」

メイ・リン「スネークはたった一人で敵の中に潜入してるんだから、やたらと戦闘を仕掛けたりしないで、慎重に行動してね」

スネーク「わかってる。…コトワザに詳しいみたいだな、君は」

メイ・リン「私、生まれも育ちもアメリカだけど、国籍は中国、広東省なの。母国の文化には興味があっていろいろ勉強したわ。これからもいろいろなコトワザ、教えてあげるね」

スネーク「それはありがたい。だが、それよりも君の事をもっと知りたいな、俺は」

メイ・リン「そのうち、ね」

(2)

メイ・リン「『高飛の鳥も美食に死す。深泉の魚も芳餌に死す』って格言があるわ」

メイ・リン「高い所を飛んでいる鳥も、美味しそうなエサをとりに降りて来た所を殺されてしまう。深い泉の底に住んでいる魚も、おいしそうなエサに引っかかって、釣り上げられてしまう」

メイ・リン「高潔な人でも欲をかいたら失敗しちゃうってことの例えよ。スネークもアイテムにつられて無理しちゃダメよ」

(3)

メイ・リン「中国では『欲多ければ則ち生を傷る』って言うことがあるの」

メイ・リン「欲をかくと、体を傷めることになるっていう意味よ」

メイ・リン「アイテムを取るのに欲張りすぎると、怪我をするわ。気をつけてね」

(4)

メイ・リン「『知は禍いをまぬがるるを貴ぶ』って、知ってる?」

メイ・リン「知恵の貴い所は、わざわいをまぬがれるという点にあるって意味よ。スネークも知恵

を絞って敵や罠から逃げてね」

(5)

メイ・リン「『迷う者は路を問わず、溺る者はあさせを問わず』って聞いたことある?」

メイ・リン「道に迷うのは、人に道を尋ねないからで、おぼれてしまうのは浅瀬がどこにあるか聞かないからだって意味なの。自分を過信して他人の意見を聞かないと失敗するってことね」

メイ・リン「スネークも困った事とかわからない事があったらキャンベルさんやみんなに話を聞いてみて。せっかく無線機があるんだから、ね?」

(6)

メイ・リン「中国では『狼 衆ければ人を食らい、人多ければ狼を食らう』って言うこともあるの」

メイ・リン「要するに数の少ない方は、多い方に絶対かなわないって意味よ。スネーク、敵に見つからないようにね」

(7)

メイ・リン「『小心に大過なし』っていうコトワザがあるわ」

メイ・リン「慎重にやれば、大きな間違いをすることはないって意味よ。ゲームになれてきても、絶対に慎重さは忘れないでね」

【中盤の注意】

(1)

メイ・リン「『可を見て進み、難を知りて退く』って知ってる?」

メイ・リン「進めそうな時に進んで、危なそうな時には撤退するのがいいって意味。その場その場で適切な判断をしてね」

(2)

メイ・リン「中国には『溺れ死ぬのは泳げるもの』って言葉もあるわ」

メイ・リン「泳ぎの上手な人こそ、かえって油断して溺れてしまうっていう例えよ。そろそろゲームにも慣れたでしょうけど、油断はしないでね」

(3)

メイ・リン「『一心は二用する能わず』って聞いた事あ

メイ・リン「一つしかない心を同時に二ヶ所に使うことはできないっていう意味よ。あなたは、何か他のことしながらゲームしたりしてないよね？」

(4)

メイ・リン「中国の格言に『一日快活なるは千年に敵る』っていうのがあるわ」

メイ・リン「一日を愉快に過ごせたなら、それは千年の楽しみにも相当するっていうような意味よ」

メイ・リン「とにかく、ゲームする暇があるってのは幸せな事だもん。遊べる時には目一杯遊んどこ？」

(5)

メイ・リン「『心遠ければ地自ずから偏なり』ってコトワザがあるわ」

メイ・リン「心が一般社会から遠ざかっていると、自然と住むところは辺鄙なところになるってこと」

メイ・リン「…スネークがアラスカに住んでたのも、そういうことなのかな…？」

(6)

メイ・リン「『飢えても腐鼠を啄まず、渇しても盗泉を飲まず』っていうコトワザも中国にはあるわ」

メイ・リン「お腹が減っても腐った鼠を食べたりはせず、のどが渇いても、盗泉っていう泉は名前が悪いから、そこの水は飲まないって意味。人格が高潔なことの例えよ」

メイ・リン「……って言ってみても、スネークの装備は全部現地調達だもんね。そんなこと言ってらんないか」

(7)

メイ・リン「『変動常無し、敵に因って転化す』って聞いたことがあるわ」

メイ・リン「相手の動きによって、臨機応変でいこうって意味らしいけど。スネークの任務にはホントぴったりの言葉ね」

(8)

メイ・リン「『志は慢るべからず、時は失うべからず』っていうコトワザも中国にはあるわ」

メイ・リン「意志をなおざりにしてはダメだし、チャンスも逃しちゃいけないっていう意味よ」

メイ・リン「スネークには言うまでもないことだったかな？」

【終盤の注意】

（1）

メイ・リン「『天に順う者は存し、天に逆らう者は亡ぶ』っていうコトワザがあるの」

メイ・リン「自然の道理に従っている者は存在できるけど、逆らう者は滅亡してしまうっていう意味よ。スネーク、あなたは正しいことをしていると思う。私、信じてるわ。だから…がんばって」

（2）

メイ・リン「中国では『命を知るものは、惑わず』って言うことがあるわ」

メイ・リン「天命を知っているものは、自分がすべき事をわかっているから、戸惑うことがない。あれこれ迷うのは天命を理解していない者だって意味よ」

メイ・リン「あなたの任務が天命かどうか、私わからないけど…スネーク、自分を信じて！」

（3）

メイ・リン「中国の格言に『戦陣の間には詐欺を厭わず』っていうのがあるわ」

メイ・リン「戦いは、勝つ事だけが目的だから、相手を騙す策略も厭わないって意味……」

メイ・リン「スネークも……生き延びるためなら、なんでもするの？」

（4）

メイ・リン「『志有る者は事ついに成るなり』っていう言葉もあるわ」

メイ・リン「強い意志でものごとを進めるなら、途中でいろいろ困難なことがあっても、最後には目標を達成できるっていうことなの」

メイ・リン「だからスネーク、気持ちを強く持って。……負けないでね」

（5）

メイ・リン「『春秋に義戦なし。彼、此れより善きは、則ち之れあり』」

メイ・リン「戦争には善いも悪いも無くって、ただこの戦

争よりこっちの戦争がましっていう程度の差があるだけだ、って意味なの」

メイ・リン「スネーク……あなたの戦いには価値があるの？」

(6)

メイ・リン「スネーク、『得難くして失い易き者は、時なり』って言うわ」

メイ・リン「時間は簡単に失われてしまうって意味よ」

メイ・リン「核の発射までもう時間がないわ。急いで、スネーク！」

【風邪引き状態】

(1)

メイ・リン「『病に六の不治あり、巫を信じて、医を信ぜず』って聞いた事ある？」

メイ・リン「病気には六つの治らないことがあって、その一つは巫女を信じてお医者さんを信用しないことだって意味なの。ちゃんと治療しないと病気は治らないわ」

メイ・リン「スネーク、風邪引いてるんでしょ。さすがにそこじゃ病院にはいけないと思うけど、ちゃんと薬くらいは飲んでおいた方がいいわよ」

(2)

メイ・リン「中国には『風は百病の長なり。其の変化に至りて乃ち他病を為すなり』って言葉もあるわ」

メイ・リン「風邪はあらゆる病気のもとで、風邪が変化して初めて別の病気になるって意味」

メイ・リン「風邪引いてるんなら、薬かなんか飲んで、しっかり治さなきゃダメよ」

【レイブン、マンティス死後一回目のみ】

メイ・リン「中国にはね、『鳥の将に死なんとするや、其の鳴くや哀し。人の将に死なんとするや其の言うや善し』っていう言葉があるの」

メイ・リン「鳥が死ぬ時の泣き声はとても悲しげで、人が死ぬときに残す言葉はとても素晴らしい。死に瀕した人の言う事は誠実で聞く価値があるって意味よ」

メイ・リン「私、あの人が嘘を言っているとは思わないな。信じてみてもいいんじゃない、スネー

ク？」

【ウルフ、忍者死後一回目のみ】

メイ・リン「……『好死は悪活に如かず』ってコトワザがあるわ」

メイ・リン「カッコよく死ぬより、カッコ悪くても生きてる方がいいっていう意味なの」

メイ・リン「……私もそう思うわ。死んじゃったら、もう何も楽しい事なんてないもの。死にたいとか思う気持ち、私にはわからない……」

メイ・リン「……スネークは必ず生きて戻ってね。……約束よ」

【拷問監禁状態】

メイ・リン「中国ではね、『志は気の帥なり。気は体の充なり』っていうこともあるの」

メイ・リン「志が気を支配していて、気は体中にみちているものだってこと。意志をしっかり持っていれば、気力が満ちてくるっていう意味よ」

メイ・リン「今……大変だと思うけど、気持ちをしっかりもって。くじけないでね」

■何かのタイミング会話　メイ・リン

【二回目の会話】

メイ・リン「どう、スネーク？　レーダーの見方にはもう慣れた？」

スネーク「ああ。大分な。（感心）しかし、良くできたシステムだ。地形だけじゃなく敵の動きまで把握できる」

メイ・リン「（得意）便利でしょ。あなたの行動も全部手に取るようにわかるのよ」

スネーク「なんでもお見通しか」

メイ・リン「（冗談ぽく）私をお嫁さんにした旦那さんは浮気できない」

スネーク「24時間空からの監視つきか。地獄だな…」

メイ・リン「安心でしょ？　道に迷う事はないもの」

【戦車格納庫に入ったら】

メイ・リン「データだけじゃなく、武器も送信できたらいいのにね」

スネーク「それは便利だ。今の俺は盗人と同じだから

な……」

スネーク「部屋に忍び込んでは何かを物色し、敵を倒すとポケットを探る……」

メイ・リン「仕方ないわよ」

スネーク「どうやら、目についた物は片っ端からポケットに仕舞い込んでしまう癖ができてしまったみたいだ」

【序盤社長救出後】

メイ・リン「ねぇ、闘うってどんな気持ち?」

スネーク「……どうして?」

メイ・リン「私、格闘ゲーム、好きなの」

スネーク「ゲーム?」

メイ・リン「そう、格闘ゲーム。この仕事してから、人が殺し合うのを見てきた。モニター画面や、バースト通信を通してだけど」

スネーク「いい仕事じゃないな」

メイ・リン「よくわからないの。ここで傍聴(モニター)してると、ゲームみたいなの。そう、格闘ゲームなんかと同じ」

スネーク「これはゲームではない。やり直しは効かない」

メイ・リン「ごめんなさい」

スネーク「楽しいものじゃない。格好よくもない」

メイ・リン「スネーク、ゲームじゃないのよね。やり直しは効かないのよね?」

スネーク「この作戦が終われば普通の学生に戻る事だ。ゲームを心から楽しめるような普通の女の子になるがいい」

【オタコン救出後】

スネーク「君はどうして今の仕事を?」

メイ・リン「私、本当は戦闘機乗り……パイロットになりたかったの」

メイ・リン「映画を見てあこがれたのよ」

スネーク「…よくある話だ」

メイ・リン「でも戦闘機で人を殺したくはなかった。それで、空軍でもBDA、爆撃効果判定報告という仕事があることを知ったの」

スネーク「破壊した攻撃目標を確認する為の作戦だ」

メイ・リン「ええ、それで空撮やら、電子情報収集(ELINT)の研究に協力し始めたの。私の専門分野だった

し……」
スネーク「しかし、爆撃効果判定報告専用のパイロットなんていないだろ」
メイ・リン「そう。気がついてみたら、今の分野のエキスパートになっていたわ」

【メイ・リンの動機2】
スネーク「メイ・リン、君はパイロットになりたかったって、言ってたな。適性はあったのか?」
メイ・リン「私、目がよくないの。これ、コンタクト」
スネーク「それで適性テストに合格しなかったのか?」
メイ・リン「おかしいでしょ。もう複葉機の時代じゃないのにね」
スネーク「…それはそうだ。音速の何倍ものスピードで飛ぶこの時代にな」
メイ・リン「そうよ。肉眼なんて役にたたないわ。もっと信頼の置ける電子の目が必要なの」
スネーク「それで、君はレーダーの開発に?」
メイ・リン「そういう意味あいもあったわね。レーダーが人の目や判断力のサポートをしてくれるじゃないかって」
スネーク「君の開発したレーダーは真実が見えるのか?」
メイ・リン「解釈しだいね。真実を見極める事が難しい」
スネーク「それは現実と同じだ」

【中盤】
メイ・リン「私との思い出も記録(セーブ)しといてね」
スネーク「思い出は、君の自慢のシステムでも記録できない。デジタルに変換され、バーストした時には消去されている」
メイ・リン「大丈夫。私のシステムは一言一句逃さないわ」
スネーク「思い出は言葉や映像じゃない。活字でいうところの行間にあるものだ」
メイ・リン「わからないわ。デジタルで出来ないことなんてない」
スネーク「じゃあ、俺が今思っている事を記録(セーブ)できるか?」

メイ・リン「そんなの記録（セーブ）できないわ。言葉にしないと……」
スネーク「そうだ。それが思い出だ」
メイ・リン「わからないわ……」
スネーク「いくら情報収集技術が進もうと、人の心を傍受はできない」
メイ・リン「いつか、できるわ」
スネーク「それにはまず人の気持ちを理解する事が先だ。メイ・リン」
メイ・リン「理解、どうしたらいいの？」
スネーク「誰かを好きになる事だ」

【ハインド撃墜後】
※SAVE回数一定以上
メイ・リン「ねぇ、知ってる？『君と遠く相知（あい）らば、雲海（うんかい）の深きを道（い）わず』っていう昔の中国の詞があるの」
メイ・リン「遠く離れていても、心がつながってるから遠い気がしない、っていうこと……」
メイ・リン「（恥ずかしくなって慌てる）あっ別に深い意味はないのよ。うん……」

【ナオミに注意されても煙草すってる場合】
メイ・リン「ああっ！　スネーク、煙草吸ってるの？」
メイ・リン「（難詰）煙草は体に悪いのよ。ナオミさんも言ってたじゃない。『唯（た）だ善人のみ能（よ）く尽言（じんげん）を受く』ってとこかしら？」
メイ・リン「注意されて行いを直せるような立派な人は少ないって感じの意味よ」

【セーブに失敗した場合】
※メモリカードがささっていない場合
メイ・リン「ごめんなさい。メモリーカードがないと、記録（セーブ）はできないの」
メイ・リン「記録（セーブ）する場合は、メモリーカードをメモリーカード差込口（さしこみぐち）に差してね」
※空き領域がない
メイ・リン「ごめんなさい。メモリーカードに空きブロックがないみたい。このままじゃ記録（セーブ）はできないわ」
※メモリカードがフォーマットされておらず、「フォーマットしますか？」というシステムからの質問に対して、ユーザが「いいえ」を選んだ場合

メイ・リン「(ちょっと困ったように) メモリーカードをフォーマットしないと、記録(セーブ)はできないんだけど……記録(セーブ)したくないの?」
※エラーが発生した
メイ・リン「ごめんなさい。エラーが起きたせいで、記録(セーブ)できなかったわ」

■その他　メイ・リン

※無線で呼ばれた時(通常) SAVEメニューが出る前
【ゲーム序盤から中盤、明るめ】
メイ・リン「何か用?　スネーク」
メイ・リン「なぁに?　スネーク」
メイ・リン「スネーク、呼んだ?」
メイ・リン「スネーク、どうしたの?」
【ボスと交戦中など、緊迫した場面の場合】
メイ・リン「(緊迫) スネーク、大丈夫?」
メイ・リン「(緊迫) 無事なの?　スネーク!?」
メイ・リン「(心配) 平気?　スネーク?」
メイ・リン「(心配) スネーク……」

【ゲーム後半、深刻な場面の場合】
※ナオミがスネーク達を裏切っていた事が明らかになったり、スネークがウイルス兵器に感染している疑いがでる
メイ・リン「(暗め) 何、スネーク?」
メイ・リン「(同情) スネーク、何か私に出来る事ある?」
メイ・リン「(心配から安堵) スネーク、無事だったのね……」
メイ・リン「(暗め) 呼んだ?　スネーク?」
※記録するメニューを選ばなかった場合
【ゲーム序盤から中盤、明るめ】
メイ・リン「じゃあね。スネーク」
メイ・リン「スネーク、がんばってね」
メイ・リン「スネーク、無理しないでね」
メイ・リン「(すねる)もう。用も無いのに呼ばないでよ」
【ボスと交戦中など、緊迫した場面の場合】
メイ・リン「(励ます) スネーク、負けないでね!」
メイ・リン「(励ます) がんばって、スネーク!」

メイ・リン「(励ます) スネーク! 勝って!!」
メイ・リン「(心底心配) スネーク、死なないで……!」
メイ・リン「(心底心配) くじけないで、スネーク……」

【ゲーム後半、深刻な場面の場合】
※ナオミがスネーク達を裏切っていた事が明らかになったり、スネークがウイルス兵器に感染している疑いがでる
メイ・リン「(心配) スネーク、あきらめないで」
メイ・リン「(心配、祈るように) 生きてかえってきてね、スネーク……」
メイ・リン「(テロリストが核を発射する刻限まで) スネーク、もう時間がないわ。急いで!」
メイ・リン「(心配、祈るように) スネーク、がんばってね……」

■アイテム蘊蓄　ナスターシャ

【サプレッサー入手】

ナスターシャ「ソーコムピストル専用のサプレッサーを手に入れたな。それを装備すれば発砲しても敵に気付かれる恐れはなくなる」

ナスターシャ「そのサプレッサーは、多層隔壁（チェンバー）で発射ガスの速度を減速して発射音と発射炎を減少させるタイプだ」

ナスターシャ「装着後も、スライド上のオリジナルサイトで照準が可能なように細めに設計されている。装着前と同じ感覚で扱えるはずだ」

【ソーコム入手】

ナスターシャ「制式特殊部隊用拳銃（ハンドガン）、ＳＯＣＯＭ（ソーコム）ピストルを手に入れたようだな」

ナスターシャ「口径は、ストッピング・パワーを重視した45口径。フレーム下面には夜間戦闘用レーザー・エイミング・モジュール（ＬＡＭ）を装着している」

ナスターシャ「武器ボタンを押しっぱなしにすればレーザー・ポインターで敵に照準を合わせる事が出来る」

ナスターシャ「専用のサプレッサーを手に入れれば、それも装着可能だ」

ナスターシャ「特殊作戦のために開発された戦闘ピストルだからな。今回の潜入任務には役に立つと思う。重くて多少扱いにくい銃だが、君なら充分使いこなせるはずだ」

【煙草共通1回目のセリフ】

ナスターシャ「核兵器や原子炉、産業廃棄物……。我々は常にプルトニウム等の放射能の危険にさらされている。それと比べれば紫煙（タバコ）による害なんて問題にならない。違うか？」

【スタン・グレネード入手】

ナスターシャ「それはスタン・グレネードだな。人質解放作戦などでよく使用される特殊閃光音響弾だ。『フラッシュ・バン』『サウンド・アンド・フラッシュ・グレネード』などとも呼ばれる」

ナスターシャ「凄まじい閃光と爆音を発生させて、敵の方

向感覚、思考能力を奪う事ができる。殺傷能力はないが敵は数秒意識を失う。有効に使え」

【チャフ入手】
ナスターシャ「それはチャフだ。細かい金属片をばらまく特殊手榴弾で、電子装置を撹乱する事が出来る」
ナスターシャ「電子装置を装備した機械には有効だろう」
ナスターシャ「しかし当然だが、攻撃されてからチャフを散布したのでは遅い。攻撃を受ける可能性のある場所では、前もってチャフを散布しておく必要性があるぞ」

【地雷探知機入手】
ナスターシャ「それは地雷探知機だ。金属を探知するタイプだな。ステルス迷彩で姿を消したクレイモア地雷でも発見できる」
ナスターシャ「発見した地雷の座標がレーダーに投影されるように設定されているはずだから、地雷探知機を装備しただけで、レーダーに地雷の位置が表示されるようになる。有効に使え」

【ダンボール箱入手】
ナスターシャ「ああ、ダンボール箱か。ダンボールは板紙(ライナー)に波形の段をつけた中芯を張り合わせたものだ。主にクラフト紙や古紙を原料としている」
ナスターシャ「発明されたのは、100年ほど前のヨーロッパだ。元々は帽子の汗取りに使われていたようだ」
ナスターシャ「同量の木材で木箱の6~7倍のダンボールを作る事ができ、リサイクルも可能なので経済性も高い。おまけに丈夫で格納性も高いので、荷物の梱包に広く使われている」
ナスターシャ「だが兵器のような精密機器を運ぶ時には、輸送中の故障が起こらないように、木箱などの頑丈な箱に詰めた上で、すき間におがくずやポリエチレンの充填物を詰めるべきだな」
ナスターシャ「……で、それがどうかしたのか?」

スネーク「……いや、いいんだ」

【グレネード入手】

ナスターシャ「手榴弾(グレネード)を手に入れたか。信管を抜いてから、5秒で爆発する。この5秒の使い方で幾通りもの戦闘方法が引き出せるはずだ。これをどう使うかは君次第だぞ、スネーク」

【C4爆薬入手】

ナスターシャ「C4爆薬だな。高性能爆薬に樹脂などの可塑剤を加えた粘土状の軍用プラスチック爆弾だ」

ナスターシャ「ダイナマイトの1.4倍以上の爆速・破壊力があるにも関わらず、安定性が高く扱いやすい。点火装置を使わない限り、火の中にいれても爆発しないくらいだ」

ナスターシャ「今回は無線式の発火装置を使うんだろう？
その発火装置はスクランブラを備えている。無線電波の影響による誤作動の危険は無いから安心していい」

ナスターシャ「しかしわかっていると思うが、発火は充分距離を置いてから、行わないと危険だぞ。あと、爆音がすれば当然敵に気付かれる。注意しろ」

【ファマス入手】

ナスターシャ「FA－MAS(ファマス)を手に入れたか。FA－MAS(ファマス)はブルパップ式のアサルトライフルで、故障が少なく低温にも強い、信頼できる銃だ」

ナスターシャ「連射速度は毎分900～1000発。フルオート掃射をすると、25発の弾倉は数秒で空になってしまう。気をつけろよ」

【クレイモア入手】

ナスターシャ「クレイモア地雷を手に入れたのか」

ナスターシャ「クレイモアは従来の地雷とは違い、地中に埋設するのではなく、地上に設置して敵を殺傷する武器だ」

ナスターシャ「爆発と同時に直径1.2ミリの鋼鉄球を700個、60度の角度でまき散らす」

ナスターシャ「通常のクレイモアはワイヤーと爆破用信管を使うが、そのクレイモアは新型でステル

ス迷彩が施された上に敵の接近を察知するセンサーが取り付けられている」

【PSG1入手】

ナスターシャ「PSG1を手にしたようだな。PSG1はもっとも高性能なスナイパー・ライフルの一つだ」

ナスターシャ「100メートル先にある約25センチ四方の黒点を確実に射抜く精度を持っている」

ナスターシャ「通常のスナイパー・ライフルと違ってボルトアクションではなく、セミオートを採用し、高い連射性能を実現しているのが特徴だ」

ナスターシャ「狙撃時は手ブレに注意しろ。遠距離の狙撃では、わずかな手ブレも着弾時には数十センチ単位のズレになるからな」

【防弾チョッキ】

ナスターシャ「防弾ベストを見つけたな。それを装備すれば、銃弾によるダメージをかなり防げるはずだ」

ナスターシャ「だが防弾ベストは、中枢器官を通常弾薬から守ることが目的だ。直撃した拳銃弾をストップさせるだけで、着弾の衝撃は防げない。過信はするなよ」

【リモコンミサイル】

ナスターシャ「それはリモコンミサイルだな。ニキータ・ミサイルとも呼ばれる偵察用の小型ミサイルだ」

ナスターシャ「発射後、弾頭に搭載した小型CCDカメラの映像を見ながら自由に飛行方向を制御できる」

ナスターシャ「ただし、ミサイルの燃料には限りがある。ゲージに注意しろよ」

ナスターシャ「主観ボタンを押せば、ミサイルからのモニター映像を見る事もできる。有効に使ってくれ」

【スティンガー】

ナスターシャ「スティンガーを手に入れたな。スティンガーは携帯用の地対空ミサイル(SAM)だ」

ナスターシャ「熱源追尾装置が装備されていて、ロックオ

ン中、ミサイルは目標を自動追尾する。ロックオンするには目標を照準に捉えるだけでいい」

ナスターシャ「アフガニスタンではアフガンゲリラにアメリカから供給され、ソ連のパイロットに恐れられた。この兵器の採用により、ソ連側は戦法を考え直さなければならなくなった程だ」

ナスターシャ「ちなみに、私の好きなモダンホラーにスティンガーというのがある。好きなカクテルもスティンガー、私はスティンガーに縁がある」

【ガスマスク】

ナスターシャ「ガスマスクを手に入れたか。そのガスマスクは二眼レンズ式だ。透明シールド式のものと違って視野が狭いから気をつけろ」

ナスターシャ「レンズは二重。外側は強化プラスチック、内側はアセテート繊維製で、曇り止め加工もされている。マスクを外さずに水分を補給でき、ボイス・エミッターも装備している」

ナスターシャ「そのマスクがあれば、ガスの中でも長い時間持ちこたえられるはずだ。有効に使え」

【暗視ゴーグル】

ナスターシャ「暗視ゴーグルを手に入れたな。暗視ゴーグルは特別なレンズを使っているのではなく、光を電気的に増幅するものだ。光を電気信号に換えて、増幅して映像化している」

ナスターシャ「増幅率は10万倍。星明りでも５００メートル先まで真昼のように見えるはずだ。だが増幅すべき光が全く存在しない闇の中では、意味が無い」

ナスターシャ「暗視ゴーグルを長時間使用すると、目を痛めるかもしれん。使いすぎには気をつけろ」

【サーマル・ゴーグル】

ナスターシャ「サーマル・ゴーグルは、熱源の分布を画像にするものだ。光ではなく熱をイメージ化するものだから完全な暗闇でも有効だし、たとえステルス迷彩でも視覚化できる」

ナスターシャ「だが目が疲れるから、使いすぎには注意しろ」

【風邪薬】

ナスターシャ「風邪薬？　それは見たまま風邪薬だろう？」

【精神安定剤】

ナスターシャ「精神安定剤？　スナイパー・ウルフが手ブレの防止に使っていると聞いた事があるな。君も使ってみるといい」

【ロープ】

ナスターシャ「ロープ？　最低、直径12ミリ以上、軽量で切れにくいものであれば、ラペリングにも使えるはずだ。ああ、麻製ではないだろうな？」

ナスターシャ「いや。ナイロン繊維が織り込んであるようだ」

ナスターシャ「それならいい。麻は濡れると柔軟性がなくなるからラペリングには不向きなんだ。大丈夫。そのロープなら充分使用に耐えられるはずだ」

【スティンガー入手】

ナスターシャ「スティンガーを手に入れたな。スティンガーは携帯用の地対空ミサイル(SAM)だ」

ナスターシャ「熱源追尾装置が装備されていて、ロックオン中、ミサイルは目標を自動追尾する。ロックオンするには目標を照準に捉えるだけでいい」

ナスターシャ「アフガニスタンではアフガンゲリラにアメリカから供給され、ソ連のパイロットに恐れられた。この兵器の採用により、ソ連側は戦法を考え直さなければならなくなった程だ」

ナスターシャ「ちなみに、私の好きなモダンホラーにスティンガーというのがある。好きなカクテルもスティンガー、私はスティンガーに縁がある」

■その他　ナスターシャ

【狙撃について】

（1）

ナスターシャ「伏せ撃ち姿勢（プローン・ポジション）で発射するんだ」

ナスターシャ「メタル製二脚で地面に固定できればいいが、ない場合はしっかりと脇を閉め顎で固定して、スコープ内のクロス・ヘアの十字線（レティクル）で標的を捉える」

（2）

ナスターシャ「通常、300メートルの距離であれば狙撃できる。私の知人には520メートルの超長距離からでも狙撃に成功した人物がいるがな」

（3）

ナスターシャ「スナイパーに必要なのは長期間アンブッシュできうる強靭な精神力、忍耐力、そして時には数日も身動きせずに体勢を維持できる肉体」

ナスターシャ「だが一番必要なのは『ひたすら待つ』ことができることだ」

（4）

ナスターシャ「手の震えによる、わずかな銃口のズレでも60メートル先の着弾点では数十センチにもなる。集中して、息を止め、揺れを無くすよう努力するんだ」

（5）

ナスターシャ「ライフルスコープは照準合わせ（サイト・イン）が大切なんだ」

ナスターシャ「照準合わせ（サイト・イン）がズレていると実際の着弾点に狂いがでる」

ナスターシャ「本当はサイトがズレているかもしれないから、試射した方がいい。試射をして、着弾点がズレている場合は、目測で狙点を修正しながら撃てばいい」

スネーク「大丈夫。この銃はスナイパー・ウルフが調整していた奴だ」

ナスターシャ「そうか、それなら、あまりサイトに触れないようにな」

（6）

ナスターシャ「長距離狙撃では、気温は誤差の原因となる。気温が一度違えば、約400メートルで1

センチ程度の誤差が出るんだ」

ナスターシャ「同様に気圧も精度に影響を与える。だから、照準の調整は実際に狙撃を行う場所の条件に合わせて行う必要があるんだ」

(7)

ナスターシャ「マグナス効果というのを知っているか?通常、ライフル弾は右回りに回転しているので、右にそれる。この銃弾の回転による影響をマグナス効果と呼ぶんだ」

ナスターシャ「照準調整の際にはこのマグナス効果も考慮にいれなければならない」

【核兵器保存施設について】

※最初からDARPA局長救出まで。最後まで行ったら二回目以降をランダム

(1)

ナスターシャ「そのシャドー・モセス島の核兵器廃棄所は今世紀初頭に作られた。廃棄核弾頭を一時保存しておくためだけにな」

スネーク「なぜ?　廃棄されたのならばさっさと解体してしまえばいいだろう?」

ナスターシャ「それができないんだ。解体した核弾頭から出る核物質。それを保存しておくための核物質貯蔵施設が収容能力を超えてしまっているせいでな」

ナスターシャ「かといって第二次戦略兵器削減条約、START2を推進する手前、核弾頭の廃棄をやめるわけにもいかない…」

スネーク「そこで一時しのぎのために、この孤島に核兵器廃棄所が作られたというわけか」

ナスターシャ「軍縮で核の脅威は遠のいたとおもわれているが…逆に今回のように、廃棄核兵器や核物質を使ったテロが起こる危険性も大きくなっているんだ」

スネーク「皮肉……だな」

(2)

ナスターシャ「1993年1月3日に調印された第二次戦略兵器削減条約(START2)で米露双方の戦略核弾頭の配備数が最大3500発に削減されたんだ」

ナスターシャ「中でも個別誘導複数目標弾頭(MIRV)化された大陸間弾道弾(ICBM)は全廃されることになった」

ナスターシャ「結果として15000発以上の核弾頭が廃棄されることになったんだ」

（3）

ナスターシャ「廃棄された核弾頭はパンテックスなどの解体工場で解体されるんだが、その処理能力には限界がある。核兵器削減計画にあわせて全ての核弾頭を処理しきるのは不可能だった」

（4）

ナスターシャ「軍縮で200トン以上のプルトニウムと1000トンの高濃縮ウランが核兵器から取り出される」

ナスターシャ「その上、各地の原子炉からも使用済み核燃料が溢れ出し続けている。アメリカ全土の核物質は2005年には5万トンに及ぶという試算すらある」

ナスターシャ「核物質貯蔵庫の貯蔵量は既に限界に達しているんだ。そのために、核兵器廃棄所が必要になったというわけだ」

【DARPA局長後】

※AT社長救出まで全部聞きおわると2～をランダムで

（1）

ナスターシャ「新型メタルギアの演習が行われていた。DARPA局長はそう言ったんだな」

スネーク「ああ」

ナスターシャ「なんてことだ……」

スネーク「（少し意外）知っているのか？　メタルギアを？」

ナスターシャ「噂程度、だがな。山岳部、砂漠、湿地帯……場所を選ばず迅速かつ正確な核攻撃を可能にする核搭載歩行戦車……。こいつについては君の方が詳しいだろう？」

スネーク「まぁな……DARPA局長の言っていたPAL（パル）というのは？」

ナスターシャ「核ミサイルに取り付けられている暗号入力式の安全装置だ。核を発射するには起爆コードを入力しなければならないんだ」

スネーク「局長の話では、二つの起爆コードの内一つは奴等に知られたらしい」

ナスターシャ「もう一つの起爆コード……もしそれもテロ

リストに知られていたら……」

スネーク「ああ。ベイカー社長の救出を急がなければ……」

(2)

ナスターシャ「PALはPermissiveActionLinkの略だ。核ミサイルに施された安全制御システムで、特殊な電子暗号を入力しない限り発射は出来ないようになっている」

ナスターシャ「だがテロリストが起爆コードを手に入れているとすると……勿論、核攻撃を防ぐ手だてにはならない」

(3)

スネーク「テロリストが起爆コードを入力せずに、PAL(パル)システムを破壊して核弾頭の安全装置を無効にする恐れは?」

ナスターシャ「それはないはずだ。破壊活動で撹乱電波などの妨害を受けた場合にも自動的に核弾頭を破壊するように設計されている」

スネーク「奴等が起爆コードか、起爆コード緊急解除用の鍵を手にしない限りは安全というわけか……」

ナスターシャ「油断するな。あらゆるシステムは常に誤作動の可能性を秘めている。安心などありえない」

(4)

ナスターシャ「メタルギアについては、私もごくわずかのことしか知らない」

ナスターシャ「1995年アウター・ヘブン。1999年ザンジバーランド……」

ナスターシャ「共に第三国の武装軍事政権だった。国際社会に軍事的政治的地位を確立するための切り札として密かにメタルギア開発を進めていたが……」

ナスターシャ「どちらも、ソリッド・スネーク……。君に破壊された」

スネーク「……」

(5)

スネーク「昔の話だ……」

ナスターシャ「ICBM(大陸間弾道弾)を発射する核サイロは、常に軍事衛星などによる監視にさらされている」

ナスターシャ「SLBM(潜水艦発射弾道弾)を発射する

潜水艦は隠密行動こそ可能だが、当然、射出ポイントは海上に限られる」

ナスターシャ「長距離戦略爆撃機搭載のＡＬＢＭ（空中発射弾道弾）は、作戦の自由度こそあるものの確実性が無さ過ぎる……」

ナスターシャ「メタルギアはこれらの問題を解決するために開発された。あらゆる地表面を自由に移動し、単独で核攻撃を行う兵器……」

ナスターシャ「世界の核戦略地図は大幅に書き変わる。軍事バランスも崩壊する。……世界を変える、恐るべき兵器だ」

（６）

ナスターシャ「メタルギア開発再開の裏には、形式上軍縮を進めながらも、軍事的優位を確保していこうという政府内の保守派勢力の目論見が見えるな……」

ナスターシャ「ＳＬＣＭ（潜水艦発射巡航ミサイル）のゼロ・オプションが締結され、潜水艦に対する公海上での抜打ち査察が認められるようになった。潜水艦の戦略的意義は多きく後退することになる」

ナスターシャ「だが全く新しい移動型核発射システムであるメタルギアならば、各種の査察を潜り抜けることができるし、核削減条約にも抵触しないはずだ」

【社長の話関係核拡散、核抑止、】

※ＡＴ社長死後、核弾頭保存棟入るまで、全部終わったら二回目以降をランダム

（１）

ナスターシャ「ベイカー社長の言っていた通り、現代は小国でも核兵器を手にする事が出来る時代だ。核兵器製造に必要な要素は、核物質、核技術者、製造技術の三つ」

ナスターシャ「それらは合法、非合法に関わらず、全て容易に手にする事が出来る。ある程度の資金があれば、な」

（２）

ナスターシャ「全世界には50万人もの核開発専門家がいると言われているが、冷戦終結後の軍縮で、核保有国内の核開発の需要は減っている」

ナスターシャ「特に旧東側では、研究の場を失った彼等を

国内に引き止めておくだけの地位を提供できないのが、現状だ。結果として年に何人もの頭脳が流出している」

(3)
ナスターシャ「ベイカー社長の言った通り、核物質貯蔵庫によっては、マフの発生が頻繁なのも事実だ」
ナスターシャ「MaterialUnaccountedFor、核物質不明量。在庫確認の際に未検認となって、行方不明とされた核物質の量だ。そのまま闇市場に流出している可能性もある」

(4)
ナスターシャ「ソ連崩壊後、核施設の管理体制は日増しに悪化している。90年代後半には百発近い携帯核爆弾が行方不明になった、という話もある」
ナスターシャ「真相はいまだ不明だが、それらが各地のテロリストに渡っている可能性もある…」

(5)
ナスターシャ「DARPA局長もベイカー社長も、いまだに『強いアメリカ』の理想を追っている人物のようだな。かなりの核抑止論者だ」
ナスターシャ「『やられたら、やりかえせ』という方針を実践する事で『やったら、やられる』という現実を作り出し、敵も自分も恐怖で縛り上げるのが抑止論だ」
ナスターシャ「つまり、抑止論を成り立たせているのは報復攻撃への恐怖に他ならない。メタルギアは彼らにとって、抑止論に現実味を持たせるための手段だったのだろうか……」

(6)
ナスターシャ「保守派は、核を保有している他国が存在する限り、その脅威に対する抑止が必要だとして、核の廃絶を拒否する」
ナスターシャ「新しい核保有国が誕生する可能性に対してすら、抑止の必要性を唱える。抑止論が有効と見なされているうちは、核廃絶は不可能だろうな……」

(7)
ナスターシャ「抑止論が妥当性を持ち得てきた背景には、それを生み出した冷戦時代の世界対立の構図があった」

ナスターシャ「東西両陣営の明確なイデオロギーの対立が、核軍拡に拍車をかけ、弾みのついた軍拡がイデオロギー対立を助長する…。時代はそうやって回転し、抑止論は世界を形作った」
ナスターシャ「だが時代は変わった」
ナスターシャ「冷戦構造が解体し、突発的な地域紛争が続発する現代の複雑な情勢下では、もはや抑止は力を持ち得ない」
ナスターシャ「現在の安全保障上の懸案である地域紛争の多くは、民族的宗教的対立に根差している」
ナスターシャ「そういった場合では、しばしば非理性的な意思決定が行われるのが現実だ。報復攻撃を考慮せず、恐怖にしり込みしない相手に核抑止は意味を持たない」
ナスターシャ「現代では、核抑止はもはや有効な戦略ではないんだ」

【解体核、核物質】
※核弾頭保存棟に入った場合
(1)
ナスターシャ「スネーク、そこが廃棄された核弾頭を保存しているエリアだ」
スネーク「ここにあるのが全て核弾頭なのか?」
ナスターシャ「そうだ。だが起爆装置は外してあるはずだ」
スネーク「核爆発で基地ごと吹っ飛ばされる心配は、ないんだな」
ナスターシャ「ああ。だが弾頭が破損すると、中から核物質が漏れ出る可能性がある。火器の使用は絶対に避けろ」
(2)
ナスターシャ「核兵器には核分裂物質として、プルトニウムが用いられている」
ナスターシャ「プルトニウムの同位体のだす放射線の多くはアルファ線だ。電離作用は大きいが、飛程(ひてい)が小さいから容器に入っているならば、被曝の恐れはない」
ナスターシャ「だがプルトニウムは、呼吸や摂食によっていったん体内に入ると、骨や肝臓、生殖腺

に定着して、排出される事は半永久的にない」

ナスターシャ「つまり一生被曝し続ける事になるんだ。100万分の1グラムがガンを起こすこともある」

ナスターシャ「だから核弾頭からプルトニウムが漏れ出すと大変だ。そのエリアでは絶対に武器は使うな」

(3)

ナスターシャ「プルトニウムを分解する微生物の開発が遺伝子操作で進められているが、今のところ、実用化の目処(メド)はたっていない」

スネーク「プルトニウム版バイオ・レメディエーションってわけか?」

スネーク「処理ではなく、再利用は? 解体核プルトニウムの民生利用もすすんでいるはずだ」

ナスターシャ「一時は国際協力の気配があったが結局は査察の問題で積み残しになっているのが実状だ」

(4)

ナスターシャ「STARTで大量の解体核プルトニウムが生まれる。その環境破壊、軍事転用を防ぐのは、冷戦後世界の最大の課題だ」

ナスターシャ「原子炉での燃焼、ガラス固化処理、いろいろな方法が取り沙汰されたが、本当に有効な処理法はまだ確立されていないのが現状だ」

■核に関するウンチク　ナスターシャ

【仮想実験、TMD、反核など】

※オタコン遭遇後最後まで行ったらランダム

(1)

スネーク「オタコンが言っていた仮想核実験…。核爆発を起こさずに新型核兵器を開発するなんてことは、本当に可能なのか?」

ナスターシャ「可能だ。今世紀初頭に完成したX線核分裂撮影施設ダート、レーザー核融合実験施設ニフ…核分裂・核融合に関するデータはふんだんに採取できる」

ナスターシャ「それに、これまで蓄積してきた核爆発の実験データもある。現在のスーパーコンピュータの計算能力ならば、シミュレーション

だけで十分新型核兵器の設計は可能だ」

（2）

ナスターシャ「仮想核実験のデータ収集のために未臨界実験も行われる。実験場の地下施設で高性能火薬を爆発させて、衝撃波をプルトニウムに当て、それが与える影響を計測する実験だ」

ナスターシャ「爆発のショックでプルトニウム表面から飛び出す粒子を計測する事で、プルトニウム粒子の質量、速度、分布などがわかる」

ナスターシャ「『核爆発を起こさない核実験は核実験ではない』として、地上地下問わずあらゆる核実験を禁止した包括的核実験禁止条約（CTBT）にも抵触しない、と政府は主張している」

ナスターシャ「だが、それに対する批判も大きい」

（3）

ナスターシャ「１９９７年７月２日にネバダ核実験場で、第一回の未臨界実験があった。それ以降未臨界実験はアメリカだけでなく、ロシア等でも頻繁に行われている」

ナスターシャ「貯蔵核兵器の安全性と信頼性の維持が目的の実験だと喧伝されているが、それは名目にすぎない」

ナスターシャ「核兵器が爆発する危険性は製造後時間が経つほど減るとされている。実験の本当の目的が新型核兵器の開発にあるのは明らかだ」

ナスターシャ「それに収集したデータが仮想核実験に流用される事は政府も認めている」

（4）

ナスターシャ「しかし、エメリッヒ博士のお祖父さんがマンハッタン計画に関わっていたとは、意外だったな」

ナスターシャ「マンハッタン計画は、第二次大戦中の核兵器開発プロジェクトだ。20億ドルもの予算を投じ、一流の科学者と技術者述べ12万人を動員して進められた」

ナスターシャ「その成果は１９４５年７月アラモゴードでのプルトニウム爆弾実験トリニティー、そしてヒロシマ、ナガサキだ」

ナスターシャ「これ以降、科学者は己の研究が人為的な大量殺戮に貢献しうるという事実から目をそ

らすことはできなくなった」

ナスターシャ「計画のリーダー、J・ロバート・オッペンハイマーは『科学者は罪を知った』という言葉を残したそうだ」

(5)

ナスターシャ「メタルギアをTMDシステムだと思って開発していたとは、エメリッヒ博士というのは随分とおめでたい人物のようだな」

ナスターシャ「Theater Missile Defense、戦域ミサイル防衛」

ナスターシャ「冷戦終結と共に、脅威と見なされなくなった旧ソ連からのICBMのかわりに、第三世界からの弾道弾を迎撃対象とした防衛システムだ」

ナスターシャ「TMDは戦域高高度広域防衛(THAAD)などによる大気圏外での迎撃と、パトリオットなどを使った大気圏内での迎撃を組み合わせて運用される」

ナスターシャ「エメリッヒ博士はメタルギアを、下層迎撃用の移動ミサイルユニットだと考えていたんだろうな」

(6)

ナスターシャ「弾道弾迎撃ミサイル(ABM)制限条約を形骸化する、としてTMDに難色を示す勢力は、ロシアだけでなく、米国内にもある」

ナスターシャ「だが弾道弾に対する防衛力を制限する事で、相互確証破壊(MAD)戦略を維持し、核抑止を存続させるABM制限条約自体が冷戦時代の遺物であり、修正か破棄すべきだという論議もある」

ナスターシャ「様々な議論を起こしながら、それでもTMDが推進されてきたのは、ポスト冷戦時代における数少ない新規市場開拓のチャンスを逃せない防衛産業からの圧力があったからだ」

【START、核削減】

※独房無線機デモ後ハインド撃墜まで

(1)

ナスターシャ「そうか。テロリストの設定したタイムリミットが第三次戦略兵器削減条約(START3)の調印をにらんでのものだったとはな……」

ナスターシャ「START3ではSTART2の発効後戦略核弾頭の配備数を、米露双方で2000～2500発にまで削減することになっている」

ナスターシャ「現大統領は今まで取りたてて大きな成果をあげていないからな。任期終了まで後わずかだ。歴史に名を残すには、START3の調印を済ませるしかない。大統領も必死だろう」

スネーク「(吐き捨てるように) くだらん」

ナスターシャ「彼や彼の取巻きにとっては切実な問題だ」

(2)

ナスターシャ「START3の調印はSTART2の批准承認が前提だ」

ナスターシャ「だが、個別誘導複数目標弾頭(MIRV)はロシアの戦略兵器の主力なんだ。当然、その全廃を求めるSTART2にロシア下院の保守派は抵抗した」

ナスターシャ「1990年代後半からのNATO拡大に対する警戒心やTMDへのABM制限条約適用をめぐる綱引きもあって批准は難航したんだ」

ナスターシャ「今回のSTART3も、明日が調印式という所までこぎつけるには、様々な駆け引きがあった。ロシアの情勢も不安定で、実際に調印をすませるまでは予断を許さない」

ナスターシャ「もし新型核開発の事実が明るみに出るようなことがあれば、全てが水の泡になるのは目にみえている」

ナスターシャ「テロリストは、その事情を全て把握した上でつけこんできている。リキッド・スネークという男、確かに頭がいいな……」

(3)

ナスターシャ「START3が調印されれば、確かに核削減は行われる。だが依然、アメリカ・ロシア両国だけで4000～5000発の戦略核弾頭が配備されつづけるんだ」

ナスターシャ「この地上に地球の全生態系を何回も破壊しつくして余りある核兵器が即時発射可能な体制で存在していく事実に変わりはない。核削減と核廃絶の間には、大きな溝があるんだ」

(4)
ナスターシャ「1990年代後半から、START3に関する交渉は行われていた」
ナスターシャ「ロシア大統領がSTART3以上の大規模な核削減を打ち出そうとした事もあったが、そういう時はむしろアメリカ側の方が、慎重な態度をとった」
ナスターシャ「大幅すぎる核軍縮は地上最後の超大国としてのアメリカの国際的地位に影響するからだ」
ナスターシャ「(吐き捨てるように) 核兵器という最強の軍事力の削減は、当事国の軍事的政治的利益を損なう形で進められることはない、ということだ」
(5)
ナスターシャ「戦略核兵器に関しては削減の努力がされているが、現在も戦術核に関する制限条約は存在しない。軍縮が進んでいるように見えても、核の脅威がなくなったわけではないんだ」

(6)
ナスターシャ「未だ核の時代は終わっていない。一国でも核保有をつづける国がある限りは核の脅威は消えはしない」

【核拡散、IAEA、NPT】
※ハインド撃墜以後
(1)
ナスターシャ「核保有のレベルが現状から下がらなければ、核兵器がテロリストの手に渡る可能性も高くなる。……今回のようにな」
ナスターシャ「通常兵力や化学兵器の攻撃に対しては核兵器で報復しない『コア抑止』を実現し、戦略核兵器の数を米露合計1000発以下にしようという論議もあったが、実現はしなかった」
ナスターシャ「アメリカ側に最後の軍事超大国としての優位を捨てることを渋る勢力があったためだ」
(2)
ナスターシャ「冷戦が終結した事によって、確かに世界規模の核戦争の危険は減った。だが核兵器が

使われる危険は冷戦時代より逆に大きくなっているんだ」
ナスターシャ「現在、世界各地で地域紛争や内戦が続発している。民族や宗教に根差す紛争では、しばしば理性的でない意思決定がなされるものだ」
ナスターシャ「そのような状況下では、一般市民への被害、その後の国際社会からの批判等の問題が考慮されずに核攻撃が決断される恐れは大きい。核抑止も効果はないだろう」
ナスターシャ「それに、戦略核と違い戦術核は末端の司令官に使用の判断が任せられる事がある。内戦のような混乱の中では、核が乱用される恐れは充分ある」
ナスターシャ「核拡散が進む限り、危険は日を追う毎に大きくなっていくんだ…」
(3)
ナスターシャ「核抑止政策が核廃絶への潮流をせき止めた。核兵器の違法性を作り上げる法的基盤を破壊してきた」
ナスターシャ「核抑止政策という、極めて政治的で軍事的な政策が、司法的な核廃絶の法律を生むことを阻害している」

(4)
ナスターシャ「冷戦時代から、イギリス、フランス、中国は核保有を公にしている。核保有国はアメリカとロシア2ヶ国だけではない」
ナスターシャ「さらに21世紀に入ってからアフリカ、中東、南米、アジアの各国で次々に核兵器が確認されている」
ナスターシャ「核は着実に拡散している。抜け穴だらけの核拡散防止条約(NPT)—国際原子力機関(IAEA)体制を改良できなかった20世紀のツケを21世紀の民衆が背負うことになったんだ」
(5)
ナスターシャ「国際原子力機関(IAEA)は、原子力の平和利用を監視し、核物質の軍事転用を査察するために、1957年に設立された」
ナスターシャ「だが、IAEAはすすんで査察を受けようという国にしか査察を行う事ができない。おまけに日時は対象国の希望を受け入れざるを得ず、抜き打ち検査は行えない」

ナスターシャ「その上、査察を受ける側は、査察官の国籍を指定することさえ出来る。1970年代後半、イラクはブルガリアとロシアの査察官しか国内に入る事を許さなかったという事実もある」

ナスターシャ「条約違反をした国に対し制裁を加える権限もない」

ナスターシャ「実際、イラクがIAEAに加盟しながら極秘裏に核兵器開発を行っていた事実が明らかになったのは、湾岸戦争後の査察によってだった」

ナスターシャ「残念ながら、IAEAは核拡散を能動的に食い止める事のできる組織ではなかった、ということだ」

（6）

ナスターシャ「核不拡散条約(NPT)は、アメリカ、ソ連、フランス、イギリス、中国の五つの核保有国以外が核武装することを防ぐため1970年に発効した」

ナスターシャ「非核保有国は条約に加盟すると、原子力を平和利用するための援助を受ける事ができる」

ナスターシャ「しかし、その代償として原子力の軍事転用を禁止され、それを検証するためのIAEAによる査察が義務化されるんだ」

ナスターシャ「だが結局、NPTも核の拡散を防ぐことはできなかった」

ナスターシャ「条約違反に対して制裁を加える手段を備えていなかった事や、民生用原子力技術の提供が核兵器の製造技術の供与にもなってしまった事などが問題としてあげられている」

【核廃棄物関係】

※メタルギア格納庫最後まで行ったら、二回目以降をランダム

（1）

ナスターシャ「地下整備基地一階に流れているのは、おそらく放射能汚染された排水だ。近付かない方がいいだろう。被曝すると危険だ。そのエリアにいるだけでもかなりの被曝量になるはず」

ナスターシャ「その施設に核処理施設はない。おそらく廃

棄核弾頭の他にも、使用済み核燃料等の核廃棄物の保管を引き受けていて、それが漏れ出しているんだろうな……」

（2）

ナスターシャ「原子炉で燃料が使用されれば、必ず廃棄物として毒性の高い人工的放射性元素が混じった使用済み燃料が生まれる」

ナスターシャ「使用済み燃料は約３００年間、発熱しながら放射能を放出し続ける。つまり向こう三世紀もの間、危険物質であり続けるということだ」

（3）

ナスターシャ「核廃棄物は特殊容器に密閉して、地下水脈の少ない岩塩層などに埋設すれば安全と考えられていた時期もあった」

ナスターシャ「だが現在では、その安全性には問題があることがわかっている。しかし、核廃棄物の有効な処理法は未だ存在していない」

ナスターシャ「ほとんどの核廃棄物は、処理するあてもないままにただ地上で貯蔵されているというのが実状なんだ」

（4）

ナスターシャ「核廃棄物は、再処理し低濃縮ウランと混ぜて混合酸化物燃料ＭＯＸ（モックス）に加工した上で、軽水炉で燃やすという利用法もあるにはある」

ナスターシャ「だが、ＭＯＸ（モックス）は低濃縮ウランよりも早く原子炉を汚染する。毒性も強い。さらにＭＯＸ（モックス）は、ウランの価格が予測の少なくとも四倍以上に高騰しなければ経済的に見合うことはない」

ナスターシャ「その上、処理工場から原子炉までの輸送中の危険性は、決して無視できない。事故による放射能汚染、盗難による核拡散……。ＭＯＸ（モックス）への加工は有効な処理法とは言えない」

（5）

ナスターシャ「核廃棄物には、一つだけ有効な利用法がある」

ナスターシャ「軍事転用だ。化学的な再処理を行うことで廃棄物中のプルトニウムを分離する事が出来る」

ナスターシャ「核兵器には、通常、軍事用原子炉で生成された、プルトニウム239の含有率が93%～94%を超える核兵器用プルトニウムが用いられる」

ナスターシャ「一方、原子炉級と呼ばれる使用済み燃料中のプルトニウムの中には、プルトニウム239は60%程度しか含まれていない」

ナスターシャ「だがこれは使用済み燃料が軍事転用不可能であるという事を意味するわけではない」

ナスターシャ「アメリカは実際に原子炉級プルトニウムを使った核兵器の実験に成功している」

ナスターシャ「あらゆる組成のプルトニウムは、核兵器への軍事転用が可能なんだ」

(6)

ナスターシャ「使用済み核燃料は劣化ウラン弾に転用される事もある。劣化ウラン弾は、劣化ウラン合金を使用した対戦車装甲用貫通弾だ」

ナスターシャ「比重が重く貫通効果が高い上に、貫通後に自然発火することから、タングステンのような他の重金属合金使用の貫通弾よりも10%も優れた性能を実現できる」

ナスターシャ「だが、燃焼して二酸化ウランとなった微粒子を体内に吸引すると、深刻な腎臓障害を引き起こすことが知られているんだ」

ナスターシャ「湾岸戦争ではイラク兵だけでなく、誤射などの事故で多くのアメリカ兵も被曝した事実がある」

ナスターシャ「米政府や民間団体による医療調査も行われたが、結局ガンの発生や次世代への影響についての因果関係は明らかにされなかった」

ナスターシャ「この放射能汚染が湾岸戦争症候群、ガルフ・ウォー・シンドロームの原因であるという説もささやかれたが、今になっても真相は明らかにされていない……」

(7)

ナスターシャ「毒性が強く半減期が長いアメリシウム、ネプツニウムなどのマイナーアクチノイドを加速器や高速中性子炉で短半減期核種に変換する技術も研究中だ」

ナスターシャ「消滅処理と呼ばれる処理法だが、技術的・経済的に課題が多く、実用化の目処(メド)はいまだたっていない」

ナスターシャ「核廃棄物の処理法は、いまだに確立されていないんだ」

【その他】

(1)

ナスターシャ「通常兵器と大量虐殺兵器の違いは明確だ」

ナスターシャ「通常兵器が軍隊に向けて使用されるのに対し、核兵器は一般市民に対して使用され、罪もない何百万人という人々が死ぬ事になる」

ナスターシャ「核兵器を不道徳な存在にしている要因は、そこにある」

(2)

ナスターシャ「未来を予測する唯一の方法は過去の不実、つまり歴史を思い起こすことだ。ヒロシマやナガサキの事は忘れてはならない」

(3)

ナスターシャ「核兵器の強大な破壊力、殺傷力は空間や時間を超えて被害をもたらす。人類のみならず、地球上の全生態系を破壊する力を持っている」

(4)

ナスターシャ「兵器が開発されれば、必ず使われる時が来る。そうなれば、この世界は終わりだ。ヒロシマの事実を見ろ。『使われる事がない』とは、決して言えない」

ナスターシャ「存在する限り、使用される危険性は拭えない」

【その他、戦争に関する話】

(1)

ナスターシャ「軍事兵器の開発にかかる膨大な費用は当然、国民が払っている。使われないとわかっている兵器を開発する為に国民の生活は逼迫していく」

(2)

ナスターシャ「冷戦終結による対立構造の崩壊、緊張と抑圧の緩和が、技術や部品、そして兵器そのものの流失をひき起こしている」

ナスターシャ「もはや経済大国＝（イコール）軍事大国ではない。経済的に弱い国でも軍事力を容易に手にできるようになっている」

（3）

ナスターシャ「現在、ロシアなどでは科学者や軍隊に充分な給料がはらわれていない。その為に、彼等は売れる武器、情報を売らざるを得ない」

ナスターシャ「結果としてNBC兵器を始めとするロシア製兵器が後進国やテロリストに流れ、世界の軍事情勢は混沌としている」

ナスターシャ「こんなに軍事バランスの悪い時代はなかった」

（4）

ナスターシャ「NATO拡大を踏まえた軍事ドクトリンには地域紛争が大規模紛争に発展する脅威がある場合は核の先制使用ができるという項目が含められている」

ナスターシャ「NATO拡大に対して、ロシアは今もなお、『核の力』を誇示しているんだ。老朽化し経済的に疲弊した通常兵力を補うために」

【その他、特別な話】

※合計30回目の会話の時

ナスターシャ「核抑止政策が取られ続ける限り、核弾頭の数は減ったとしても、廃絶はされないだろう…」

ナスターシャ「だが、世界に必要なのは核の削減ではない。廃絶だ」

ナスターシャ「私は以前、国防省情報局（DIA）にいた。ペンタゴンに入ったのは、核廃絶を実現するには内部から核抑止の無効性を訴えていくしかないと、考えたからだった」

スネーク「どうして、そこまで？」

ナスターシャ「……放射線被曝は残酷で悲惨なものだ……。私はそれをよく知っている」

ナスターシャ「……よく知っているんだ……」

スネーク「？」

ナスターシャ「私が生まれ育ったのはウクライナ、プリピャチ市だ。1986年、4月26日。当時、私は10歳だった」

スネーク「まさか？」

ナスターシャ「……チェルノブイリ原子力発電所が炉心融解を起こした時、私はそこから北に三キロの所に住んでいた……」

スネーク「……」

ナスターシャ「プリピャチ市からは、60万~70万の人が疎開した。65万の子供が健康をそこない、86年~93年の間にその内の12000人が亡くなった……」
ナスターシャ「除染作業をしていた私の両親も……数年後に放射線障害で亡くなった」
ナスターシャ「核兵器は、これ以上の惨劇を人為的に引き起こすんだ。しかも被害を受けるのは一般市民と自然環境…。私たちはこの地上から核を廃絶しなければならない」
ナスターシャ「次の世代に、あんな思いをさせてはならない」

■戦場蘊蓄　マスター

【屋外での注意】

(1)

マスター「極寒の地では音がよく伝わる。拳銃(ハンドガン)を使うなら、サプレッサーを装備しろ」

(2)

マスター「摂氏零下30度から40度になると、アイスフォッグが出る。空気中の水分が氷結したものだ。キラキラとして一見、きれいだが視界は悪くなる。注意しろ」

(3)

マスター「イギリスの詩人で、ノーベル賞も受けたキプリングは、『北緯65度を超えたらそこはもう神の加護も人間の掟も及ばない』と書いている。そこで生きのびるには神などに頼らず、他人もあてにしない強い精神力が必要だ」

(4)

マスター「極地では体温の70%がむき出しの頭部から失われると言われている。適切な帽子を被れ」

スネーク「帽子は好かない……バンダナでいいか?」

マスター「ないよりはましだとは思うが……」

(5)

マスター「極寒の地では汗をかいたらすぐに下着を着替えなければならない。愚図愚図していると体温を失い、肺炎にかかったりするからな。フロ上がりのプレイはさける事だ」

(6)

マスター「極地では脱水状態を起こしやすい。水分補給は重要だ。だが雪で乾きを癒そうなどとは考えるな。胃袋が冷やされて、体温が下がるからだ。雪をとかして湯にしてから飲め」

(7)

マスター「冷たい食べ物、飲み物は厳禁だ。体温との温度差が生じて、体内に吸収する際に体力を消耗するからな。極地での基本だ」

【暗闇について】

(1)

マスター「暗闇を見るときは、いきなり暗いところを

見詰めるな。明るいところから、暗いところへ目を慣らしながら見るんだ」

マスター「そうすれば徐々に目が慣れて暗闇を見る事ができる。暗闇でのプレイも避けた方がいい」

(2)

マスター「闇の中での戦いは嗅覚と聴覚が頼りだ。目に頼らず、耳をすませ。空気の淀み、流れから敵の位置と攻撃を、全身で感じ取るんだ」

(3)

マスター「暗闇は恐怖を助長する。冷静になることだ」

(4)

マスター「暗視ゴーグルをかけていると光が何百倍にも増幅されるので、閃光や爆発を見ると網膜が焼きついてしまう。視力が戻るまでしばらく時間がかるぞ」

【戦士の心得】

(1)

マスター「思い出にふける時じゃない。今は考える時だ。考えるのが一つの脱出路になる。難しく考えすぎて行き詰まったら、単純化して考えろ。キャンベルあたりに相談するのも手だ」

(2)

マスター「実戦で鍛えられた兵士はいつでもどこでも仮眠を取るコツを身につけているものだ。VRシミュレータでの訓練しか、経験していない連中との大きな差だな」

マスター「長時間プレイした後は仮眠をとるべきだ」

(3)

マスター「午前3時前後は人間の精神活動が最も鈍くなる時刻。人間の判断も鈍る。今、睡魔の中でいるのなら、仮眠をとったらどうだ」

(4)

マスター「排便排尿をコントロールする事も大切だ。いつ長いデモが、はじまるかわからん。どうしてもモニターの前から離れられない時にも、対応できるようにしておくことだ」

(5)

マスター「戦闘中は腹八分目くらいが最適だ。満腹状

態では頭の回転も鈍るし、眠くもなる。食後はたっぷり30分は休息をとってからプレイするといい」

(6)
マスター「攻撃を受けてうろたえる人間は専門用語で『的』といわれる」

(7)
マスター「軍用の携帯食料はカロリーが優先している。その為に、ビタミンやミネラルなど栄養補給食品を併用するのがいい」

(8)
マスター「実際に戦場を体験し、生きのびてきた人間には危機に関しての独特の嗅覚が備わっているものだ。戦士としての、ゲーマーとしてのカンを信じろ」

(9)
マスター「戦場ではわずかな時間が勝敗を大きく左右する。決断をためらうな。行動が遅れれば遅れるほど勝算は低くなるものと思え」

(10)
マスター「戦場で危険を察知するカンは、訓練で備わるものではない。実戦を生き抜き数々の修羅場をくぐり抜けてはじめて、修得できるものだ」

(11)
マスター「身を隠すには敵の探しそうなポイントは避けるべきだ。常に敵の身になって考えウラをかけ。頭の善し悪しではない。常に頭をフル回転させて、考えろ。頭を使って行動するんだ」

(12)
マスター「敵は分散させ、一人ずつ攻撃しろ。古典的だが極めて有効な戦術だ」

(13)
マスター「決断を早くしろ。わずかの逡巡が死という結末を生むのが戦場だ」

(14)
マスター「近接戦闘(CQB)の基本は、自分の逃げ道を確保するように効率良く敵を倒すことだ」

(15)
マスター「安易に銃を使うな。自分の両手足で窮地を脱することができるならば、それにこした

事はない。それが無理な時に初めて銃を抜け」

(16)
マスター「戦場で慌てる奴は殺される。常に次の行動を決定しつつ動くんだ」

(17)
マスター「隠れる場所をよく考えろ。完璧に姿を隠せても、任務を遂行することができない場所では意味がない」

(18)
マスター「戦況にあわせて常に最適の武器を判断しろ。効果のない武器を使い続けるのは、弾の無駄使いだけでなく、自分の命を危険にさらす」

(19)
マスター「マガジンの最後に曳光弾を詰めておくのは、マガジンチェンジのタイミングを計るためのテクニックの一つだ」

(20)
マスター「敵の立場で作戦を考えるんだ。敵の司令官になったつもりで、作戦を検討しろ。マップ・デザイナーの気持ちになれば、おのずと道はひらける」

(21)
マスター「希望を失ったら最後だ。希望が無くなったと思いこんだ瞬間に、無力になってしまう。絶望は死へとつながる」

(22)
マスター「信じる事だ。全身全霊を込めて信じれば願いはかなう」

(23)
マスター「戦場や極限状態では見えない物がみえたり、あるはずのない物が見えたりする。錯覚も起こしやすい。バグか？　などと疑わず、落ちついて行動するんだ」

(24)
マスター「これまで体験した悲惨な時代の事を思い出せ。誰でもそういう経験はあるはずだ。それを思えば戦場の苦難も切り抜けられる」

(25)
マスター「戦場での達人は臨機応変に作戦展開を行えるものだ。戦術マニュアル通りに行動する

と、パターン化してしまう為に戦略が見破られてしまう」

(26)
マスター「戦場というものは人間の残虐性を引き出す。どんな育ち方をした兵士でも戦場に投入されれば、獣性がむき出しになる」

(27)
マスター「最初から負け戦とわかっていても闘わなくてはいけない時がある。たとえ数パーセントでも可能性があれば、それにかけてみるんだ」

(28)
マスター「戦場では予知能力が大切だ。極限状態では人間の潜在能力である第六感がはたらく。その時は理屈ではなく、予感を重視した方がいい」

(29)
マスター「恐怖と立ち向かい恐怖を克服するには、恐怖から逃げていてはいけない。自ら進んで恐怖に身を投じる事だ」

---

(30)
マスター「敵がお前の弾丸によって死ぬのは仕方ないことだ。彼等も殺される危険を覚悟してこの場にいるはず」

(31)
マスター「アラスカの天候は変わり易く、予測するのが難しい。世界最悪の天候として知られている」

【狙撃について】

(1)
マスター「狙撃に必要なものは、何よりも生まれ持ったセンスだ。これについては、訓練ではどうにもならない。センスの無い者はいつまでたっても上達はしない」

(2)
マスター「SWATの教本によれば、狙撃手が充分に神経を張りつめて、狙い続けられる限度は15分だ。通常は15分で観測手と狙撃手が交代する。常に一人ないし、二人での行動だ」

（3）

マスター「標的が静止しているようなので、訓練を積んでいれば、難しい射撃ではないはずだ」

（4）

マスター「スナイパー・ライフルのスコープは倍率は高いが反面、視野がかなり狭い。敵の位置をサーチする時は、視野の広い双眼鏡を使え」

■その他　マスター

【ダンボール入手】

※一回目のみ

マスター「ダンボール箱か。ザンジバーランドを思い出すな」

スネーク「アウターヘブンでも世話になった」

マスター「工夫を凝らしてあらゆるものを最大限に活用していくのがサバイバルの基本だ。潜入任務では特にそれが重要になる」

スネーク「ああ、忘れてはいない」

METAL GEAR SOLID
SCENARIO BOOK

メタルギアソリッド
シナリオ・ブック

原作／監修　小島秀夫

カバーイラスト　新川洋司
アートディレクション／カバー＆表紙デザイン　久留一郎
本文デザイン　荒川　実
DTP　邑上真澄

協力・監修　株式会社コナミデジタルエンタテインメント
小島プロダクション

制作　株式会社新紀元社 編集部

印刷・製本　大日本印刷株式会社

Printed in Japan